

心的である場合も、神中心」的である場合も變りがない。社會的キリスト教はキリスト教を捨てて社會主義に轉化するものではなく、キリスト教を社會主義に對抗し得るものに改良すること、社會主義を撲滅してそれに取って代ることを目的とするキリスト教の一新形態であつて、神、キリスト、愛、罪、救ひといふ社會主義と根本的に相容れぬものを基本原理としてゐる點では、從來のキリスト教と變りはない。辯證法神學も在來の「人間中心」的な神學と自己とを絶對的に反するものとして區別するが、近代主義神學も、それが神學である限りはキリスト教の絶對性、絶對的なものとしての神や信仰の前提を假定してをり、決して科學としての宗教學ではなかつたのである。新興神學と舊神學との間に何らか根本的な差異が存するとして、兩者を絶對的に區別する考へが流行してゐるが、兩者は近世市民社會に於ける一にして同一なる護教學發展史中の二つの區分を外ならぬことは特に注意しなければならぬことである。新神學の本質はかく同一の市民階級的神學の現代的形態としてのみ正しく把握することが出来るのである。

だがまたわれわれは舊神學と新興神學との區別をも明かにしなければならぬ。この場合は新興神學自身の主張を、それが舊神學に加へてゐる「批判」を、十分な考慮を以て利用することが出来る。社會的キリスト教は舊神學を個人主義的であり、魂の救済のみを旨とするものだと主張してゐる。また辯證法神學は舊神學を「人間中心」的であり、世俗的文化に對して妥協的であつたと稱してゐる。これらの個人主義、社會的悲慘に對する冷淡、人間中心」的、文化的といふことは一應近代主義神學の現代神學に對する特質と見ることが出来る。

出來よう。だがこれは絶對的なものではなく、單に比較的なものであること、殊に人間主義的、文化的であることは、神學としては或る絶對的な限界を有つてゐることは、前述の如く忘れられてはならぬことである。かゝる制限を意識しての上で、舊神學は人道主義的、文化的で、個人主義的であつたこと、これに對して新興神學としての社會的キリスト教の理論は、その個人主義性を修正しようとし、辯證法神學はその人間主義、文化主義を清算し、キリスト教をより超絶的、絶對的なものにしてしようとしてゐる、といひ得る。

しかしこのことの意味はもつと進んで考へねばならぬ。十八世紀までの封建的ドイツの公認の神學は、固化せるルテル主義としての正統派神學(Orthodoxie)であつた。これに對して商業ブルジョアの神學として、敬虔派(Pietismus)、改革派(Reformatoric)の神學、或は自然神學等が存在したが、眞に強力な市民的神學の基礎は、フランス革命の影響の下に、ドイツ觀念論によつて築かれてゐる。ドイツ觀念論の神學は封建的神學に代る新しい市民的神學として、前記の教會或は聖書の絶對的權威に依據するものに對して、キリスト教に合理的な基礎を與へ、これよりその眞理性を演繹しようとするものであつた。この合理的な基礎として擇ばれたものは、自律的な個人の理性であり、また感情であつた。そしてこの合理的基礎にもとづかぬ權威は歴史的な検討を加へられ、批判された。實にこの點からこの近代主義神學の自由主義、個人主義、人間主義、その或る程度の批判性が生れてゐるのである。ヘーゲル(G. W. F. Hegel, 1770-1831)及びシュライエルマツヘルの二神學者を生んだこの時代は、神學の黄金時代だつたといふことが出来るであ

らう。だが元來神學は一つの解き難き矛盾である。神學とは神にしろ、教會にしろ、絶對的權威として示された或る超絶的なもの合理化であり、信仰と理性との調和である。それは單なる信仰の是認ではなく、それを合理化し、盲目的信仰を批判しなければならぬが、この合理化、批判は一定限度に止らねばならぬ。合理化、批判の徹底は、神學を人間學に、無神論に導く。神學のこの特性はドイツ觀念論神學の運命に特につきりと現はれてゐる。

ドイツ觀念論神學はヘーゲルとシュライエルマツヘルによつて代表されることが出来るが、ヘーゲル左派の神學の行方(これは全ヘーゲル哲學の正當な歸結、發展でもあつた)は、神學の合理化を漸次徹底せしめ、これを人間學から無神論にまで導くものであつた。即ちシュトラウス(Friedrich Strauss, 1808-1874)は、福音書を歴史的に批判し、これを當時のキリスト教徒の宗教觀の象徴的表現、即ち神話であることを斷定したが、更にブルーノ・パウエル(Bruno Bauer, 1809-1882)は進んで、福音書は福音記者の意識的な創作、虚構であると主張した。だがこの批判的傾向を行くところまで行かしたのはフイエエルバッハ(Ludwig Feuerbach, 1804-1872)である。彼は人間にとつて神であるものは、人間自身の精神の投影にすぎぬこと、従つて神の本質は實は人間の本質であり、神學は即ち人間學でなければならぬことを主張し、純然たる唯物論の見地に到達してゐる。

ヘーゲル左派のこの運命はかく神學からの逸脱だつた。従つてドイツ神學の傳統はこの一定限度を守つたシュライエルマツヘル——リッテナルの線によつて代表されてゐる。これは元來シュライエ



シュライエルマツヘル

ルマツヘル神學の基礎とされてゐる、絶對依據の感情(„das absolute Abhängigkeit“)といふ「感情的なるもの」は「非合理的なるもの」であつて、ヘーゲルの場合の理性と異り、歴史的、社會的な展開を行ひ得ないものであることによつて、根本的に合理性、批判性を制限してゐるからである。シュライエルマツヘルの立場を繼承し、ドイツ近代主義神學のオーソドックスを形成したものはリッテナル(Calbrecht Ritschl, 1822-1889)である。あらゆる時代の神學がさうであるが、リッテナル神學に於いては特に科學及び宗教に對する科學的批判に對する宗教の防衛といふことが前面に押し出されてゐる。これは當時見られた自然科學の目ざましい發展とそれのあらゆる領域への浸潤、それに伴ふ唯物論哲學の普及、一方社會主義の勃興といふ恐るべき風潮に際して宗教が危機に陥つた(現にヘーゲル左派の神學自體の否定の事實がある)ことに對して、特に必要とされたことである。ここからリッテナル神學が、宗教の本質として現在の生ける信仰、實踐的體驗を強調することが起つてゐる。キリスト教を形而上學的な觀照の宗教と見るのは、キリスト教に混じたギリシヤ思想とされ、神學から形而上學は排される。神の存在は形而上學の證明によつて示されるのではなく、罪のゆるしを得て神と和ぐことによつてのみ自證せられる。またキリスト教の本質は

現在の體驗にある故、キリスト教の歴史の究明はその本質を明かになし得ない、とされる。しかしかかる寧ろ反科學的な體驗中心的な神學に於いても、之を基礎づけるために、存在判断と價值判断とを分つロッツェの哲學が借りられてゐるのは興味あることである。要するにロッツェ神學の基礎的な觀念は、實驗的な體驗といふことにあるのであるが、これは即ち自律的な個人の體驗であつて、この人間の體驗が神、罪、救ひ等の諸觀念の基礎とされてゐる點、ここに近代主義の一般的特性が現はれてゐるのである。

ロッツェ神學は現在までのプロテスタント神學の主流をなすものであり、現代の近代主義神學の諸派はこの神學の諸變態と見ることが出来る。

二 近代主義神學　ロッツェ派は種々なる分化を見たが、キリスト教の眞理を道徳的見地から基礎づけようとしたヘルマン (G. W. Herrmann, 1846—1922) をその正統の一つと見ることが出来る。ヘルマンに於いても形而上學の排除と實際的信仰の強調とが見られるが、特にカトリック的なスコラ哲學からのキリスト教の分離が主張せられ、ロッツェの如く信仰が、彼の所謂「神との交り」(Verkehr mit Gott) がキリスト教の眞髓とされる。だが彼に於いて注意されるべきことは、かかる信仰と現世的活動との必然的合致の思想である。彼は信仰が世俗的活動と矛盾するといふ神祕主義の體道的傾向を極力排し、人間が世俗的生活に於いて道徳的義務に服従し、道徳的理想を追求してゆく過程に於いてこそ神と對向するとなし、神を道徳の見地から説明しようとしてゐる。これは活動的、現世的、向上的なドイツ市民階級の典型的な神學といふことが

出来る。なほ彼は新カント派に屬する倫理學者でもあつた。カフタ (Julius Kaffan; Eine Apologetik des evangelischen Glaubens, 1917)・ノッセル (Wilhelm Koppelmann; Das Wesen des Christentums, 1922) もこれに近い立場にある。

一方チュービンゲン學派を中心として所謂歴史神學の發展が見られ、ロッツェ派内に於いても原始キリスト教、舊約聖書、教會についての歴史的、批判的研究は不可避のものとして進められて行つたが、かかる歴史的研究は神學の陣營内にも比較的進歩的な見解を導入したやうである。ハルナック (Adolf Harnack, 1851—) は最近に於けるこの傾向の代表者と見られてゐる。ハルナックはキリスト教教會及び教義の歴史家であつたが、キリスト教の本質を、永遠の教會やドグマのうちに見ることに反対し、これを歴史的、批判的に明かにすべきことを主張した。そしてキリスト教の本質は原始キリスト教のうちのみ見出され、キリスト教のその後の發展はただこの本質の種々なる變態と解された。トレルチ (Ernst Troeltsch, 1865—) はこの方向を一步進めて、キリスト教の本質そのものを歴史的、發展的なものと見てゐる。即ちハルナックは原始キリスト教のみに一回的にキリスト教の本質を見て、その後のキリスト教の發展を、單にそれのままの形態に於ける現はれと考へてゐるのに對して、所謂歴史主義 (Historicism) の代表者としてのトレルチはキリスト教の歴史全體のうち、キリスト教の本質を見ることが主張してゐる (尤もカトリックの全歴史を除外してはゐるが)。それ故彼はこの方法を、教會や教義の絕對性、奇蹟的な啓示のうち、キリスト教の本質を見たり、啓蒙主義の抽象的普遍的眞理のうち、それ

を認めたりすることから區別してゐるのは當然であるが、またヘーデル派のやうに歴史的發展を先驗的な論理的理念の有する豫定のプログラムに従つたものと見ることも反對してゐる。しかしだからと言つて歴史發展の基本的な線を、客觀的に歴史そのものから見出すやうとするのではなく、キリスト教の本質は一つの理想であり、この理想がキリスト教のうちに内在し、一つの衝動力となつてキリスト教史を發展せしめたとするのである。そしてかかるものとしてキリスト教を見る立場は、彼によつて「人格的立場」とされる。トレルチは必然的にこの見地に附随する個人主義、主觀主義を、歴史に於いてはそれぞれが補正し合ひ、全體として眞理に近づくものとして、免れようとしてゐる。これが現在の近代主義神學に於ける歴史主義的傾向である。

次にシュライエルマッヘルに見られる宗教を、主觀的に人間の感情の狀態より基礎づけようとする傾向も、最近の心理學及び心理學的方法の優勢に伴つて發展せしめられてゐる。ベルリン大學のヴョッベル (Georg Wobbermin, 1868—) はこの傾向を代表してゐる。彼はシュライエルマッヘルに歸することを主張するが、なほ彼を以て不十分であるとし、所謂宗教心理學的循環 (Religionspsychologischer Zirkel) なる方法によつて宗教の本質に到達すべきことを説き、シュライエルマッヘルの歸依感情の外に、安住感情 (Geborgenheitsgefühl) と渴仰感情 (Sehnsuchtsgefühl) との二つを宗教的心理の必然的な要素としてゐる。オットー (Rudolf Otto, 1869—) もやはりシュライエルマッヘルの影響を受けた心理主義者であるが、彼に於いては神祕的傾向が強く、超越者に對する畏怖感が特に

強調されてゐる。その他心理學的立場に立つてゐるものには、マン (Wilhelm Mundt; Die religiösen Erlebnisse. Ihr Sinn und ihre Eigenart, 1923)・ホフマン (Paul Hofmann; Das Religiöse Erlebnis, seine Struktur, seine Typen und sein Wahrheitsanspruch, 1925)・ケッセル (Jacob Wilhelm Haner; Die Religionen. Ihr Werden, ihr Sinn, ihre Wahrheit, I, 1923)・ハイレル (Friedrich Heiler; Das Gebet, 1918) などがある。

以上がドイツ・プロテスタントの近代主義神學の現狀であるが、近代主義はロッツェ以来英米佛のプロテスタント神學にも多大の影響を及ぼしてゐる。イギリスでは廣教會 (Broad church) の自由主義神學に影響を及ぼし、アメリカではロッツェ派が神學界の主流をなし、マッキンゴット (McGifford)・ブラウン (Brown) を擁するユニオン神學院がその中心になつてゐる。現在また辯證法神學に抗してホルムス (J. H. Holmes)・リューズ (Leuba) が近代主義の見地を守つてゐる。またフランスではプロテスタントのサヴァテ (E. Savatier) が近代主義に立脚してゐる。最後に近代主義神學の個人主義的特性といふことについて一言しておきたい。これは、全く辯證法神學及び社會的キリスト教の理論が指摘するやうに、この神學の本質的特性をなしてゐる。キリスト教の本質的觀念たる罪、キリストによる贖罪、救済、啓示等々はすべて個人の體驗内に於ける事實であり、個人の罪、個人の救ひが中心事である。これは近代神學が社會の救ひ、或は神の王國といふことを語らないといふのではない。それを語る場合も、それはつねに、個々の個人の救ひ、個々の個人の覺醒を通じて、ただそれによつてのみ到達せられる

ものとされてゐるのである。この根柢には社會は原子的個人の算術的集合であるとする抜き難い個人主義的世界観が存してゐる。しかし注意すべきは、この個人主義を新興神學やカトリック神學のいふやうに、單にマイナス的のものとして一面的にのみ見てはならぬことである。元來個人主義は二義を有つてゐる。一つは原子論的且つ自己中心的世界観としての個人主義であり、もう一つは封建的イデオロギーとしての絶対主義的、他律的哲學に對して闘へるものとしての市民階級の人間主義的、自律的哲學としての個人主義である。ルネッサンスの「自我の發見」、ドイツ觀念論の「人格の自律」といふことが、個人主義の概念のうちに含まれてゐる。従つてかかる個人主義を有する限りに於いては近代主義神學は進歩性を有してゐる。辯證法神學者ゴッタルデンが、國家の概念或は支配と服従の概念を以て、近代主義の個人主義に反對してゐるのは、實にかかる意味の「個人主義」をも含めてゐることに注意しなければならぬ。

三 社會的キリスト教の理論 市民階級の一つのイデオロギーとしての近代主義神學は、資本主義のその後の發展自體によつてもたらされた新たな社會狀勢に面して、新たな變貌を行はざるを得なかつた。この新狀勢といふのは、經濟、政治、文化のあらゆる方面にわたつて資本主義社會の基本的矛盾が暴露せられて來たことを示してゐる。漸次深刻化してゆく恐慌、それに伴ふ失業、貧困、隸屬、もはや覆ひ得なくなつたブルジョア階級とプロレタリア階級との根本的對立と闘争の事實、資本主義列強の對立、その解決としての世界大戰、そしてプロレタリアの世界観としてのマルクス主義——この唯物論は宗教と根本的に相容れぬ——の普及、これらの社會的

事實は、市民階級の位置を十八九世紀に於けるものと根本的に變へた。嘗つての勤勉で、活動的で、樂天的で、封建階級に對して攻める者であつたものが、今は保守的な、絶えず不安に脅かされ、プロレタリアに對しては攻められる者となつてゐる。かかる事情の變化によつて、市民階級のイデオロギーが從來有してゐた合理性、科學性、民主性は喪はれ、唯物論に對して正面から闘争することによつて、益々反動化することになつた。これが直接に露骨に現はれたものは、イギリスに於ける廣教會のオックスフォード運動、イングデーン運動(1860—)などの神祕主義、アメリカのウェストミンスター神學院を中心とする根本主義(Fundamentalism)等である。だが一方かかる社會狀勢は、十九世紀末より直接的な反動ではない社會民主主義の運動及び理論を生み出してゐる。例へば新カント派の社會主義等は、この現はれてゐる。社會的キリスト教の運動及び理論も根本的にはかかる一般傾向の現はれてゐる。勿論現實の困難な生活に直面し、次第に覺醒しつつある大衆の間に、在來のキリスト教の無力さが暴露され、魅力を失ひ、逐年信徒の著しい減少が見られてゐることが、社會的キリスト教運動の起された直接の動機であらう。そしてこの際キリスト教會員中の下層階級出身者及び急進的學生の意見が、キリスト教社會化のための槓杆となつたことも疑ひない。しかし社會的キリスト教及びキリスト教社會主義の歴史的意義は、社會民主主義以外のものではない。

今社會的キリスト教の運動を見ると、イギリスでは廣教會派の自由主義神學者の間からモーリス(E. D. Maurice, 1805—1872)、キングスレー(Charles Kingsley, 1819—1875)が出、聖トバイ組合

(Guild of St. Matthew) 社會的キリスト教聯盟(Christian social union)などが作られた頃から始まり、この運動の特に盛んなアメリカではグラッドン(W. Gladden, 1836—1918)、ストロング(J. Strong, 1847—)等が先驅的な社會的キリスト教の唱道者で、今世紀の初頭以來有名なラウセンブッシュ(Walter Rauschenbush, 1861—1918)、ウァーネ(F. Ward)の外、ウァッター(H. G. Vatter)、ホール(T. G. Hall)、スミス(G. B. Smith)、ヘルウッド(G. A. Ellwood)、テイラー(G. Taylor)等が社會的キリスト教の理論を發表してゐる。自由主義神學者のヒーポデー(E. H. Peabody, 1847—)、マシューズ(S. Matthews, 1863—)の立場もこれに近かつた。大戰中はこれらの理論家は人道主義、平和主義を重要なモットーとしてゐたが、殆んど活動をやめ、大戰後再び活動を開始し、エルウッド、ウァッターの理論から、魂の救済のみでなく實生活の救済をも目的とする實用的教會(Institutional church)が作られ、一九一九年にはウァッターを主唱者として多くの宗派の教會が共同の教會改造の綱領を發表してゐる。またドイツに於いてもこの運動及び理論は醸成せられ、シュテッケル(A. Stecker)、ナウトン(E. Naumann)がその理論的代表者となつてゐる。ドイツ系スイス人の間にも特にこの理論の發展が見られ、ブルムハルト(Blumhardt)父子、クッター(H. Kutter)、ラガン(L. Ragan)などが出てゐる。

社會的キリスト教はなほフランス、日本のキリスト教徒の間にも唱道され、カトリックの間からも多くの理論家を出してゐる。日本では社會運動の一潮流としては以前より賀川豊彦等によつてキリスト教社會主義として主張されてゐるが、キリスト教内の運動として

の社會的キリスト教は、一九三〇年頃より一時わが國に於ける最も活潑なキリスト教理論雜誌であつたキリスト教青年會の機關紙『開拓者』の指導権を握つたが、一九三二年の所謂夏季學校事件を轉期として急激に下火になつた。即ちS. C. M. 運動である。これはマルクス主義の烈しい影響を受けたキリスト教青年學生のキリスト教を離脱せんとする過程をも混入してゐたため、本來の社會的キリスト教理論家である幹部から弾壓されてゐる。

社會的キリスト教の運動は、前述の如く本來社會主義及び唯物論からのキリスト教の擁護を目的としてゐる。キリスト教の新解釋、神學の改造といふことは、この目的に附帶して、たゞこの目的のために爲されたことである。このことはラガン、クッター、ウァッターなどにはつきりと見られることであり、比較的マルクス主義に理解を有つと思はれるラウセンブッシュに於いてもこれは争へぬ事實である。

社會的キリスト教は、キリスト教が單に人間の魂だけでなく、現在在の破局に瀕した現實の世界そのものを救ひ得ること、否それのみが、かかるものであることを立證しようとする。このためキリスト教の現世性、倫理性、社會性が強調せられ、厭世的、神祕主義的傾向はキリスト教の本質でないことが言はれる。「神の國」といふ觀念が前面に押出され、神の國は未來に於いて實現せられるユトビーヤではなく、現世に實現せらるべき、また實現せられ得るものとされる。従つてまたこれに關聯して神の超越性に對して、神の現世の社會生活に於いての内在性が強調せられる。この點は辯證法神學とは反對の方向に近代主義神學を分化せしめてゐる。

キリスト教の世俗性、神の現世への内在性といふことは、キリスト教の民主性といふことに必然的に聯關せるものとして説かれる。ラウセンブッシュは、超越神と内在神との對立は、專制國家と民主國家との對立であり、現在なほ神の超越性を主張するものがあるのは、殘存封建的勢力の神學的反映であるといふことを言つてゐる。

これらは近代主義神學の一面の延長と見ることが出来るが、社會的キリスト教の特性はむしろ近代主義神學の個人主義に對して、人間の連帶性、共同性を説くところに現はれる。これは階級闘争の事實及びマルクス主義の階級闘争説に對して、從來の個人主義的キリスト教の無力さを修正し、これに對抗し得るものにしよとする意圖から行はれてゐる。このため社會的キリスト教は從來の神學が、罪及び救ひを全く個人主義的に解し、罪も救ひも單に個人のものとして對して、罪も救ひも社會的であることを主張するキリスト教信者の社會からの救ひではなく、社會と共にの救ひである。この際社會的キリスト教の理解する社會には、社會學上の概念である利益社會(Gemeinschaft)と共同社會(Gemeinschaft)といふ考へが借りられ、資本主義社會は利益社會であるが、階級闘争説に立脚するマルクス主義の理解する社會もまた利益社會であるため、これは前者を克服することが出来ない。これに對してキリスト教の「神の國」は愛によつて結合せられ、神によつて主宰せられる共同社會であり、これが眞に兩者を克服するものとされる。

だが社會的キリスト教は、マルクス主義の克服を第一の目標としながらも、一方にはキリスト教會内の下層大衆の意向をも反映し、資本主義の罪惡、それに對する從來のキリスト教の無關心、無力を

も攻撃する。ラウセンブッシュは資本家の擡取、致富、それによる大衆の貧困と隷屬化とを神に對する最大の罪となし、在來のキリスト教が資本家を、それが單に安息日に祈禱し禮拜することを以て模範的クリスチャンとなしてゐることを皮肉つてゐる。しかしラウセンブッシュによると、資本主義社會の罪惡も人類のうち普遍的に内在し、時代から時代へと傳承されてゐる社會惡なるもの一つの現はれてあつて、すべての個人がこの社會惡の構成因子として責任を有つてゐる。従つて悔ひ改めとは個人がこの惡の世界が征服され、やがて責任を感じることであり、信仰とはこの惡の世界が征服され、やがて神の共同社會が實現されることの信念である。而してこの神の國の實現の手段は階級闘争ではなく、すべての人類にこの神の國の意識を自覺せしめるといふ精神的運動に求められる。即ち資本主義社會のもたらす罪惡も、結局は人間一般に本來的な永遠の罪惡に解消せられ、マルクス主義が資本主義社會の止揚の必然的槓杆となしてゐる階級闘争を人類愛の宣傳に代へるのが、社會的キリスト教の本質的特質となつてゐる。

四 辯證法神學 辯證法神學は特に世界大戰後に於けるドイツ小市民階級の不安定な心理——これが一方ではキェルケゴール(Kierkegaard, 1813—55) 哲學の復興、ハイデッゲル(Martin Heidegger, 1889—)「ヤスベルス(K. Jaspers)の哲學の誕生となつてゐる——の神學に於ける反映と見るべきものであるが、その一部(ゴーガルテン)は大市民階級の經濟上、政治上の自由主義、民主主義の否定としての統制主義、獨裁主義の氣運に合致する傾向を漸次に帯びて來てゐる。代表的な辯證法神學者はバルト(Karl Barth,

1886—)「ブルネル(Emil Brunner)」「トールナイゼン(Eduard Thurneisen)」「フーガルテン(Friedrich Gogarten, 1887—)」「バルト(Balthasar Balthmann)」である。詳細は辯證法神學の項について見られたい。

五 カトリック神學 カトリック神學に於いては、現在近代主義と、新トーマス主義(Neothomismus)又は新スコラ哲學(Neuscholastik)との對立が見られる。カトリックの近代主義はやはりプロテスタントの近代主義の影響を多分に受けて、教會、教義に對する自由討究、科學的成果の攝取、内在的神觀、民主主義傾向等をカトリック神學に導入してゐる。かかる近代主義者としては、「イギリスの國教會から轉じたニューマン(J. Henry Newman, 1801—90)」「フォン・フューゲル(Von Hügel)」「フランスのロブソン(Alfred Loisy)」「ル・ロア(Eduard Le Roy)」「オレーラブリュヌ(Léon Ollé-Laprune)」「ライツツは雜誌ホッホランド(Hochland)によつてムート(Karl Muth)一派、イタリーの民主的キリスト教徒同盟の一派等があるが、カトリック的モダニストとしては特にフランス人が顯著である。といふのはフランスの近代主義は勿論ドイツの近代主義の影響を受けてゐるが、ベルグソン(Henri Bergson, 1859—)の非合理主義によつて獨特のものに仕上げられてゐるからである。しかし例へばベルグソン主義者としてのル・ロアは、勿論因果律によつて神の存在を證明するやうな主知主義には反對するのであるが、近代主義者としての彼は決して神を超越的には考へてをらない。神は世界と人間のうちに内在する。自然の進化の内在的原因となつてゐる。またドグマに對しても自由な討究を許さるべきものと見、

超自然的な天啓や奇蹟をも客觀的なものでなく、特異な宗教的心理に於ける主觀的な體驗となして、カトリックと科學との調和を圖つてゐる。この科學との調和といふことはロアジにも見られることであつて、一方では信仰の基準としての教會の絕對的權威を認めながら、他方にはその諸内容に對する科學的討究が許さるべきであり、兩者は毫も矛盾しないことを主張してゐる。

一方新トーマス主義の方を見ると、元來トーマス(Thomas von Aquino, 1225—1274)の哲學をカトリックの公認哲學とするといふことは、一八七九年八月四日の法王レオ十三世(Leo XIII, 1878—1903)の回教(Inocentia Aeterni Patris)に言はれ、一九一〇年ポピウス十世(Pius X, 1903—14)が更にこれを強調してゐるが、カトリックに於けるこのトーマスの復興は、十九世紀後半よりの思想界の唯物論的、批判的傾向に對する反動であり、大戰直前のフランスに於いてはカトリックの近代主義者、即ちベルグソン主義者に對抗して行はれてゐる。かかるベルグソン主義に對する主知主義的な反動としての新トーマス主義は、單に神學内の運動に止らず、哲學、文學の領域にも波及し、その代辯者としてマリタ(Jacques Maritain)「ブラン、ヴァレリー(Paul Valéry, 1871—)などを有してゐるが、これらのいづれがより反動的であるか、比較的に進歩的であるかは決しがたいことである。周知の如くトーマスはオーガステンに對してリアリスチックな、主知的な神學者である。トーマスは啓示による知識(Immen supernatural)と理性による知識(Immen natural)との合致を信じ、感覺的認識より漸次に抽象を行ふことによつて、何ら啓示の助けを借ることなく、神の存

在を證し得るとなしてゐる。そしてオーガストンの神秘的な直觀的な神認識には反對し、それは必要でもなく、また可能でもないとなしてゐる。しかしフランスのみに限らず、一般に歐洲に於ける神學運動としてのトーマス主義をとるならば、これは比較的、民主主義的、自由主義的な近代主義に對する反動であることは動かしがたい事實である。

ブシエラ (Erich Przywara) の Die Problematik der Neuscholastik (Kantstudie XXXIII, 1928) によると現代の新トーマス主義は三つに分けられる。第一はローマ、フランス、スイスのドミニク派の新トーマス主義で、これはトーマスの哲學をそのままもち出すもの、第二の新トーマス主義は、歴史家的興味から出發して、オーガストン主義に對するトーマスの地位を嚴密な史的方法によつて把握せんとするもの、これにはヘートリンク (Herling)、タラーマン (Martin Grabmann)、ボイムケル (Jemens Baenkler) など屬してゐる。第三のものは、二つの形式に分れるが、その第一は今世紀の始めに起つた所謂キリスト教形而上學 (christlichen Metaphysik) である。これは眞理の客觀性、意志の自由、靈魂の不滅等の神學の根本的前提を、近代科學や哲學をとり入れて哲學的に考察しようとするもの、ロツツェの立場に近く、認識論に於いては論理的でなく心理的である。ガイゼル (Joseph Geysler) などはこれに屬してゐる。この派の第二の形式はドイツではマッセルの現象學から出づつ、シューニル (Max Scheler)、ハイデッゲル、アロイズ・シュニル (Aloys Müller)、マッセル (Johannes Hessen) などの哲學に至つて實を結んだもの、フランスではベルグソンの影響を受

けたもので、新トーマス主義とは言ひながらトーマスよりはむしろオーガストンに近いものである。この派の神學者としてはなほガールドレーニ (Romano Guardini)、ワグネル (Peter Wust)、ヘンリッヒ・ワグネル (Karl Eschweiler) などがゐる。

参考文献——W. Litigert; Die Religion des deutschen Idealismus und seine Ende, 1922—26. H. Groos; Der deutsche Idealismus und das Christentum, 1927. E. Troeltsch; Der Selbständigkeit der Religion, 1896. Glaubenslehre, 1925. W. Herrmann; Dogmatik, 1925. G. Wobbermin; Systematische Theologie 3 Bde. R. Otto; Das Heilige. A. Harnack; Lehrbuch der Dogmengeschichte 1885—90. Wesen der Christentum. F. Naumann; Soziale Programme der evg. Kirche 1890. Was heisst christlich-sozial? 1894. H. Kutter; Die Revolution des Christentums, 1908. Not und Gewissheit, 1926. L. Ragaz; Kapitalismus, Sozialismus und Ethik, 1907. Jesus Christ und moderne Arbeiter, 1908. Weltreich, Religion und Gottes Herrschaft, 1922. E. Przywara; Religionsphilosophie, Katholischer Theologie, 1927. G. Herling; Historische Beiträge zur Philosophie, 1914. M. Grabmann; Die Geschichte der Scholastischen Methode im 12. und beginnenden 13. Jahrhundert, 1909. J. Geysler; Einige Hauptprobleme der Metaphysik, 1923. J. Hessen; Die Weltanschauung des Thomas v. Aquin, 1926. 一般的なものとして Hans Leisegang; Religionsphilosophie

der Gegenwart, 1930.

(甘粕石介)

### 進化論

(英 theory of evolution, 獨 Deszendenztheorie, Abstraktionslehre, 佛 transformisme)

- 一 序
- 二 進化論の發展
  - a. ダーウィンの進化説
  - b. ダーウィン以前

一 序 一般に進化 (evolution) と云ふ場合には、それは (自然的又は社會的) 秩序の徐々たる展開を意味し、それらの秩序の急激な變化を意味して云ふ場合は、これを革命 (revolution) と呼ぶ。併し乍ら進化論と云ふ場合は、それは生物學的進化といふ狭い意味に解され、この理論を基礎とする社會的文化的現象に關する進化説と區別される。スペンサー (Herbert Spencer, 1820—1903) や マッケル (Ernst Heinrich Haeckel, 1834—1919) 等の思想體系はこの進化説に基いてゐる。さて所謂進化論によれば、地上の凡ての生ける有機體はその根源に就ては未だ確立的に知られてゐない非常に單純なものからある系統を辿つて漸次に發達して來たものであつて、各個體は生殖といふ個體繼續の要因によつて、生命の流れの具現者として現はれる、そして一系列の個體の形態機能は時と共に變化する、即ち現在の種 (species) はそれに先行する種から變化して發生したものである。處て生物進化のこの現象は勿論一つの歴史的事實であるが、これが理論として確認されるに至つたのは近世のことに屬

シムカロン

しづる。

### 二 進化論の發展 a. ダーウィン以前

勿論古代希臘時代に於ても既に二三の自然哲學者 (例へば、タレス Thales, 640? B.C. アナクシマンデロス Anaximandros, 610—547 B.C. クラクレイトス Heraclitos, 535—475 B.C. 等) は觀念論的ではあつたが、自然を發展して來たもの、又は現に變化の途上にあるものと見てゐたが、然しこれらの思想は、その後基督教が勃興するに及んで、凡てのものは神の直接の創造物であり、且不變であるといふ信條の勝利の下に、發展を妨げられた、そして中世紀は進化論にとつても亦暗黒の時代であつた。ルネッサンスに至りて自然哲學者の間に個體の發見及び自由思想の見解の擡頭と共に進化思想が出現し始めたが生物學的に進化の問題を取扱ひ出したのは更に遅れて十八世紀になつてからである。その萌芽は **カントフオン** (Georges Louis Leclerc Kuffin, 1707—88) に於て見られる。彼は動物がその生活要約の變化によつて其等自身の形態を變じてゐることを一應は認めたが、然し彼は未だ當時支配的であつた神の直接創造の思想に對して勇敢に闘ふ事が出来ず、後には神の恩寵を唱へることによつて自説を曲げてしまつた。近世博物學の創始者である同時代のリンネー (Karl v. Linné, 1707—78) によつて「種は不變である」 (Species constantissimae sunt) と云ふ命題を立ててゐた。即ち種は神が最初に創造しただけの數が存在する。この命題は長い間支配的であつたが、その後 **ラマルク** (Jean Baptiste de Monet Lamarck, 1744—1829) Philosophiè zoologique, 1809. 小泉丹の譯あり) は **フエッフォン** の影響をうけて、環境の影響が動物の習性を變化させ、動物の意欲

は必然的に習性の變化を伴ふ、そして若し新しい欲求が一定となり繼續的となると新しい習性を形成し、新しい習性は新しい部分を使用し、その部分を發達せしめ、一方使用の廢止はその部分を退化せしめる(使用廢用説)、そしてこの獲得形質は遺傳する、といふ考へに至つた。彼は斯くして進化の過程とその要因(ラマルクの要因)を力説し、且始めて動物の系統樹を描いた人であり、ダーウィン以前の最も偉大な進化論者であつたが、同時代のトレヴィラヌス(Gottfr. Treviranus, 1776—1837)も生物内部に於ける固有な形成運動の存在を信じつゝ、環境の影響を重大視した。同様にゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe, 1749—1832: Die Metamorphose der Pflanzen, 1790, Ueber den Zwischen-Kiefer des Menschen und der Tiere, 1784)は複雑な生物體を簡單な型に還元して、一種の原基型(Urtypus)を想定した。然しダーウィン以前の進化論者は生物の合目的性や完全性への傾向を環境と生物との相互關係に求めないで、生物の意欲とか形成衝動とか原基型のイデーの發展とか凡て生命に固有な内的な力の發展の中に認めてゐることによつて觀念論や神祕主義や活力説に陥つてゐる。シルレル(Johann Christoph Friedrich von Schiller, 1759—1805)もゲーテの原基型のイデーを「經驗ではなくして思ひ付きだ」と云つてゐる。そしてこれらの活力的な進化論を科學的たらしめたのはダーウィンである。併し乍らダーウィン説が勝利を得るに至る迄には未だ久しい年月を経なければならなかつたのである。佛國では當時未だラマルクの進化説は勢力を得る事が出来ず、且キュヴィエ(Georges Cuvier, 1769—1832)の反對によつて窒息せしめられてしまつた。キュヴィエはリ

ンネーの「種は不變である」との命題を固執し、化石遺骨と現在の生物との差を進化によつて説明せず、天變地變毎に神が新に種を創造したことに依るとして兩者の間に發展系列的關係のない事を主張したのである。これは一方では進化論を否定して神學を裏書すると同時に他方では佛國革命勃發前における新興市民階級の思想を代表してゐた故に當時に於ては壓倒的勢力を得てゐた。従つて當時ラマルクの唯一の支持者であつたセン・チレル(Geoffroy St. Hilaire, 1772—1844)も例へば家畜に就いて最も古い家畜がその野生の原型と著しく變化してゐることに注意を拂ひ、且一八三〇年パリの科學アカデミーに於て軟體動物であるイカと普通の魚との間に於ける構造上の同一性を主張してキュヴィエと有名な論争をなしたが後者のために否定されてしまつた。その後ライエル(Charles Lyell, 1797—1875: Principles of Geology, 1830)が地球の構造の連續的進化を説いてキュヴィエの天變地變説を駁したが未だこれを生物界に適用する者は無かつた。斯くてダーウィンに至る迄の間、生物進化の問題は生物學者達の關心とならなかつたが他方に於て別の方面で生物學は著しい發展を遂げつゝあつたのである。即ち、キュヴィエは生物の變異性を無視したが比較解剖學の創始者としてこの方面に偉大な功績を残し、フォン・メヤー(Karl Ernst v. Baer, 1792—1876)は始めて比較胎生學を確立し、更にヴォルフ(Kauper Wolf, 1733—94)は個體發生の機構に就いて新生説(Theoria generationis)を立て、個體發生の際には特殊分化の無い原形質から全機官が新生するとして後成説を主張し、十八世紀末迄支配的であつた前成説(又は展開説)の誤謬であることを證明し、比較解剖

學及び發生學の發達に次て更に十九世紀の始め三十年代にシュライデン(Matth. Schleiden, 1804—81)とシュワン(Theod. Schwann, 1810—82)によつて凡ての生物及びその幼體は同素たる細胞から成立してゐる、といふ細胞説が主張された。斯くして生物の複雑な生命現象もそれを構成してゐる全細胞の機能の結果であることが證明されるに至つて生理現象に關する従来の神祕的な活力説的な思想は大きい打撃をうけたのである。その後細胞説の發展と同時に細胞の内容である所の原形質(Protoplasma)がシュルツ(Max Schultze, 1825—74)やモール(Hugo v. Mohl, 1805—72)によつて始めて明らかに規定されるに及んで組織學(Histologie)は廣大なる研究範圍を見出す様になつた。これと同時に十九世紀前半頃に盛んになつてゐる前史時代研究によつて、殊に歐洲の水邊村工居生活跡の發見と共に、時間的に見て現在よりも遙かに過去に存在してゐる時期の家畜資料が手に入れられ、その當時の家畜種の組成が明らかにされると同時に、その野生の原始型に遡り、或ひは現在の家畜種迄系統を追ひ求めることが可能とされることによつて有機的形態の變形可能性の正しいと云ふことが漸次認識されかけようとしてゐた。斯くしてダーウィンの時代に至る僅か五六十年間に生物學は一つの方向に於て異狀の進歩をとげ、一方解剖學的研究に於ても一段の發展を示して、ダーウィンの進化論を生み出す土臺は既に出來上りつゝあつたのである。只進化論といふ當時の狀態としては宗教的見地から見て異端視される恐れのあるこの理論を大膽に發表する事の出来る場所のみが問題として残されてゐたと云つてよい。そしてそれに最も相應しい土地はさし詰め英國であつた。其處では既に産業革命

も成就され、新興市民階級は躍進の頂上にあつた、そして其處は新らしき思想を植ゑつけるに最も適當した土地になつてゐた。かゝる土地にダーウィンが登場したのである。そしてかゝる土臺に於てのみダーウィンの存在は可能であつた。



ダーウィン

は一八三一年より三六年迄五ヶ年間英國軍艦「ビーグル」號に博物學者として便乗して世界を周遊し、その間鳥嶼の生物界殊にガラパゴス島の動物相に特性を認め又南米に於ける貧齒類の著しい地質的繼續に注目した。是等の事實は彼をして彼の劃時代的な理論を作り出す所の萌芽を得せしめるに至つた。歸英後彼は死に至る迄ケンブリッジのある村に住し、全く科學的研究に献身し、絶えず種の起源の觀察を擴張せんために苦心し、事實の蒐集に努め、殊に家畜飼育者と實際して家畜種の系統の問題に注意を拂つた。然し彼は自分の學說を地質學者ライエル、植物學者フッカー(Jos. Dalton Hooker, 1817—1911)に通信してゐたに止まり一八五八年迄これを公にする事を決心しなかつたが、この年に友人ウォーレス(Alfred Russel Wallace, 1823—1913)が論文(On the tendency of species to form varieties etc.)を受取りし際に多くの重要な點に於て自己の意見と同じであることを知つてウォーレスの論文と自己の說の主要

とを同時に公にし、翌一八五九年に『種の起源』(On the origin of species by means of natural selection. 小泉譯岩波文庫上巻のみ、大畑譯あり)を世に問ふたのである。その後當時の系統問題に關する業績を總括したものとては『飼育下に於ける動植物の變異』(Upon the variation of plants and animals under domestication, 1862) やその他『人類の由来及び雌雄淘汰』(Descent of man and selection in relation to sex, 1871. 邦譯あり)並びに『人類と動物の表情』(The expression of the emotions in the man and animals. 岩波文庫邦譯あり)等が續いて世に出たのである。そして上記の本が彼の進化學說の主張の全部をなしてゐる。彼の特長は自己の學說に對する批評や非難に對して筆をとらなかつた事で寧ろこの役は他の人達例へばハックスリー(Thomas Henry Huxley, 1825—95; Man's place in Nature, 1863)やヘッケル(Ernst Haeckel, 1834—1919; Generelle Morphologie der Organismen, 1866; Natürliche Schöpfungsgeschichte, 1868)やスペンサー(Herbert Spencer, 1820—1903; Principles of biology, 1867)によつて引受けられたのである。

ダーウィン以前の進化學者がダーウィンに對する影響に就いては彼の『自叙傳』(Life and letters of Charles Darwin, with an autobiographical chapter, ed. by Francis Darwin, 1887. 岩波版邦譯あり)によると、彼の進化論的意欲は自身に萌してゐたので讀書によつて緒を得たものでなく、自己の意欲が成立した上で多くの先進者の説を學び、それを判断したものである。この點に關する經過は『種の起源』の序を参照するがよい。彼は『ビーグル』號に搭乘

して世界周遊中、現在の生物と過去の生物との地質的關係に關するある事實から深い感銘を受けて、種の起源に關する考へに及びつてゐたが、歸英後飼育下にある動植物に關してこの考へを纏めんとために事實を蒐集した。そして彼は淘汰といふことが人間が動植物の有益な種類を作る基礎であることを悟つた。が然し自然の状態に於ては淘汰が如何にして適用されるかに就いて考へてゐた時に偶々マルサス(Thomas Robert Malthus, 1766—1834)の『人口論』(Essay on the principle of population)を讀み、人間生活には情欲と食欲は必然的であつて、人口は増加する力を有つてゐる、然るに食物は算術的に人口は幾何學的に増加し、前者の増加は後者の増加に及ばない、従つて人間が生存して行くためには兩者は是非平均を保たなければならぬ、その結果は人口増加の妨げは人間生活に於て必然的現象である。それは「動植物界に於ては種子の浪費、疾病及び天死」人類にありては貧窮及び罪惡である、といふマルサスの考へを知るに至つて、ダーウィンは兼ねて彼が動植物の習性に關して永い間續けて來た觀察の結果である所在に行はれてゐる生存のための闘争の事實の認識を基礎にして好都合な變異は保存され、不都合なものは滅ぼされる傾向のあることを想ひ浮べた(ダーウィンはマルサスに就いては彼の著作の中に「つも言及してゐない、只自叙傳の中に於てのみその關係が窺はれる」)。この結果自然に於ける新らしい種が形成されるといふ見解に彼は到達したのである。このことはマルサスとダーウィンの直接の影響を度外視しても、兎に角兩者は當時の英國の社會理論であつた生存競争の理論の反映であつたことは否めないのである。

彼は自然淘汰説を次の様な順序で説明してゐる。飼育動植物には夫々獨特な形質を有つた品種が存在してゐるが、これは人間がその必要に應じて、又は好事的見地から、自己の目的に適ふ特質を有つたものを選び出して飼育しそれに適はないものを捨て、行つたためである。この取捨が人為淘汰(artificial selection)である、が然し人為淘汰は生物自體が有つた特質を土臺にしてゐるが、然し人間は如何なるものでも作り得るのではなく且生物體の流動性が永久的に持續されることもないので一定の期間は人為淘汰は効果を生み、ある品種を作り出す事が出来るが然しそれから後は止んでしまふのである。處て淘汰の土臺である變異(variation)即ち生物個體の差異は生物界に於ける普通の現象であつて、生物界には同一なもの全然無い、同一父母から生れた子の間にも差異がある。この變異は人間がこれを選びとることによつて代々重ねられてゆく中にそれが顯著になつて一方では在來の種の特徴を破壊しつゝ他方では新らしい品種を作り出すに至る。この淘汰作用の結果は非常に緩慢な經過に於て現はれる。而して淘汰は人間の意識が其處に作用しなくても行はれる、これを無意識的淘汰(unconscious selection)といふ。處てこの淘汰作用は自然によつても行はれる。即ち人為淘汰の場合人間が自然の作用に干渉するのであるが自然の場合には、自然に於ける生存競争の結果、生活要約によく適した生物の個體のみが生存を持續し、反對にそれに適しないものは死滅し、生存に最も適したものがその子孫を繁榮させることが出来る。例へばジャラフは、土地が乾燥して草木に乏しく高い樹枝の葉を食ふ必要に迫られてゐる土地の制約によつて、絶えず頭と四肢とを伸ばすことを代々續けた結果、

その累積が頭と四肢とが長いといふ特質を得るに至つたのである。それと共にジャラフは、その土地の要約に最も適したものとて他のものが生命を保持することが出来ないのに、ジャラフのみは生存を續ける事が出來た。云はゞ生存競争の勝利者となつたのである。即ちこの自然淘汰が適應の原因ともなり、種の變化を起し、そして新しき種の生成の要因となるのである。この他にダーウィンは適者生存による自然淘汰以外に、雌が配偶を選ぶ場合にその審美觀や其他によつて最も優れた雄を選びその結果配偶を得ぬものは子孫を残さないので死滅し、配偶を得るものは子孫にその形質を傳へてゆく。この意味の淘汰は雌雄淘汰による自然淘汰であつて、彼はこれをも重要な進化の要因と見てゐる。そして彼は人為淘汰及び自然淘汰の場合に獲得形質の遺傳されることを認め且ラマルクの要因である生活環境の影響や使用廢用の成果の遺傳的累積や雜交その他の結果をも認めてゐる。が然し彼は自然淘汰と適者生存の説を最も強く主張してゐる、そしてこの點に彼の進化説の特徴と功績がある。それに就いては吾吾は彼の書の表題『生存競争に於ける自然淘汰又は恵まれた品種の保持による種の起源』(Origin of species by means of natural selection or the preservation of favoured race in struggle for life)を考へてみなければならぬ。何故に彼が「自然淘汰」と云ふ言葉を使つたか。それは當時未だ一般に種は現在の儘で神によつて創造されてゐた、といふ自然の形而上學的解釋を彼が打破すると共に、他の一方では當時の家畜や栽培植物の蕃殖者が自ら新らしい變種を作つてゐると主張してゐたに對して、彼等が新らしい形質を作り出すのではなく、夫等の形質が現はれた時に彼等は單にその新形質を

選擇(淘汰)しそして保存してゐるに過ぎない、といふことを指摘する  
 ためであつた。斯くして彼は従来の生物學の觀念論的解釋に對し  
 て、環境哲學の生物學的基礎を興へ、實驗と觀察とによつて科學的  
 に進化過程を説明したのである。そして生物界に於けるこの進化説  
 を社會現象に適用したのがマルクス(Karl Marx, 1818—83)であ  
 つて、『種の起原』が出た一八五九年はマルクスの『經濟學批判』  
 (Zur Kritik der Politischen Ökonomie)が最初に出版された年であ  
 かつたことは注目に値する。

以上の如くダーウィンの進化論は近代科學史上時代を劃する役  
 目を果たしたが、然しそれには未だ進化論の後の發展によつて補はれ  
 るべき點を有つてゐたし且又誤謬や缺點をも有つてゐたのである。  
 先づダーウィンは屢々彼の書の中で新形質を呼ぶに偶然的(acciden-  
 tal, chance)産物といふ言葉を用ひてゐるが、これは彼がそして  
 又當時の誰もこの新形質が如何にして起るかを知らなかつたからであ  
 つて、これはダーウィン以後發展した生物學殊に遺傳學、細胞學に  
 よつて明らかにされたのである。又彼は淘汰による種の形成とラマ  
 ルクの要因による形質の獲得以外に出現の最初から顯著に現はれて  
 ゐる變異を認めてゐるが、この後者の種の形成に就いては彼は僅か  
 しかその意義を認めてゐなかつた、之は後年に偶然變異と呼ばれる  
 ものによつて説明されるに至つたものである。又彼は凡ての變異が  
 遺傳的であると考へてゐるが、此點も變異に遺傳的なものと然らざ  
 るものがあることが彼以後遺傳學の進歩によつて明らかにされた。  
 更に根本的な錯誤は、彼の進化論は自然淘汰によつて古い形質が止  
 揚され、新形質が生ずるといふ優れた辯證法に依つてゐるに拘らず、

ウィーン説は『種の起原』の出版後三十四年の間には單に生物學に於  
 ててばかりでなく社會の各方面に影響を及ぼし、一八九〇年頃には  
 確實に支配的の位置に進んでゐた。斯くして進化説そのものは一つ  
 の疑ふ可からざる事であつて、以後の進化論の發展は、要之、進化  
 の要因に關してそれを外的要因に置きか内的要因を主とする  
 かによつて議論分れとなつてゐるのである。

これらに就いての論争として見るべき主要なる立場は、新ダーウィ  
 ン説(Neo-Darwinism)と新ラマルク説(Neo-Lamarckism)の對立  
 である。前者はワイスマン(August Weismann, 1834—1914; Studi-  
 en z. Deszendenztheorie, 2 Bde. 1875—76. Ueber die Vererbung,  
 1883. Das Keimplasma, 1892. Die Allmacht der Naturzücht-  
 ung, 1893. Vorträge über Deszendenztheorie, 1902. 3 Aufl. 1913.  
 Die Selektionslehre, 1895)の説で、これによると有機體の細  
 胞は生殖細胞と體細胞とに分れ、生殖細胞——卵又は精蟲——は胎  
 芽質と稱する物質の貯藏所であつて、一つの性の個體のこの胎芽質  
 の微細な小部分が他の性の個體の同じ部分と結合すると新しい一  
 個體が生れる。そしてここに時代から時代に至つて胎芽質の不斷の  
 流れがある。そして胎芽質は唯一の遺傳の運搬者であつて體細胞に  
 起つたものは子孫に傳渡されぬ。即ち生殖細胞と體細胞は獨立して  
 ゐる、従つて例へば尾の無い猫は車輪に尾を切られた祖先の猫から  
 の遺傳ではなくて、尾のない血統の男親に由來してゐる。未開人は人  
 體の一部に傷をつける習慣を持つてゐるが只一つの場合でもそれは  
 子孫に遺傳されてゐない、従つて獲得形質の遺傳は不可能であつて、  
 進化の要因は只自然淘汰のみであるとし、「自然淘汰の全能」を主張

彼は複雑な自然現象をたゞ生存競争といふ事實によつて一方的に解  
 決した爲に機械論的誤謬に陥つてゐること、この點も相互扶助の  
 現象が自然界にあり、且又生存競争によらないでも種の變化のある  
 事實があることが立證されるに至つてゐる。

ダーウィン以後、ダーウィンの『種の起原』の出現は生物學界  
 及び言論界に大きい波紋を生ぜしめた、が殊に基督教的宗教界に對  
 する影響は大きく、ダーウィンの説は聖書にある神による直接創造説  
 に反するものとして大きい反對を受けた。この傾向は宗教界に於て  
 てばかりでなく、教育界に於ても見られ、數年來米國のある州では現  
 在でも進化説教育は法律によつて禁止されてゐる。然し一方では既  
 に『種の起原』の出版直後に多くの方面で賛成を得、フーカー(F.  
 Dalton Hooker, 1817—1911; Flora Antarctica, 1845—48)・ハック  
 スリー(Huxley; Man's place in nature, 1863)・モリレル  
 (Fritz Müller; Für Darwinism)・ケネル(Generelle Morpho-  
 logie, 1866. Natürliche Schöpfungsgeschichte, 1868)・スペンサ  
 ー(Herbert Spencer, 1820—1903; Principles of biology, 1867)  
 等が各自の立場からダーウィン説に賛意を表した。更に「自然淘汰」  
 発見の名譽をダーウィンと共に分ち有つてゐるウォレスは一八八  
 九年に自己の進化説を纏めて『ダーウィン説(Darwinism)』と題する  
 書を著し、謙讓の徳を發揮した、が然し彼の説はダーウィンが獲得  
 形質の遺傳を信じてゐるに對してこれを排し、自然淘汰を進化の唯  
 一の要因とした點に於て異つてゐる(新ダーウィン説 Neo-Darwin-  
 ism)。勿論當時生物學者の間にもダーウィン説に反對する人も  
 ゐたが多くは非科學的な神祕主義者であつた。そして他方ではダー

する。その結果彼は新形質の出現の源泉を専ら遺傳される生原の内  
 部の再構成に求め、外的環境の影響に對する絶対的不變及び固定の  
 特質を胎芽質に歸せしめてゐる。ウォレスや相當多くの英國の生  
 物學者がこの説を奉じてゐる。新ラマルク説は、ダーウィン説が單に  
 變化を假定するに止まつて、その起原を説明しない、そして自然淘汰  
 は適者生存を説明するに止まり、その起原を問題としない、が然し淘  
 汰の行はれる前に既に變化があつた筈である、と云ふ見地に立つて  
 自然に於ける變異の偶然性といふ概念を基礎とする自然淘汰の役割  
 を否定し、變異の應化性と合目的性及び獲得形質の遺傳を主張し、生  
 物と環境とを機械的に對置させ、更に生物の内的な促進を強調する。  
 この派に屬する人達にはスペンサー、オスボーン(Henry Fairfield  
 Osborn, 1857—)・アイメル(Theodor Eimer, 1843—98)・ヤモン  
 (Richard Semon, 1859—)等がある。

これらの論争はダーウィンの進化説を周るものであつたが十九世  
 紀末にはこれらの要因以外のものに関する進化論も出現してゐる。  
 それはアイメルの主張する「定向進化」(Orthogenesis)であつて、  
 古生物學的見地から見たものである。即ち舊き地層から順次新らし  
 き地層へかけて發掘されるある一群の動物の化石を排列するとその  
 形態は一定の方向に向つてゐる事が見られる、そしてこの一列は  
 古きものより新らしきものへとその器官は單純なものから複雑なも  
 のとなつてゐる(更に進むと退化し單純化する)。そしてその器官  
 の發育はある場合には最初有益でなかつたものが後に有益となり、  
 ある場合には器官の増大が却つて有害となり、生物の死滅が起る。  
 これは内的又は外的の原因による變異の進化であつて、これは自然



淘汰説では説明出来ない。アイメルは外的原因を主張し、ネーゲリ (Karl Wilhelm v. Nägeli, 1817-91) は内的原因を述べ、この説は自然淘汰説を否定するのではなくて却つてその作用の範囲を限定して認めてゐるのであつて、どちらかと云へばラマルク説に近い。同じくこの時代に現出したものに隔離説 (segregation theory) がある。これには二つありその一は、新しい種の生成には地球的隔離が有効であり必要であるとする説であつて、ブダネル (Moritz Wagner, 1813-87; Entstehung der Arten durch räumlichen Sondernung, 1889) がこれを唱へ、貝類の研究によつてギュエリック (J. T. Gulick; Evolution, racial and habitual, 1905) も同様にこれを主張した。猶この地理的隔離に對して生理的又は性的隔離がある。この主唱者は **ローネス** (Theo. John Romanes, 1848-94; Mental evolution in animals, 1883) である。

一九〇〇年代に入つてから、進化學界は有力な刺激をうけた。その原因は突然變異説 (Mutationstheorie) の出現である。この説は、**ド・フリース** (Hugo de Vries, 1848- ) : Die Mutationstheorie, 1901-1903) が始めて主張したもので、ダーウィン以後の有力な進化論と認められてゐる。彼は一八八九年に「細胞内汎生説」 (intracellular pangensis) と云ふ變異遺傳説を立て、生物の種の新しい形質は、ダーウィンやラマルクの説く様に微少な彷彿變異の累積の結果形成されるのではなく、新世代の形態と全く連続しない形態が子孫世代に突然に現はれ且環境の要約とは無關係に遺傳することを、オホマツヨヒグサの遺傳實驗によつて發見した。同様の實驗の結果は **パウエル** (Erwin Baur, 1875- ) : Einführung in die ex-



バーバンク(左)とフリース(右)

perimentelle Vererbungslehre, 1914) によつて得られた。猶 **モルガン** (Thomas Hunt Morgan, 1866- ) : Physical basis of heredity, 1919) は猩々蠅に就いて永年研究し、殊に加熱や放射線の放射によつてこれに種々の突然變異が生ずる事確かめた。これは生殖質に變化が起る結果であつて、細胞學的に見て染色體の異常等が證明された。従つて野外でも放射線や宇宙線が生物の生殖質に變化を及ぼし、その結果新しい種が形成される可能性のあることが認められるに至つた。突然變異説の特徴は偶然と必然との内面的聯關から離れて偶然的變異のみが強調され、量から質への辯證法的轉換が無視されて質的變化は不可解の内に閉ざされてゐる點にある。

進化論はその後遺傳學によつて大きい影響をうけてゐる。その最初の功績は **メンデル** (Gregor Mendel, 1822-84) の形質の遺傳及び支配に關する法則 (Mendelian) に歸せられるが彼の説はその研究發表の當時一般に認められず、その後一九〇〇年に獨逸の **ロンズ** (K. Correns)、奥の **チェルマー** (E. Tschermak) 並びに **ド・フリース** が各自獨立に植物の雜種研究の結果、雜種の子孫に於て親の形質が現はれる様式に關する法則を發見して以來、**メンデル** の遺傳の法則が再發見され、それと共に細胞學殊に染色體に就いての形態學的研究が、大きい發展を遂げ、細胞核の染色體

(chromosome) の中にある物質(遺傳子)が子孫に遺傳されるとする染色體説(chromosome theory)が生れるに至つた。更に **モハンゼン** (Wilhelm Johannsen, 1857-1927; Ueber Erblichkeit in Populationen u. in reinen Linien, 1903) は變異の研究によつて、純粹系統に於てはそれは認められないが、雜種系統に於てはそれが認められることを確かめた。これらの説は進化を説明するに或ひは細胞内の遺傳子の變化や交配を以つてし、或ひは獲得形質の充分の意義を認めないことによつて、ダーウィンの遺傳や變異に關する理論に對して否定的態度をとつてゐる。

以上によつて認められる如くにダーウィン以後の進化論は遺傳學、細胞學、生理學等の著しい發達に拘らず、純粹に進められてゐない形勢にある。即ち進化論は全く生物學の一部として取扱はれ、淘汰といふことは全く度外視されてゐる傾向がある。然しこれは具體的事實として證明されてゐるし亦證明されねばならぬ事柄であつて、現に米國の **バーバンク** (Luther Burbank, 1849-97) は實驗的(人為淘汰)の結果によつて幾多の新らしい果實種を作り出してゐる。従つて自然淘汰も可能であると云ひ得る。斯様に種の變化を立證し、それを積極的に應用することが眞の意味の進化論の發展であらう。

参考文献——本文中の著書 小泉丹、進化學序講 同譯、進化學說 アーサー・リュウイス、荒畑譯、社會進化と生物進化 等。(加茂儀一)

### 新聞

(英 newspaper, 獨 Zeitung, 佛 Journal)

單に新聞紙に限らず、廣く新聞現象を指す。人間社會のイデオロギー交通の一つの契機であり又一形態である處のジャーナリズムは近代的様相としては、出版、ラヂオ、キネマ、演臺(舞臺及び演壇)、博覽設備(展覽會・博覽會・陳列會・ショー・ウィンドー・ネオンサイン・スカイサイン・アドバルーン・其他)等の現象をその乘具とするが、この内出版(乃至印刷)現象にぞくする書籍・雜誌・パンフレット・ピラ・ポスター・傳單等々と並んで、近代出版現象の代表的な一つとして新聞現象を數へることが出来る。一般にジャーナリズムといふと近代ブルジョア・ジャーナリズムだけを考へたり、また極端な場合には新聞紙と聯關した行動だけを考へたりするが、ジャーナリズムは近代ブルジョア・ジャーナリズムや新聞に較べて遙かに一般的な又歴史的に古い規定である。

近代新聞紙が發生したのは十七世紀前半のヨーロッパ各國の大都市に於てである。之は初めグーテンベルク (Johann Gensfleisch Gutenberg, 1400-68) の手押機械を用いた四六版數頁の週刊新聞紙に過ぎなかつたが、十九世紀の中葉までに資本主義の發達と政治的自由主義の伸張とに沿つて極度の發達を示すに至つた。併し近代新聞紙に限らず一般に新聞現象として見る限り、その起源は遙に古い。新聞紙の初めと看做されてゐるものはシーザー (Gaius Julius Caesar, 100-44. B.C.) の Acta Diurna や前唐玄宗帝の『邸報』の如き官報類似のものであつたが、ローマ貴族及び中世ヨーロッパ

諸侯は、通信奴隷や通信臣下を用ゐて情報(間諜制度や、使節制度による)を蒐集したが、之が自由に回讀されたりノベリスト等やゼンガー等によつて讀賣されることによつて、やがて手書き新聞となつた。更に近世初期のブルジョアジーはその商業上の報知のために消息・往來を交換したが、夫が今日の近代新聞紙の初めをなす。

新聞紙は新聞現象の機關乃至媒介である。之を發行するインスティテュートは新聞社であり、新聞社にあつて新聞紙を編輯・發行するのは新聞記者(廣義の)であり、新聞紙を購讀する者は新聞紙讀者である。新聞現象はこの四つの要素の間の具體的な關係に基いて社會的機能を營む一つの社會現象なのである。——新聞紙プロバパーの他に多くの補助新聞紙(例へば號外を別として週間朝日・サンデー毎日の類)もあるが之は新聞紙が含む廣義の文藝欄(Festhalten)の延長獨立したものに過ぎない。又新聞社組織の外に附屬的な組織の延長獨立したものがある。通信社・廣告取次店・販賣取次店等々。又新聞記者と云つても社長・出資者・株主其他の出版資本家と記者とは區別されねばならず、記者の内にも顧問客員や専屬記者や寄稿者は區別されねばならず、がより大切なのは編輯部員(探訪・論説委員・主筆・其他)と營業計畫部員との區別である。後者は新聞社組織の經濟的・資本主義的・物質的基礎に直接關係し、前者は之に觀念的作用力を通じて間接に關係する。ブルジョア新聞社組織が行ふ資本主義的新聞企業に於ても、その言論は必ずしも直接新聞社自身の經濟的基礎に貢獻しなくてもいゝ場合がある。同一資本系統の企業を利するとか、一般社會の資本家的利益を齎すとかすれば足りる場合が、決して少くはない。——讀者は併し特別な要素である、と云ふのは

ひ表はす各種の言葉の内にも現はれてゐる。Intelligenz, Anzeiger, Announcement はどれも廣告の謂であるが、その言葉の本來の意味は寧ろ報道を指してゐる。

文藝とは第一に論説、解説及び註解を含み、第二に評論、批判及び紹介を含み、第三に文藝を含む。第一は主として教導の機能を、第二は主として評價の機能を、第三は主として娯樂(Unterthaltung)の機能を果す。無論この三つのもの夫々の間に、又三つの機能夫々の間に、一定の聯關と移り行きがあるが、文藝を廣く批評と呼ぶことが出来る。さてそこで、報道と廣告との聯關はすでに述べた通りであるが、報道乃至廣告とこの批評との聯關を述べることが必要である。實は報道それ自身がその意圖と効果から云つて一つの批評的機能を有つてゐる。ニュースの選擇、書き方、載せ方などは、すでに一定の批評的態度に基かざるを得ない。逆に批評記事が一つのニュースに他ならぬことは云ふまでもない。又廣告の本質は元來自己推薦にあるが、そのためには一定の自己評價を下して見せねばならぬ。云はゞ之は一種の自己批評であり、或ひは少くともその形を取らねばならぬ。批評自身は逆に又、廣告の機能を營む場合がある。夫は主に新聞社組織或ひはその背景をなす一定の資本、或ひは廣く資本主義社會そのもの、ために、宣傳の役割を與へられた時などである。

新聞現象の根本規定は時事性にあると云はれてゐる。時事性とは世界の刻々の歴史的運動に現實的に沿つた活動的な觀點を意味する。時事性の内容は第一に日常性である。日々(刻々・年々・月々)條件を新たにする事物の動きに就いて、その日々の特種性を指摘するためには、日常性の原則が必要である。之は超時間的な形而上學

讀者は新聞記者其他のやうに新聞社組織に組み入れられたものではなくて、一應之から獨立した人的要素であるから。

新聞紙の紙面は普通、政治欄・文藝欄・商業欄・廣告欄に分類される(Karl Bücher, 1871)。だがこれは新聞紙の空間的分類であつて、新聞現象の社會的機能による分類ではない。新聞現象は内容的に報道(Nachrichten)と文藝(Literatur)とに分類される(D・シュタイニッツ)。前者は時事性・現實行動性(actuality)を著しい特色とし、後者はこの點あまり顯著でない。これは報知的部面(Anzeigenteil)とテキスト的・編輯的・部面(Text-Redaktionsteil)との區別とも云はれてゐる。

報道とは私信・週文などと異り公共的なものを云ひ、或る一定の限られた讀者でなく、一般的に不定な讀者を想定するものを指す。併しその内でも、私的・個人的・市井的・私黨的な興味に基づくもの、公的・國家的・市民的・社會黨派的な興味に基づくものを區別しなければならぬ。前者を私的報道、後者を公的報道と呼ぼう。だが又この報道は公私ともに、報道者の個人的な利害に直接立脚しないことを建前とする。さうでなければ報道は公平と眞實との外見を失ふからである。報道者自身の個人的利害に直接立脚する特殊な報道は廣告と呼ばれてゐる。廣告も明らかに一種の報道ニニュースであるが、ニュース・プロバパーと異なる點は、ニュースが讀者に一種の義務を負はせるに反して、廣告は讀者の好意ある閱讀を希望するといふことである。普通廣告は有料のニュースであるといふ風に規定されてゐるが、その區別は寧ろ今云つた點から派生するものである。報道と廣告とのニュースとしての差別と同一性は、之を云

的原則のよくする處ではない。時事性乃至その第一規定であるこの日常性は廣くジャーナリズム現象の根本規定のだが、新聞現象の場合には夫が報道の迅速さの問題となつて、第二の規定として現はれる。間に合ふ・時宜に適する、といふことが新聞現象では極めて大切な時事性乃至日常性の内容となる。こゝから新聞現象の週期性なるものが見出される。新聞現象に關する各國の法制は、寧ろ逆に、一定の週期性ある刊行物を新聞紙と定義してゐる。新聞現象の週期性は交通の物質的條件によつて決定されることは云ふまでもない。交通機關の發達はこの週期を細かくする。

だが新聞現象の根本規定である時事性は、單に日常性につきるのではない。或ひは、日常性そのものが、單なる迅速さや週期性につきるのではない。時事性のもう一つの大切な規定はその政治性に存する。尤も政治性と云つても廣く社會性を意味する場合と狭くブルジョアの或ひはプロレタリア的政治活動を指す場合とは區別されるが、新聞現象にとつては、いづれの場合も必要である。新聞現象の時事性もつ社會性に就いて、新聞紙は普通新聞と特殊新聞とにその社會的機能上分類される。經濟新聞・産業新聞・宗教新聞・大學新聞・文藝新聞等々は後者にぞくする。之は社會性を發揮する部面が普遍のか特殊のかの相違であるが、時事性が社會性に止まるか或ひはプロバパーな意味での政治性を發揮するかの區別は、日本の例で云へば、小新聞と大新聞との區別となる。小新聞は主に社會の市井事を報道することを目的とし、之に反して大新聞は政論の用具であつたが、獨り日本に限らず今日はこの小新聞が資本主義的大新聞として發達し、政治的批評機能に富む所謂大新聞は、ブルジョア新聞

紙としては事實上は小さい新聞紙となつてゐる。かつて大新聞にはブルジョア階級の社会的政治的「輿論」を代表するといふ政治的役割があつたが、今日のブルジョア新聞に於てはこの役割は全くの單なる扮装としてしか残つてゐない。そして最後に、社會性政治性そのものゝ内に、近世の階級社會に於ては判然とした對立があるの、そこらからブルジョア新聞紙とプロレタリア新聞紙との區別が現はれる。こゝで問題になるのはもはや單なる輿論や何かではなくて、新聞紙とその讀者層との政治的文化的イデオロギーなのである。現代新聞現象に關する最後の問題はこゝにあるのである。

ブルジョア新聞の特色は新聞紙といふ商品の製作販賣による利潤の追求といふ過程の内に存する。かゝる制限をほゞ或ひは完全に脱却してゐるプロレタリア新聞は無産階級の組織・啓蒙・宣傳・アジテーション・指令其他の機關として機能することによつて、却つて新聞本來の一般社會的使命に立つことが出来る。ブルジョア新聞に於ては曲りなりにも新聞本來の使命に立ち歸るべく新聞の「倫理化」を説くのを常とするが、云ふまでもなく倫理は利潤の前に何等の權威でもない。ブルジョア新聞による「自由新聞」運動も、少くとも「社會主義新聞」運動(F・ラッサールやK・ビュッセルによる)にまで轉化するのだから積極的になれない。プロレタリア新聞は「はコンミュニストによつて始められ、今日ではサヴェント聯邦(「イスクラ」に始まる)は云ふまでもなく、イギリス、アメリカ(デリー・ワーカー)等に於て大きい勢力と絶對な意義とを持つてゐる。尤もプロレタリア新聞紙は歴史的にも、理論的にもコンミュニスト・パーティーの機關紙に限るとは考へられないが、之は今日プ

ロレタリア・ジャーナリズムの最も有力な一部分をなしてゐる。  
参考文献——K. Bücher: Gesamte Aufsätze zur Zeitungskunde, 1926. E. Steinitzer: Der Allgemeine Beitrag des modernen Nachrichtenwesens (Grundriss d. Sozialökonomie IV, 1925). O. Groth: Die Zeitung, 1927. など詳細は戸坂、新聞現象の分析(「現代哲學講話」所收一九三四年)を見よ。(戸坂潤)

### 心理學 (英 psychology, 獨 Psychologie)

- 一 心理學の定義
- 二 心理學の對象
- 三 心理學の方法
- 四 心理學の種類
- 五 意識
- 六 本能
- 七 感覺
- 八 知覺
- 九 記憶と想像
- 一〇 注意
- 一一 感情
- 一二 情緒
- 一三 意志
- 一四 思惟

一 心理學の定義 茲に言ふ心理學は言ふまでもなく一つの科學である。科學としての心理學、これが吾々の課題である。歴史上には多くの非科學的もしくは前科學的、或ひは哲學的、心理學が興へられて居る。がそれらは吾々の興り知らないところである。吾々の問題は飽くまで科學としての心理學に止まつて、それ以上もそれ以下にも出でない。このやうな心理學は近代の、特に十七八世紀以降の、所産である。それはまさに近代精神である自然科學的

精神と共に發生した近代科學である。

吾々の言葉で謂ふ心理學の原語は英語では psychology、ドイツ語とフランス語としては Psychologie である。此等は共にギリシヤ語の ψυχή と λόγος とからの造語であつて、前者は心を、後者は學を意味する。従つて語源的には心理學は「心の學」の意であつて、日本語で心理學と譯すのもそこに由來して居る。もとより心といふ言葉は種々な意味に解されるが、いまそれを心理現象、精神現象乃至意識現象と普通に呼ばれるものを意味するとするならば、心理學は心理現象もしくは精神現象に關する學であることとなる。斯くて心理學なる名稱はその學を對象から規定した言葉である。併し一つの科學を對象から規定しただけではその科學の性質の解明は未だ充分であるとは言はれない。科學は更に方法を一つの重要な要素とするからである。それでは心理學の方法は何であるか。それは如何なる方法に依つてその對象を研究するのであるか。それに答へて吾々は心理學の方法は自然科學的方法であると明確に言ひ得る。對象を單に思辨的に一つの大前提から演繹的に説明して行くのではなくして、却つて實證的に觀察と實驗とを通じて歸納的に説明して行くのが自然科學の精神である。

心理學は心理現象を對象とし自然科學的方法を方法とする。即ち心理現象を對象とする經驗的自然科學が心理學である。

二 心理學の對象 心理學の對象である心理現象は古來物理現象と並行して、而も相互に區別して考へられて來た。物理現象は自然的な外界に於ける存在即ち事物的な物質現象のことであつて、その屬性として指摘されるものは空間的な廣がりである。之に對して心

理現象とは吾々人間が日常生活に於て朝夕直接に感知し經驗する内界の出來事である。物理現象は時空的に其處に在る外物であるが、斯くの如き外的存在を吾々の心の内に想ひ浮かべること、想ひ浮かべる作用乃至力が心理現象である。吾々は種々な外的存在なる事物を意識の上に想ひ浮かべ、また其等に對して種々な好惡愛憎の感情を經驗する。更に快感を味ははせる事物を追求し、その道に不快感を起こさせざる事物をば排斥しようとして多様な努力を拂ふ。進んでは事物の想ひ浮かべや不快の感情を土臺としてそのものに就て何等かの判断を下し、或ひはその存在を肯定し、もしくは否定するに至る。凡て此等は吾々が直接に經驗するところであつて、其等が心理現象に他ならない。

心理現象とは吾々が内的に經驗する感覺や感情や記憶や想像や思惟等の總計である。其等は吾々の内部に於て現實に發生し進行する精神的過程である。之に對して物理現象は何等かの意味に於て吾々の外部に於ける過程であり、そこに兩者の間の差異の一つが認められる。けれども、他面に於て兩者の間には密接な關係が存在する。人間の肉體なる生理現象は最も複雑な物理現象であるが、第一に、斯かる生理現象を離れては心理現象は存在しない。第二に、肉體上の種々な變化は心的生活の上に夫々顯著な變化を興へ、また逆に心的生活に於ける種々な變化は肉體の上に各々明確な影響を及ぼす。而して肉體のうちで特に興つて力あるものは腦髓である。従つて心理學が對象とするところは生理現象を基礎とした心理現象でなければならぬ。

三 心理學の方法 心理學の方法は自然科學的方法であるが故に

それは心理現象を一つの事實としてありのままに観察し、斯くして獲られたところを記述し、且つそれを説明しなければならぬ。その方法は先づ第一に観察的であり、次に記述的であり、最後に説明的である。

観察とは科学の材料を蒐集する爲に現象をその事實的生起のままに知覚することである。而もその場合に知覚はただ漫然となされるのではなくして、一定の目的乃至見地の下に組織的に行はれる。このやうな観察は普通に自然的観察と實驗的観察との二種に區別される。前者は所謂観察であつて、後者は略して實驗と呼ばれる。観察は現象に對して何等人爲的干渉を加へることなくして、それを自然のままに、それが生成し消滅するがままに、観察することである。實驗は之に反して研究の一定の目的の爲に現象を人爲的に生成せしめ或ひは變化せしめて観察することである。従つて實驗は最も嚴密な意味に於て自然科学的研究方法であると言ひ得る。

廣義の観察はまた内観もしくは内省 (Introspection) と外觀 (Extrapection) とに區別される。前者は自分の精神現象を自分で観察することであり、後者は他人のそれを観察することである。斯くて心理学の観察法としては次の四種のものが結果する。一、觀察的外観。二、實驗的外観。三、觀察の内観。四、實驗の内観。

ところで観察が常に分析的であることは注意されねばならない。次に心理現象を観察し實驗し分析した以上は、吾々はそれを記述しなければならぬ。心理学は事實科学であり記述科学である。併しその記述は個々の心理現象の個性の記述ではなくして、却つてその本質、法則を取り出すことである。心理学は斯くて法則定立科学

である。最後に、見出された法則に依つて個々の現象を説明することが必要である。心理学はまた説明科学でもある。

四 心理学の種類 心理学の種類及び領域としては種々なものが考へられ、また現に存在して居る。其等を分類する爲の理論的な規準となるものは心理学の對象とそれに對する態度とである。而もこの二つの規準は互ひに交錯して多くの種類を構成して居る。先づ對象から見れば正態と變態、個體と團體、人間と動物、成熟者と未成熟者乃至老若者等が區別され、次に態度からすれば一般と差別的、現狀と由來、内観的と外観的、理論的と應用的等が分かれる。この二つの規準からして現在心理学の種類として廣く認められて居るものを擧げるならば次の如くなるであらう。普通心理学、個性心理学、變態心理学、民族心理学、社會心理学、兒童心理学、青年心理学、老年心理学、動物心理学乃至比較心理学、發達心理学、理論心理学、應用心理学、内観心理学、外観心理学、實驗心理学。更に心理学は精神現象の類別そのものからしても種々に區別される。例へば意志の心理学、感情の心理学、思惟の心理学、學習の心理学等がそれである。

以上の中で最初に學ばるべきもの、従つてまた理論としても初めに位し他のもの標準となるものは普通心理学である。このものは個人としての人間の而も成熟者の一般的な正態的な心理現象の研究である。即ち普通の成人に共通な精神現象の一般相、普遍性を問題とするものである。成熟する文明人の正態的な精神現象はあらゆる心理学が参照すべき標準である。吾々が兒童や動物や民族や社會等の精神を観察し説明し得るのは、其等に就て吾々が知るところを標融合して一つと成らんとする傾向を備へて居ることであり、他はそれが標の關係に於て、即ち時間的に、統一されて現在の意識の中に含まれて居ることである。斯くて意識に於ては全體が一つに統一され結合されて一つの同一の自我の意識を構成する。

而も意識の統一とは靜的ではなくして動的である。意識は過去からの經驗の繼續であると同時に未來に向かつての運動である。意識は根本に於て絶えず未來へ未來へと前走して行き、常に先へ先へと進動して行く。而してその際に意識は持續的に統一を保つて居る。このやうに進動的であることは意識の根本的な特徴である。多様な變化を統一しつつ自發的に運動して行くものが意識である。

六 本能 意識が能動的な自發的な作用であることはそれが常に情意作用を基礎とするものであることを意味する。この基礎的作用である情意作用の中の最も單純なものは衝動 (Impulse, Trieb) 並びに本能 (Instinct, Instinkt) である。此等のものは單純な意志作用、原始的な意志作用であつて、明確に意識的な自我の活動ではない。

本能とは意識の程度は衝動よりも更に稀薄であつて、而も學ばずして生れながらに一定の目的に叶つた動作を行ふことを意味する。吾々が直接の生活上種々半無意識的な而も目的に合つた動作を爲すのは凡て本能の領域である。本能的活動の特徴は次の如く概括し得るであらう。第一に、それは他から教へられまたは自己の經驗から習得しなくとも遺傳的になし得る活動である。第二に、それはその個體もしくはその個體が屬する種族の存続に合目的である。第三に、それは反射運動に比較して一層複雑な全般的な可變化的なものであ

準的な心理現象と比較することに依つてのみである。其故に心理学的研究は正態的な成人の意識作用の研究として始まらねばならぬ。従つて吾々の論述も普通心理学に限ることとする。

五 意識 心理現象は意識 (consciousness, Bewusstsein) であり、それは吾々が自ら直接に經驗し體驗するところである。意識とは吾々が直接に意識することであり、また吾々に意識されてあることである。意識のこの事實からして、意識に於ては主観的な作用的側面と客観的な對象の側面とが區別される。前者は意識作用であり後者は意識内容である。前者は吾々が感覺や感情を感知する作用の方面であつて、後者はそれに依つて感覺され感情された内容の方面である。意識はこの二つの側面を俟つて初めて成立する。兩者を内に内在せしめる具體的な機能が意識に他ならない。

このやうな意識現象の特徴は自發性、變化性、統一性、運動性に於て捉へられる。物理現象が受動的靜止的機械的であるに對して、心理現象は能動的積極的自發的である。意識は消極的に外來の感覺を俟つて成立するのではなく、感覺が成立する時には既に其處に意識が積極的に働いて居る。或刺戟に對して意識が積極的に自發的に働き掛けて初めて意識現象は成立する。

意識の諸々の活動は時々刻々に變化して暫くも靜止する時がない。それはまさに一つの流れてある。この流れそのもの、變化そのものが意識である。併し變化性を特徴とし流轉して極まりない意識は他面に於て統一性を特徴として居る。變化的な意識は他方に於て常に統一ある現象である。意識現象の統一といふことには二つの意味が含まれて居る。一つは意識現象が横の關係に於て相互に結合し

る。第四に、それは反射運動の單なる集合ではなく、全體として構成された統一體をなし、その内に一定の内的方向を含み、個々の部分的活動はこの全體のものに依つて支配されて居る。第五に、それは上述の如き意味に於て盲目的ではない。第六に、それは或程度まで纏まつた統一の構成である。第七に、それは最廣義には内面的活動をも含むものである。

本能を分類するならば次の如くなるであらう。

第一の部門 自己の生物的存続に必要な物質の攝取に關する本能で、營養本能、呼吸の本能、温度に對する本能。

第二の部門 自己の生物的存続に邪魔になるものや損傷を與へるものを排除し防止する本能で、排泄本能、防禦本能、休息及び睡眠の本能。

第三の部門 他の人間またはこれに準ずるものに對する親和的本能で、性的本能、親としての本能、子としての本能、群居本能、好意的本能。

第四の部門 主として社會的な本能で、嫉妬本能、競争本能、誇示の本能と退讓の本能、模倣本能、褒貶・賛否・許可不許可等に關する本能的反應、他人に對する一般的關心。

第五の部門 比較的に多種の意義を有し得る本能で、恐怖及び逃避の本能、憤怒及び争闘の本能、支配的傾向と屈從的傾向、獲得・狩獵・所持・貯藏・蒐集の本能、居住本能、移住と望郷の本能、清潔の本能、探索本能、遊戯本能、歩行・彷徨・追従・右利左利・發聲・把握等の本能。

七 感覺 複雑な意識現象の客觀的方面を構成する最も單純な要素、知的な心的要素、が感覺 (sensation, Empfindung) である。

例へば赤とか青とかの色の意識、その他、音や味や匂ひ等の單純な意識は凡てこれに屬する。客觀に關する最も單純な意識、最早これ以上分析し得ない最後の要素的意識が感覺に他ならない。それは事物を思ひ浮かべ、見とめ、見分ける最も原始的な知的作用であり、吾々の外界認識の基礎をなすものである。

感覺はそれが發生する爲に生理的條件を缺くことが出来ない。感覺が起る爲には外界からの物理的刺戟が感覺器官に作用することが必要である。物理的刺戟を受けることに依つて感覺器官に夫々特殊な生理的變化が生ずる。この生理作用は特に生理的刺戟の中の末梢刺戟と名づけられる。末梢刺戟が各々の感覺神経を通じて腦中に運ばれた時、そこに起る生理作用は中樞刺戟と呼ばれる。この一定の中樞刺戟が生じた場合に意識の上に起つて来る最も單純な活動が感覺である。

感覺が感覺である爲には必ずそれに備はつて居なければならぬ特性がある。これは感覺の屬性と名付けられる。斯かるものとして普通に感覺の質と強度とが挙げられる。質とは一つの感覺が他の感覺から區別されるそれに固有の特質のことであり、強度とは一つの感覺が持つ一定の質の強弱の度合のことである。例へば赤の感覺と青の感覺とは質を異にし、濃い赤と薄い赤との感覺は強度を異にするのである。なほ感覺の屬性の中にはこの外に時として擴がりしと連續とが數えられる。外物の形や大きさの感覺が擴がりであり、感覺の時間的持續が連續である。

感覺は感覺器官の生理作用を條件とするものであつた。感覺器官

としては普通に耳、目、口、鼻、皮膚の所謂五官が數えられるが、感覺器官は決してこの五種には限られず遙に多數である。身體の内部の肺臓や胃腸等を初めとして筋肉や關節に至るまでその中に數えられる。而して感覺の種類は感覺器官の種類を規準として分類される。その種類は次の如くである。

第一類は皮膚の感覺で、觸覺、苦痛の感覺、温度の感覺。第二類は運動の感覺で、筋肉感覺、關節感覺、體感覺。第三類は有機感覺で、食道に關する感覺、血液循環に關する感覺、呼吸に關する感覺、分泌に關する感覺、性慾に關する感覺。第四類は平均感覺で、頭部の平均及び運動に關する感覺。第五類は其の他の感覺で、味覺、嗅覺、聽覺、視覺。

八 知覺 知覺 (perception, Wahrnehmung) は感覺よりも複雑なもの、多數の感覺を構成要素とする意識現象である。それは多少複雑な諸感覺を想ひ浮かべて、其等諸感覺に對する客觀物が現に感覺的に意識されつたと認めることである。即ち知覺は先づ主觀から獨立した客觀物の存在を必要條件とする。現に想ひ浮かべつつある諸感覺が客觀物に無關係であつて、單に主觀の妄想に過ぎないならば、知覺は起らない。故に知覺が生ずる爲には、ただ諸感覺が想ひ浮かべられるばかりでなく、更に必ず其等が主觀から獨立した客觀物に關するものであることが必要である。

感覺が夫々の外的刺戟に基づいて起るやうに、知覺も客觀物の刺戟に基づいて起る。吾々が經驗する知覺の種類は客觀物の多様と相俟つて殆ど無數である。この無數の知覺の種類は多くの心理學者に依つて、知覺が備へて居る性質性と空間性と時間性といふ形態性

に従つて、性質的知覺と空間的知覺と時間的知覺とに分類される。多數の知覺は事物の様々な性質を捉へ、次に空間性即ち大きさ、形、位置、距離、方向等を捉へ、またすべての知覺は時間性即ち時間の長さ、持續、を捉へる。性質性と空間性と時間性とは知覺の重要な形式的特徴である。この他にも知覺の變化性とか知覺相互の連絡、結合、統一とか、知覺の發生的並びに衰退的狀態とかが注意されるべきである。が今日の心理學は未だ其等の點を開明するまでには至つて居ない。

性質とは事物の性質であつて、それは色彩、音の調子、味、香等である。従つて斯かるものに關する知覺が性質的知覺であつて、その主なるものは明暗と純粹色彩との混合としての色彩の知覺、音楽に於ける調子或ひは階調の知覺、味と香との知覺、皮膚感覺と筋肉、關節等から来る感覺の混合としての觸の知覺等である。空間的知覺は空間性の知覺であつて、視覺的空間知覺と觸覺的空間知覺と聽覺的空間知覺とに分かたれる。時間性とは第一に連續を意味し、第二にその關係即ち同時及び前後又は過去、現在、未來を意味し、斯かるものに關する表象が時間的知覺である。

九 記憶と想像 記憶 (memory, Gedächtnis) は記憶の表象であつて、表象の中の一様である。それは狭義には知覺表象を意識の上に想ひ浮かべ再現することであり、従つて外的刺戟に依らずして、腦中樞内の刺戟に依つて起るものである。廣義には一定の知覺乃至觀念を経験し、それを覚えこむこともその中に數えられる。故に記憶作用の範圍は頗る廣く、凡そ次のやうな五つの作用を含むこととなる。

第一は記銘作用で、諸観念を意識面に印象し、暗記し、學び、覚え込む作用である。第二は把持作用で、記銘したものを維持して行くことである。第三は再現作用で、記銘したものを後に意識面に想ひ浮かべる作用である。第四は再認作用で、以前に経験した印象にまた接した時に「あああれだな」と感ずることである。第五は推時作用で、いつ頃に経験したことであるといふことを確める作用である。

想像 (Imagination, Einbildung) は想像的表象であつて、これも廣義の表象の中に數へられる。而もそれは記憶と同じく、知覺表象を意識の上に想ひ浮かべることであり、従つて外的刺激に依らずして、腦中樞内の刺激に依つて起る。併しそれは記憶とは異なつて、過去に経験された諸観念を記憶どほりに再現することではなくして、寧ろ記憶された諸観念を以前の経験とは異なつた形に綜合することである。従つて積極的な創造作用が想像の中心である。

想像にも様々な種類がある。ただあてもなく空想の赴くままに居る受動的想像と、藝術家が事件の發展を想像的に描く時のやうな能動的想像とがある。後者の中には藝術的なものに、科學的なもの、工藝的なもの、宗教的なもの等種々ものがあり、且つ其等は夫々特殊な性質を備へて居る。

一〇 注意 (Attention, Aufmerksamkeit) とは一般に或意識内容が意識の焦點にあつて明瞭になつて居る状態、もしくは或意識内容を特に意識の焦點に齎す作用を意味する。即ち注意は第一に意識内容の方面から見られる。或意識内容がはつきりして居、他の意識内容が漠然として居て、意識が中心ある統一状態をなして

居ることである。このやうな状態が注意の状態であり、この状態の中心になつて居る意識内容は注意されて居るのである。注意は第二に意識作用の方面から見られる。見る聞く等の知覺作用は統一的なものであり、それは或印象が明らかになり他の印象がぼんやりするやうに精神作用が統一的に働いて居ることである。知覺作用のこの統一が注意作用である。従つて知覺といふ作用の外に特別に注意といふ作用があるのではないことが知られる。注意作用は表象作用に伴ふ特殊の作用、一つの意志作用であり、或ひは緊張乃至努力の感情であるに他ならない。

吾々は一瞬間にさう多くのものを意識し得るものではない。従つて吾々は同時に無制限に多數の事物に注意し得るものではなく、一時的にはただ少數のものにしか注意し得ない。一時に明瞭に想ひ浮かべられる意識の範圍は注意の範圍と言はれる。注意の範圍の周圍に吾々は漠然たる表象や感覺を意識する。意識にははつきりした部分とぼんやりした部分とがある。前者が注意の範圍で、後者は意識内容の總體即ち意識の範圍である。注意は普通に受動的又は無意的注意と能動的又は有意的注意とに分類される。吾々が欲すると否とに拘らず注意がひとりてに無意識的に他に向ふのが受動的注意であり、それを引き締めて或特定の對象に意識的に注意を向けるのが能動的注意である。ところが或種類の對象に對する能動的注意はこれを反覆して居ると次第に受動的注意に變化して去る。即ち初めは有意的に能動的に注意して居たものが後には無意的に注意するやうになる。この種の受動的注意は第二次的受動注意と呼ばれる。人々が専門のことをやつて居る時は主としてこの注意に依つて居る。

一一 感情 意識現象の主観的方面即ち情意作用の構成要素が感情 (Feeling, Gefühl) である。感情の本質はそれが主観的である點、即ち客観に關する意識ではなくして主観にのみ關する意識であるといふ點、に存する。感覺や表象は刺激が外界から感覺器官に傳はり、更にそれが末梢神經から腦中樞に傳はつて生ずるが、感情は斯くして生じた感覺や表象に對して反應的に起る作用、即ち感覺や表象の中樞刺激に對して先づ腦中樞に起る反應作用に依つて起る作用、中樞作用に始まつて次第に末梢機關に及ぶ生理作用に伴ふ作用である。感覺や表象が主観から獨立した客観物の意識であるに對して、感情は純粹に主観の反應作用である。

感情の種類としては普通に快感と不快感が數へられ、これのみが感情が備へて居る唯一の種類であるとされて居る。快不快が感情全體に共通な根本特徴であることは否定出来ない。併しこの事實は直ちに感情にはそれ以外の種類は存在しないと斷定させるものではない。寧ろ更に無數の種類が存すると考へられる。快不快は全體に共通な大きな種別であつて、その下に更に小さな種別があるのである。ヴント (Wilhelm Wundt, 1832-1920) は感情三方向説を採つて、感情の種類を次の如く區別する。快的感情と不快的感情、緊張的感情と弛緩的感情、興奮的感情と鎮靜的感情。彼の説明に依れば後の二對四種の感情は初めの快不快の感情を離れて獨立にも經驗され、而もこのものと同じく多くの感情に共通な傾向である。

感情は別に單純感情と表象的感情とに區別される。前者は單純感覺を内容とする最も單純な感情で、單に赤の感情、高い音の感情、味の感情、温度の感情等がそれであり、その數は無數であつて、少な

くとも感覺の數だけは存するものである。後者は一表象を内容とするもの、従つて數種の單純感情より成立するもので、このものに比して一層複雑なものである。

一二 情緒 感情特に單純感情が主観的な情意作用の構成要素であるに對して、斯かるものが複合した同じく主観的な意識は特に情緒 (emotion, Affekt) と呼ばれる。それは多少複雑な數種の表象を内容とするものであつて、その内容が複雑なところから發動時間も多少長く、且つ吾々を感動させる。情緒は單純情緒と複雑情緒とに區別される。



驚愕の情とか恐怖の情とかは一見すれば單一な感情であるやうに思はれる。併し事實は既に複雑な統一體である。情緒は多數の單純感情や表象的感情の融合體である。驚愕の情は普通突然に意外な物を經驗した時に起るもので、その際想ひ浮かべられる様々な表象に對して種々な感情が生じて來、それ等の合一が驚愕の情である。而して情緒は大體に於て發端感情と稱する比較的顯著な一定の感情を以つて始まり、種々の性質と強度との感情の経過があり、最後に終末感情を以つて終る。單純情緒の主なるものは次の如くである。喜悅の情緒、悲哀の情緒、驚愕の情緒、憤怒の情緒、期待希望恐怖の情緒。

單純情緒より複雑なものが複雑情緒である。その分類の精確なも

のは未だ興へられて居ないが、それは大體に於て形式的感情と人格的感情と超人格的感情との三種に區別されるであらう。形式的感情とは故意に個々の内容から引き離して單に感情の外形即ち起伏の形から觀察されたもので、その主なるものは力の感情と緊張の感情とである。人格的感情とは自己並びに他人に關するもので、自己感情と他人に關する感情とに大別される。超人格的感情とは藝術的感情、道德的感情、倫理的感情、宗教的感情等に對して便宜上名付けた名稱である。此等は情緒の精練されたものであつて、普通に情操と呼ばれるものである。

複雑情緒の主要なものは次の如くである。活動的感情、自己保存の感情、同情及び愛情、自我の感情、美的乃至藝術的感情、知的乃至論理的感情、道德的感情、宗教的感情。

一三 意志 普通の考へに依れば、意志 (Will, Wille) は感覺や感情とは全く性質を異にする一種の特殊な力、即ち事物を欲しもしくはそれに向かつて行爲する力である。意志は感覺と感情との外に第三の心的要素として考へられる。併しこの考へ方は正しくない。意志は決して單純な作用ではなく、寧ろ初めから知的作用と情的作用との複合體として多少複雑な作用である。即ち目的並びに手段の觀念が想ひ浮かべられ、これに様々な程度の緊張、努力、奮闘等の感情が加はり、更に生理上からの緊張の感覺を伴つたものの總體に對する名稱が意志である。意志と感情とは極めて親密な關係のもので、意志の精髓は感情作用である。また意志作用の經過の前には快不快の種々な感情や情緒が纏はりついて、兩者は不可分離な一體をなして居る。

意志は明らかに意識された主觀的活動である。その中には意識された自我活動、自我主張、が含まれて居る。其故に活動又は努力と言へばその範圍は意志よりも一層廣く、意志と言へば一層狭く且つ複雑な作用である。意志の行爲は内的と外的との二つに區別される。意識内に於ける諸作用の經過が内的意志行爲と名付けられ、その意志が外的に實行される經過が外的意志行爲乃至外的動作と呼ばれる。内的行爲の中で顯著な現象は行爲の動機である。動機とは一定の行爲が實現される内的原因であつて、意志の行爲即ち經過は斯かる動機の数に依つて種々に變化する。

意志が自由であるか或ひは非自由であるかといふことは、大きな問題である。併し極端な意志自由説も意志非自由説も共に誤りであつて、意志は因果的に限定されながら而も同時に或種の自由を備へて居る。即ち限定的自由が意志の本性であると考へられる。吾々には何なる決意や實行をも完全に自由になし得るものではなく、そこには何等かの因果的制約が存する。それは心的生活に特殊な因果律であり、物的因果から區別して心的因果と呼ぶべきものである。

一四 思维 思维 (thinking, Denken) とは理解作用又は認知作用であつて、主として概念 (concept, Begriff) の構成並びに判断 (Judgement, Urteil) の形成に依つて行はれる。

概念とは個々の具體的表象に對する抽象的表象のことである。それは個々の具體物の代表的觀念であり、抽象的觀念である。概念は思维に於ける意識内容であるが、それは具體的表象から發生し構成される。表象は最初は活々とした具體的なものであるが、次第に具體性を失つて多少漠然たるものに變する。具體性を失ふことに依つ

て表象は多數の表象に共通な性質を獲、斯くて夫々の概念が發生する。斯かる概念が發生する爲には他面に於て判断作用の補助殊に分折作用の補助が必要である。概念の役目は多數の個々物を一つの觀念を以つて概括することであり、従つて吾々は一つの概念を以つて多數の個々物に關する知識を概括する。

概念は理解作用の要素であり、判断は理解作用の中心又は理解作用そのものである。其故に判断の構成要素は概念であつて、主語と述語と呼ばれる二つの概念の結合が判断である。「この花は美しい」といふ判断は「この花」と「美しい」との二つの概念から成立する。判断の特質は二つもしくはそれ以上の事項を同時に想ひ浮かべ、その間の關係を比較し見分けることである。併しこのことは先づ二つ以上の事項が別々に想ひ浮かべられ、次にそれが結合されて判断が生ずる、と解されてはならない。寧ろその逆に、兩者を漠然と含む全體表象が先づ興へられ、これが部分表象に分析されて、二つの事項とその關係とが明示され、そこに判断が生ずるのである。其故に判断の原形は知覺であり、その内に漠然と含まれた關係を發展せしめたものが判断である。

判断は客觀的な關係の意識である。と同時に確認乃至不確認といふ主觀的な意識を伴ふ。吾々が明確に事物の關係を見分けた時には満足の快感を伴ひ、反對の場合には同じく反對の感情を伴ふ。判断作用の背後には情意作用が存するのである。

参考文献—Wundt: Grundriss der Psychologie, (Grundzüge der physiologischen Psychologie, Einführung in die Psychologie, Th. Lippe; Leitfaden der Psychologie, Ebbing-

ジンルイガク

haus; Grundzüge der Psychologie, Külpe; Grundriss der Psychologie, Münsterberg; Grundzüge der Psychologie, Messer; Psychologie, Pränder; Einführung in die Psychologie, James; Psychology, Principles of psychology, Pillsbury; Fundamentals of psychology, Titchener; A primer of psychology, A Text-book of psychology, MacDougall; A primer of psychology, An outline of psychology. 金子馬治、普通心理学、増田惟茂、心理学概論・實驗心理学・心理学研究法、高橋積、心理学、松本亦太郎、心理学講話、城戸橋太郎、心理学概説・心理学の問題、小保内虎夫、心理学、黒田、心理学概論、久保、心理学概論、佐藤慶二、最新心理学概論。(佐藤慶二)

### 人類學

- (英 anthropology, 獨 Anthropologie, 佛 anthropologie)
一 社會科學としての人類學
二 人類學の範圍
三 人類の分類
四 人類の祖先(化石人類)
五 人類と文化

一 社會科學としての人類學 人類學は人間 (hominos) についての科學であるが、それが社會科學の一部門であることが最初に注意せらるべきである。ルドルフ・マルテン (Rudolf Martin, 1861-1925) によれば、人類學は「あらゆる限りの時と場所とに於ける人類

の自然史」を意味し、主として人類及びその集團の身體及びその諸部分についての解剖學的研究をその目的としてゐる。かゝる見地からすれば人類學は自然科学の一部門となり、特に生物學・醫學と深い關係を持ち、自然に於ける人類の位置、換言すれば靈長類としての人類が動物界に於て占める位置を研究する科學となり、その社會科學的性格は喪失されてしまふ。果してさうであらうか？

もとより人類學が自然科学の一部と看做されることについては、この科學の歴史的發展の跡を辿れば理由のないことではない。十六世紀の劈頭、人類學がはじめてラテン名を擔つて學問の世界に登場した最初の書物はマグヌス・フント(Magnus Hundt)の *Anthropologium de hominis dignitate*, 1501. であるといはれ、之は人類の解剖學と生理學とを一般的に取扱つたものであつた。英國に於て人類學の名が最初に現れたのは十七世紀半であつて、匿名の書物 *Anthropologie abstracted: or, the idea of human nature reflected in briefe philosophical and anatomical collections*, 1655. をはじめである。ハドソン(A. C. Hudson)はいつてゐるが、こゝにも解剖學的に反省された人間性の觀念といふことが特徴づけられてゐる。人類學の名を明確に現代科學分野のリストに記させたフランスのトポナル(Paul Topinard, 1830—1911)の *L'Anthropologie*, 1876. に於ても「人類學は人及び人種を取扱ふ自然史の一分科である」と規定されてゐる。かうした歴史的事情は現代人をしてなほも人類學を自然科学の一分枝のごとく想到せしめる充分な理由を形造るのであるが、果してさうであらうか。人間が *Homo sapiens* として動物界の一類を形成してゐることは疑ひもなく明らかであ

る。マグヌス・シェーネル(Max Scheler, 1874—1928)によれば人間は植物的部分さへ具有してゐるといはれてゐる。しかしかゝる生物學的規定によつて人類の性格は盡きるのであらうか。アリストテレスの *Neon Politikon* をまつまでもなく人は優越な意味に於て社會的存在者である。人間は社會的人間或は社會化された人間 (*sozialisierte Mensch*) として始めて具體的に把握される。生物學的人間はいはゞ社會的人間の一抽象的側面に過ぎない。されば人類學を眞に包括的な人間把握の學としてその具體的性格を維持するためには、人類學をば自然科学的人間、換言すれば自然人としての人間把握にとゞめず、社會的人間としての具體的な人類把握に迄もその科學の外延及び内包を擴大深化せしむべきである。人類學の廣表のかゝる擴大は、人類學を自然科学の一部門に止めず、それを社會學の部門に歸屬せしめることになる。そしてこのことは單なる獨斷的提唱に終るのではなく、人類學の現在迄の客觀的な發展の徑路が、かゝる發展方向への足跡を我々に示してゐる。解剖學的な體質人類學として出發したこの科學がやがて文化人類學或は社會人類學の側面に展開して來たといふ斯學發展の事情は、一層具體的な人類把握を志向した又志向せざるを得なくなつた、この科學の正しき發展傾向でなければならぬ。

人類學が社會科學であるといふ一つの理由は、それが個人科學でないといふ點からも證明されるであらう。解剖學が個人科學であるかどうかはしばらく疑問にしても、それが直接研究の對象として取扱ふものは個人の身體及びその諸部分の形狀・構造である。ところが人類學の研究對象は集團化された人種或は人類であつて、解剖

學的知識はかゝる集團化された人種或は人類の身性を明かにするための補助手段にすぎない。ドイツのデュツセルバッハ(Diesselhorst)上流の溪谷から發見されたネアンデルタール人の頭蓋・骨片を問題とするにしても、それによつて現生人類以前のネアンデルタール人類の身性・生活様式を探究せんとするためであつて、フェルドローフェル洞窟(Feldhofer Craven)のそれは、偶々かゝるネアンデルタール人類の代表的型として取扱はれてゐるのである。我々はかゝる代表的型を通じて、集團としてのネアンデルタール人類一般の身性・生活様式・地理的分布を知らんとするのである。原始民族の心性を問題とする場合にも、それを個人心理學の對象としてではなくて、それによつて原始民族の社會生活・宗教生活・藝術・呪術の様式を知らんとするものである。こゝでは個人が問題ではなく、あくまで社會が問題なのである。個人はこゝでは社會生活を営む人類又は人種の理想型或は現實型として集團的研究の手掛りをつくるものであるに過ぎない。

二 人類學の範圍 人類が自然的人類であると共に社會的人類であるといふことは人類學に二つの部門を展開せしめる。一は體質人類學として、他は文化人類學として。

體質人類學は、人類の解剖學的・生體學的側面であつて、人間と猿との區別はどうか、人類の起原及び進化の過程は如何？ 人類の體質的特徴、人種の成因及び分類、人種の混合及び分布、人類とその物理的環境との關係、遺傳及び優生學等々の問題が研究の日程に上る。こゝでは動物學・解剖學・生理學・化石學・地質學・遺傳學等の知識が有効活潑に使用されて、これによつて自然界に於て人

間が如何なる位置を占めてゐるか明らかになる。文化人類學は之に反し、人類が創造し、或は又現在保持してゐる物質文化と精神文化の研究であつて、過去の人類が如何なる技術道具によつてその生活を維持してゐたか、その時間・空間中に於ける分布進化の状態はどうであつたか、人類の思想傳達の方法としての言語の起原發展の徑路及びその分布の状態、人類の共同生活の形式である社會の形式が如何なる段階を経て發達して來たのであるか、その社會の中に於て、經濟・法律・政治・宗教・祭儀・呪術・藝術・神話等は如何に營まれ、如何に創られて來たか、結婚様式は如何、知識・思考の形式は如何、發明・發見は如何になされたか、これら文化が環境によつて如何なる影響を受けたか、抑も文化は如何なる起原を有し如何に傳播されたか、各々獨立に發達進化したものであるか、相互に影響したものであるか、輻合(convergence)か傳播(diffusion)か等々の問題がこゝでは探究される。したがつてこゝでは考古學・工藝學・言語學・社會學・土俗學・神話學・宗教學等の知識が饒多に動員され、逆に文化人類學の研究の業績が、これら文化諸科學の進歩に對して多大の貢獻を及ぼすといふことにもなる。最初體質人類學として發達したこの科學が、バステリアン(Adolph Bastian, 1826—1905)・ランツェル(Friedrich Ratzel, 1844—1904)・スピンサー(Herbert Spencer, 1820—1903)・タイラー(E. H. Tylor, 1832—1917)・ヘルガン(L. H. Morgan, 1818—1881)・フナーン・ヤン(J. J. Bachofen, 1815—1887)・ブクラン(J. F. McLennan, 1827—1881)・ヤント(Wilhelm Wundt, 1832—1920)・フナーザー(L. G. Frazer, 1854—)・ウキスター・マートク(F. A. Westermarck)が如何なる位置を占めてゐるか明らかになる。文化人類學は之に反し、人類が創造し、或は又現在保持してゐる物質文化と精神文化の研究であつて、過去の人類が如何なる技術道具によつてその生活を維持してゐたか、その時間・空間中に於ける分布進化の状態はどうであつたか、人類の思想傳達の方法としての言語の起原發展の徑路及びその分布の状態、人類の共同生活の形式である社會の形式が如何なる段階を経て發達して來たのであるか、その社會の中に於て、經濟・法律・政治・宗教・祭儀・呪術・藝術・神話等は如何に營まれ、如何に創られて來たか、結婚様式は如何、知識・思考の形式は如何、發明・發見は如何になされたか、これら文化が環境によつて如何なる影響を受けたか、抑も文化は如何なる起原を有し如何に傳播されたか、各々獨立に發達進化したものであるか、相互に影響したものであるか、輻合(convergence)か傳播(diffusion)か等々の問題がこゝでは探究される。したがつてこゝでは考古學・工藝學・言語學・社會學・土俗學・神話學・宗教學等の知識が饒多に動員され、逆に文化人類學の研究の業績が、これら文化諸科學の進歩に對して多大の貢獻を及ぼすといふことにもなる。最初體質人類學として發達したこの科學が、バステリアン(Adolph Bastian, 1826—1905)・ランツェル(Friedrich Ratzel, 1844—1904)・スピンサー(Herbert Spencer, 1820—1903)・タイラー(E. H. Tylor, 1832—1917)・ヘルガン(L. H. Morgan, 1818—1881)・フナーン・ヤン(J. J. Bachofen, 1815—1887)・ブクラン(J. F. McLennan, 1827—1881)・ヤント(Wilhelm Wundt, 1832—1920)・フナーザー(L. G. Frazer, 1854—)・ウキスター・マートク(F. A. Westermarck)が如何なる位置を占めてゐるか明らかになる。



mark, 1862) 等の研究努力により、更に近くは米國に於けるゴアス (Franz Hens) ウィンター (Clark Winkler) ゴールデンワイザー (Alexander Goldenweiser) 等の土着アメリカインディアンの人類學的研究により、或はイギリスのエリオット・スミス (Elliot Smith) やペリー (W. J. Perry) の埃及研究により、リヴァース (W. H. R. Rivers, 1864-1922) のメラネシア社會の研究等によつて、十九世紀後半から現在に至る迄の方面に急速な進歩發達が見られたことは眞に目醒ましいものがある。

勿論かゝる事情は體質人類學の意義を意味するのではない。體質人類學は古く溯れば埃及にその起源を求め得べく、希臘のアリストテレスやヒッポクラテス (Hippocrates, 460-377 B. C.) をその祖と見ることが出来る。降つてヴェサリウス (Vesalius, 1513-1564) の解剖學上の創見、リンネ (Karl von Linné, 1707-1778) が人類を決定的な種 (Species) として自然に於ける人間の位置を定めたこと等はやがて科學としての人類學が生れる途上の大きな足跡であつた。更にキリスト教の信仰の未だ盛なる中であつて、ヴェニ (Luca) Vanini, 1585-1619) が人間は猿の後裔であると斷言して火刑に處せられ、カルヴィニストのビエレル (Isaac de la Peyrere) が新大陸發見に刺戟されて、アダム・イヴが地上最初の人間でないことを主張してその著 *Præ-Adamitæ* (1655) がパリ議會により焚書の難に遭つた如きは、新興科學の建設途上に常にまつはる受難のエピソードである。しかし科學的な人類學の樹立はこれらより更に降つてゲッチンゲンの教授ブルーメンバッハ (Johann Friedrich Blumenbach, 1752-1840) に求むべきであらう。ブル

ーメンバッハは人類學を始めて合理的基礎の上に置いた人として人類學史上注目されるべき人物であつて、その頭蓋學の創始者として、又人種分類の基礎を樹てた等の効績は永く記憶されるべきである。勿論彼の業績は後にレチウス (Retzius, 1794-1860) によつて一層整備されて頭蓋指數 (cephalic index) の發明となり、更に、顔面、額等の計測ともなつて、頭蓋學は現在の形態を採つて來たのである。一方現生人類以前の洪積世人類の發見が、一八五六年のネアンデルタール人類 (Homo neanderthalensis) の人骨の發見を始めとして、ジャヴァに於けるピテカントロプス・エレクトゥス (Pithecanthropus erectus) の發見 (一八九一—二)、今世紀に入つてハイデルベルク人類 (Homo heidelbergensis) の發見 (一九〇七)、ビルトダウン人類 (Eoanthropus dawsoni) の發見 (一九二二) 等によつて、最古の人類の形貌がやうやく明らかとなり、更に人類學に於ては、リネやブルーメンバッハの開拓期の分類はしばらく措くとしても、ハックスレー (T. H. Huxley, 1825-1895) によつて Australoid, Negroid, Xanthochroid, Mongoloid, Melanochroid. の五大分類が樹てられ、皮膚の色調による古典的な人種分類よりも毛髮の形状による人種分類が一層合理的であることが認められてからは、メーレル (F. Müller) の羊狀毛 (Ullrich) 直毛 (Lissotrich) の分類が ヴッケル (Ernst Haeckel, 1834-1919) によつて採用され、更にドニケー (J. Deniker, 1852-1918) が毛髮組織を基調として、これに皮膚の色調・身長・頭型・鼻形の分類を混用して、有名な人種分類表 (六大別・十七小別・二十九獨立種族) を作製した等は記憶されるべき人類學上の業績である。

體質人類學は今世紀に入つてルドルフ・マルチンの包括的な著述 *Lehrbuch der Anthropologie*, 1914. によつて整然たる體系が整へられたが、それ以上の進歩が見られなかつたわけでは決してなく、メンデル (G. I. Mendel, 1822-1884) やチールトン (Francis Galton, 1822-1911) によつて唱へられた遺傳學の進歩に伴ひ、又最近の血球の凝集反應による血液型の研究の人類學的應用により、更に、今迄洪積世人類の發見がヨーロッパに限られてゐて、亞細亞大陸にその人骨を發見するに至らなかつたものが、一九二七年より一九二九年にかけて北京郊外の周口店の石灰洞の三回に渉る發掘により、洪積世人類の比較的古い型の人骨、いはゆる北京人類 (*Sinanthropus pekinensis*) の發見により、人類系統樹に一つの問題を投げかけ學界の注目を惹いてゐる等のこともある。自然科學的方法を唯一確實な方法として採用してゐる體質人類學は、かゝる人骨・遺跡の發見、又他の自然科學的業績の進歩に伴つて、緩慢ながら確實な進路を辿つて行くことは疑ふべくもない。

ところで興味あることは體質人類學にしても文化人類學にしても世界に多くの植民地を有つてゐる、又有つてゐた英・佛・獨に比較的早く發達し、ラテンアメリカをその政治的圏内に置き、その領土内にアメリカインディアンを多數包摂してゐる米國に今や人類學の活潑な動きが見られるといふことは注意すべきことではなからうか。この問題はこれらの諸國が合理的の思惟に即ち科學的精神に富んでゐたといふことだけで解決される問題であらうか。その政治的・經濟的圏内に多くの異人種を蔵してゐるといふ社會的事實が人類問題に興味を惹き又植民地の複雑な人種葛藤の事實及び豫想が人

類についての認識を刺戟し、やがて人類學發達の導きの絲となつたのではあるまいか。この意味で、滿洲國の成立によつて、我國の人類學が一段と飛躍を遂げるであらうことは豫想してもいい。既にその徴候はいろ／＼な形で現れてゐる。學問—文化—政治との關係、これは人類學者自身の氣づかない、社會科學發達の一つの法則である。

三 人種分類 さて人種分類はまことに困難な問題である。「人種」といふ言葉についても、各人類學者がいろ／＼に規定してゐるので、したがつてその分類も様々に變つて來る。普通われ／＼は不用意にイギリス人種とかアメリカ人種とかいふ言葉を使用するが、かゝる政治的規準に立つた人種分類は人類學では認められない。現今の人類學は體質的特徴をもつて人種分類の規準と看做してゐる。ラテン人種とかアングロサクソン人種とかケルト人種とかいふ場合には多少體質的特徴が考慮されてゐないでもないが、主として言語とか文化とか政治とかによる區別であるから、これも人類學の認める所ではない。白色人種とか黄色人種とかいへば、これは皮膚の色調による區別、即ち體質的特徴による分類であるから、人類學的區別の範圍に入るが、かゝる一方的な體質的特徴では現代の人類學の人種分類の規準とはならない。現代の人類學では、毛髮の形状、皮膚・眼彩・毛髮の色調、頭形、身長、鼻形、唇形、眼瞼の形状等々の體質的特徴が人種分類の規準として採用されてゐるのであつて、これらの體質的特徴を共通に遺傳的に共有してゐる個人の集團を他と區別して一人種と名づけてゐる。

ところがかゝる人種分類の規準が立つたとしても、いざ具體的に

現存人類を分類して見ると、いろいろ困難な事情が生じて来るのであつて、ドニケーが全人類を六大別・十七小別・二十九獨立種類に分類したのに対し、ハッソンは三大別三十六小別の人類分類表を作製し、ディクソンは頭幅示數・頭高示數・鼻骨示數の三條件を選び、各示數を三つに分け、これを組合せて、八つの基本型と十九の混合型、合計二十七の型式をつくつて、全人類はこのいづれかの型式の中に入るものであるとする等、具體的な人類の分類は種々様々である。おそらくリンネが *Homo sapiens* を六つのグループに分類して以來、又ブルームンバツが人類を五つ (*Caucasian, Mongolian, Ethiopian, American, Malayan*) に分けて以來、人類學者の數だけ人類分類はあつたといつても大した形容ではあるまい。それならば何故かゝる種々な分類が企てられるのであらうか。もとより各人類學者によつて「人種」の意義を異にし、その體質的特徴を擧げるにしても各人その條件が違つてゐるといふことに一つの重大な原因はあるにがあるが、根本的には現存人類の中に「純粹」と名づけられる人種がごく僅かしか存在しないからであつて、その多くは人類混交の現態であるからに外ならない。ヒットラーが聲を大にしてドイツ民族の純潔を誇號し宣言するを聞くものは、靜かにアンモン博士 (*Ammon*) が純粹なるアルプス型の人種の寫眞を求められた時に、博士が數千の頭形を計測したのにも拘らず、遂に一個の典型的に完全なるものを獲られなかつたといふ事實を想ひ浮べて見ればよい。即ち現存の人類は永い人類の歴史に於て、複雑なる混合過程を経て現在に至つてゐるのであるから、純粹完全なる人種を求めることは頗る至難の事柄である。しかも人類學者はその科學的合理性にしたがつて、人

種分類を企てようとする。そこで、各人が様々な條件によつて、體質的特徴を組合せて、人種分類の範疇をつくり、現存の人類を自らつくつた範疇に當嵌めて區別しようとする。いはば、人類學者の人類分類學とは人類學者の各々が抱く理念型 (*Ideal type*) に外ならない。マクス・ヴェーベルが社會科學の基礎的方法として唱へた理念型操作は人類學者によつて具體的に試みられて人種分類學となつたのである。ハッソンが「人種の型」とは主として我々の心の中にある」といつてゐる (*The Races of Man, P.1*) のは誠にこの人類學者の理念型を指したものに外ならない。したがつて、この型は相對的暫定的たるを性格とし、又さうなるを避けられない。便宜的な人類認識の手段として、かゝる人種分類が企てられたのである。例へば現在最も普通に人類學的測定として用ひられてゐる頭示數 (*Cephalic index*)、之れは頭の長さを一〇〇とした場合、これに對する頭の廣さの百分比を表したもので、その比率が七五以下のものは狭頭或は長頭 (*Dolichocephalic*)、七五—八〇のものを中頭 (*Mesocephalic*)、八〇以上のものを廣頭・圓頭或は短頭 (*brachycephalic*) と稱し、この示數を規準として、全人類を各種の人種に分類してゐるのであるが、この頭示數が人類の體質的特徴を數字的に示す極めて便利な示數であつたとしても、根本的に考へれば可成不完全なものたるをまぬかれない。この示數は環境の影響を受けることが極めて少ないといはれてゐるけれども、フランツ・ポアスのいふ所にしたがへば一八七〇年より一九〇九年の間に米國に移住した東歐ユダヤ人の頭示數は、八三をやゝ少し超えてゐるのに、その子供達—彼等の母達が移住して來てから二十年後に生れた子供達の頭示數は、八〇より

稍々低い比率を示してゐるといふ。親達は廣頭人種に屬するののに、その子供達は中頭人種に屬するといふ分類は可成奇妙なものでなければならぬ。又たとへこの示數が比較的相當であるとしても、その頭の形態學的特徴を考慮せずに、人種決定することができたらうか。身長といふ、人類學的測定の一つの規準となる體質的特徴も、文明の高度に進むにしたがつて、多少の變化があることは、我國の少女達の身長がその母親達よりも年々高くなつてゐる事實を目標すれば、身長を規準としての計測も相對的不完全たるをまぬかれない。

されば現在の人類學者は比較的年齡・性別・氣候・環境によつて變化のない、毛髮組織をもつて、人種分類の第一規準とし、毛髮の形式によつて、直毛 (*Leiotrichi* 或は *Isotrichi*)、波狀毛 (*Cynotrichi*)、羊狀毛 (*Ulotrichi*) の三つとし、——ハッソンによる——又、これを細分して十一の形狀に分類してゐるマルチンの如き學者もある。しかしかゝる毛髮の狀による分類が果して身體の遺傳的關係を指示し反映してゐるものであるかは多少の疑問なきを得ない。現象型的分類に加ふるに性的分類を必要とする所以である。いはんや最近發達の過程にある血液型の研究による人種分類が如何なる新しい生面を分類學に示すか未だ疑問であるとしても、かゝる研究が人類學に應用されるといふことは單に生體學的研究による人種分類の一つの極限に達したものであることを示してゐるものではなからうか。科學が進步するに隨つて人類學者がつくる理念型は進步する。これが相對的不完全なる所以は實にこれに據るのであつて、われわれはしばらく、今後の人種分類學の進歩に期待を寄せる外はない。

いのである。

四 人類の祖先(化石人類) 基督教信仰の支配であつた時代では人類の祖先はアダム・イヴとして神によつて地上に創造されたといふ神話はそのまゝ科學的事實として受取られて矛盾がなかつた。もしこの神話を否定するものがあれば教會は無神論者としてこれを破門するに躊躇しなかつた。随つて人類の祖先が如何にあるかといふ問題はその當時問題として提起されなかつた。精々、十七世紀の頃ケンブリッヂの教授ライトフット (*Lightfoot*) が「人類は紀元前四〇〇四年十月二十三日午前九時、神によつて創られたものである」といふ愉快な結論に到着した如きに過ぎなかつた。ところが新大陸の發見とかダーウインの種の起原の提唱とか、次第に人類の祖先についての疑問を近代人に提出し、加ふるに十九世紀の後半から本世紀にかけて續々ヨーロッパ各地で發見される化石人類の骨片・遺跡等によつて、人類の祖先の問題は現代人類學にとつて重要な部門を構成してゐる。これを歴史的に見るならば、一八五六年ドイツのデュセルバッハの上流の石切場よりネアンデルタール人類 (*Homo neanderthalensis* 一八六四年キング *W. King* の命名) の人骨が發見され、その後ベルギーのスピール洞窟から一八八六年發見されたもの、フランスのラ・シャペーユ・オー・サン (*La Chapelle au Saint*) の小村から一九〇八年發見されたもの、古くはジブラルタル人類と呼ばれて、一八四八年ジブラルタル要塞附近の石切場から發見されたもの等は、等しくネアンデルタール人類として包括分類されてゐる。このネアンデルタール人類の特徴は割合短頸で推定身長一・五五米から一・六米前後、頭蓋は長頭且つ低頭で眉弓の發

達著しく、顔面は高く、眼窩は四角よりむしろ圓形で、鼻骨は大きく、鼻梁は高い。口吻は少し突出して、下顎は頭強で顔は殆んどない。大腿骨太く尺骨及び橈骨の彎曲が著しい。かうした特徴を數へて行くくと、それが現在の人類のそれと著しい相違があつて、それが現生人類の祖先たることは疑はしい。むしろ、現生人類以前の、死滅した人類の一種ではあるまいかといふ認識が一般に通用してゐる。ジャヴァでオランダの軍醫デュボアズ (Eugène Dubois) によつて一八九一年に発見されたピテカントロプス・エレクトゥス (Pithecanthropus erectus) も、現生人類と類似した構造を持つてゐるが、頭骨の猿類的なると、大腿骨の眞直な所から、直立猿人と譯され、人猿中間のものとして一般に解せられてゐる。ドイツのハイデルベルク附近のマウエル村から一九〇七年に発見されたのはゆるハイデルベルク人類 (Homo heidelbergensis) はその共存動物の遺骸等よりしてネアンデルタール人類より遙かに古期と推定され、齒牙は人類的であるが、その下顎骨はネアンデルタール人類よりも一層ゴリラ的で、むしろ類人猿に近い人屬であるまいかの推定が行はれてゐる。英國のサセックス州のビルトダウンの礫層から一九一一年より數次の發掘によつて発見されたビルトダウン人類は、頭骨の破片は骨質その他現生人類と類似してゐるが、下顎骨はむしろ猿類的であつて、これを同一個體のものとするれば、發掘者ウッドワード (Woodward) と共にこれに曙人 (Mouthopon dawsoni) の名が冠せられるが、頭骨と下顎骨とが時代を同じくした二つの個體のものだとすれば曙人説は破れ、ビルトダウン人類については未だ一定の見解がなされてゐない。

以上の人類はすべて洪積世前期に地上に生存してゐた人類で未だ現生人類の祖先といひ得ないとするれば現生人類の祖先は何れに求むべきか、これは最後の氷河期以後の洪積世後期の化石人類の中に求めなければならない。ところで洪積世後期の化石人類は、これを大別すれば大體次の三種となる。一グリマルディ人種 (Grimaldi race) イタリアのグリマルディ洞窟からヴェルノー (R. Verneau) によつて一九〇二―六年に発見された人骨で、その頭蓋・骨格は現在のニグロと類似して居り、その遺物の女性石像はブッシュマンやホッテントットと酷似した貌をしてゐる。即ち南阿のホッテントットやブッシュマンと相離れること遠くない人種であつたと推定されてゐる。二クロマニオン人種 (Cro-Magnon race) 一八六八年フランスのヴェジエール溪谷のクロマニオンより発見されたもので、その後この人類はフランス各地から續々発見されたが、頭蓋は長頭にして高頭、額部は眉弓の上に少しく突出、大きな眼窩は四邊形を呈し、顔骨強大で鼻骨狭長、これらはネアンデルタール人種にはなく現代の地中海人種や北方人種に類似してゐるといはれてゐる。三ジャンスラード人種 (Mousterian race) は一八八八年フランス・ジャンスラード附近に発見された人骨で、クロマニオン人種より低身、頭骨は長頭且つ高頭、額は廣く著しく突出し、咀嚼筋の發達が窺はれる。この人種は現時のエスキモー人種と類似してゐると説く人もある。これらの外にも所屬の明らかでない史前人類の人骨が諸所で発見されるが、一體これらの人種が、何處よりヨーロッパに現れたかは明らかでない。又それら人種の文化の變遷についても、共に出土される遺物の考古学的考察によつて、僅に舊石器時代又新石器時代の

文化を所有してゐたことを明らかにすることが出来るわけである。人類と文化、又人類と文化の關係は、されば人類學上重要な課題であつて、文化人類學はこのことを取扱ふ。

五 人類と文化 (附 環境と文化) 人類と文化の關係は、たゞに人類學者のみでなく、歴史家も社會學者も深く關心を抱いてゐる問題であるが、これは二つの問題に分けることが出来る。一つは同一人種は同一の文化を創造又は擔ひ得るか? 他の一つは人種は文化の決定的原因となり得るかの問題である。

第一の問題に肯定的主張をなしたものは進化論者又は獨立發展説と呼ばれた人々であつて、タイラーやスペンサーの古典的文化人類學者はこの説に組みする。それによれば、人類文化は石器時代・青銅時代・鐵器時代と漸進的、一直線的に發展したものであつて、一人種の創造した文化は他の影響を受けることなく、獨立な發展を遂げるといふ主張である。もしこの主張が正しいとすれば、一人種の發明若しくは創造した文化はそれ自身獨自であつて、全く他に傳播しないことになる。ところがその後の人類學的研究の結果は異なる人種に於ても、土器その他の物質文化・宗教・藝術等の精神文化に於ても著しく類似の傾向が認められて獨立發展説や進化論によつては到底この現象が説明し得なくなつた。そこで進化論に代つて現れたのが、輻合説 (convergence theory) と呼ばれるもので、これは生物學の相同 (homology) の如き現象が、文化の上にも起るのであつて、鯨と魚とが、その類を異にしてゐるにも拘らず、類似の形態を示すやうに、外婚制とか首狩とかタブーとかいふ現象が異なる人種の間にも近似的に現れるとする。フランツ・ボアス (Franz Boas) 、

エーレンライヒ (Ehrenfeld)、ロウイー (Lowie) といふやうな人々はこの説の主張者である。ところが、輻合説の缺陷は、何故にかゝる現象が起るかといふ説明に於て不完全不徹底であつて、バスティアンの基本概念 (Elementarbestand) の如き假説を設け、各人種に共通した心的一致を假定しなければならなくなるが、この假定はやゝ神秘的なるをまぬかれない。さればこの輻合説に反對して唱へられたのが傳播説 (Diffusionism) である。これはグレブネル (Greebner) やリヴァース (Rivers) によつて唱へられてゐる説で、文化は同一根原から發して、次第に各地に傳播したものであるとする。米國に於ける農業の傳播、各種神話の世界的傳播、土器や宗教の世界的分布等がこの説の有力な根據となつてゐる。さればグレブネルの如きはこの説から世界的な文化の波狀線或は文化層等を考案さへした。しかしこの説にも缺陷があるのであつて、地域的遠近はこの際問題にしないにしても、類似の土器とか宗教とか、果して同一根原から發し、同一機能を遂げてゐるのであるかどうか。形は類似してゐても、その役割に於て異なることが證明されれば、傳播説はくづれることになる。まして傳播説に於ては人間の自發的發明能力が極めて低く評價されることになるが果してさうであらうか。これらのことは更に深い實證的な研究によつてのみ解決されるべき問題であつて、更に將來の研究に持つより外にはない。しかし輻合説にしても傳播説に於ても同一人種が同一文化を擔ふとする古典的進化的説は否定されてゐるのであるから、言語や藝術や社會制度等の文化的特徴が同一人種に沿つて發展するとする第一の問題は否定されるわけである。

第二の人類が文化の決定の因子たり得るかどうかの問題は第一の問題と多少關聯を持ち、しかも獨立した一つの興味ある問題である。一般に黒人の文化が低いといふことは、その人種の素質が低劣であるといふ理由に歸して考へられがちである。このことは、優秀な文化は優秀な人種から生れるといふ命題をその背後に潜め現代のヨーロッパ文明を優秀人種の所産として肯定するに誠に都合のよい論理である。しかし果してそうであらうか。現代ヨーロッパ文化の一つの重要な擔ひ手である北方人種 (Nordic) はローマ帝國華やかなりし頃は必ずしも優秀な文明を有つてゐたわけではなく、北方人種即ちチュートン民族が文明の舞臺に登場したのは極めて最近の世紀にすぎなかつた。アリストテレスが、その『政治學』で述べた言葉はこの場合極めて興味あることで、アリストテレスは「北部ヨーロッパの寒冷な土地に住む人種は精神に溢れてゐるが、知識と巧智に缺けてゐるから政治組織を持つことは出来ず、隨つて他を支配することは出来ぬ」と斷言してゐる。アリストテレスの聰明をもつてしても現代西歐文明の繁榮を豫言することは出来なかつたのである。黒人が今後數世紀の後に優秀な文明の旗手として世界史の舞臺に登場できぬと誰が豫言することが出来るであらうか。現に黄色人種擡頭の徴候は世界史にきざし始めてゐるではないか。由來人種を文化發展の因子とする論理は人種概念と民族概念の混同からする虚偽であつて、ドイツ文化の優秀を北方人種の優秀から證明しようとする論理は、ドイツ人の得意とする所、現代ナチス文化理論の根柢となるものであるが、シュニット (W. Schmitt) の研究にしたがへば、ドイツ文明の最初の開花は北方ドイツでなく南方ドイツで、

そこには非北方の人種がドミナントであつたといはれてゐる。或人 (G. Child) の調査によれば、新石器時代の文明を隨伴するデンマークやスウェーデンの墓穴から發掘された人骨は、必ずしも同一の體質的特徴を有してをらず、當時既に高度の人種混交が行はれてゐたことが知れるといはれ、又新石器時代の北方・中部・東部のヨーロッパには少なくとも九種の頭蓋の型が區別されるといふのであるから、これから、當時の文化を人種によつて區別することは無理でなければならぬ。由來人種と民族とは區別されるべきであつて、人類學的範疇であるに對して民族は社會學又は歴史學的範疇である。ドイツ民族といふ時我々は其の背後に複雑な人種混交を豫想しなければならぬ。ドイツ文化といふ場合にも、それは複雑な歴史・社會的複合體を見出すのであつて、文化は歴史又は社會の所産である。されば人種をもつて文化發展の決定の因子と見することは科學的には無根據である。文化發展の因子はこれを他に求めなければならぬ。他に求めるとなると我々は次に物理的環境をもつて文化發展の因子と看做す環境論者 (environmentalist) に出合ふ。パップル (J. Baskie, 1891-1893) を始めとして文化が地理的環境に依存することを説く環境論者は各國共に可成多數である。しかし果して文化は環境を決定の因子とするであらうか。まことにエスキモーが、雪穴を掘つて住居とすることは彼等の住む極地に雪があること、我國に稲作の發達したのは牧場に適する土地が少なく、水田に適する土地が多かつたことから一應説明できる。しかし雪のあることは必ずしもエスキモーの雪居生活の理由にはならず、シベリアのチュクチ種族の環境はエスキモーと同一であるにも拘らず雪居生活を営ま

ず、我國の先住民族は日本人種と同一環境に在りながら稲作はしなかつた。雪とか水田に適する土地とかは確かに雪居や稲作の必要な條件とはなり得ても之等が必要にして且つ充分な理由とはなることはできない。むしろかゝる環境はその人種が創造し傳播した文化によつて様々に變化せしめられるといふことができる。我國の稲作は、この國に農業文化が移入されて以後の事柄に屬し、水田に適する土地の存在は稲作の決定の因子ではなかつたのであらう。環境は文化によつて様々に變貌する。文化の發達は環境のかくれた側面を發見して新しい生面を開く。肉食文化の移入による我國の牧場の發達を見るべきである。環境は文化によつてその發展の積極的條件ともなるが、又否定的條件ともなる。河や海の存在はその沿岸の交通を開く條件ともなるが、又、對岸との交通をはばむ條件ともなる。人間は文化の發明傳播によつてかゝる否定的條件を克服する。水泳・カヌー・船・汽船の發明・移入等々を見よ。

それ故我々は環境論者に組みして環境を文化發展の決定の因子とすることはできない。文化が環境によつて制約されることは認めるがその決定の條件ではない。文化は歴史的社會的複合體である。従つて文化發展の決定の因子は歴史的、社會的構造の中に求めなければならぬ。しかしそれを探究するには吾々は人類學を逸脱して社會學・歴史哲學の範圍に入らなければならない。

參考文獻——Darwin: Descent of Man. Huxley: Man's

Place in Nature. P. Topinard: L'Anthropologie, 1876. do:

Éléments d'anthropologie générale, 1885. R. Martin

Lehrbuch der Anthropologie, 1914. J. Deniker: Les races

スウガク

## 數 學

(英) mathematics, 獨) Mathematik, 佛) mathématique

一 數學に於ける方法論發展の諸段階 二 數學の種別

一 數學に於ける方法論發展の諸段階 前世紀と今世紀の境目は、數學發達史上、忘れることの出来ない重要な革命的時期である。前世紀の中葉までは、諸理論が個々雜然として、獨自の發展の道を辿

et les peuples de la terre (英譯) Races of Man, 1900). R. B. Dixon: The Racial History of Man, 1923. A. C. Haddon: The Races of Man, 1924. A. Bastian: Der Mensch in der Geschichte. E. D. Tylor: Primitive Culture, 1871. do: Anthropology, 新版 1924. L. Morgan: Ancient Society, 1877. H. Spencer: Principles of Sociology. F. Boas: The Mind of Primitive Man, 1911. do: Anthropology and Modern Life, 1928. R. R. Marett: Anthropology, 1912. A. L. Kroeber: Anthropology, 1923. C. Wissler: Man and Culture, 1923. G. E. Smith: The Diffusion of Culture, 1933. A. Goldenweiser: Early Civilisation, 1923. do: History, Psychology and Culture, 1933. A. C. Haddon: History of Anthropology, 1934.

長谷部言人、自然人類學概論 清野・金關、人類起源論 小山榮三、人類學概論 西村眞次、人類學。(武田良三)

つてをつたが、此の時期に至つて、改組統一付けられ、今世紀への飛躍を約束する新内容を獲得し得たのである。此の様な現代数学がそれでは、如何なる傾向の下に發展しつゝあるか、又、如何なる問題に其の焦点を合せてゐるかを知る爲には、数学が過去に於て採り來つた方法、及び、現在取りつゝある研究方法を把握する事が、最も重要な、そして、一番の早道である。

数学を支配する方法論は、他の自然科学等と同様に、原始的な直観的段階より、解析的、分析的段階に至り、更に三轉して、総合的な形式的抽象的な夫に迄發展してゐる。例へば、幾何學は其の初期に於ては、具體的な方法で図形を作つて研究を進めた初等幾何學であつたが、其の研究對象が増加複雑化するに及んで、數と圖形との對應を興へる座標概念を導入し、從來の錯雜さを統一整理した。此の解析的分析的方法の侵入の中には、其の後に來る幾何學の抽象化の萌芽を見出すことが出来る。此の解析的段階に於ても幾何學は、其の前提なる公理等が區々であつた爲、種々異なる幾何學の出現を見たのであるが、群論の應用は之等の幾何學の概括を成功せしめた。他方、幾何學基礎論の公理的研究は、之と獨立に行はれたが、此の兩者の協力は總て幾何學に抽象的公理的性格を完全に賦與し、現代幾何學の根幹を形成するに至つた。数学研究法發展の段階は、従つて、次の如くに大別する。

- (1) 直觀的方法
- (2) 解析的方法
- (3) 抽象的方法

此の(3)こそは現代の数学の凡ゆる部門に侵透し之を支配してゐる

諸分派を完全に統一したものの Erlanger Programm と稱せられる劃期的研究の成果である。(Erlanger Programm: Vergleichende Betrachtungen über neuere geometrische Forschungen Math. Ann. Bd. 43. 1893. 又は Klein Gesammelte Abhandlungen Bd. 1. 1921) 此のエルランゲル目録は幾何學を完全に近代化し、其の以後の幾何學の發展は殆ど總て之を基礎としてゐると言ふも過言ではない。直接之より展開された理論は左の諸書に載せられてゐる。

Klein: Vorlesungen über Höhere Geometrie. Heffter und Kohler: Lehrbuch der analytischen Geometrie. Beck: Koordinatengeometrie.

次に、幾何學を、其の對象の研究方法に従つて分類する。

(a) 綜合幾何學 (synthetic geometry, Synthetische Geometrie) 圖形夫自身を考察する幾何學で、主として、圖形の位置的關係を論ずる分野である。古くは、初等幾何學、近世では、射影幾何學を指す。

註 初等幾何學とはユークリッド幾何學の事である。射影幾何學は後節參照。

(b) 解析幾何學 (analytical geometry, Analytische Geometrie) 點の位置と數とを對應せしめた座標を用ひ、微分學、積分學等を利用した、即ち、無限概念、換言すれば連續性の導入に依つて展開された理論。必然的に、圖形の大きさ、長さ、面積等計量的性質が主として論ぜられる。座標幾何學、微分幾何學、接續幾何學等之に屬する。

座標幾何學 (coordinate geometry, Koordinatengeometrie) 所

る方法であるが、之は更に次の如く三別出来る。  
(a) 集合論的方法 カントール (Georg Cantor, 1845—1918) の集合論 (1894) に初まる、一部門に屬する同種の量を同種元素と看做し、其等の元素の集合的性質を論ずる方法。

(b) 群論 抽象代數學的方法 ガロア (Evariste Galois, 1811—32) 及び、アーベル (Niels Abel, 1802—29) の方程式論に其の端を發した、(a) と略々同様な方法であるが、(b) との相異は、集合の元素間に、特定の演算法則、集合法則を考へる點にある。

(c) 公理的論理的方法 非ユークリッド幾何學の研究が其の搖籃の地で、文字通り、数学の公理的研究である。

之等の方法は、必ずしも、單獨で使用せられず、相互に聯關して採用されてゐる。此の事は、現代数学が、一研究對象處理の際に、その對象が本來は從屬しない領域の結論、方法等を用ひる事實——例へば、整數論は、元來、代数学の一課題であるが、之を解析學的に取扱ふ時は、解析的整數論が新に發生する——と相俟つて数学の分類を困難にし、各部門の定義を曖昧ならしめる主要原因となる。

二 数学の種類 数学の分類は、現代に於ては、殆ど正確にはなし得られないが、從來の分類方針に従へば左の如く三別出来る。

- (1) 幾何學
- (2) 代數學
- (3) 解析學

A 幾何學 (Geometry, Geometrie) 幾何學は、クライン (Felix Klein, 1849—1925) に従へば、變換群に於ける不變形式を論ずる科學と定義することが出来る。此の定義は、當時に於ける幾何學の

謂、デカルトの解析幾何學で、特に、二次以上の代數曲線及び代數曲面を研究する部門を代數幾何學 (algebraic geometry, Algebraische Geometrie) と呼び、ヘンセル (Hensel) の ヴェーベル (Weber) に依り創始せられ、前世紀の後年に於ける主要課題の一つであつた。

註 代數曲線、代數曲面とはそれを表はす座標  $x, y, z$  等の商數關係が有理商數なる場合である。

微分幾何學 (differential geometry, Differentialgeometrie) 幾何學に微分學、積分學を適用したもので、解析幾何學の主要部分、結局、全幾何學體系の最重要部門の一つである (詳細は微分幾何學の項參照)。

接續幾何學 (geometry of connection) 一般化せる微分幾何學に非リーマン幾何學等とも呼ばれ、物理學との密接な關係の下に於て發展しつゝある最新の理論である (後節の接續幾何學の項參照)。

B 各種幾何學の概要 斜影幾何學 幾何學が、デカルト (René Descartes, 1596—1650) の オイラー (Euler 十八世紀中葉) の解析的段階を超えて、再び、綜合的色彩を帯び初めたのは十八世紀末より十九世紀の初にかけてである。斜影幾何學 (projective geometry, Projective Geometrie) 又は位置の幾何學 (Geometry of position) と呼ばれる此の新綜合幾何學は、モンチュ (Gaspard Monge, 1746—1818) の カルノー (Louis Carnot, 1753—1823) によつて創設され、ポンスレー (Jean Victor Poncelet) の メービウス (August Ferdinand Möbius) の フォン・シュタウト (von Staudt) の クレモノナ (Lu. Cremona, 1830—1903) 等を經、ライ (Theodor

Reye) ウェンレン (Oswald Veblen) ヤング (W. H. Young) に至つて完成を見たもので、其の綜合的見地は、古典綜合幾何學たる初等幾何學に含まれる數多の概念的夾雜物を除去し、新に總ての概念を、出来る丈一般的に、且、嚴密に定義し、此の定義、並びに一群の公理を、定義された要素(即ち、點、平面、直線、空間等)に、斜影 (Projection) 及び截斷 (section) の二方法によつて、適用して組上げた、論理的、公理的な立場である。更に、此の幾何學では、要素の集合を閉集合にし、種々なる對應關係を一對一ならしめ、此の體系より「例外」を排除する爲に、此の幾何學の成立する空間の無限遠要素として、無限遠平面を導入してゐる。此の導入は、虛原素の採用と共に、此の幾何學の本來の性格ではない計量的特性を持つ部門までをその中に包含することに成功した。

註 此の無限遠原素が平面であることが、此の幾何學の斜影的なる所以であり、それが、唯一點なる場合は、總ての意味で、之と對照する球幾何學 (sphere geometry, Kugelgeometrie) となる。

此の空間を斜影的空間 (projective space, Projektiv Raum) と呼ぶ。クラインの定義は、此の幾何學の從屬する群は斜影變換群であることを教ふる。斜影變換 (projective transformation, Projektive Transformation) とは、次の二様に考察される變換が互に移行し合ひ、從つて、結果に同一の形式を興へる。

- (1) 圖形の位置は不動で、座標系を變換する。
- (2) 座標系は固定してゐるが、變換の對象たる圖形が甲位置より乙位置に移される。

斜影變換群には之に屬する從屬群が存在する。此の從屬群は夫々

來、球幾何學(前註参照)的に計量幾何學を再編成する試が行はれてゐる。——或は、高須博士の如く、原素の有向性より出發する立場もある。(高須博士の著、軌近高等數學講座八卷には、此の點が詳述されてゐる)。

球幾何學は、斜影幾何學と、無限遠原素を異にするのみで、而も相互の成立する空間は、所謂、リーの線球變換で結合せられるから、得られる多くの結論は、互に對照し合つてゐる。最近のテーマの一つ。

斜影變換群、又は、球幾何變換群は、一次變換群であり、之以上の群に對しても、それに相當する幾何學が存在することがクラインの定義より豫想される。事實一個の變換群には一個の幾何學が相當する。之等の幾何學の分類等に関しては、高須氏著(前掲)卷末等に記されてゐる。我が斜影幾何學は、所謂、クレモナ變換群の特殊な場合である。矢張り、此の方面も、現今頻りに取上げられてゐる。

参考文献——Cromona: Elements of Projective Geometry. Baker: Principles of Geometry, I, II, III. Reye: Die Geometrie der Lage, I, II, III. Veblen and Young: Projective Geometry, I, II. Klein: Nicht-euklidisch Geometrie. Pasch und Dehn: Vorlesungen über neuere Geometrie. (計量に關して興味ある研究が記されてゐる。) 吉川實夫、近世綜合幾何學 細川藤右經門、岩波數學講座。

微分幾何學 此の部門も、少くとも、一九一六年迄は、完全にクラインの定義下にあつたもので、各種の變換群に相當して、各種の

特性を有するから、此れによつて生ずる幾何學は、個々相異なるものである。今、從屬群中主要なものを選び、それによつて規定される幾何學を列挙すれば

- (1) 橢圓合同變換群 橢圓幾何學 (elliptic geometry)
- (2) 双曲合同變換群 非ユークリッド幾何學 (non-Euclidean geometry, Nicht-euklidische Geometrie)
- (3) 擬眞變換群 擬眞幾何學 (affine geometry)



ラインの等形變換群(一名拋物的變換群) 拋物幾何學 (parabolic geometry)

等積變換群 等積擬似幾何學 (equifine geometry) 所謂、ユークリッド幾何學は、拋物變換群に從屬するユークリッド群で規定されてゐる。

更に、條件を附すると、より低い程度の幾何學が発生するし、計量幾何學を興へる群も射影變換群に含まれ、又、通常の座標幾何學微分幾何學も射影幾何學の一部となる。もつとも、本來、射影幾何學には計量的性質が稀薄なる爲、長さ、角の大きさが一義的に決定されない等といふ種々の難點を生ずる。此の難點を避ける爲に、近

幾何學が生れてゐる。その主なるものは

- 射影變換群 射影微分幾何學 (projective diff. geo.)
- 擬眞變換群 擬眞微分幾何學 (affine diff. geo.)
- ラグエル變換群 ラグエル微分幾何學 (Laguerre's diff. geo.)
- 位相變換群 位相微分幾何學 (topological diff. geo.) 等

註 diff. geo. は differential geometry の略である。此の方面は、リー(Lie)、ヘルツ(Hilbert)、ベルトラミー(Beltrami)、ワインガルテン(Weingarten)等により創始發達せしめられたもので、前の綜合幾何學より遙かに方法的色彩に富んでゐる。之は、前掲の分類表の名稱より知る事が出来る。

微分幾何學の對象は、圖形の計量的性質、即ち、長さ、角の大きさ、曲線の曲度、體積、面積等て之を數量的に表示し、その間の關係を求める。クラインに依れば、その要素となるものは、空間の一般的曲面、曲線である。アインシュタインの一般相對性理論に使用されたリーマン幾何學は此の部門に屬する。

参考文献——Darboux: Géométrie analytique, 1917. Blaschke: Vorlesungen über Differentialgeometrie. (Lehrbuch- Lindemann: Vorlesungen über Geometrie. Baker: Principles of Geometry. IV. Bianchi: Lezioni di geometria differenziale. Eisenhart: Riemannian Geometry.

クラインの定義は、一九一七年以後、レビチビタ (Levi-Civita)、スカウテン(A. Schouten)、ワイル(Hermann Weyl)、ケーニヒツヒ(König)、カルタン(E. Cartan)等に依つて擴張せられ、物理學の統

一場理論の平行移動概念の研究と相聯して、遂に一九二四年スカウテンにより完成された。(Erlanger Programm und Übertragung-lehre. Neue Gesichtspunkte zur Grundlegung der Geometrie. ... Rendiconti del Circolo matematico di Palermo, 50, 1926. 又は、カルタンの紹介、Rapport sur le Memoir de J. A. Schouten, Bull de la Soc. Phys-Math de Kasan, [3], 2, 1927. 或は日本数学物理會誌第二卷第二號、高須鶴三郎氏紹介)。スカウテンの思想は微分幾何學的で次の如く要約される。「一つの  $n$  次元空間  $X_n$  の各原素に、其の原素を含む一つの  $N$  次元空間  $X_N$  を切せしめ、無限に近い二個の  $X_N$  の一方を他方に、與へられた連續群に屬する變換で表現せしめて不變形式論を展開するのが幾何學の一般的使命である。此の定義は相接近する二點の變換を用ひる故に、變換群の要素なる函數は完成せられた夫である必要がない故、クラインの定義より遙に廣いものである。現下の課題の一である接續幾何學は、此の新射影微分幾何學に依つて、略々統一されてゐる。(物理學、一般場理論の項参照)。

接續幾何學 ベクトルの平行移動條件決定によつて方向付けられた幾何學で、相對性的統一場理論の發生と共に、ワイル、スカウテン、ヴェブレ、カルタン、フィンスレル(Finsler)等の手により加速度的發展が行はれてゐる。主要なる點は、ベクトルの長さの位置變化に伴ふ變動を研究するにあるので、テンソル解析を用ひ、微分幾何學的に歩を進める理論である。此の統一的概設は次の三書で叙述されてゐる。  
Schouten; Ricci-Kalkül (最も統一的な著書で、接續幾何學とし

ての所謂、ワイルの幾何學、リーマン幾何學、ユークリッド幾何學は皆その特段の場合として取扱ふ、或る意味で劃期的な書である。)

Eisenhart: Non-Riemannian Geometry.  
Veblen: Projektive Relativitätstheorie.

論、新微分幾何學の基礎的問題を論じた書としては、Veblen and Whitehead: Foundations of Differential Geometry が有名。

幾何學の分科には、前者の外に、位相幾何學、幾何學基礎論がある。位相幾何學 (Topology, Topologie) 一名位置解析 (Analysis situs) と云ふ。リーマン面の研究等に其の端を發し、ブラウエル(Brouwer) が集合論的基礎を與へて以來特に蘇聯で著しい發展をなせる部門で、圖形の連續變換群に於ける不變的性質を研究する。例へば、點の集合として、面、又は、線が形成される爲の條件、或は、線、面等の合同性に關する問題等は之に屬する。フレイシエ(Frèchet)、モイゲル(Menger)、トイツイエ(Ftze)、リーデマイステル(Riedemeister)、クレクヤルト(Krekjarto)、アレクサンドロフ(Paul Alexandroff)、ホッフ(Hopf)等は此の方面の權威である。之を統一的に概説することは、現在發展の過程にある爲困難であるが、概して、集合論的方法と組合論的方法とに分類する事が出来る。猶、ブラシュケ一派の位相微分幾何學もあり、群論と結び付いた方向もある。Krekjarto: Topologie は必讀の書である。

幾何學基礎論 幾何學の公理的研究で、非ユークリッド幾何學の發見に刺戟されて發達し、パツシュ(Pasch)等を経て、ヒルベルト(D. Hilbert)の幾何學基礎論(Grundlagen der Geometrie, 1913)に統一的概観が與へられた。抽象代數學に多大な影響を持つてゐる。

C 代數學 (Algebra, Algebra) 定義 藤原松三郎博士はその著『代數學』第二卷に於て、代數學とは元素間に加減乗除の全部、又は其の一部が許される集合の形式を論ずる科學であると定義してゐる。此の定義は、最近の獨書の傾向の如く、古典論には重心を置かず、更に廣汎な、現代代數學として適切なものである。

代數學はその對象に依つて分類すると、  
(1)古典論 (2)抽象論 に二別出来る。



藤原松三郎

(1)に屬する主なる分科は、方程式論、行列式論、複素數論、整函數、無理數、連分數、二次形式等の諸理論であるが、その主體的研究は、既になし盡され、現在では、部分的發展を見る許りである。整數論も本來は古典的理論ではあるが、最近異常な進歩を遂げてゐるから、特にその概要を叙述する。整數論 (Theory of numbers, Zahlentheorie) 之は、元來、整數の性質を取扱ふ部門である。ユークリッド、フェルマー等によつて發達せしめられた所謂初等整數論はガウス (Gauss) の Disquisitiones arithmeticae (1801) で概括せられたが、整數概念を代數方程式と關聯させて擴張を行った爲、其の視野は甚だしく開け、ガウスの複素整數論 (1831)、クンメル (Kummer) の理想數の理論となり、更にデデキント (R. Dedekind) のイデアール論の構成はその發展に拍車を掛け、遂に、

クロネッカー (Kronecker) を經つて、ヒルベルトに依つて統一せられた。之を代數的整數論 (Theory of algebraic numbers) と呼ぶ。現今、此の方面の指導者はハッセ (H. Hasse) アルタン (E. Artin)、高木博士等である。一方、整數論の課題である素數分布の研究は、解析學と結びついて、解析的整數論 (Analytical theory of numbers) を構成した。ディリクレ (Dirichlet) の Recherchs sur diverses applications de l'analyse infinitesimale a la théorie des nombres は、此の方面の劃期的研究 (1840) 現在参加せる人々はヘッケ (Hecke) アルタン、ラングウ (Landau) その著 Zahlentheorie は最近の研究を殆ど包括してゐる。(等であるが、此の部門は他方結晶學へ適用され、その基礎を築くと同時に、逆に此の部門の發展を強制せしめられるに到つてゐる。猶、整數論の文獻としては、高木博士の整數論も忘れることは出来ぬ。

(2)は抽象代數學 (Abstract algebra, Abstraktalgebra) と呼ばれる部門で、近代數學の形式的抽象的資格は、主として、此の理論の適用に基いてゐる。最初、五次方程式解法に用ひられたアーベル群が、フロベニウス (Frobenius) に依つて始めて抽象的に取扱はれたことに萌芽を見たがそれは群論の範圍に止まり、顯著な進歩は見られなかつた。シュタイニッツ (F. Steinitz) の研究は、幾何學基礎論との影響と相俟つて、此處に、四則算法、集合論に基礎を置いた全く抽象的な理論の發生を見るに至り、此の結果、在來の四則の意義の再検討が行はれ、代數學は全くその面目を新にするに至つた。此の理論は、現在急速度の發展過程にある故、之を概括するは甚だ困難であるが、その動向は、主として、環、群に向けられてゐる。

る。此の中、特に群論は、ワイル、ハイトラリーによつて量子力学一般論、並びに分子構成論に適用され、各々其の方面を長足に進歩せしめてゐる。元來、此の部門の對象は、或る規定下の元素集合の構造並びに性質で、之に作用 (Operation) なる概念を働かして究明するのである。此の特定の元素集合には群 (Gruppe)、準群 (Ultragrupp)、環 (Ring)、體 (Körper) の諸種がある。此の諸概念の系列を圖示すれば、

集合—準群—群—環—體

となる。今、集合元素間に結合方法を設定し之を乘法又は、加法で表はせば、任意の二元素を  $a, b$  とすれば、

群 (1)  $ab$  は一義的に決定されるべきこと。

(2)  $(ab) \cdot c = a \cdot (bc)$  此の (1)(2) のみを取る時は準群となる。

(3)  $ea = a$  なる元素  $e$  の存在 (4)  $ba = e$  なる  $b$  の存在

環、二種の結合法が與へられ、一方に就いて準群、他方に關しては可換群 (例へば、 $ab = ba$  が常に成立する群) で、且、二種の結合法間には、分配律が成立するを要す。

體、環が  $0$  ならざる元素を有し、且、 $0$  と異なる元素の全體が乘法に關して群をなす時、此の環を體と云ふ。例へば、全有理數は體をなす。猶、詳細は次の参考文献によられ度い。

- 1. von der Waerden: Moderne Algebra, 1930. 2. Steinitz: Algebraische Theorie der Körper, 1930. 3. Weyl: Gruppentheorie und Quantenmechanik, 1926. 4. 正田建太郎, 抽象代數學 (1932).

(4) の著作は、他に比して最新の研究までが掲載されてゐる。

D 解析學 (Analysis, Analyse) 無限概念を基礎とした函数の研究と言ひ得られる。併し乍ら、無限概念は數學全般に亘るもので (微分幾何學、級數論) 解析學の獨占物ではなく、比較的、無限概念が全面的に現はれる分野が解析學である。微分學、積分學、兩數論、實變數函数論、微分方程式論、積分方程式論、兩數解析學又は諸種の函数研究、及び連續群論等總て之に屬する。統一的體系を持たない方法的色彩の濃厚な分科である爲、總括し得ないが、連續群論 (Theory of continuous group)、兩數解析學 (functional analysis)、概週期函数 (almost periodic function, Fastperiodische Funktion) 等は現下の課題の一である。連續群論はリーの連續群論に於て一旦完成の域に達したが、現今、シュライエル (Scheurer)、カルタン、ノイマン (Neumann) 等によつて展開された抽象的連續群論がその主題である。その論ずる所は、點集合をなす元素が有限次元集合體をなし、その群合成法則が連續條件を満足する群の抽象的一般的取扱ひである。又、兩數解析學はヴォルテラ (Volterra, 1837)、アダール (Hadamard, 1903) によつて創始された汎函数 (Functional, 函数の函数) を對象とする分科でエヴァンズ (Evans) ペルー (Pérez) 等の複素汎函数論及び統一的なフレッチ (Frochet) の抽象空間論、更にその發展である一般解析學 (general analysis) の二方向がある。此の理論は、パウリ等の量子電磁力学に應用せられ、それを異常に發達せしめてゐる。概週期函数論は一九二五年にボーア (Bohr) によつて提出された週期函数の一種の擴張で、物理學の振動現象に廣汎な適用範圍を有してゐる。

参考文献—Volterra: Theory of Functionals. Schreier:

Leber neuere Untersuchungen in der Theorie der kontinuierlichen Gruppen, 1928. Deut. Math. Verein. の年報。數學の基礎的分科として、以上の外に集合論 (Theory of sets, Mengenlehre) がある。元素集合の性質を研究する分野で、一八八三年、カントールに依つて創始され、爾來、無限概念の基礎付けに資してゐるが、現在では、更に一般に總ての領域の方法論とし、多かれ、少かれ、關與し、所謂集合論的方法を提供してゐる。

参考文献—Fraenkel: Einführung in die Mengenlehre 他に數學基礎論等の分野もあるが、數、これを省略する。

(雨宮綾夫)

### 性格學 (英 characterology, 獨 Charakterologie)

吾國に於ける性格學の發達は極めて最近のことである。岸本惣吉氏が明治十七年 (一八八五年) より昭和八年 (一九三三年) に至る間に發行された七百冊の應用心理學に關する單行本を列挙してゐるが、その内から性格學のものを拾ひ出してゐるに、昭和五年 (一九三〇年) に内田の『性格學史』及びクレッチェメル (K. Kretschmer) の『性格學』の紹介があり、昭和六年 (一九三一年) に高良博士のものが出てゐる。之は主として Hoffman (Hoffmann) の著書の紹介をなされたもので、その中には西歐に於ける諸學者の性格學説がよく述べられてゐる。昭和七年 (一九三二年) には綾哲一氏の本が出てゐるが是には本邦に於ける性格學の實驗的研究も紹介されてゐる。

セイカクガク

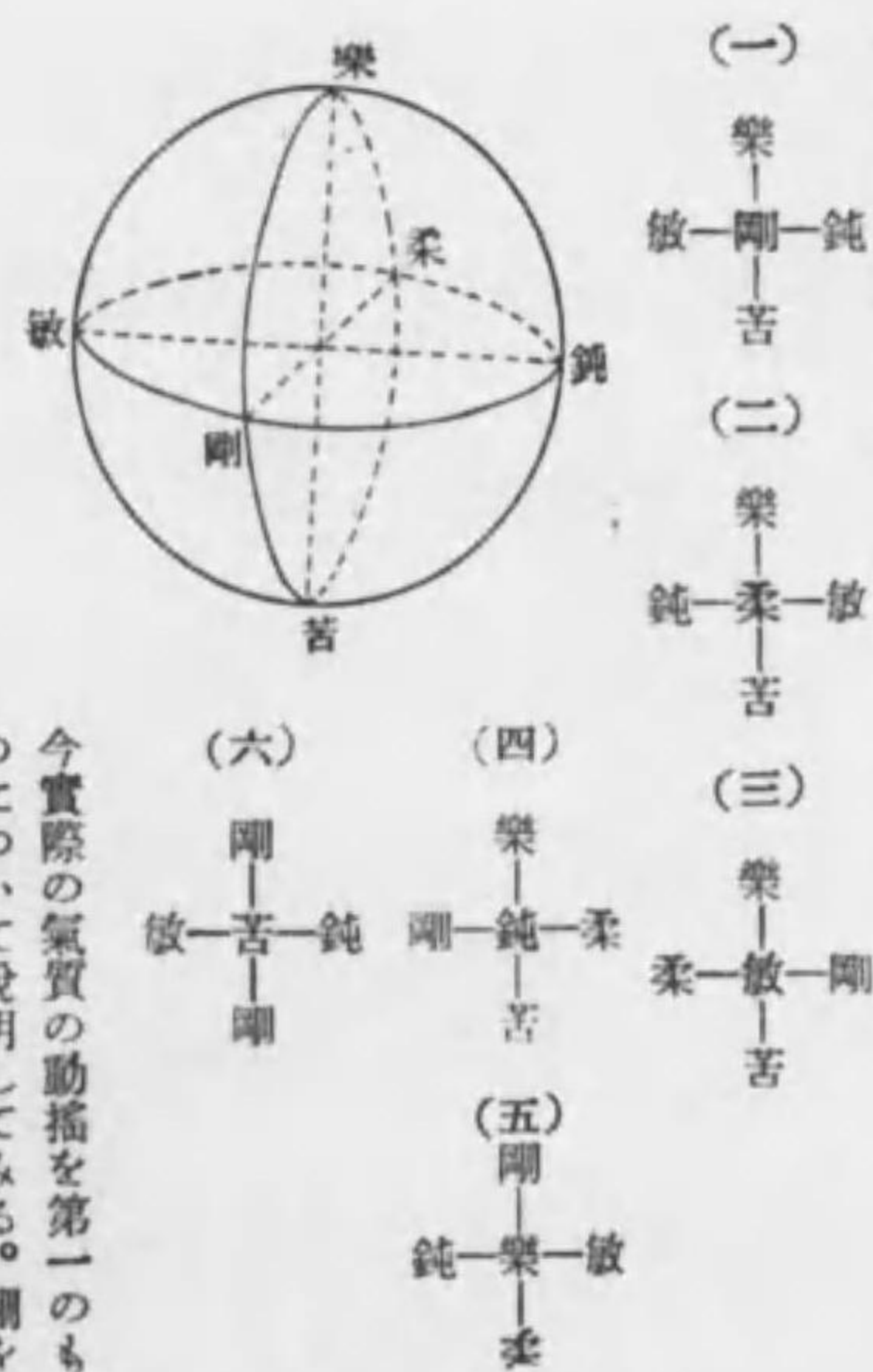
昭和八年 (一九三三年) には小野島右左雄博士の性格心理學の理論的方面のものがある。尙以後の年代のものを附記すれば、内村祐之博士はクレッチェメルの『天才人』を譯してゐる。昭和十一年 (一九三六年) に田中秀雄學士は性格に關する統計的研究の著書を出す。更に、學術雜誌にある性格學の文獻をみるに、最初のもものは石川貞吉博士が、クレッチェメルの體型及氣質論を紹介したものである。大正十三年、一九二四年)。ついで生物心理の方面より研究された性格論の現状につき發表された (昭和五年、一九三〇年)、是に於ては性格なる概念の生物學的方面に於ける西歐の代表的ものを擧げ、本邦中川龜松學士の新説をも紹介してゐる。尙性格の類型論 (Typologie) に及びクレッチェメル、ヘンク (Carl Jung)、ヘーワルト (Ewald)、古川、ワイニンゲル (Weininger)、クラゲス (Klages)、ヒトラー、フライエンフェルス (Müller-Freienfels)、シュプラングル (Spranger)、ディルタイ (Dilthey) 等のものを極めて簡明に解説してゐる。次に性格の遺傳の研究をのべ、ソムメル (Sommer)、ロンブローゾー (Rombrosio)、村瀬、パウエル (Bauey)、フィッシャー (Fischer)、ランツ (Lanz) 及び特に健康人に關する研究としてホマンの性格遺傳を詳述し、ナボレオン、ペール・ペールソン (Pehr Pehrson) 一家 (瑞典豪農)、フリードリッヒ大王の三家族の遺傳例を示してゐる。

終りに Hoffman の研究方法に對する意見を述べ、石川博士は是に批評を加へてゐる、曰く Hoffman のものは發案草々のものにして實地試驗を経たる上ならては其價值を判じ難し、ともかく凡て其等に關し經驗的に研究を重ねることは、他の性格論の諸問題と共に前途



に屬する好箇の攻究問題たらずんばならず。と結んでゐる。是等の文獻は西歐現代性格學の傾向を知るには誠にすぐれたものである。安井洋氏は氣質の分類について、新説を發表してゐる(昭和四年、一九二九年)。即ち氣質、性格に關係ある言語を悉く蒐集し是を其關係によつて配列し、其間に一定の統一關係を發見せんと努めた。試に氣強い氣質と思はれる若干の言語を取つて比較してみると剛毅と云へば單に強いことを意味するに過ぎないが、勇敢と云へば強いと云ふ外に銳さがあり、更に勇悍剛悍と云へば強く素早きこと敏捷の意が加はる、同じく強い氣質であつて豪宕、豪放と云へば強くして且つ小事に拘泥せざる樂觀的態度が現れて居る。剛毅、嚴烈と云へば強くして且つ細事をも苟にしない苦觀的の傾向が現れて居り、沈毅沈勇と云へば強くして落着きたる傾向となり沈重、鈍重に連つて遲鈍の意が加はつて居る。即ち強い氣質は剛を中心として敏、鈍、樂、苦の四方向に連續する傾向があり、剛毅の四隣には敏捷、遲鈍、樂、苦觀の四の中心があると云ふことが知られて來る。又是等の四中心が敏と鈍、樂と苦の如く互に正反對の意味をもつ所から見て剛の反對にも柔と云ふ中心があつて是に對立して居るものであることは云ふまでもない。こゝに至つて下圖に示すが如き三軸、六極の統一關係が成立することになる。而して安井氏は此の六極の性質を圖形に基いて詳しく説明してゐる。六極とは剛の氣質、柔の氣質、敏の氣質、鈍の氣質、樂觀の氣質、苦觀の氣質、等であつて、六極の色々の組合せから中間氣質が生ずると説く、かくして、氣質、性格の語はこの基礎氣質の上に成立し、圖中の何處かに位置づけられる。

尙更に人の氣質なるもの、ここに畫けるが如き球體圖型の一局所に固著せるものではなくて寧ろ此の一局を中心とせる當該半球の範圍内に動搖發展するものと考へることが出来る、その結果次に示すが如き發展範圍を有する。



今實際の氣質の動搖を第一のものについて説明してゐる。剛を中心とする氣質。剛を中心として其の四周に發展する氣質の長所について言へば例之ば平素は沈着沈毅にして妄りに動かす(鈍)、一朝事あれば勇猛果敢に活動して(敏)孫子に所謂疾如風、徐如林と云ふが如き趣があり又一面には豪宕潤達にして細事に拘泥せず(樂)一面には秋霜烈日犯すべからざる威嚴を具ふる(苦)が如き性格である。之に反して其の短所を云へば一面には頑愚頑鈍にして御すべからず(鈍)、一面には短慮焦急にして人を苦しめ(敏)、自らは驕慢專肆す

あり(樂)、人に對して峻嚴苛酷を極むると云ふが如き性格である。と云ふ風に一見矛盾せると思はれる性格も發展範圍を考へれば理解できる譯になる。

以上安井氏の説は勿論定説となるには發表後の日が浅いが、併し科學者の新性格説としては本邦に於ては唯一のものであるからこゝにその一端を述べてみた。

石川貞吉博士は安井洋氏の氣質の分類法が著しく Kretschmer, Ewald, Jung のそれに類似せるに驚けりと云つて博士は彼此類似點を詳しく指摘し、安井氏の氣質分類を見るに其「樂苦」はタ氏の爽快より悲哀及び精神感度の過敏に屬する苦に當り、敏鈍は概してタ氏の精神經過及精神運動の遲速の状態に當り、剛柔に相當するものに關しては同氏は主として精神運動の一性質として一部は精神經過の一性質として表はせる如し、再言すれば安井氏の苦觀中にはタ氏の躁鬱氣質の抑鬱に傾けるものと、乖離氣質の精神の過敏に屬する苦を含める差異ある如し。而して安井氏は躁鬱氣質に屬せる諸性質の意義を解剖し、結論として該氣質は樂觀を中心として敏、鈍、柔への偏倚あるも剛の意味を見ずと云ひ、又乖離氣質の夫れを分析して苦觀半球を中心として剛鈍に集中するの傾向ありと云へる如きは、同氏が純粹躁鬱氣質は柔きに傾き、剛なるは乖離氣質に見ると云へる大主意に一致せりと、更に博士はユングとの一致を示し、而して一致點ありと云ふことは眞理は兩方に存在すと云ふこととてなくて、事によりては容易に判じ得ずとなし、又分類に先立つ前作業に具體的關係との連絡なく、此の點はむしろエーワルトの氣質及性格構成論に近似せりとす。その説の出發點の單純なるには誰しも批難をなす

所であらう。性格、氣質の辭語及文字は無生の互譯同然で、それより活ける生理法を發見せんとするは無理であるとしてゐる。併しながら一言之を掩へば所謂六極の辭語と之れが對象たる無數の氣質性格の文字は本邦固有の概念を有するものにして、直ちに外國語の直譯を許さず故に之を概するに著者は、東洋的なる特殊の氣質論を樹立せるの關係なるなり、茲に余(石川博士)は著者の本業績は純心理學的に觀たる氣質及性格の構成と其定理論とに貴重な貢獻をなせるものたるは斷じて疑はずと石川博士は結むてをられるが安井氏の分類を分析して所謂彼此の同を見出したのは石川博士の見方の極めて分析的に凡ならざるを知り、その評は甚だ興味あるものである。

杉原學士は本邦人並びに朝鮮人につきクレッチメルの説をたしかめるために、先づ同氏體型變形によつて體型の分類をなし、性格との一致度をみた。その結果、歐米人と同じく細長—闊土型に乖離性情性を、肥滿型及類肥滿型に躁鬱性情性を認め同氏の説に裏書した。更に杉原學士は只體型と性情との關係を論ずるにあつてそこに見逃すべからざる重要な點は體型が専ら生物學的、遺傳學的に説明せらるゝに對して、性情に於ては教育及び環境の影響の甚大なる事を考へなければならぬことを強調し、體型と性情とが全く相反して居る様な場合にはそれも比較的らくに行くが兩者の一致が相反するときには性情の定め方は困難を極める。今假りに細長型の入て躁鬱性情性ありとすれば、其の體型とは乖離性情性が相一致すべきであるから、その氣鬱性情性は或は本來乖離性質のものが教育環境のために表面さうなつたのあらざるかを先づ疑はしめる。此の際は現象型(Phenotypy)として躁鬱性情性が見られるのか、

或は原型 (stereotypus) であるのが問題になる譯である。それだからからる場合に於て本来ならば先づ體型と親和性を有する乖離性情性が力強く發達すべきであるに拘はらず、何等かの事情によつて其發達が妨げられ傍ら躁鬱性の素質の發達に非常に都合なる條件が加はつたために現象型は専ら躁鬱性情性を示すに至つたと解釋するの至當でなからうか。併乍ら一般に就て考へるに教育、環境の影響如何に拘らず細長型に乖離性情性、肥滿型に躁鬱性情性として定型的なる發達を遂げて居る場合が決して稀ではない。即ち體型と親和性を有する性情要素自身に於てもその價值單位 (Valenz) に高下あるもので、その力強きものに於ては多少の不適當なる環境に於ても尚且つ他を排して發展し得るものである。かくして出來上つたものは所謂固定性現象型 (fest Phänotypen) (Kahn) であり、又教育環境等の影響によつてそれに適した要素が發展する場合は所謂可動性現象型 (unbeständige Phänotypen) (Hoffmann) である。固定性現象型は吾人の場合に於ては體型と性情とが相一致したものであり、然らざる場合は可動性現象型と考へらる。此の如く本來は比較的薄弱なる要素でありながら異常なる體験によつて強く勢ひづけられたる性質となつて表はれ來る所の現象をホフマンは *überhaupten* 或は *überbiegen* と名づけてゐる。

即ち吾人の情性の要素としては何人に於ても躁鬱性並に乖離性の兩要素が存在し得るものにしてその夫々の情性と體型とは勿論或程度まで親和性を持つものではあるが、其情性の價值單位如何によりては個人の體験とは殆ど無關係に一定の情性が發達し或場合には教育環境等の影響を受けて本來微弱にとゞまるべき要素が著しき發展

をとげると云ふ事が考へられる。以上は杉原學士の解くところであるが實際クレッチュメルのあげてゐる例は現象型と原型が一致してゐるものであるが、實際臨床的に出あふ個人においては、一見一致せぬものが出て來るので現象型を原型に關係せしめて研究することは目下のところ非常に必要で、その場合一方遺傳の研究、一方環境の影響の限界等の研究はその目的に役に立つ、今後益々此の方面の研究が盛になることと思はれる。

池見猛學士は専門學校受驗生三千名の内から適當と思はれるもの一千五百名を選び出してクレッチュメルの體型變形により體型に分類し細長型には無口、心配性、親切、好人物、儉約、正直、熱慮、熱心な人が多く一般に精神乖離型の傾向の人が多い様であり、闊土型に屬する者には親切、陰氣、正直、熱心、勇敢進取的、勝氣な人が多く乖離型傾向が多い。肥滿型の人には好人物、親切、多辯、香氣、笑談、正直、大膽、趣味が多い、即ち一般に躁鬱性情格の人が多く、發育異常型に屬する人には親切、無口、神經過敏、調和、正直、鈍重、熱心、勇敢進取即ち精神乖離型傾向で、故にクレッチュメルの體型と性情との關係は大體に於て肯定する事は出來るが、この肥滿型の人の場合には細長型となる場合がある。その際如何なる型式によつてこの性格が變化するかは今後研究すべき問題として殘されてゐると述べてゐるが、併し、細長、闊土、異常特殊型は乖離性に屬する性格特徴ではあるが、それら異つたものをあげ、且つ肉體型の移行を見出してゐるが、池見學士が如何なる方法を用いたか詳しくはわからぬが、それ等の點はクレッチュメルの考へを異にしてゐるやうである。

本田清之學士はクレッチュメルの三體型を體型變形及指數的取扱から本邦内地人につき調べ本邦人では純粹型は獨逸人男子より少なく、肥滿型四%、闊土、細長八%を越えず、肥滿型が本邦人に甚だ少ないのは本邦人の體型の一特徴であるとしてゐる。

以上は主として精神病學者の性格學的研究であるが、次に心理學者の方面に於けるものを述べる。

小野島右雄博士は性格學説をたて性格の研究は結局個體の全體性の上に於てのみ一定の類型を求めることが出來、斯かる類型は形態の同一性と云ふ姿に於て認識され得るものである。若しかゝる形態性を度外視して性格を認識しようとするならば、或は個々の斷片的なもの、總和若くは平均から虚構的な性格を捏造するから然らずんば之に類する靜的な性格をもつて全體性と見誤るか或は若し其の變者 (Variante) のみによつて性格を認識しようとするならば、結局無限に差異を有するものを認めることに終つてしまつてあらうと述べてゐる。而して参考書目として Wolfgang Koehler, Wertheimer, E. Husserl, C. Stumpf, Witasek, Hildebrand, Müllers-Freienfels の著をあげてゐる。

體育研究所においては、内田、松井、本田、谷本、山根學士が、クレッチュメルの性格學の實驗類型學的研究をなし、v. d. Horst, M. Kibler, Enke, Lutz, Phahler Bayer, Dambach, Scholl, Vollmer Kroh, Korschach 等の性格の診斷的研究の追實驗をなし、素質類型特徴の實驗像を前者と同じく認め得ることを見出し、實驗像よりする徵候群の存在を示してゐる。

正本正學士は人間類型の研究としてクレッチュメルの素質類型に

セイカクガク

より高等學校生徒を分類し、且つ典型者が果して生涯に性格の變化をどの位うけるか、その限度をしらべて甚だ興味ある結果を得てゐる。

同氏は更に性格學豫備概念性格學史を述べ、而して E. Jaensch の所謂直觀像 (Anschauungsbild, Eiderik) に興味をもち、つひに Jaensch の類型學の實驗的追研究をしてゐる。

久保夏英博士は性格の自己診斷結果と血液型との關係を見て古川氏血液型と性格關係に消極的結果を出してゐる。

尙兒童につき Kretschmer の説をたしかめるために Kibler の自己診斷と體格特徴とを關係させて消極的結果を出してゐる。

内田、西坂學士は Kretschmer の素質類型を實驗心理像、臨床的方法とを用ひて兒童に積極的結果を得てゐる。乖離性情格と細長型、躁鬱性情格と肥滿型との一致度は兩者ともに入〇%程になつてゐる。

依田新學士は専ら類型學 (Typologie) そのものの學說的研究を發表し、Kretschmer, Jung の類型をとらあげ、自然として人間の把握は歴史性の無視を結果し、そして「歴史的研究を見捨てることは人間認識を斷念する事」に他ならないと述べてゐる。

淡路圓次郎博士及び岡部彌太郎學士は人格研究に所謂向性検査法を用ひてゐる。而しながらこゝに云ふ、外向性、内向性なるものは理想標式設故、方法は Kretschmer, Jung, Freud, Marston, Latiri, 等によつてゐるが、趣を異にしてゐる。

桐原葆見博士は Jaensch の類型の實驗的の追試をなして、積極的結果を得てゐる。

内田は Kretschmer 類型による乖離性素質者の作業、及精神運動性の特徴を實驗的になし、夕氏の記載に積極的結果を得てゐる。尙早稲田大學心理學教室では専ら主として Kretschmer, Hoffmann 等の生物心理學的性格學(人格學)の實驗的及び遺傳の研究をなし、内田、戸川行男學士は、性格の遺傳、性格と肉體型との關係において積極的結果を得てゐる。即ち精神型(人格型、性格型)と肉體型との一致は明白であつて、精神型を定めるに自己診斷、既往歴、家系の有様を併せて診斷をなせば、肉體型との一致は愈々高くなる。尙極端な乖離性素質者の遺傳關係は甚だ顯著なることが出てゐる。牛島義友學士は淡路、岡部「向性検査」標準案を用ひて一家族の各員を検査した結果につき、夫婦、親子の相關係をみた。夫婦の向性指數の相關は零に近い、同胞間も非常に低い、親子は 0.3 以下で一般に此の方法によれば遺傳關係が餘り著しくないと結論してゐる。併し之は、向性そのものが前に云つたやうに、理想標式であるから、その方法で遺傳を考へるのは無理と思ふ。併し、その向性検査の成立を考へれば、本來素質的類型の特徴にもなつてゐたものであるから、此の方向を強調して方法の變容をすれば、遺傳研究にもある程度用ゐられ、結果も、もつと積極的になるのではないかと思はれる。

本邦に於ける性格學は大正十三年(一九二四年)頃からおこり、昭和五年(一九三〇年)頃から漸く盛になつたと云へ、實に寥々たるもので、新學説をたてたものは僅に安井氏を挙げうるのみで、大多數は歐米學説の紹介で實驗的、臨床的研究も十指を屈する程もない。之を次にのぶる歐米の近時の盛なる研究とくらべると甚だ見お

とりがする。

研究内容からみると學說方面では、三木清氏が Klagen の性格學の重要なことを示してゐるが、未だ完全なる紹介をみないし、他の臨床的研究は Kretschmer, Jaensch, Jung, Hoffmann の四人の業績の追研究でつきてゐる。併しながら此の傾向は西洋でも大體同じで、その傾向が本邦にも反映したと見ることが出来る。此の意味において質的におとつてゐるとは考へられぬが、たゞ量的には斷然相違してゐる。

試に Allport と Vernon とが一九三〇年に此の種のものを集めたものをみてみると三百二十七あり、年代に従つてならべると、

|      |        |
|------|--------|
| 1910 | ....1  |
| 1915 | ....1  |
| 1919 | ....2  |
| 1920 | ....1  |
| 1921 | ....6  |
| 1922 | ....9  |
| 1923 | ....14 |
| 1924 | ....16 |
| 1925 | ....21 |
| 1926 | ....33 |
| 1927 | ....47 |
| 1928 | ....53 |
| 1929 | ....63 |
| 1930 | ....60 |

になり、獨逸國が五十八、佛國か入て他が英米である。ユ氏、夕氏の著書が出た年である一九二一年位から増し、やはり一九三〇年頃が多い。

G. Watson が一九三二年に集めたものをみるに、是は主として性格、人格の測定に關するものであるが一九三〇年に一七一あり、獨逸國二〇、佛國五で、他は英米である。そして亞米利加に起つた意志氣質検査の類は全く影をひそめ、又内向性、外向性の問題も下火になつて来たが、性格、人格の心理學的研究が確固たる歩みで増加してゐると報告してゐる。そして獨逸國のものは個々の類型の分析的臨床的研究の傾向が増し、亞米利加では依然大數的研究が多

い。精神電氣的反應と性格、人格の問題は多くなつてゐる。

彼我をくらべてみてわかることは今後我國における、此の種の研究は益々盛になることと思はれる。研究の方法の種類は消長はあるが大體二つの方向に進むと考へられる。第一は、遺傳、素質、氣質、人格類型 (Personalkeitsypus) の生理生物心理學的方向と、第二は、智能、性格の心理社會的方向とであらう。

本邦性格學の大體の趨勢をのべ、次に歐米の現状の概説をするつもりであつたが、そこにいたらなかつたことは遺憾である。併し之は初めに挙げた數種の文獻によく紹介されてゐる、尙詳しくは英語では Roback 獨逸語では Kronfeld, Prinzhorn のものがいふと思ふ。併しいづれにしても性格學はもはや世界各國とも紹介、概説の時をすてにはなれ、學問の各領域のものが今やラボラトリーの仕事に専念してゐる。

参考文献

岸本惣吉、我國に於ける應用心理學者目錄、應用心理研究特輯號 第三卷第二號、昭和十年  
 内田勇三郎、素質型と其の心理學的診斷、昭和五年  
 内田勇三郎、神經學雜誌第三十卷第七號、第十二卷以降、教育心理研究第四卷第四號第八號第十號、第五卷四號  
 高良武久、性格學、昭和六年  
 綾哲一、教育的性格診斷學、昭和七年  
 小野島右左雄、性格心理學と兒童研究  
 内村祐之、天才人 田中秀穂、個性の研究  
 石川貞吉、クレッチャム氏の體型及氣質論(同氏著、抄録及評

註) 神經學雜誌、第二十三卷、大正十三年三月、第二十六卷、大正十五年三、四月號

石川貞吉、生物學的心理の方面より及其他より研究せられたる性格論、昭和五年

體質を顧みたる躁鬱病の觀察殊に所謂「ピクニケル」に就て 神經學雜誌第二十七卷、昭和二年六月號

中川龜松、植物神經緊張と氣質との關係、神經學雜誌第二十四卷 大正十三年十月、十一月

古川竹二、血液型と氣質、心理學研究第二卷、第四輯、昭和二年 村瀨雄平、智能の遺傳、大正六年

H. Hoffmann: Das Problem des Charakteraufbau, 1926.

安井洋、氣質の分類に就て、神經學雜誌第三十一卷第四號、昭和四年、第三十三卷、第八號、昭和六年

石川貞吉、安井洋氏の氣質の分類を讀む、神經學雜誌、第三十三卷、第九號、昭和六年

杉原滿次郎、體型と精神との關係についての知見補遺、神經學雜誌第三十一卷第七號、昭和五年、第三十四卷第三號、第五號、昭和七年

池見猛、體型と性格との關係、神經學雜誌、第三十七卷第五號、昭和九年

太田清之、クレッチャム氏三體型の指數的表現と本邦内地人の體型、神經學雜誌第三十六卷第五號、昭和八年

小野島右左雄、性格の心理學的研究に就いての一面、心理學研究 第二卷第一輯、昭和二年

セイカクガク

- 體育研究所、素質の實驗類型心理學研究、教育心理研究第五卷五號、六號、昭和五年
- 正木正、人間の類型の研究、心理學研究、第六卷、第一輯、昭和六年
- 正木正、性格學、教育科學、昭和六年
- 正木正、殘像について——人間の類型の研究——、心理學研究、第七卷第三輯、昭和七年
- 久保良英、自己判斷による性格と血液型との關係、兒童研究所紀要、第十四卷、昭和七年
- 依田新、類型學、教育科學、昭和七年
- 淡路圓治郎、岡部彌太郎、向性検査と向性指數、心理學研究、第七卷第一輯、昭和七年、第七卷第三輯、昭和七年、第八卷第三輯、昭和八年
- 内田勇三郎、乖離性素質者の作業障害の實驗的研究、體育研究第一卷第一號、昭和八年
- 内田勇三郎、乖離性素質者の精神運動性に關する實驗的研究、同誌第一卷第四號、昭和九年
- 赤松保羅、内田勇三郎、戸川行男、精神型と肉體型との關係、フイロソフイア(哲學年誌)第四卷、昭和九年
- 内田、戸川行男、常人に於ける神經質、乖離性、内向性的特徴と肉體型との關係、神經學雜誌、第三十八卷第九號、昭和十年
- 牛島義友、向性遺傳について、心理學研究、第十卷第二輯、昭和十年
- L. Klages; Die Grundlagen der Charakterkunde 6. Aufl.

- Die Prinzipien der Charakterologie (1910) 1928.
- Die Problem der Graphologie. Entwurf einer Psychodiagnostik, 1910.
- L. Klages; Über den Begriff der Persönlichkeit (1916) in "Mensch und Erde" 3 Aufl., 1929.
- Zur Ausdruckslehre und Charakter-Kunde, Ges. Abhandl. 1928.
- Handschrift und Charakter 11/13 Aufl., 1929.
- E. Kretschmer; Körperbau und Charakter, 8 Aufl., 1929.
- Geniale Menschen, 1929.
- E. R. Jaensch; Über Methoden der Psychologischen Typenforschung, Ztschr. f. Psychol. Bd. 108, 1928.
- E. R. Jaensch; Grundformen menschlichen Seins. Mit Berücksichtigung ihrer Beziehungen zur Biologie und Medizin (Monographien zur Grundlegung der philosophischen Anthropologie und Wirklichkeitsphilosophie, 1929).
- E. R. Jaensch; Hand Mit Arbeiter; Studien zur Psychologie menschlicher Typen, 1930.
- W. Jaensch; Grundzüge einer Physiologie und Klinik der psychophysischen Persönlichkeiten, 1926.
- C. G. Jung; Psychologische Typen, 2 Aufl., 1926.
- C. G. Jung; Das unbewusste. Ein gesunden und kranken Seelenleben, 3 Aufl., 1926.
- C. G. Jung; Über die Energetik der Seele und andere psy-

chologische Abhandlungen, 1928.

- W. Allport and Phillip E. Vernon; The psychological Bulletin, Vol. 27, No. 10 December, 1930.
- G. Watson; Measure of Character and personality, Psychological Bulletin Vol. 29, 1932.
- A. A. Roback; The Psychology of Character, with a Survey of Temperament, 1928.
- A. Kronfeld; Lehrbuch der Charakterkunde, 1931.
- H. Prinzhorn; Charakterkunde der Gegenwart, 1931. (内田勇三郎)

政治學

(英 political science, politics, 獨 Politische Wissenschaft, Politik, 佛 science politique, politique)

- 一 研究方法上の問題
- 二 政治概念の問題
- 三 政治形態の問題

A 現時政治學の問題

政治的實踐上に於て今日立憲自由主義の傾向が叫ばれてゐるやうに、政治理論上に於ても、同じやうな傾向が認められる。しかし立憲自由主義の傾向の問題は、根本的には、立憲自由主義を作りあげてきた、近代社會機構の問題であると同時に、近代社會が生み出した近代的思惟方式の問題にすぎない。こゝ

セイジガク

にこれを理論的にとりあげて見るならば、この近代的思惟方式は、個人主義、自由主義、理想主義であつて、とくにカント的理性主義(rationalism)であることと云ふことができる。故に立憲自由主義の轉向と云ふ問題は、理論的には、このカント的及び理性主義的思惟方式そのものの轉向と云ふ問題に歸着するのである。カントの範疇的無命令や意識一般の先驗性や形式的批判主義などと云つたやうな思惟的立場が、今日問題とされてゐるのである。それらの思惟方式が何故今日問題化されてゐるか云へば、云ふまでもなく、實踐的にすべて妥當でないからである。私共の歴史的社會的生活的存在性と全く離れて、超越的な思惟形式の自由と云ふものが在り得るか云ふ疑問がとくに今日強烈になつてきた。すなはち思惟の先驗性の否認である。かやうに思惟の先驗性が否認されるやうになつてきたと云ふことは、理論の黨派性が顯著になつてきたためであつて、各社會層の把持する要求が互に調和し難い矛盾を示すやうになり、社會理論が、各社會層の立場に於て、互に矛盾的に構成され、しかもこれを綜合するためのより大きな立場からの理論が在り得ないと云ふことである。例へばマルキシズムは科學の階級性を主張する。これに反してフッシズムは、科學の綜合性を主張するかのやうに見えるけれども、實際はさうではなく、ただ科學の民族性を主張してゐるにすぎない。マルキシズムが新興の階級理論の優越性を主張するのと、フッシズムが優勝民族理論の支配性を強調してゐる差異があるだけで、何れも理論の社會關係性を認める點に於て違ひはない。かやうな理論の社會關係性、それは思惟の存在性であり、思惟のイデオロギー性を認めるものであつて、これが今日一般の科學方法論又

は知識論に於る新しい傾向である。かやうな立場で科學方法論を樹立しようとする新しい試圖が生れてゐる。知識社會學(Wissenschaftssoziologie)がそれである。知識社會學のうちにも種々の傾向があるけれども、右のやうな立場に立つてゐる點では、同じである。知識社會學における特に著しい對立的な傾向は、文化社會學(Kultursoziologie)と、現實社會學(Wirklichkeitssoziologie)とである。前者は社會的實體を共同的精神(Gemeinschaftlicher Geist)に求め、後者はそれを社會的現實(Soziale Wirklichkeit)の上に求める。前者に觀念化的傾向があり、後者に唯物化的傾向がある。したがつて前者にフッサシヤ化的傾向が認められ、後者にマルキシズム的傾向が認められる。とくに前者は現象學的方法(Phänomenologie)を採用してゐて、いまだ充分にカント的思惟方式を脱却しきつてゐるとは云へない。例へばテオドル・リント(Theodor Litt, 1880- )や、それを祖述するスメント(Rudolf Sment, 1882- )のインテグレーション(Integration, 等制)の理論に立つ國家論のトキキは、これに屬してゐる(Verfassung und Verfassungsrecht, 1928)。これに對して後者は、ディルタイ(Dilthey)の生命の哲學(Lebensphilosophie)の、とくに實證的發展の方向を代表するものとして、ハンス・フライヘル(Hans Freyer, 1887- )の國家理論、例へば『國家論(Der Staat, 1925)』や『右翼の革命』(Revolutions von rechts, 1931)などによく現はれてゐる。とくに社會科學をイデオロギー性に於て問題としたものとして注目すべきものは、パンハイム(Karl Mannheim, 1903- )であつた。彼の『イデオロギーとソートロジー』(Ideologie und Utopie, I. u. II. Aufl, 1930)は、



ケルゼン 後者を對象とする法則科學(Kausalwissenschaft)とに似た。前者はいかにあるべきか(Sein-sollen)を研究し、後者はいかにあるか(Sein)を研究する。前者は法律形式の問題を考究しようとする法理論に屬し、後者は社會生活的實體を觀察しようとする社會的科學に屬する。イエリネツクはかやうに異つた二つの立場から、社會及び國家を眺めようとした。したがつて常に價值批判の問題と因果法則の問題とが、分離隔絶されて、何らの連絡をも持ち得ない。價值批判に對しては法則關係が没交渉であり、法則關係は、また社會生活の領域に於ても沒價值的に發生するものとされてゐる。そのために價值批判が社會性と歴史性

とを持ち得ないで、それは平面的靜的形式的に流れ、また法則そのものも單に機械的分析的なものとなり、何ら發展性の含まれてゐないものとならざるを得ない。理想と現實との隔絶がそこから起り、理論と實踐との矛盾がそこに存在せざるを得ない。實體のない形式主義の法律理論と、實踐性の缺けた政治理論とがあるばかりである。特にイエリネツクに於ては、政治學(Politik)は技術(Kunst)であつて科學(Wissenschaft)ではない。政治學は國家原理を實踐するための應用的技術であるとされてゐる。かやうに法則と價值との中間領域たる政治作用が、科學的意義を喪つたのは偶然ではない。

しかるにケルゼン(Hans Kelsen, 1881-)の企圖は、寧ろイエリネツクの方法二元論を救はんがために、カント的な價值的一元論に還つてゆくことであつた。カント主義の特徴は、價值批判の先驗的自由を確立したことであり、社會に對する個人の先在性を確立したことであつた。したがつて價值批判の法則性や、個人生活の社會性を説くことは、そのこと自體矛盾であつた。故にケルゼンがカント主義者として價值的個人主義的單一主義の立場に還つて往つたことは、その限りでは正しかつた。しかしそれは決して方法二元論發生の源泉に外ならなかつた價值と法則との相對性について、問題を何ら正しく解決したものではなかつた。むしろそれは却つて問題を深めたものであり、同時にそれは現代に於る思惟形式の一般的要求に、逆行する發展でしかなかつたのだから、それはむしろ現代に於るカント主義そのもの、危機を、益々深刻ならしめたものに外ならなかつた。その著『法理的及び社會學的方法の限界』(Ueber Grenzen zwischen juristischer und soziologischer Methode, 1911)

社會學的にフライエルよりも發展性を認めることができる。

B カント的方法 カント的思惟方式が、問題の類上にのぼせられてゐるが、科學方法論に於て最も問題化されてゐる點は、その方法二元論(Syncretismus)である。その意味で近代に於るカント主義的政治學を代表するものは、

イエリネツク(Georg Jellinek, 1851-1911)である。彼は名著『一般國法学』(Allgemeine Staatslehre, 1900)に於て社會科學の對象たる人間の社會生活を、自律的な意思に基く作用と、他律的な力の支配の下に動く作用との二つに分け、前者を對象とする規範科學(Normwissenschaft)と、後者を對象とする法則科學(Kausalwissenschaft)とにした。前者はいかにあるべきか(Sein-sollen)を研究し、後者はいかにあるか(Sein)を研究する。前者は法律形式の問題を考究しようとする法理論に屬し、後者は社會生活的實體を觀察しようとする社會的科學に屬する。イエリネツクはかやうに異つた二つの立場から、社會及び國家を眺めようとした。したがつて常に價值批判の問題と因果法則の問題とが、分離隔絶されて、何らの連絡をも持ち得ない。價值批判に對しては法則關係が没交渉であり、法則關係は、また社會生活の領域に於ても沒價值的に發生するものとされてゐる。そのために價值批判が社會性と歴史性

や『一般國國家論』(Allgemeine Staatslehre, 1925)などは、かやうな彼の純粹法學(Reine Rechtswissenschaft)の立場を最もよく示してゐる。それはイエリネツクの法則科學を拋棄して、規範科學のみをとりあげたものであつた。すなはちこれらの書中でケルゼンは、いかにあるかの問題と、いかにあるべきかの問題とを峻別し、イエリネツクが、法律學や政治學にとつて、この二つの問題は、共に必要であることを主張したのに反し、ケルゼンは、いかにあるかの研究が社會學であつて、いかにあるべきかの研究が法律學であると、法律學を全く法則科學に對立するものとなし、規範科學に外ならないものとなした。したがつて彼の法律學は、全く社會學から切離された形式的價值批判の學となつてしまつた。かやうにそれは、イエリネツクのカント的方法論をもつと徹底せしめたものに外ならなかつたのである。

イエリネツクに於てすでに、政治學(Politik)は應用的技術の學とされ、原理的な國國家論(Staatslehre)に附隨的なものとされたのであつたが、イエリネツクの法則科學の方向をより發展せしめ、社會學的にカント主義を基礎づけようとしたマックス・ウェーベル(Max Weber, 1864-1920)に於て、やゝ政治學的方法的發展を見ることのできた。それは彼の『職業としての政治』(Politik als Beruf, I. Aufl. 1919, II. Aufl. 1926)であるけれども、そこで彼は政治が官職的營利行爲(Amterpatronage)となつてきたことを明にしてゐるのであつて、すでにカント主義的な政治の正統主義的説明から一步脱却し、政治の現實性を把握したところがあるけれども、その見地はやはり理性主義であり、個人主義であり、心理的であつた。

しかるにケルゼンに至れば、再び政治學は技術の學とされ、科學とは認められなくなつた。それは彼の『民主主義の本質と價值』(Wesen und Wert der Demokratie, I. Aufl. 1920, II. Aufl. 1929)、『議會主義の問題』(Das Problem des Parlamentarismus, 1925)及び『社會主義と國家』(Sozialismus und Staat, Eine Untersuchung der politischen Theorie des Marxismus, I. Aufl. 1920, II. Aufl. 1923)その他の政治的論文のうちで、屢々彼が科學的認識(Wissenschaftlicher Erkenntnis)と政治的價值批判(Politische Werturteil)とを對立せしめ、政治的判斷は或る目的を達成するための手段に關する技術の考究であつて、決して科學的認識に屬すべきものでないと云つてゐることによつて知られる。カント主義が政治の科學的認識に於て失敗したことは、これで明であつて、それは偶然なことではなく、カント主義の認識論では、當然のことである。何故當然であるかは、云ふまでもなく、政治は行爲であり、動態であるにも拘らず、カント主義には動的行動態を把握する方法がなく、靜的固定的平面的分析及び綜合のみがあるに止まるからである。

C 政治學の方法 法則と價值、存在と當爲、社會と個人などをカント主義のごとく隔絶的に分裂させてしまつては、恰も肉體を持たない抽象的な人間や、榮養の補給を必要としないロボットを考へるやうなものであつて、社會的現實の姿は既に見られないのである。それでは社會學や法律學も亦すてに正しく見られてはゐないのであり、政治學のやうな、最も活動的な現象を把握することは到底出來ないのである。そこでこゝに必要なことは、法則と價值、存在と當爲、社會と個人との不離的交渉關係を基礎として政治を把握しな

ればならないことである。すなはち法律、道德、慣習のごとき價值規範が、いかに社會の歴史的存在性を反映するものであるか、またわれわれの思惟がいかにわれわれの社會的存在そのものゝ表現に外ならないか、そして個人的立場がいかに社會的立場に外ならないものであるかと云ふことを、先づ私共の政治的研究の出発點とする。そこから生ずるものは、思想や理論のイデオロギー性であつて、私共にとつては、ただいかなるイデオロギーを選むかと云ふ問題でなしに、むしろ一つのイデオロギーをとつても自己の立場であらしめるために、私共がいかなる社會生活を生きるべきであるか、と云ふ問題である。政治學は、さう云ふ私共の政治的な社會的態度を決定するための理論に外ならない。しかし政治學は單に思惟のイデオロギー性を明にすることに止まるのではなしに、いかなる社會的存在關係が、いかなる勢力内容を持ち、またいかなる發展性と頽廢性を包含してゐるかを明にすることによつて、私共がすべての社會生活を發展的に指導して行くことと云ふことであり、とくにそれが政治問題について問題にされることである。

政治現象が發展的に把握されるためには、政治現象が社會的集團關係に於て觀られるだけではないに、むしろ各種の社會的集團相互の矛盾的結合として觀られる必要がある。自由なる個々人の契約的結合や、單純な個人的目的の一致などで、社會的集團關係を説明することが、いかに事實からかけ離れてゐるかは、多く云ふ必要はあるまい。社會的集團はむしろ生活上の必要から起り、しかもそれぞれ結合が、必ずしも契約的一致をもつものでなしに、むしろ社會的勢力の支配であり、生活の質的量的不等による依存關係にもとづく

ものであり、しかもこれらの必然的依存が、必ずしも矛盾を含まない完成的統一でなしに、むしろ強制的な集團生活に外ならないと云ふことであつて、そこに各種の生活的矛盾が含まれてゐると云ふことは、私共が社會生活的事實を直視すれば、すぐ明になることである。故に社會的集團には内にも外にも種々の對立と争闘とが存在せざるを得ないのであるが、この對立争闘があればこそ、これらの集團が活躍したり、發展したりすることができる。完全に一體化されたものは、結晶體のやうに美はしくはあつても、それは永久に死せる固體として同じ姿をつづけなければならぬ。行動もなければ、變化もない。政治現象はむしろ不斷に新しい行動であり、新しい態様であり、何事かを社會に作り出す勢力作用として存在してゐる。したがつてそれを把握し得るところの方法は、在るところの政治過程の社會的存在關係と、その實質的勢力とを明にすることによつて、政治的動向と政治的歸向とを知り、政治的現實に對處すべき態度を決定せしめるものでなくてはならない。

## 二 政治概念の問題

A 政治の近代的概念 政治の近代的概念は、むしろ政治の否定的概念である。ウォレス(William Kay Wallace)の『政治の終焉』(The Passing of Politics, 1924)は政治の近代的概念を最もよく示してゐる。彼によれば「政治は戦争と同じやうな勢力獲得のための闘争であり、政治は個人又は一般の意思の目的又は計畫を實現せんがための手段である。」(一五頁)と云ひ、ただ政治は戦争とは異なる手段を用ひ、外交的な平和的手段を以てその目的を達しようとする。したがつて政治は次第に戦争的手段を退けて、今日では科學的

經濟的技術をなるべく用ゐるやうになつてきたのであつて、この傾向からすれば政治は、全くその勢力的闘争手段を喪失するやうになり、遂には政治としての本質的なものをも失ふに至ると云ふのである。かやうな政治觀は近代の自由民主主義的概念を代表するものであつて、政治的支配否認の意味を内包する。

かやうな政治概念を他の側から見たのがカール・シュミット(Carl Schmitt, 1888—)の『中立化及び非政治化の時代』(Das Zeitalter der Neutralisierungen und Entpolitischen, 1929)である。彼は政治概念の四つの發展段階をあげ、(一)神學的な領域を追ひ出し、(二)形而上學的領域を分離し、(三)道德的領域を分離し、(四)經濟的領域を分離し、かくてあらゆる領域が政治から分離されてきたため、今日の政治は最早全く支配すべき自己の領域を持たなくなつてしまつた。宗教の自由、思想の自由、精神の自由、及び經濟に於る放任主義などの確立された現代の政治には、政治的固有領域として、果して何が残つてゐるのであるか。シュミットはナチスの理論家として、かやうな非政治化や政治の中立化に反對し、政治が信仰や世界觀や科學や經濟生活をも指導しなくてはならないと主張するのである。(Der Begriff des Politischen, 『政治的なるもの』、概念』参照)。

かやうに近代的政治概念の特徴は、あくまで政治を中立化しようとすること、非支配化しようとするのであつて、結局政治的でないことであつたが、今日ではむしろ反對に、政治に對して再び社會の全面的支配を認めようとしてゐるのである。近代主義の崩壊と新しい政治概念の發生が、かやうに必要とされてゐる。

D 國家と政治 政治を國家の現象とすることは、これまで最も一般に認められてきたところであつたが、政治を國家から別に規定しようとする主張が起つてあつた。かやうな傾向を助長したものは多元的國家論 (Pluralistic theory of the State) であつた。G. D. H. Cole, 1889—) の『國家に於る労働』(Labour in the Commonwealth, 1918) や H. K. キ (Harold John Laski, 1893—) の『政治學要綱』(Grammar of Politics, 1925) などがその代表的なものであり、團體の構成員の一致せるその團體の共同目的を達成する機能が政治であるとする。この概念は一面に政治を非支配的なものとしようとする民主的の自由主義の立場に立つものであつて、先述の政治中立化、非政治化の代表的なるものである。



ラスキ

かやうな立場が今日最早政治的事實と一致しないことは、先に説明した通りであつて、政治は益々支配を強化しようとする傾向にある、かやうな政治概念は今日ではすでに顧みられなくなつた。けれども今日では別の立場から、政治概念を國家概念と切離して規定しようとする要求が強く起つてゐる。それは國家が現代では或る轉向期に置かれ、現存の形態を保存することよりも、新しい發展的な形態が待望されてゐるために、むしろ國家の發展性が説明せられねばならぬのであるが、そのためにはむしろ國家を創造するため

の、より基本的な原理が要請される。それは政治である。國家があつて後政治が在るのでなしに、むしろ政治があつて後初めて國家がある。國家は政治的原理によつて作り出された効果である。故に國家は決して静的なものでも固定的なものでもないであつて、不斷の政治的作用によつて新しく創造され、且つ活動しつゝあるところの秩序たるにすぎない。かやうな立場で先づ政治を國家に先存的なものとして認めることにより、國家の指導原理としての政治の本質を決定しようとする要求が、今日とみに高まつた。

すてにトリーベル (Heinrich Triebel, 1898—) が『國法學と政治學』(Staatsrecht und Politik, 1928) のうちで、國法學を政治學の基礎の上に確立する必要を述べたのであるが、ケルロイテル (Theodor Otto Koellreutter 1883—) の『一般國家論原理』(Grundriss der Allgemeinen Staatslehre, 1933) の巻頭に於て「國民の現在の政治的生活形態として」、國家を認識すべきことを主張してをり、またヘルマン (Hermann Heller, 1891—1933) もその『國家論』(Staat und Lehre, 1934) のうちで、國家原論を政治學の一分科とし、政治學を一つの科學として、樹立すべき必要を主張し、政治學は政治科學 (Politische Wissenschaft) であり、それは政治學 (Politikologie) と稱せらるべきであると云つてゐる。

國家論の側からかやうに政治學の先存性が主張されるやうになつたと同時に、政治そのものの概念を國家概念から離して自主的に確立せねばならない必要が生じてきた。ケルロイテルが、政治の本質は公的な共同社會 (Gemeinschaft) に於る結合そのもの、うちに見出されると云つてゐることは (上出書)、いまだ近代的政治概念を指導してそこに統一組織を作り出すのであるが、その組織が法であり、且つその組織は不斷に新しく作られてゆき、その勢力關係は不斷に新しく指導されてゆく。これが政治である。

C 法と強制力 政治的統一のためにはそこに法が存在し、法が行はれるためにはそこに強制力が必要である。しかしこの法を規範的價值となし、強制力を事實的勢力となすことは、最初に述べたやうに、方法二元論に陥るものである。事實上兩要素は何れも無視することができないけれどもこの二つの要素の本質と關係とが、いかに説明せられるべきであるかと云ふところに問題がある。

この兩要素を互に本質的に、また發生的に、別のものとするところに誤謬がひそんでゐる。法は當然強制力を含んで行はれるべき管轄のものである。それと同時にこの強制力は法と結びついてのみ存在しなければならぬ。かやうな法と力との共同の源泉は、これを何處に求むべきであるかと云へば、それは人類の集團的社會生活そのものに求むべきである。人類が集團生活を営むときに、そこには必ず統一組織が必要であり、しかもその統一組織は、單純に、また自由に、作り出されるものではなしに、いかなる集團生活であつても、またその集團の形式がいかなるものであつても、集團生活は常にそのうちに存在する勢力關係の歸向によつて動き、勢力關係によつて規定される。例へば契約的に構成された組合に於て、その組織と活動とが、形式的にはいかに合議的に構成されてゐるとしても、そこでは構成員の意見が決して平等の力を持つてはなしに、むしろ最も勢力ある意見が、他の意見を支配するのである。従つてその集團生活が絶対に平等なる生活關係から成立してゐない限り、決して

ら脱却してゐないものであり、ヘルレルが權力の組織と權力の分立と權力の獲得のうちに政治を見出し得べきものとしてゐるのも、いまだ述べて盡さないものがある (上出書)。シュミットが國家の最高の要素を力や法よりも、むしろ人的決斷 (Entscheidung) に求め、これを決斷主義 (Decisionismus) と呼んでをり、同時に政治は「友敵關係によつて構成された關係」(die durch das Freund-Feind-Verhältnis konstituierte Beziehung) であると云つてゐることも、甚だ特色ある説明であつて、そこにファシズム獨裁の政治概念を見ることができるのである (前出書)。そこで政治が一つの對立的抗争として、辯證法的に把握されてゐることは、確に特徴であるけれども、人的決斷に政治的決定を求めたところに、そのファシヨ的要素が含まれてゐる。

政治を決定するものも亦個人でなしに社會關係であり、社會勢力であること云ふ視野から、考へられていかなければ正しくない。マルキシズムに於て、政治權力が階級權力であるとせられたことは、事實を正しく把握してゐるけれども、階級は對立であり、分裂抗争であるに反し、政治は内に對立抗争を含むところの支配的綜合であり強權的統一である。一つの階級が他の階級を支配することによつて、これを自己の勢力下に統一することである。この統一の内部には當然支配に抗争する對立勢力が含まれてゐるけれども、抗争の勢力よりも支配的勢力の方が勢力的に優勢なために、そこに政治權力が存在し得る。故に私共はむしろ政治を次の如く定義すべきであると思ふ。「優勝的社會勢力的支配關係の法統一的組織化的創造過程」である。それは社會の諸勢力の抗争に於て、優勝なるものが自らこれ

て團體の決議は公平に行はれるものではない。民主主義者は普通、投票権さへ平等であれば、平等な決議がなされると考へてゐるのであるが、それは大なる誤りである。更に政治的集團のやうに必然的存在をもつものにあつては、その活動は常に構成員の意思の多數決や一致によつて決せられるものではなしに、むしろその共同生活に於る生活の不平等關係によつて決定されてゐるのである。そこに階級的對立があれば、それは當然その集團の動きに反映する。政治的集團のうちの最も著しい勢力の對立關係は階級であるが、その他にも種々の對立や矛盾が含まれてゐて、各種の勢力關係が作り出されてゐる。その勢力關係によつて生活の集團性が指導せられてゐる。そこから統一組織と組織的權力とが生れ、政治權力と法律秩序とが作り出されてゐる。故に政治權力と法律秩序とは、各種の矛盾と對立とを含む共同生活の統一の支配作用として生れ出たものに外ならない。それらは本來一つのものゝ二つの側にすぎないものであつて、別々のものではない。それであるが故に、法は力を持ち、この力は法に依據せざるを得ない内容を持つてゐるのである。

三 政治形態の問題

A 法治主義の問題 近代的政治原理としての法治主義は、人に對する支配を退けて、より合理的な法の支配を確立した。政治の最高の支配者は人てなしに法であること云ふことである。換言すれば國家主權の本質は最高の人的地位てなしに、自主的な國法秩序であると云ふことである。これを法治主義と云ふ。しかしこの近代の法治主義の原理には、根本的に法の本質の問題が結びついてゐる。すなはちそこでは法が理性主義 (rationalism) に於て考へられて

實體的な内容に改造しようとするものにすぎないが、シュミットの主張は、法治主義と結合してゐる自由主義を打破して、ファッショ的な獨裁的統制主義の政治原理を樹立しようとするものである。

B 議會主義の問題

法治主義の保障は議會主義である。國民の政治的自由 (political liberty) たる参政權を認めることなしに、國民の法律的自由 (civil liberty) を保障することはできない。故に議會主義は法治主義と並んで、近代の政治原理となつたものであるから、法治主義の動搖と共に、議會主義も亦動搖するやうになつた。議會主義 (parliamentarism) は、本來、等族議會 (Grafen- und Herrenrat) から發達したものであつて、君主が人民に對する租稅賦課について人民の承認を求めるとを主たる目的とした。しかしそれが民主主義的意義を持つやうになり、人民の政治參與や、民權の保障と云ふ新しい職能を持つやうになつて、初めて近代的議會制度が確立した。しかし官僚主義 (bureaucracy) から政黨政治 (Parteienstaat) へ發達し、議會主義が確立せられるにつれ、ここに議會の職能に對する第三の變化が發生した。それは議會が民意を代表せず、また民權を保障しないのみでなく、更に國家の財政に對する國民的監督權すら充分に行使することをなせず、却つて國民の一般的利益の犠牲に於て、階級的利益に奉仕するための機能となつてきたと云ふことである。かやうな議會の質的變化は、社會の構成的變化のためであつて、政治的支配の階級的勢力が高まつてきたためであることは云ふまでもない。

C 獨裁政治の問題

獨裁政治は屢々誤解されてゐるが、何時でも政治形態轉換の過渡期には現はれてくる。主權的獨裁と委任的獨

るることである。こゝに云はれる法主權と云ふことは、理性主義的な法の支配と云ふ意味であつて、理性すなはちラチオ (Ratio) の支配と云ふことを意味してゐる。しかしこのラチオと稱する第十八世紀的觀念に、今日では疑問が存する。法は果して理性的な創作物であるかと云ふにさうではないからである。理性的にただ創作された法は、法としての效力を持つことがなく、直に行はれ得るものでない。もとより法は、人の考と行とによつて、存在するものであるが、その背後に一つの法を必要とする社會生活がないならば、法は決して實踐的に成り立たない。法が社會生活の規定として、生活そのものゝうちに生れてくればこそ、法は行はれなければならないのである。したがつて法は、契約のやうに自由に作られるものでなしに、永い社會生活の傳統を荷ひ、廣く社會相そのものを反映し、生活様式をそのまゝに表現する不斷の生きた社會關係そのものとして現存する。さう云ふ意味の法なればこそ、それは何よりも支配的であらねばならぬ。今日かやうな意味で法治主義の原理に質的な變化が要求されてゐる。それがヘルレルの「社會的法治國家」(Sozialrechtsstaat) の主張であり (Hermann Heller: Rechtsstaat oder Diktatur? 1930)、ケルロイテルの「民族的法治國家」(National-Rechtsstaat) の理論であり (Koenig: Der nationale Rechtsstaat, 1932)、更にシュタットの「法治國家より法律國家へ」(Vom Rechtsstaat zum Gesetzstaat) の主張である。玆に遂に、法治主義の否定論に發展してきてゐるのである。ヘルレルやケルロイテルの主張するところは、理性主義的な法治主義を上述のごとく、或は社會主義的な意味に於てか、或は民族主義的な意味に於てか、も少し

裁とがあつて、前者は非合法的に樹立され、後者は合法的に樹立される。例へばムッソリーニ、ヒットレルのファッシズム獨裁や、サヴェーロトのプロレタリア獨裁のごときは主權的なものであり、現に各國憲法の上で認められてゐる財政上の緊急處分、緊急命令 (Notdekret, Dekret-Verordnungen)、戒嚴令、兵馬非常大權などがそれであつて、一九三四年六月ルーズベルト米國大統領に與へられた獨裁權や、一九三五年六月ラヴァル佛國內閣に與へられた緊急勅令發布權などは、みなこの委任的獨裁政治の實例である。それは既成法律を超えて行はれる獨裁者の暫定的專制政治であるが、常に特別非常の意味を持ち、從つて暫定的な意味で行はれ、單に過渡的なものにすぎない政治形態である。獨裁政治が今日問題とされることは、また政治が今や轉向期に立つてゐることを示してゐる。(今中大聲)

生の哲學

(英) philosophy of life, 獨 Lebensphilosophie, 佛 philosophie de la vie

- 一 現代に於ける生の哲學
  - 二 生の哲學の諸相
  - 三 生の哲學の三つの系譜
  - 四 生の哲學の現代的意義とその運命
- 一 現代に於ける生の哲學 あらゆる哲學は、哲學たる限り生の哲學の契機を含んでゐる。この意味に於て哲學はすべて本來生の哲學であり、またあらねばならぬと云ふ見方がある。しかし、私達がかゝつて取扱はうとする「生の哲學」はかゝる意味に於けるそれでは



ない。それはあくまで現代に於ける哲學の一潮流としての「生の哲學」についてである。

生の哲學が、現代哲學に於ける一潮流、しかも極めて有力な一潮流をなしてゐることについては多くの學者の指摘するところである。例へば、「二十世紀に於けるドイツ哲學」の著者ライゼガング (Hans Rehgang, 1920) は、現代ドイツ哲學に於ける主要傾向について語り、三つの傾向を擧げてゐる。一は、傳統の理性哲學の精神を受けつゞ、嚴密な意味に於ける最高の學を建設せんとするもの、二は、二十世紀の初頭から殊に有力となつてきた生の哲學 (Lebensphilosophie)、三は、一と二の傾向を綜合せんとする文化哲學 (Kulturphilosophie) である。また、「二十世紀の哲學の主要潮流」に於て、ニコルル＝フライエンフェルズ (Richard Müller-Freim-feld, 1932) は「學の哲學」(Wissenschaftsphilosophie) に対して「生の哲學」(Lebensphilosophie) について語つてゐる。この様に、生の哲學が現代哲學に於て有力な一潮流であることは多くの學者の指摘するところであり、また現實的にも否定すべからざる事實である。従つて、新カント派のリックルト (Heinrich Rickert, 1888) の如く、生の哲學を單なる流行概念 (Modebegriff) として頭から罵言を投げかけることは、事實を歪曲するものであり、あるものを無きものゝ如く云ふとの批難を受けるであらう。と云つてまた、「生の哲學者」ジンメル (Georg Simmel, 1858-1918) の如く、今日世界の哲學的解釋に於いて生の概念が支配的な地位を占めてゐると語ることによつて、ともすれば、生の哲學をもつて現代哲學を一色に塗りこめようとすることも亦ゆき過ぎと云はねばならぬであらう。

かを明らかにせねばならぬ。

生の哲學は、「生」(Leben, vie, life) の概念が多義的なため、それぞれのニュウンスの異なるに應じて從來種々意味されて來た。大體次の如きものがある。

一、處生哲學、人生哲學、生活哲學。これらの用語は嚴密な意味に於てニュウンスの異なるものがあるが、人生觀確立のために、正しき生活のために、哲學的認識が通俗化され、「生活の技術」として、日常生活への應用が企てられてゐる。ギリシヤ末期の哲學、東洋哲學に於ける通俗的形態、或はプラグマティズム pragmatism に現はれたる「生の哲學のアメリカ的形態」に於て見出すものである。

二、生活力としての哲學 (Die Philosophie als Lebensmacht)。これはフォルケルト (Johannes Volkelt, 1848-1930) の哲學として有名である。即ち、哲學を、科學的確實性の他に、特に人格的確實性を要求し、單なる論理的知的要求に止まらず、情意的要求即ち私達の道德的宗教的若しくは美的要求をも充すべきものとして意味するものである。

らう。生の哲學に對してまた次の如く云ふ學者もある。即ち生の哲學は、決して現代に於ける特殊現象ではなく、そのエスプリに於て、平板な現實主義に對する一層深い理想主義の反抗である。それは、中世紀に於けるトマス・アクィナス派に對するアウグスチヌス派の神祕主義、古代ギリシヤに於けるアリストテレス學派に對するプラトン學派、更に溯つてニーチェ的表現を借りれば、アポロ的文化に對するディオニソスの文化の如く、生の哲學の精神は、世界文化を二分する一方の代表者である。しかし、かゝる解釋も亦現代生の哲學に對する正しき解釋として受けとれないであらう。然らば、生の哲學は、現代哲學に於いて如何なる地位を占めるものであるか、如何なる地位づけが最も妥當であるか。このことを明らかにすることが本稿のテーマである。このことをなすためには、その精神的乃至文化的的意義が如何なるものであるかを問題にすることが必要である。

二 生の哲學の諸相 まづ、生の哲學とは何であるかを問ふことから初めよう。生の哲學 philosophy of life or life philosophy, Lebensphilosophie, philosophie de la vie は、從來「人生の哲學」、「生活の哲學」、「生命の哲學」、「生の哲學」、等々譯されてゐたが、現今に於ては、「生の哲學」の譯語が最も一般的に用ひられる様になつた。このことは生の哲學が、從來の種々なる夾雜物を整理して、ある一點を中心にして凝結し、一定方向をたどりつゝあることを示すに他ならない。それ故に、この中心、方向を探ぐることは、現代哲學の一潮流としての生の哲學の概念を明らかにすることになる。で、私達は、從來生の哲學が如何なる意味に解されつゝ、現今用ひられてゐる如き「生の哲學」にまで立ち至つた

本源的活動的創造的なる形而上學的生命即ち精神生活の實在を認め所謂文化價值を論理的要請に止めず、實生活(文化の歴史的具體的過程)に實現せんとする哲學的努力を意味してゐる。

次に、私達は、生物學の生の哲學に對する役割に注意しなければならぬ。これは、リックルトが「現代流行の生の哲學は、直觀主義的契機と生物學的契機との混交をその特色としてゐる」と述べてゐること、また、「現代生の哲學の父母」ニーチェ (Friedrich Nietzsche, 1844-1900) とヘルクソン (Henri Bergson, 1859) とに對するダーウィン (Charles Darwin, 1809-1882) や スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) 等の生物學的生命的把握が影響を與へてゐることを想ふとき、生物學的生命的の哲學の一傾向を無視してはならぬ。即ち、



四、ドリーント (Hans Driesch, 1867) の生命哲學。これは新生説 (Neovitalismus) の立場に立つものである。有機體の哲學 (Philosophie des Organischen) である。

を借りれば、生の充溢からの哲學(Keine Philosophie aus der Fülle des Erlebens des Lebens heraus)にある。現代の生の哲學の本流は彼等に於て見出される。即ち、

五、彼等は「生ける生」(Lebendiges Leben)の把握を企圖する。彼等によれば、本来の生はエラン・ヴィタール(Elan vital)である。絶えず新たな内容を創造しゆく創造的活動である。そしてこの「生」を把握するためには、「生に即して生を把える」方法即ち直観、理解等々、概念や理論的ならざる方法が採られねばならぬとなしてゐる。彼等は、「凝結し、固定した生」、「死せる生」、「生きた生」(celestes Leben)は本来の生ではないとしてゐる。生を特殊な意味に於て解釋し、直接的な實在としての生を重要視する。そして、その方法に於て直観的方法、非合理主義的なものが採られてゐる點に、彼等の哲學の特色が見出される。現代生の哲學の本流の特色もまたこゝにある。

以上は、ニーチェからベルグソン、ディルタイ、ジンメル等に共通的な特色であるが、併し彼等はその對象に於て、方法に於て詳細な點にまで完全に一致するものではない。今それらの差異を中心として見るとき、彼等は全體三つの群に分たれ得る様に見える。

一、ニーチェ、ベルグソンによつて代表される群  
二、ディルタイ、ジンメルによつて代表される群  
三、ハイデッゲル、ヤスベルス、シェーレル等によつて代表される群

一に於ては、あくまで生ける生、エラン・ヴィタールの把握に終始せんとするに對して、二に於ては「生」を歴史として把握する。歴史は生の表現である(ディルタイ)となし、生の形式(Forme)或は形成

的競争、弱肉強食、萬人競争の社會のシンボルであらう。従つて、ベシミズムの色彩で掩はれざるを得なくなる。この意志論が、悲劇の哲學者ニーチェに受けつがれ、權力への意志(Wille zur Macht)となり、超人(Uebermensch)の理念と發展して來た。若きニーチェのショウベンハウエルへの思慕はあまりにも有名である。私達は、彼に於いて生の哲學が如何なる姿を採つてゐるかを見なければならぬ。



ニーチェは從來種々に解釋され、種々なる方向に影響をあたへてゐる。しかしこゝでは主として、生の徹底的肯定者としての彼の歡喜の讚美者としての彼を見ることにする。シェーレルは、彼に於てはじめて、「生」(Leben)と云ふ言葉は深い意味が與へられたと云

つてゐる。事實、彼ほど激情的に生について語つたものは少い。しかし彼の語つた生は種々に解釋されてゐる。だが彼の生は單なる生物學的自然科學的概念ではなくして、創造的なもの、或るデモニッシュなものとして、いはば歴史的自然として把へられてゐる。アポロンの對するディオニソスのものとして把へられてゐる。「距離への情熱」——一切のものが遠くにある、凍える空に突き立つ山頂に於ける孤獨の人——かゝる場合に於ても「生」に對して「ヤア」と云ふ。生は、彼にあつては、一切の快樂、一切の苦痛と一緒に肯定

物(Gebilde ジンメル)が重要な對象とされてゐる。この場合に於ては、谷川徹三氏の指摘する如く、體驗としての生「の役割がイに比して小さくなつてゐる。ところで、ハに於ては、現實的存在としての生の把握を核心としてゐることは勿論であるけれども、イ、ロに於て、ともすれば無體系がちなものを體系化せんとしてゐる。現實的存在としての生、實存を宇宙に於て、歴史に於て、自然に於て尋ねてゐる。それ故に彼等の哲學が、哲學的人間學(Alle philosophische Anthropologie)又は實存の哲學とも云はれてゐる。

以上で、ごく大體ではあるが、「生の哲學」の諸概念をたづね、現代哲學の一潮流としての生の哲學が何處にその本流があるかを明らかにした。然らば、その本流は何處より流れ來り、何處へ向ふものであるか。次にこのことを問はねばならぬ。

三 生の哲學の三つの系譜 現代に於ける生の哲學は直接にはドイツ觀念論の哲學の否定に源泉してゐる。即ち、生の哲學は、その對象に於て本来の生を問題にし、その方法に於て直観主義、非合理的方法を採つてゐる。この生の哲學の特色をなしてゐる方法と對象は、ドイツ觀念論哲學のアンチテゼとして誕生したものである。ヘーゲル(G. W. F. Hegel, 1770—1831)の理性の哲學、homosapiensの否定である。私達は、ヘーゲル哲學のアンチテゼとしてのショウベンハウエル(Arthur Schopenhauer, 1789—1860)の非合理主義の意志哲學に於て、現代生の哲學の源流を見出すであらう。彼の「内なる意志 Wille」、それは「全自然の最も奥深い本質」である。たゞ「生きんとする盲目的意志」、この意志は飽くなき衝動である。充たされざる無限の渴望にあえぐ意志、それは無政府

さるべきである。「運命の愛(Amor fati)である。かくて、生の概念は、單に「存在への意志」(Wille zum Dasein)ではなく、「權力への意志」(Wille zur Macht)となり、超人(Uebermensch)の理念と結びつく。しかもこの場合「未來」の概念が最も鮮かに導入された點に於て、彼の生概念は特異なものである。

彼の生の哲學は何ら體系的なものを備へてゐなかつた。しかし、現代の生の哲學は、多く彼の影響の下に決定的になつてゐる。ところで、彼を生を哲學の母と云へば父はフランスのベルグソンである。彼の哲學は、直観的方法、反主知主義、純粹持續(Puree pure)又は内部持續(duree interne)、生の躍進(Elan vital)、創造的進化(Evolution creative)等の言葉によつてシンボライズされてゐる。彼に於て「生」(vie)は如何に取扱はれてゐるか。彼は、スペンサーの機械的進化論を退けて、「創造的進化」を説くことによつて、「生」の概念を深め、新しい光の下にもちきたらした。「生」は根本に於て創造であり、發明であり、自發であり、自由である。「生の進化の前には未來の扉は一杯に開け放たれてゐる」。「生」はかくて、エラン・ヴィタールである。彼は「生」を榴彈の破片の總體とも喩へてゐる。

——ところで、かゝる「生」は如何にして把へられるか。彼は認知の限界を論じて、直観的方法によつてのみこゝに迫り得ると説く。生そのものの中に入り、生そのものを理解し把握する——直観のみがこれをよくする。かくて、彼の生の哲學は直観の哲學である。シェーレルは、彼があらゆる近代的思想の根本的方向とは相反する一つの新しい方向に人間態度を向けしめた點に、彼の眞の偉大さがあると云つてゐるが、これは彼の直観主義、反主知主義的方向なのであ

る。事實、彼は、ニーチェと共に生の哲學の父母として大きな影響をあたへてゐる。近代生の哲學は彼等によつて決定的地位と方向があたへられた。ところで、彼等にあつては、「生ける生」があまりにも魅力的であつた。生の躍動に身をまかせすぎてゐる様に思はれた。彼の生の哲學が「體驗としての哲學」と規定される、所以である。しかし、彼等の影響の下にあるジンメル(G. Simmel, 1838—1918)、**ディルタイ**(W. Dilthey, 1833—1911)等に至ると生の哲學の姿が稍々異つてくる。前二者を第一期とすれば、後二者は第二期とも云はるべき區別が見出され得る。その區別の標は、前者は體驗としての生の哲學に對して、後者は客觀化された體驗とも云はるべきものを重んじてゐることである。前者に於て輕視された「生きた生」が再生し、歴史、文化などが重んじられてきてゐる。「生を自身から理解する」(das Leben aus ihm selber verstehen)——これがディルタイの生の哲學の核心であらう。しかもこれが彼の歴史的研究に於て實現されてゐるのである。彼の立場が心理學的より解釋學的へ、そして現象學的的存在論的のものへ接近して行つたすべての場合を通じて生の哲學的衝動が脈打つてゐたのである。現代生の哲學に於けるディルタイの地位は周知のことである。ジンメルは生の哲學者の中にあつて最も知性的であるとされてゐる。しかし、知性的であるが故にまたよく「**理知**」の限界を知つてゐた。彼はディルタイと共にドイツ觀念論の教養が深い。そして、彼は多面的な學者であつた。その彼が生哲學者としての全貌を現はしてきたのは比較的後半期——ジンメル研究者の區別に従へば第三期(最後期)であつた。彼自身の生の哲學を現はす以前に於ける彼の多くの

生の哲學者(ショウベンハウエル、ニーチェ、ベルグソン等)に對する研究を想ひ見るべし。彼に於ける「生」は、生物學的、心理主義的なものではなく、一層深められた或は一層高次のいはゞ形而上學的なものである。それは意識をも精神をもイデーをも即ちあらゆる文化的形成物をもつゝみ込み、そこから生み出す態の生である。彼に於ては、生の本質は不斷の流動と自己超越にある。「生の超越性」(die Transzendenz des Lebens)と「イデーへの轉向」(Wendung zur Idee)である。文化の悲劇、生の悲劇は、彼に於てよく語られてゐる。ところで、ディルタイ、ジンメル等以後の生の哲學は別な姿を呈しはじめた。所謂第二期に對して第三期とも云はるべき、即ち**ヤスベルス**(K. Jaspers, 1833—)、**ハイデッゲル**(M. Heidegger, 1889—)等によつて代表される、**實存の哲學**及び**シエーレル**などの哲學的人間學である。實存即ち現實的存在の意味は人間存在に於て最もよく現はれてゐる。人間の存在を問ふことが實存の哲學の重要な課題である。この點、「宇宙に於ける人間の地位」を探ぐる哲學的人間學と相通するものがある。勿論、嚴密な意味に於ては兩者は區別されるべきである。前者は實存によつて存在一般への通路を求めらるに對して、後者は専ら人間の本質を問ふことに終始するからであるが、とにかく、實存の哲學に於て「生」の概念、「生」の間ひ方がこの様な方向に動いてきてゐる點に第三期の特色がある。この第三期に於て、ニーチェの影響が、わけてもハイデッゲルに對して著しくあたへてゐるのを見逃してはならぬ。ハイデッゲルの最近の「大學論」に於て、ニーチェの説いた、運命の愛と超人のミストスが脈打つてゐるのを見てもこのことがわかる。またヤスベルスの豫言者的哲學も亦ニー

チェのそれと相通するものを見るであらう。

以上が第三期の概括である。いはゞ第一期に於ては生が生のまゝ、自ら主張するに對して、第二期に於ては、生が自らの所産を顧み、第三期に於ては生が再び問ひ直され體系化の途をたどつてゐる。以上が、現代生の哲學の大體の姿である。で、要約的に次に系譜してみよう。

第一期 ヘーゲルのアンチテーゼとしてのショウベンハウエルの意志哲學をうけつぎ發展せしめたニーチェ、フランスに於けるベルグソン、ニーチェの影響下にあるクラーク等々。  
第二期 ディルタイ、ジンメル、シュベンゲル(O. Spengler, 1880—1936)。

第三期 ヤスベルス、ハイデッゲル、哲學的人間學者の群。  
以上に於て、素描的に生の哲學が何處より流れ來り現在に至つたかを見てみた。然らば何處に流れゆくのであるか。私達は、次にこのことを生の哲學の現代的意義を問ひつゝ、明らかにしなければならぬ。

四 生の哲學の現代的意義とその運命 生の哲學の存在理由は、現代文化の批判にある。機械文明、理性主義、自然科学主義に對する批判にある。彼等が直觀主義、非合理主義を説くのはこのためである。このことは、理性の哲學ヘーゲルに對難したショウベンハウエルに於てすでに見出し得るが、その顯著なるものは現代生の哲學の父母と云はれてゐる**ニーチェ**と**ベルグソン**に於て見出す。ニーチェが現代實証主義的産業文明を罵り、**理知(科學)**をもつて「生」の全部を律しようとするのは、生を矮小化し、生そのものを破壊し去

るものと説いたこと、そして超人の哲學を説き、すべての價値の轉換を説いたことは周知の通りである。ベルグソンも亦近代自然科学主義の世界觀に對して決定的な批判を下してゐる(さきのシエーレルの批評にもある通り)。彼等がかく現代文化に對して批判の矢を向けるのは、「生」そのものが現代文化の立つてゐる自然科学主義、理性主義に壓迫され、その躍動を無視されてゐるからである。理知的な唯物論、唯心論の彼岸のものを目指し、また抽象的な理想主義に不満を覺えたのも、そしてまた形式主義の「學の哲學」に反抗したのもそのためである。この意味に於て生の哲學は**ロマンティズム**と通ずるものがある。抒情的な點、直觀的な點、非合理的な點など共通のものがある。殊に一般に云はるゝ如く、**ロマンティズム**は社會の轉換期に現はるゝ一つの態度であるとするれば、**ロマンティズム**と通ずる生の哲學がブルジョア文化の末期に現はれ、現代文化の批判として現はれたと云ふことは故なきではない。この意味に於て生の哲學を**新ロマンティズム**とすることは承認すべきものがある。(谷川徹三氏の如き、また**トレルチ E. Troeltsch, 1833—1933**はベルグソンの哲學を實証主義的新ロマンティズムとなしてゐる。また**三木清**氏はニーチェを悲劇的**ロマンティケル**と規定されてゐる)。新ロマンティズムとしての生の哲學は、**舊ロマンティズム**が消極的、回避的なに比して積極的、能動的なる點、現實的で實踐的な點に於て區別されるべきであらう。しかし、果して、**新ロマンティズム**の批判がよく現代文化を止揚し得る能力があるであらうか。かゝる生の哲學に對してどの點まで期待し得るであらうか。このために**マルキシズム**と**フアンシズム**に對決

してみよう。  
 生の哲學は、ヘーゲル哲學に反對して成立したことは既に述べたところである。ところが、マルキシズムも亦「**フアイエルバッハ**」(Eisenbach, 1804-1823)を通じてヘーゲル哲學のアンチテーゼとして成立した。この意味に於ては兩者は同じものがある。そしてまた兩者は現代文化に對して等しく批判者として立ち現はれてゐる。しかし、否定の仕方が異つてゐる。ヘーゲル哲學に對しては、生の哲學は理性の哲學を否定するに對して、マルキシズムは理性哲學を生かして、唯物辯證法につき進んでゐる。その結果生の哲學が現代文化に對して非合理的な意志やディオニソスの情熱を説くに對してマルキシズムは社會的經濟的根柢を突いてゐる。従つて、マルキシズムに比して觀想的ならざるを得ない。この點からのみしても生の哲學が現代文化批判として如何なる地位を持つかを見採り得るであらう。

然らばファシズムに對しては如何。ベルグソンとソレル (E. Moréas, 1847-1922)、ソレルの後裔の一人としてのムツソリニ (E. Muzolini, 1883- )、ニーチェの軍國主義との結びつき、あらゆる價値の轉換を企圖する高貴性の道徳の理念の下に平等的個人主義を排し超人の理念を説くニーチェの哲學が英雄支配のファシズムと結びつくこと、ハイデッゲルがニーチェを講へつゝファシズムに轉向したことなど想ひおこせば、ファシズムと生の哲學とのつながりは想像以上に密なるものがあらう。

以上の如きファシズム、マルキシズムに對する生の哲學の態度によつて、彼等の現代的意義及びその將來性は大略見當がついてあらう。

う。

次に見なければならぬのは生の哲學が第三期に於て今や本來の生の哲學ならぬものに轉換せんとする傾向が現れてゐることである。従来、生の哲學に對する批難はその無體系化にあつた。否定的面、破壊的面のみ強調することは建設を無視することである。あまりにも「學の哲學」に對する反抗は、つひに生の哲學をして、断片的性格に終らしめた。ところで、理性と概念に對する偏憎、直観と體験に對する偏愛は、つひに彼等をして自己矛盾に陥らしめた。といふのは、學は學たる限り體系化を要求する。生の哲學もそれが學たる限り然り。ところで生の哲學は無體系のところに特色があつた。従つて、生の哲學は自繩自縛の境にたゞづまざるを得なくなつてゐる。しかし、生の哲學の第三期に於ては、生の哲學の體系化が企圖されてゐる。ハイデッゲル、ヤスベルスなどの實存の哲學に於てこのことを見出すであらう。それとともに初期の如き生の奔流、激情がいまやその姿を没せんとしつゝある。生の哲學は生の哲學ならぬものに變換せんとしつゝある。

一方マルキシズムに對難し、他方ファシズムと結びつきつゝ、いまや生の哲學は生の哲學ならぬものに變換しようとしてゐる。生の哲學がかゝる運命を負はざるを得なかつた理由の一つは、彼等に於て「生」が個人的なものとして體験され、把握されたのみで、何ら社會的歴史的に把握されなかつた點にある。このことはまた、「身體性」の無視ともなつてゐる。個體的生の獨立的存在の確證、このことは結局に於て社會的歴史的生の把握となるであらう。いはゞ、彼等があまりにもパトスのなもの、把握に急にしてロゴスの面を見逃

がし、兩者の辯證法的把握が企圖されなかつたことに由来する。彼等に於ては、主體の客體化と客體の主體化との辯證法的把握が無視されてゐた。こゝに私達は、生の哲學が現代文化の批判として立ち現れたとは云へ、本來的にはブルジョア的個人主義のある種の表現であつたことを見出すであらう。かくてまた生の哲學がブルジョア哲學としての理性哲學に對して決定的な批判をなし得ず、彼自身その生を終焉に曝さざるを得ない運命を持つてゐるのである。生の哲學それ自らの姿としてはその將來性は多幸なりとは云ひ得ないであらう。

参考文献(主として引用したもの)――

イ、一般的の部

- H. Leisegang: Deutsche Philosophie im XX. Jahrhundert, 1928. R. Müller-Freienfels: Die Philosophie des 20. Jahrhunderts in ihren Hauptströmungen. H. Rickert: Die Philosophie des Lebens. F. Heinenmann: Neue Wege der Philosophie. P. Leersch: Lebensphilosophie der Gegenwart. E. Troeltsch: Gesammelte Schriften, III (Der Historismus und seine Probleme). B. Groethuisen: Philosophische Anthropologie. Landberg: Philosophie Anthropologie. 理想・生の哲學號(三五號)、人間學號(五五號) 谷川徹三、生の哲學(岩波講座哲學) 三木清、現代思潮(岩波講座世界思潮) 勝部謙造、現代哲學の根本問題 岩波哲學辭典「生の哲學」の項。

ロ、生の哲學者の部

セイノテツガク

- II. Bergson: L'évolution créatrice, 1907. W. Dilthey: Gesamm. Schr. K. Katsube; W. Dilthey's Methode der Lebensphilosophie, 1931. H. Driesch: Mannichtheorie des Lebens, 1896. H. Driesch: Philosophie des Organischen, 1909. R. Eucken: Der Kampf um einen geistigen Lebensinhalt, 1896. R. Eucken: Der Sinn und Wert des Lebens, 1908. R. Eucken: Einführung in eine Philosophie des Geisteslebens, 1908. M. Heidegger: Sein und Zeit, 1926. M. Heidegger: Die Selbstbehauptung der deutschen Universität, 1933. K. Jaspers: Psychologie der Weltanschauungen, 1919. K. Jaspers: Philosophie, 3 Bde. 1931. L. Klages: Der Geist als Widersacher der Seele, 2 Bde. 1929. F. Nietzsche: Werke. 三木清、ニーチェ(岩波講座世界思潮) 同、ニーチェと現代思想(經濟往來第十卷第四號)。

- M. Scheler: Versuch einer Philosophie des Lebens, (vom Umsturz der Werte, II. Bt. 1919). M. Scheler: Die Stellung des Menschen im Kosmos, 1928. G. Simmel: Der Fragmentcharakter des Lebens, Logos VI. Hft. 1. 1916. G. Simmel: Der Konflikt der modernen Kultur, 1918. G. Simmel Schopenhauer und Nietzsche, 3 Aufl. 1923. G. Simmel Lebensanschauungen, 2 Aufl. 1922. G. Simmel: „Henri Bergson“ in „Zur Philosophie der Kunst“ 1922. O. Spengler: Der Untergang des Abendlandes, Umriss einer

Morphologie der Weltgeschichte, 2 Bde. 1918—1922. O. Spengler: Der Mensch und die Technik, Beiträge zu einer Philosophie des Lebens, 1931. A. Schopenhauer: Die Welt als Wille und Vorstellung, 1819. 以上の文献は主として本稿の引用に關係せしもの。尙ほ理想・生の哲學號所載の生の哲學の文献目録参照。(大道安次郎)

### 生物學 (biology, 眞 Biologie, 眞 biologie)

生物學の定義 生物に關する科學を生物學と名づく。生物とは大部分膠質状態を呈する實在的對象にして、一、外界との間に不斷の物質交換あるにも拘らず比較的一定の形態を保有し(新陳代謝)、二、適當なる條件の下に於て自ら同じ形質を有する對象を形成する(生殖)。生物がこゝに述べた如き特性を永久に失ふことを死といふ。生物を形成する物質即ち生活物質を原形質(Protoplasm)と名づく。

有機物質と生活物質 有機物質(Organische Stoffe)とは曾ての日、生物體によりてのみ形成せらるゝと信じられた化學的物質である。但し化學はヴェーラーによる尿素の合成以來かゝる物質はいづれも生物體の助けなくして造り得ることを示した。即ち無機物質と對立する有機物質なるものは存在せず、もし現今にても有機なる語を用ふるとせばそれは歴史的興味に基くか又は便宜の爲である。生活物質(Organisierte Stoffe)とは上に掲げたる生命の特性を現

す如くに結合せられたる化學的物質の集團をいふ。即ち生物學的單位である。換言すれば原形質とは一定の化學的物質の名稱でなく、特殊の模式に結合せられたる諸化學的物質の集團の名稱である。

生物學の分類 生物學は時間に關係なき廣義の分類學と時間に關係する因果的生物学とに分けられる。廣義の分類學は與へられたる形態を單に與へられたるものとして比較しそれを種・屬の關係によつて一つの系統に纏め上げる。分類學・純粹形態學がこれに屬する。因果的生物学は歴史的生物学と法則的生物学とに分けられる。歴史的生物学は主として化石を研究しそれより生物が過去に辿り來れる道程を探明せんとする。系統發生學がこれに屬する。この學より見れば分類學の與へる系統は生物過去の歴史によつて規定せられる。因果的生物学は主として實驗的方法により現在の生物の行動を研究しその結果を法則の形に纏め上げる。生理學・發生力學・遺傳學等がこれに屬する。以上の分類は多少とも人為的であり、實際の研究はそのいづれをも少しづつ含むことが多い。

細胞説 生物體の最少單位を細胞(Celle)と名づく。細胞は通常一個の核とそれを包む細胞質とより成り、植物に於ては更にその周圍に、これらを圍む細胞膜を有する。現今に於ては高等なる生物(多細胞生物)が多數の細胞より構成せられて居ることは明白なる事實であり、かゝる意味に於ける限り細胞説の正當さを疑ふものは一人もない。問題は然らばかゝる多細胞生物の現す諸種の形質は残りなく細胞の現す形質に還元なし得るや否やといふ點に存する。この問題は要素と全體との關係に關する點に於て生命論の論争にも比せられる。十九世紀末葉に於ては還元なし得るといふ風に考へられた。フ

ルヴォルンの細胞生理學説・フィルヒョーの細胞病理學説はかゝる傾向の代表者と見られる。但し今世紀に入りてより發生學・遺傳學等の研究の進歩はかゝる細胞總和説の非なることを一つ一つ明かにした。現今の我等の考へを述べれば次の如くなる。多細胞生物は多くの細胞の集合よりなるが、そこでは個々の細胞の行動ではなく生物全體として始めて生ずる超細胞的な行動が指導原理となつて居る。

個體發生の問題 すべての生物は發生の頭初には一個の細胞(生殖細胞)である。然らばかゝる簡單なる細胞より如何にして複雑なる成體が生ずるか。この問題に對し古來對立する二個の學説がある。第一は前成説(Präformationstheorie)で、成體の構造はそのまゝ生殖細胞中に既存すると解く。この説に従へば發生とは單に小さなものが大きくなり、腫まれたるものが展がることに過ぎぬ。第二は後成説(Epigeneistheorie)で成體の構造は比較的一様なる生殖細胞より漸次形成せらるゝと説く。この論争は久しき間卓上にて闘はされたが、近來實驗發生學が勃興するに及び實際的に解決することが出来るやうになつた。初期發生・再生等に關する實驗的研究の結果によれば從來考へられたる如き前成説は實際の發生には當嵌らぬ。例へば海膽卵が分裂して二細胞又は四細胞となつたときにそれを個々の細胞に分離すると、各細胞が一個の幼蟲となり、結局一個體を生ず可かりし卵から二個體又は四個體が生ずる。發生にしてもし前成説の説く如くならば、かゝる際には當然幼蟲の二分の一又は四分の一に相當するものが生ぜねばならぬ。但しこゝに注意す可きは前成説の要素全く無して済ますわけにはゆかぬことである。何となれば分離されたる細胞より生ずる幼蟲はあくまで海膽幼蟲であり他の

動物の例へば海星の幼蟲ではない。即ち海膽卵の中には海膽卵を海星卵より區別せしむるものとして何等かの構造が前成されて居らなければならぬ。かゝるが故に近來は我々は「動的前成説」(dynamische Präformationstheorie)といふことを唱へ出した。この説によれば卵中には一種の構造が既存するが、かゝる構造は決して從來の前成説(靜的前成説)の如く成體の構造を卵に投射したる如きものとしてではなく、後に成體の形成を可能ならしむる如き條件として存する。即ち成體の構造そのものは發生中に形成せられる。

系統發生の問題 我々が現今見る如き多種、多様なる生物相は如何にして生じたか。これに對しても兩つの説がある。第一の「種不變説」によれば生物の種は永久不變であり、従つて最初生物が生じた時に既に現今と同数の種が存したと説く。この説の有名な代表者はリンネである。第二の「種變化説」によれば複雑なる種は簡單なる種より漸次進化し來れるものなりと説く。この説の有名な代表者はダーウィン(Charles Darwin, 1809—82)である。現今の生物學者の殆んど全部が第二の説(「生物進化説」)を採用して居ることはこゝで述べるまでもない。

生物進化なる根本原理を認むるならば當然こゝに二つの問題が起る。一つは進化は如何なる徑路を辿つたか(系統樹の問題)、他は如何なる原因がかゝる徑路を辿らしめたか(進化要因の問題)。系統樹は實在的な類縁關係を現す可きもの故議論の餘地はないが、進化要因となる説が一致しない。ダーウィニズムは自然淘汰を要因なりとし、ラマルキズムは用・不用を要因なりとする。

先づ系統樹を見よう。系統樹とは生物全體の歴史を現す可きもの、

換言すれば「かく進化せし」を示すものにして「かく進化せしと考ふることを得」を示すものではない。従つて實際問題としては化石の研究が重要な役割を演ず可きである。然るに従来の系統樹は往往にして——否非常に屢々——次の如き方法によつて打建てられた。ある一群の生物を似よりの程度によつて比較し、より似よれるものは類縁的にもより近きものとし、それを基礎にして一つの系統を立てる。而してかゝる系統を以て直ちにその一群の系統樹（歴史）なりとする。併しこゝに大いなる誤りがある。何となれば歴史的關係（實在的關係）は似よりの程度による類縁關係（觀念的關係）とは別個のものであり、而して前者は後者を規定するも後者は前者を必ずしも規定せぬからである。卑近なる例をとれば兄弟は似て居るが、似て居る二人の者が必ずしも兄弟ではない。なほかゝる系統樹が歴史にならぬことは次の事實よりも知られる。生物を似よりの程度によつて分類する際には屢々ある一定の器官だけを標準にせねばならぬ必要にせまられることがある。例へば鯨では歯の特殊化と後肢の退化とが相關的に變化して居らぬ爲歯を標準にして得られた甲の學者の系統樹と肢を標準にして得られた乙の學者の系統樹とは全然別個のものとなつて居る。もしかゝる系統樹を歴史と看做せば、鯨は二つの歴史を有するといふ不合理に到達する。もし一群の生物の諸器官が相關的に變化して居る場合にはいづれの器官を標準にするも大體似合へる系統樹を得るであらう。事實化石學者アールベルの如きはかゝる系統樹だけは當てになるといつて居るが、併しかゝる系統樹の歴史に對する關係は上述鯨の系統樹の歴史に對する關係と理論的には異らぬ筈である。

従来の多くの系統樹はかくの如く歴史ならざるものを以て歴史なりとせるものが多い。これは當然に心ある生物學者の不信を買ひ、果ては有名なデュ・ボア・レイモン (Du Bois-Reymond, 1818—90) をして「英雄の系圖と生物の系統樹位當てならぬものはない」といはしむるに至つた。事實生物學者中に於けるダーウィニズムの不信は大部分かゝる不正なる系統樹の跋扈に歸せしむ可きであらう。但し一部の學者の如く系統樹の多くが誤りなりといつて進化思想そのものを否定せんとするのは理論的に誤つて居る。何となれば系統樹は進化思想を前提とするが、進化思想は系統樹には拘束されぬからである。吾人の務めはむしろかゝる誤れる系統樹を排し進んで正しき系統樹を打建てることにならねばならぬ。

次にラマルキズムの用・不用説の説くところを見るに、個體生活中に用ひらるゝ器官はよく發達しそれが子孫に傳はる。従つて幾代も重ねて同じ器官を用ふる内には、段々とその器官のよく發達せる——即ち生活により有効なる——形態が生ずると。個體發生中に用ひられる器官が發達することこれは疑ひない。例へば鎌を取る腕が太り、車を挽いて走る脚が太くなる如きものである。但し個體生活中に獲得された形質が子孫に遺傳するや否やこゝに問題がある。現今の生物學者の大多數は獲得形質の遺傳を否定する故、かゝる遺傳を前提とするラマルキズムをも否定し去るのである。

次にダーウィニズムの自然淘汰説を見よう。生物は非常に澤山の子孫を生ずる（繁殖）。それら子孫は互ひに全く等しい（變異）。故に生存競争場裡にあつては、生活條件により適して居るもの（適者）が適して居らぬものに打勝つて生残る。換言すれば適者

が淘汰される。用・不用説が獲得形質の遺傳を前提とする如く、自然淘汰説は獲得形質の遺傳を前提とする。何となれば獲得形質が遺傳せられなければ淘汰は一代限りで終り、従つて各代同じことを繰返すに過ぎぬこととなるからである。然るに遺傳學研究の結果は獲得形質の遺傳を否定する。然らば自然淘汰説をも否定し去る可きであらうか。こゝに突然變異が登場する。突然變異とは文字通り突然に起り子孫に遺傳する、變異である。そこで新しいダーウィニストは獲得形質の代りに突然變異を置くことにより自然淘汰説を救助せんとする。かゝる説に従つて生物進化を觀れば次の如くなる。生物には突然變異が起る。かゝる變異にはその生物の生活により有利なものもあらうし、より不利なものもあらう。もし有利なる場合にはそれに自然淘汰の原理が作用して保存される。進化はかゝる有利なる突然變異の集積によつて起される。

先に突然變異とは文字通り突然に起ると述べたが、これは曾ての日かく信じられたといふに過ぎぬ。極めて最近の研究によれば吾人はX線・熱等の作用により突然變異の出現を左右し得ることが判つた。いはば突然が段々と突然でなくなりかけて居るのである。これは極めて重大なる意義を有する。何となれば外界とは全く無關係に純内發的にしか起らぬと考へられた遺傳可能の變異（突然變異）が外界の影響下に立つことが判つたからである。これは將來外界の影響を重視するラマルキズムが再びとり上げられ、突然變異を根柢とする新ダーウィニズムと何等かの形で綜合せられるのではあるまいかと想像せしむる。

生命論の問題 生命論といへば從來機械論・生氣論の對立が考へ

られて来たが、最近に至りこの兩者に對する第三者として全體論なるものが唱へられて来た。自身の立場以外に立つものをすべて生氣論なる一語で蔽はんとする機械論者は全體論をも生氣論の一種なりといふが、實は從來の生氣論とは全然軌を異にするものである。

機械論 (Mechanicismus) はその發祥比較的新しく、その隆盛を致した原因としては哲學上ではカント哲學、科學上ではマイエル (Julius Robert von Mayer, 1814—78) のエネルギー不滅の法則・ヴェーレル以來の有機化合物合成・ダーウィンの進化論の出現を挙げることが出来る。十九世紀後半に隆盛を極めたいはゆる自然科学的唯物論の生物學に現れたる姿であり、その根本思想は原子論である。同じく機械論とはいへその流派流派に従つて説くところ必ずしも一致せぬが、大體に於て次の如くである。生物體は物理・化學的要素の總和故、生物體の現す法則性も物理・化學的以外のものではない。もし生物の現す法則性は一見物理・化學的に説明なし得ぬ如きものありとせば、それは現今の我等の知識の不完全さに起因するものであつて、何時の日か必ず物理・化學的に説明なし得べしと論ずる。

これに對するものが生氣論 (Vitalismus) であるが、生氣論をば必ずしも機械論に對する反動學説とのみ考へてはならぬ。例へばアリストテレスのとれる生命論は生氣論であつて、これは生氣論が生命現象、就中生物發生現象の觀察によつて自ら觀者の心の中に湧き来る思想なることを示して居る。生氣論によれば生物體の現す法則性は明かに無生物の法則性とは異なる故、一、それを構成する要素が無生物とは異なる特殊生物的のものであるか（生命物質説 Lebenskraft-

theorie)、二、要素は無生物と異らぬが特殊生物的な力が存するか(生命力説 Lebenskrafttheorie)、三、或ひは特殊な目的論的原理が作用して居らなければならぬ(新生氣論 Neovitalismus)とする。現今の我等の知識によれば生物と無生物とを構成する要素の間には何等本質的な相違なき故、生命物質説の如きは現今では始めより問題とするに當らぬ。現今でもなほ執拗にその存在を主張するドリーシュの生氣論の如きは新生氣論に屬する。

この論争をよく見るといづれも徳和的な考へ方に立脚する。換言すれば生物をばそれを構成する要素の徳和なりと假定する點に於ては兩者その軌を一にする。我等はこゝでかゝる假定そのものが正當なりや否やを論ぜねばならぬ。もし徳和がこの世界に於ける要素集合様式の唯一のものならば、生物をその要素の徳和と考へるは當然であり、従つて機械論・生氣論の論争も意義を有する。若し之に反し徳和以外の要素集合様式も可能なりとせば、要素の現す法則性と異つた新しい法則性を全體が現したとて差支へないこととなる。より具體的にいへば、要素が物理・化學的法則性を示すからとて必ずしも全體たる生物が物理・化學的法則性を示してはならぬこともなく、逆に全體たる生物が特殊生物的法則性を示すからとて必ずしもそれを構成する要素が物理・化學的以上のものたることを要しない。即ち機械論・生氣論の對立はその意義を失ふ。全體論 (Einheitstheorie) とはかゝる全體的立場に立つ生命論である。なほ全體論は英語で全體論 (Organicism) と呼ばれることもある。全體論も決して忽然と生物學に現れたものでなく、最近に於ける一般的風潮の生物學に於ける現れに過ぎぬ。かゝる一般的風潮とは

體系哲學と世界觀哲學との差異を示すものと思はれる。

カント自らの哲學についても、従來は主として前者の立場からのみ解釋され來つてゐたが、後の立場からはおのづから別個な理解が成立し得るだらうといはれてゐる。カントはこの世界市民的意義における哲學の分野は次の問ひに要約されると述べてゐる――

- 一、私が何を知り得るか。 Was kann ich wissen?
- 二、私は何を爲すべきか。 Was soll ich tun?
- 三、私が何を望み得べきか。 Was darf ich hoffen?
- 四、人間とは何か。 Was ist der Mensch?

第一の問に答へるものは形而上學であり、第二は道德、第三は宗教、そして第四は人間學が答へる。そして最初の三つの問は最後のものに連らなり、それに歸すると考へてゐる。論理學講義と略々時を同じうして公にされた『實際論的立場よりする人間學』(Anthropologie in pragmatischer Hinsicht)の序文にはかういふ句がある。「人間がそれを通じて學業を修めるところの教化 Kultur における進歩とは全て、かく獲得された知識と技能とを、世界のために使用に供するといふ目的をもつてゐる。しかし人間が世界のうちでそれらを適用し得る最も重要な對象は人間である、蓋しそれこそ彼自らの窮極の目的であるから。従つて人間をその本性上理性を具へた地上の存在者として認識することは、特に世界知 Weltkenntnis と呼ばれるに値ひする、たとへ人間は地上の被造物のたゞ一部を成すに過ぎなくとも」。かくみてくるとカントによれば、世界哲學、世界知といふものは、人間が人間自身を對象とし、而も人間のためにする哲學であり、認識であることにならう。そして人間は自然物としても

全體主義・集團主義である。論理學・物理學・心理學・社會學等の最近の傾向を窺ふならば、それがいづれも全體主義に基けるものなることが判るであらう。生物學の全體論は生物が物質進化の途上の一階梯に現れた全體なることを主張する。従つてそこにはそれより下の階梯たる物理・化學的全體の示す法則性とは自ら異つた新しい法則性が存することを認める。これは何も生物には物理・化學的法則性が當嵌らぬことを意味するのではない。物理・化學的要素より成立つ以上勿論當嵌るが、全體としては全體としての新しい法則性が指導原理になつて居ることを意味するのである。(丘英通)

### 世界觀 (獨 Weltanschauung)

カント (Immanuel Kant, 1724—1804) は哲學の概念を分つて、Schulbegriff と Weltbegriff とに類別した。これを敢て意譯すれば、講壇の概念および世間の概念とも稱し得よう。カントの言葉を用ひすればかうである。「哲學は哲學的認識または概念よりする理性認識である。それはこの學の講壇概念である。世間概念では in seculo coenatio (他の個所では「世界市民的意味」ともいつてゐる) 哲學は人間理性の窮極目的の學である。この高い概念が哲學に尊嚴を、即ち絶対價值を與へる。そして事實それだけが内的價值をもち、他の一切の認識に初めて價值を與へるものである(論理學講義、カッセル版全集第八卷三四二頁以下、田邊重三氏邦譯あり)。この講壇哲學と世間哲學または市民哲學の區別は、とりも直さず、

扱ふことができるが、これは生理學的人間論の問題であつて、カントの考へようとするのはさうではなく、自由に行動する存在としての人間である。彼が特に「實際論的立場よりする」と斷る所以である、即ち人間の「自己みづから爲すこと、爲し得ること、爲すべきことに關する」。

「人間に訴ふる論證法」 Demonstratio ad hominem は、形式論理學の教科書では普通、虚偽の「つ」として擧げられてゐる。しかしこれはマルクス (Karl Marx, 1818—83) が指摘したやうに、知識が物質的力を獲得する條件とも考へられるのである。人間の存在、その自由なる實存を無視した哲學は、如何に精緻にして華麗な體裁を具へてゐても、人間にとつて何らの役にもたゝないであらう。哲學はヘーゲル (Georg Wilh. Friedr. Hegel, 1770—1831) によつて文化の惘然と崩壊期に發生するやうに述べられてゐるが、それでもギリシヤの初期に於ては、自然哲學は醫術と、倫理學は立法の術と雖して考へられなかつたといはれてゐるやうに、哲人の面影といへば偉大なる立法者が思ひ浮べられるのが常であつた。教師といふやうな觀念が哲學と結びついたのは恐らくソフィスト以來であらう。今まで優れた人格者として崇敬の的であつたのが、一個の知識の供給者、助言者に過ぎなくなつた。知識が金で賣買できるものとなつた。この教師たちの組たてたのがいはゆる「解釋哲學」である。世界をさまざまに解釋する哲學である。時代の要求、社會の要望をはなれて、純粹に思辨するならば如何なる解釋も可能であらう。そこでは何らの現實的抵抗も感じられないであらう、思惟の公理に逆らふことは全て成立するだらう。これに對するものは世界の革新に關心

する哲學である。これは體系としてそれ自身の深遠と完備とを誇るのではなく、人々の意識に滲透してその動向を決定する觀念的武器、いはゆるイデオロギーとして作用することが目指される。レーニン(Vladimir Ilyich Ulyanov, 1870-1924)が哲學をイデオロギーとしての外、理解しなかつたのは、そのためであつたらう。世界觀哲學は世界解釋の哲學ではなく、世界を何らか革新することを意圖する哲學である。

かつてシェウベンハウエル(Arthur Schopenhauer, 1788-1800)は口を極めて教授哲學者を罵倒したが、今日アカデミーの學風に對するものはジャーナリズムである。アカデミーといふ名稱はいふまでもなく、プラトン(Platon, 427-347 B.C.)がその地をトとしてその學舎を建てたアテネ郊外の名稱に發してゐる。プラトンの師ソクラテス(Sokrates, 470頃-399 B.C.)は、まだ限られた子弟をもつてはゐなかつた。アテネの市民全體が誰れでも彼の問答の相手だつた。その意味で彼は哲人の傳統の具現者だつた。ところがソクラテスを處刑したアテネ市民はもはやプラトンの友ではない。いきほひプラトンの教をきかうとする者は市民と切りはなされざるを得なくなつた。たゞ、こまでもソクラテス精神の繼承者であり、その神話の完成者であるプラトンのアカデミアは未だ宗派的團體 Sokratikにはならなかつた。宗團の發生したのは、統一あるヘラスの文化が没落して、哲人が故國への關心を喪ひ、専ら宗團に屬する者のみの救済、個人的安住を念願とするに至つてである。近代の大學はスコラの學風に反抗し、教權と王權とからの獨立を標榜した進歩的機關であつた。ところが一度、對立を喪つた大學は、中世の寺院

の如く門戸を閉ざし宗團化し、専ら安逸な思索に耽ると同時に、國家權力の増大に伴つて何らかの政治的目的のために束縛され、結論は豫示され、それに副はないものは遠慮なく阻礙されるといふ現狀である。

もと教育は範型と模倣といふ原理に立つてゐた。教師を全人格的にモデルとしてそれを倣ふことであつた。その意味で教師は禮拜の對象であつた。殊にある學塾の開祖、師祖には神格が與へられた。ところが今日における大衆教育に於ては、既にかゝる人格的模倣關係は望むべくもない。むかしその領土に於て聲高らかに話し得るものは領主に限られたといはれるが、今日、教室に於てかゝる權利をもつものは教師だけである。人格交渉は薄らざるを得ない。また現在、學者といへば哲人ではなく、自然科学者が代表として思ひ浮べられるやうに、知識の全般的統率者ではなく、部分的専門知の所有者が教師と考へられる。かくて教師はもはや人格の權化でなく、知識の傳達者といふ物格に過ぎなくなる。従つて教育の原理もまたアカデミズムから反對物に轉化せざるを得ない。

ジャーナリズムは第一に眞理の超時代性、超時間性を否定する。我々が最も切實な關心をもつのは、時事問題、即ち我々の生活に對つて具體的な時間に関聯する諸問題である。それは一方に、世界歴史的である。政治、經濟等の動きを客觀的に觀察する場合がそれである。他方にそれは日常的である。市井の愛憎、勞苦、冒険、犯罪等への興味がそれである。各々の年齢、性格、職業、境遇、階級等に從つて、この客觀主觀兩方面の關心が自己のその都度の行動に關聯させられてゆく。第二に元來ジャーナリズムは報道を任務とする。

批判はその記事の選擇、排列等によつてのみなされ、益々物格的になつてゆくのが近頃の傾向である。しかし却つてそれ故にラヂオ、映畫(音畫)等と同じく、いはゆる指導者たちの風貌と見解を自由に躍らせ、人格的效果を達成する。第三にジャーナリズムによつて再び國民が即ち大衆が教化の對象となつた。大衆を以て衆愚と考へる傾向は、街頭の群集を標本とした群衆心理學に根ざす偏見であらう。

講壇的學風は評論的學風によつて初めて人間の要求に觸れるものとなる。講壇哲學は評論的哲學となつて初めて世界觀哲學となるといへよう。尤もそれは哲學時評を意味するのでも、雑駁な社會時評を指すのでもない。評論には法律からすると、經濟學からすると、政治的立場からすると、哲學からすると各々その妥當性が異らねばならない。哲學的妥當性のある評論でなくては世界觀とはならない。

各々の時代には各々の世界觀がある、各々の人にはまた各々の世界觀があるともいへるかもしれぬ。フィヒテ(John Gottl. Fichte, 1762-1814)のやうにそれを各人の性格に歸することもできよう。この難多な世界觀はどう統制さるべきであらうか。ストアから十七世紀に連なる種々な自然體系は、自然の名に於て各時代、各地域に通ずる世界觀の存立を要求した。然るに現代の歴史的意識はこれを許さない。かくして心理學的に、比較的的に、これらの世界觀について分類學が要求される。かゝる企てのうち最も著名なものはデイルタイ(Wilhelm Dilthey, 1859-1911)の試みである。彼が世界觀を(1)自然主義、(2)自由の觀念論、(3)客觀的觀念論の三大類

型に分つたのは有名である。他の見地からこれを(1)宗教的・神學的(2)審美的・科學的、(3)意志的・實踐的(デイルタイ)あるひは(1)ユダヤ・キリスト教的、(2)ギリシヤ的、(3)自然科学的(シェーレル)、更にアポロ的とディオニソス的(ニーチェ)、プラトンのとアリストテレス的等々に類別することもできよう。カール・ヤスベルス(Karl Jaspers, 1883-)も了解心理學および専門とする精神病學的な立場から主として近代世界觀の分析を行つてゐる。またリツケルト(Heinrich Rickert, 1863-)も自由主義的な中立の立場から世界觀學の必要を説いてゐる。如何なる世界觀を選ぶかは到底、學問の上だけでは定まらない。如何なる實踐を意識するかによつてのみ定められる。

参考文献——三木清、世界觀構成の理論(理想三九號、世界觀學號) W. Dilthey: Weltanschauungslehre (Ges. Schriften 8 Bd.) 船山信一、邦譯あり。  
K. Jaspers: Psychologie der Weltanschauung. (本多謙三)

### 戦争 (英 war, 獨 Krieg, 佛 guerre)

古來、主として思辨的宗教的立場から種々の戰爭論がなされて来たものの(例へばヘラクレイトス、ジョセフ・ド・メーヌストル、カント、ヘーゲル等々)、その科學的研究、特に社會科學的研究は未だ尙今後に俟つものが多いやうである。以下今日到達した限りに於



いて戦争に関する科学的實証的研究の成果を概括しよう。社会發達に於いて戦争を不可缺の要因と看做し、生物学に於ける生存競争の理論を押し擴げて人類社会の戦争を解釋しようとするものは社会ダーウィニズムの見解である。社会ダーウィニズムに依れば戦争は生存競争の一つの形態である。生物界に於いては個體間及び集團間に生存競争が行はれ、適者生存の法則の存することはダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809—1882) 以来周知の事柄に屬する。今生存競争を解して生物が自己の生命の維持と發達とのために他の生物乃至は自然現象との間に有する一切の闘争關係であるとすれば、これを分つて三つの場合を考へることが出来る。第一に同種の個體間の闘争があり、第二に變種間及び變種に屬する個體間の闘争があり、第三に異種の個體間の闘争がある。この中で生存競争の最も激烈なる場合は第一の同種の個體間の場合と第二の變種間の場合であることはダーウィンの指摘するところである。そしてこれ等の生存競争の形態にあつても最も激烈なる同種の個體間の闘争關係こそ戦争の名を以つて呼び慣はされたものであらう。即ち戦争とは動物に於いても人類に於いても同種の集團間の生命を投げ出した暴力の闘ひであると言はれるのである。これ等についてはダーウィン、ルトセルノー (Charles Letourneau, 1831—1902) などの著作を参照するのがよい。

けれどもここに問題がある。同種の動物間に於ける生存競争は常に近代人類社会に於けるやうな集團的闘争、即ち戦争の形をとるかどうか、又果して謂ふところの戦争の形をとるとしても人類社会に於ける場合と齊しく一律に究明することが出来るかどうか。先づ

動物界に於ける生存競争は必ずしも謂ふところの戦争現象となると

は限らない。生物学の教へるところに依れば、集團的闘争としての生存競争の行はれるものとしては蟻、蜂、或る種の鳥類などをあげることが出来るが、一般に個體間の闘争であつて、集團的闘争は寧ろ例外的と言ふべきである。而もかかる集團的「戦争現象」と雖も果して嚴密なる意味に於ける戦争の名稱を附すことが出来るかどうかは甚しく疑問である。後に戦争の定義を結論する際に觸れるやうに、かかる集團的生存競争は稍々發達せる社会闘争の一形態であるとしても人類社会に見られる戦争現象とは著しく類を異にするものであり、齊しく生物進化の法則を以つて十分なる解明をなし得ないことは恐らく明かであらうし、この社会ダーウィニズムに對する批判が既に様々な形態で行はれて來たことも多くの人々の知るところであらう。この點に於いて人類社会に於ける戦争と動物界の戦争現象とを區別してこの立場の見解を一步進めたものは即ち社会生物学の人々であらう。次に社会生物学の理論を概説するに先立つて、念頭に置かねばならぬことは、生物界における生存競争の第一の目的が生活手段の獲得であつて、附隨的現象として生殖目的をも伴ふとしても根柢的には右の事情に左右されてゐる。故に生存競争の一形態としての社会的闘争、特に戦争現象の説明に於いては經濟的諸原因に立ち入つて始めて本質的な把握が可能であると言へるのである。

とを力説する社会生物学説を要約しよう。この學説の代表的なるものとして何よりもグンプロヴィツチ (Indwieg Gimpłowicz, 1838—1909) の *Der Kassenkampf*, 1883; *Grundriss der Soziologie*, 1895 などに現はれた思想を見なければならぬ。グンプロヴィツチに依れば社会過程と社会進化との動因の究明は社会集團間の闘争と戦争の理論とに他ならない。而も人類社会に於ける社会集團間の闘争は必然的に人種闘争となる。では人種とは何か。人種は近代では最早なる人類學的概念ではなく、歴史的概念である。…人種は今日は歴史的過程に於いて社会の發展から生じた統一物であり、その出發點は言語、宗教、道徳、法律など一切の文化的要素の中にある、それは血の統一にまで至るのである。かかる人種の對立闘争が即ち戦争状態を招來するもので、生存競争の法則の人間社会に現はれた形態に他ならない。この最も多様な種々の異種同種の社会の統一體、集團、共同體の闘争が謂はゆる人種闘争であり、これが歴史過程の總内容を示すのである。

であり、更に少數者の他數者に對する優越の組織である。而もこの支配、被支配の關係は人種的には異種であることが特徴的である。かかる國家には二つの意味の行動が考へられる。一つは國家對國家の團體的行動であり、他は一國家内の集團行動であつて、この國家を形成する諸人種の社會的要素間の關係である。團體的行動も集團的行動も共に生存權の確保と權力の擴大を眼ざす點においては本質的に同一であるが、國際間の團體的行動に依る闘争は謂はゆる戦争の形式をとり、これは永久的に暴力に訴へるものとは考へられない。何故ならば戦争は勝利せる國家の支配者にその目的たる資源を無盡蔵に供給するものではないからである。けれども國家内の集團的行動では個々人の欲求は政治的秩序に依つて限定されてゐるが、それは普遍的傾向としては無限に平和的闘争を繼續するのである。かくて戦争及び一切の社會的闘争は自然必然的であるのみならず、それは社會の進歩にとつて決定的要因であり國家形成の根柢となつてゐるのである。吾々は彼が動物界に於ける生存競争から人類社會の社会闘争を區別してその生物学の根據を明かにした點は大いに認むべきであらうし、又、戦争及び社会闘争が必然的であり社會の進化に重大なる意義を持つことも當然のことであらう。この點ダンプロヴィツチ、ラツェンホーフェル (Ratzel, 1844—1902) 等に從ひ得ても、社会闘争と戦争とを一應區別しながら戦争を單に國際間の闘争現象とのみ規定することは尙事實の一面を捉へたに過ぎぬものといふべきであらう。戦争は近代社会に於いては以上の如く概括出来るとしても中世、古代と溯るにつれて、それが種々の形態をとつてゐることは後に説く如くである。

戦争の必然性を説くことから飛んで戦争の謳歌に趨る人々も少なくない。社会ダーウィニズムの批判者として著名なノヴィコフ(Nojkov, 1849—1912)とJantes entre sociétés humaines への見解をとつてゐると思はれるイェルザレム(Wilhelm Jerusalem, 1854—1922)の *Der Krieg im Lichte der Gesellschaftslehre*, 1915 も戦争の社会化作用を強調しつつ原始社会に於いて集團の形成に戦争が如何に重要であつたかを述べる。戦争の本質はかくて近代の個人主義と全く相容れないにも拘はらず、歐洲大戦に依つてこれらの矛盾は揚棄されて新たに國民主義の建設となつた。戦争は國民としての自覺を新にし國家の人格性を強化せしめる。戦争の社会化作用はかくて社会の發展、國家の形成になくしてはならぬ動因であると言ふ。(これに對して粗雑ながら武器と戦術の發達が社会進化の決定者であることを主張するものはロツス(Edward Alsworth Ross, 1866—)の *The Psychology of the American Sociological Society*, vol. X. に發表された *War as Determiner of Martial Determinism* を力説して、例へば中世封建社会の崩壞は全く火薬に依るものなることを指摘する。)更に戦争を極度に讚美して戦争なくしては人類の進歩は到底望むべくもないと主張するものはシュタインメッツ(Steinmetz)である。シュタインメッツは *Die Philosphie des Krieges*, 1907 に於いて戦争は人類發達に於ける原動力であり、その幾多の害悪にも拘はらず國家の全力をあげて投げ出しこれを本質的に應用せしめ、國家のために自己を投げ出すとすゝる個人の利他心を誘發する力あることを強調する。又歴史の

正義は戦争に依つて遂行され、民族の價值は戦争に依つて決定される。戦争に於いて一民族の過去から現在に至る傳統の力が擧げて傾倒されるのであるから戦争は民族の優劣を決する世界の最高の法廷であると言ふ。

以上の如く戦争の謳歌は多いが、これらに依つては戦争の科學的説明は不可能であり、ノヴィコフ以外の他の諸説は寧ろ戦争の本質を歪め蔽蔽するものと言はねばならぬ。戦争の生物學的根據に就いては多くの隱微を残しながら一應ダンプロヴィッチ等に依つて明らかにしたとするならば、進んで吾々は戦争の心理學的基礎を明かにしなければならぬ。

從來、社会心理學者に依つてなされた多くの戰爭論が社会戦争の一形態としての戦争を論ずるよりも寧ろ社会戦争一般をとりあげてゐることは社会ダーウィニズムの諸家とその軌を一にする。以下マクドローガル(William McDougall, 1871—)ギンズバーク(Morris Ginsberg)等に就いてその所説を明かにしよう。社会心理學者は戦争の基礎は闘争本能にあると言ふ。然らば、かかる闘争本能は何に依つて生ずるか。人間の闘争本能は吾々の基礎的感情たる憤怒と恐怖とに由来する。憤怒は自己の欲望を抑へるものを突き放し怒と恐怖とに由来する。憤怒は自己の欲望を抑へるもののみならず精神力にも大きな影響を與へる。憤怒を惹き起すものは他のあらゆる問題を排除して大きく膨脹されて前面にのし出てくる。そしてかかる憤怒を感じる時は吾々は瞬間的に考へ決定し行動する。吾々は自己の目的を達するため一切の反對を破壊し傷害しようとする熱情に動されるのである。憤怒に伴つて憎悪もある。憎悪は憤怒の結果

であるが、憎悪のある時は極めて容易に憤怒を招來する。闘争本能の基礎となるものは更に恐怖である。恐怖は逃避を齎し、闘争本能と一見反對のやうに見えるが、憤怒の原因たる自己の目的への障害に對する潜在的な恐怖が吾々を驅つて闘争に齎すのであるから、憤怒と恐怖とは結核に於いては同一根源から來ると思はれる。けれども闘争本能と同じくその根柢にある恐怖は常に同様な重要性を伴ふものとは限らない。それは古代社会、原始社会に溯るにつれて社会闘争の重要原因ではあつたが、文化の進歩と共に遙かに減少したと見るべきであらう。

戦争をも含めて社会闘争の心理的側面は闘争本能のみならず更に群本能からも見なければならぬ。戦争は後に明かにするやうに社会的諸要素間の集團的闘争であるが故に、その後には集團に屬する成員の連帯意識を生みだす群本能が當然豫想される。これ即ちイェルザレムの所謂社会化作用の根柢であり、シュタインメッツの所謂利他心の基礎である。かかる群本能は常に潜在してゐるが、集團的闘争に於いては最も強力に發揮され個人は異常の精力を以つて集團の利害に自己を埋没せしめるのである。故にシュタインメッツは戦争の勝利の最大條件として統一的な精神力を擧げイェルザレムは國民主義の昂揚を説く。このことはマッカーデー(MacCurdy)の *The Psychology of War* にも言及されてゐる。群本能は人類文化の發達と共に愛家心となり、愛郷心となり、愛國心となる。かかる愛家心、愛郷心、愛國心は單に本能的な群本能に加へて更に傳統的慣習、知性、同情などの心理的要素を伴つてゐるのである。これ等の諸要素特に祖國愛は戦争の原因であるよりも多くその結果であるけれど

センツウ

も極めて重要なものであることは言ふまでもない。この祖國愛と關聯して民族心があり、社会的傳統的概念としては模倣、暗示性などの動機があるが、何れも社会闘争乃至戦争の重要なモメントであることを注意しなければならぬ。さて以上に依つて社会闘争の、特に文明社会の戦争の心理學的側面を聊か明かにしたのであるが、かかる闘争本能が歴史の各時代を通じて常に同様の重要性を持つてゐるとは考へられず、近代社会に於いてはかかる本能を觸發する社会的諸要素が第一次的であることは明かであらう。集團的闘争形態としての戦争に就いては特にさうである。社会心理學者の所説はかくて多くの示唆に富むとはいひながら、それは社会闘争一般と戦争との區別を明かにし得ず、戦争の本質を把握するまでに至つてゐない。吾々は人間に集積ふこれ等の諸種の本能が如何なる自然的社会的諸條件に於いて發現されたかを究明しなければならぬのである。マクドローガルの *Introduction to Social Psychology* に於いてもマッカーデーの *The Psychology of War* に於いても或はギンズバークの *The Psychology of Society* に於いてもこのま

で究明すべき必要を痛感するのである。この意味で戦争現象に最も本質的な説明を與へたものはマルクス主義の功績であると言はねばならぬ。次にマルクス主義の理論が戦争を如何に把握するかを見ることにする。

ルトゥルノーの *L'évolution politique dans les diverses races humaines*, 1890 やモルガン(J. H. Morgan, 1818—1881)の *Anthropological Society*, 1877 などの人類學的研究は戦争の起源に極めて重要な發見を齎し、従つてその本質的把握にも優れた端緒を與へ

た。モルガンに依れば人類の石器時代、銅器時代には戦争の前身とも言ふべき形態はあつたにしても、それがかなり明確に謂はゆる戦争としての形をとつたのは青銅器時代、即ち野蕃時代 (Period of Barbarism) の中期であつた。然らばかかる意味での戦争をそれ以前に社会的闘争と區別するものは何であるか。この點を最も明かに闡明したものはマルクス主義の理論である。

マルクス主義に於いては戦争現象は人類特有のものであるのみならず人類發達史にも普遍的な現象であると言ふことが出来ない。古來原始人類の蒙昧時代から種々な形態に於ける社会的個人的闘争はあつた。それらはたとへ集團的敵對關係であり武力を用ふるものであつたとしても野蕃の中期に入つて生産手段の私有化が起らざる限り戦争の名に値するものではない。戦争に就いては本質的にはその經濟的基礎を先づ明かにしてかからねばならず、それが多くの社会闘争から峻別される所以は何よりもその生産手段の私有との不可分の關係にあり、戦争は生産手段の私有を維持し強化し擴大するための集團的武力的闘争形態に他ならないのである。クラウゼヴィッツも有名なる『戦争論』に於いて「戦争とは敵を屈服せしめて自分の意志を實現せんがために用ひられる暴力行爲である」とするのみならず、口を極めて戦争の政治性を強調せざるを得なかつたのである。「共同社会の戦争は……必ず政治上の状態に胚胎し、政治的動機に依つてのみ喚起される。故に戦争は一つの政治的行爲である」。更に「戦争は單に一つの政治的行動であるのみならず、又實に一つの政治的手段であり、政治的對外關係の一繼續である……政治的意圖は目的であつて戦争は手段である」。レーニン (Nikolai Lenin, 1870

—Ibid.) がこの武將の本能的な戦争の本質究明に絶對的な讚辭を贈つたのは故なきことではない。政治は經濟の集中的表現であり私有財産社会に於いては經濟現象は凡て生産手段の維持、強化を廻つて變動するからである。

さて戦争を以上の如く理解することは社会ダーウィニズムの見地社会心理學者の見解、民族學者の所説を駁論し且つ一歩進めて戦争現象の本質を始めて闡明したものといはねばならぬ。吾々は以下においてかかる理解の下に戦争の發生以來各時代におけるその諸形態が如何に變遷し來つたかを概観して見よう。

モルガン、ルトウルノー等の民族學者に依れば石器時代、銅器時代には今日まで發見された武器や道具から推論して個人的争闘さへも存在しなかつたといふことが出来る。即ち當時の原始社会に於いて未だ私有財産の發生を見ず、全く平和状態であつたことは又これ等蒙昧人の非戰的性質を示す多くの黄金時代の神話に依つても窺ふことができよう。ところが青銅時代に入ると家畜や貨物を掠奪する戦争の萌芽を始めて見るのであるが、それは鐵器時代に入つて私有財産の發生、階級社会の成立と共に次第に本來の意味での戦争形態をとるのである。けれども野蕃時代を通じては分取品の爲の侵略が尙一般的であつて、その後期から文明時代に入らねば私有財産と奴隷制の社会とは言へないであらう。

眞に戦争の名に値するものは文明社会に固有のものと言ふことが出来る。文明時代の歴史は又戦争と革命との歴史である。古代奴隷經濟の上に立つた都市國家の間の争ひは言ふまでもなく、封建的諸侯の間の紛争から近代國家の國際的争闘まで凡て以上の如き本質を

持つ戦争の諸形態に他ならないのである。

さて古代都市國家の濼然たる文化は土地及び奴隷の私有經濟の上に咲き誇つたのである。かかる奴隷労働の必要は他民族から捕虜を獲得することに依つて充された。従つて絶えず征服戦争が繼續され、戦争に依つて奴隷を獲ることは勿論、土地、資金、市場の確保が目的とされたのである。

中世の封建社会に於いては奴隷制が衰退して農奴がこれに代るのであるが、土地經濟が尙支配的であることは言ふまでもない。かかる社会に於ける戦争は常に土地と貨物とを目的とするものであり、封建領主はそのために鎗を倒つて相闘はざるを得なかつたのである。實は數百年に亘る諸侯間の戦争が中世史を埋めてゐるが、又その裏面には領主に對する市民乃至農奴の反抗が徐々に昂まり、土地兼併に成功せる大領主が土地と資本とを蓄積して來るべき市民社会經濟への地盤を用意するに至るやこの反抗は遂に封建社会の崩壊に導くのであつた。

併しながら戦争の重要性は市民社会に入つて最も大である。商業資本の確立から産業資本の制覇に進むにつれて自然科学の發達は所謂産業革命を招來し、機械に依る大量生産の發達は戦争の技術と規模にも驚異的な革新をもたらさざるを得なかつた。かくして戦争は人類文化の發達を刺戟すること多大なものありと言ひながら、今や人類の自滅を來す劫火となりつつある。されば市民社会に於いても戦争は不可避の煉獄である。戦争は資本の急激なる膨脹を助けるために凡ゆる市民國家の重要な實務となつたのである。商業資本から産業資本へ、更に金融資本に轉化すると共に益々戦争の

必然性は急迫して所謂帝國主義戦争の頻發となる。これらの戦争は第一に資本の發展に伴ふ市場の擴大と原料生産地の獲得のためのものであり、これを未開植民地に於いて武力的に占領することを目的とする。更に又資本主義國家の各々擁する老成なる軍備は平和の國際貿易に於いても商品の背後からこれを護衛して取引上の地位を有利ならしめる。今日の帝國主義の時代に於いては、資本そのものの國外輸出が必然的であるために戦争の危機は一層逼迫してゐる。列強は國家財政の極めて多くの部分を割いて軍事實に充當せざるを得ない現状である。軍備縮少の協定も市民社会に於ける限り無意義であると言はねばならぬであらう。又かかる激化せる帝國主義戦争自體、階級闘争と共に市民社会を否定するものであらう。

(小面孝作)

### 存在論 (Existential)

一 ギリシア以來の傳統的哲學問題である存在論が最近に至る迄暫らく人々の關心から遠ざかつてゐたことに就いては、それが遠くカントに因を發し、近くは特に新カント學派の或る人々(殊に西南

ドイツ學派)の影響に依るものであることは周知の通りである。純粹觀念論の立場をとり續けようとする人々、古くはフイヒテ (Thomas Hann Gatlisch Fichte, 1762-1814)、更にはグリーン (Thomas Hill Green, 1836-1882)、近くはリツケルト (Heinrich Rickert, 1863-)等に依れば、カントに於ける物自體の思想はカント哲學に於ける前批判哲學的なものの殘滓であり、批判主義の徹底は當然その様なものを廢棄することになければならない。既にフイヒテに於いては、自我の意識から獨立にある存在者を豫想して出發することは直ちに獨斷論に他ならない。更にリツケルトは認識の對象を以つて超越的存在者であると考へることに反對し、意識に於ける異質的連續 (Heterogenes Kontinuum) の背後にあるものを問はうとはせず、所謂超越的當爲 (意味) を以つて唯一の獨立的、超越的な對象として考へた。しかもこのことの結果は存在の形而上學の廢棄と共にまた一般に存在問題の等閑視と云ふことであつた。意識を離れた獨立的存在者を豫想しようとせぬ人々の立場からしては、存在問題は認識問題のうちに解消してしまはなければならなかつた。

しかし歸つて考へる時、そもそも意識と云ひ認識と云ふのは何であるのか。それはもともと存在の一つの在り方ではないのか。正しくその通りである。人はひとたびかのテカルト (René Descartes, 1596-1650) の Cogito, ergo sum (我思惟す、故に我在り) と云ふ、直接的推理に基く命題の持つ眞理性を認める時、更に一步を進めて、その命題を Sum, ergo cogito (我在り、故に我思惟す) と云ひなほさなければならぬ。蓋し *res cogitans* に、我々の意識にとつては、*cogitare* → *esse* が順序ではあつても、*in esse* に、事態そ

のものに於いては、*esse* → *cogitare* が正當な順序でなければならぬいからである。しかも斯く見る時、我々は既に認識論的地盤の上にはなく、存在論的地盤の上に立つてゐるのである。我々は認識の構造や妥當性を問題とする認識論を必要とする一方、また認識對象と共に認識主觀そのものの存在をも問題とする存在論をも缺くわけには行かない。認識論と存在論とは互に豫想し合ひ補足し合ふ二つの學科であるべきである。——近時に於ける存在論問題の復興に就いては、一面に於いて現實社會の存在の問題の濃厚化がその原因をなしてゐることも否定し得ぬとは云へ、なほ一層本質的には、ひとたび不當に閉却されてゐた本來の問題領域への當然の進出として見らるべきである。このことはこの學の復興の過程を見れば容易に知られ得る。

二 存在論はその窮極の課題の關する限り、今日に於いても傳統的なそれと特に別のものを追ふてゐるわけではない。アリストテレス (Aristoteles, 384-322 B.C.) が第一哲學と呼び、其後の人々が *metaphysica generalis* (ontology) と呼び習はして來たものが、存在者その特殊な諸部面に於いて考察する特殊な諸科學とは異なり、存在者を存在者としてある限りに於いて (*quod est ens in se*) *atomus ens in se* 考察しようとするものであり、存在者一般の基礎構造やその在り方に關する又その原理や原因に關する研究であつた様に、今日に於ける存在論も何等かその様な存在者一般或は存在者の存在に關する問題を目標としてゐる點に於いては變りはない。ただししかし認識論的自覺に於いて高められた現代の存在論は、傳統的なそれと、その方法に於いて異ならねばならなかつた。

先づ今日現象學の内部に於いて云ふところの存在論に就いて見るのに、それはその方法的制約或は立場的約束のために、形而上學的なものとは關はりのない、別個のものとして作り上げられてゐる。フツセル (Edmund Husserl, 1859-) が、その『イデーア』 (Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie) に於いて説くところに依れば、彼の云ふ存在論には形式的並びに實質的なものが區別せられ、前者は領域一般の空虚な形式、例へば「對象、性質、事態」等の名を以て呼ばれるものを研究し、後者は「事物、形態、原因」と云ふ如き實質性を持つものに就いての研究をなすものである。而して彼に依れば、對象の各領域に應じて夫々或る程度に實質性を持つ領域的存在論 (regional-ontologie) があるの云ふ。しかも斯かる存在論は總て事實科學の本質的理論的基礎をなすものとしての、純粹に現象學的な意味に於ける、本質學或は形相學に他ならない。それ故この存在論はまた形相的存在論とも呼ばれるものであり、存在者そのものの形而上學的な實在構造や實在根據を問ふものとは別のものである。

なほ云ふところの領域的存在論に就いては、その具體的な試みが、ゲルダ・ヴァルテルの『社會共同體の存在論』、『コントラート・マルティウス』の『事實的外界の存在論或は現象論』及び『事實的存在論』、『オスカル・ベッケルの『數學的實在(數學的現象の論理學及び存在論の研究)』、『フィリップ・シュヴァルツの『比較事態の存在論』(いづれも『現象學年報』中の論文)などに於いて見られ得る。いま右のヴァルテルに就いて見るのに、彼に依つても形式的並びに實質的な種々の存在論があり得るのであつて、それ等は、本質的還元を行つた後、種々

な普遍性の程度に於けるあらゆる種類の形式的並びに實質的な對象の本質を研究する。而してそれ等はその様にして領域的、部類的、特殊的、及び個別的な本質の研究に分たれる。例へば生物の存在論は生物一般の何であるかや本質を研究し、更に生物の様な種や類型等を研究する……其他の存在論例へば社會共同體の存在論の如きも同様である」と云ふ。しかも彼に依れば、斯かる存在論は「對象の普遍の本質、エイドス」を求め記述するものであつて、特に「對象の形而上學的——實在の本質」を問題とするものではない。同じくコントラートも云ふ、「實在とは何かと我々は問ふ。その場合我々に於いてなされることは、フツセルの形相學の意味に於ける純粹の本質研究である。「我々は事實、全世界とそれの實在存在の意識とを直接且つ端的に結合してゐるのであるから、我々はただこの意識のうちの本質必然的に固着してゐるところのものを説明すれば足るであらう」と。なほ右の他の人々に於ける研究に就いて見ても、そのいづれも所謂現象學の範圍内に於けるものであつて、形而上學的な意味のものではないことは同様である。

現象學に於いて云ふところの存在論はこの様に、所謂本體論などの意味に於けるものとは全く異なり、寧ろマイノング (Alexis Meinong, 1857-1920) の對象論 (Gegenstandstheorie) に近似したものであり、殊に云ふところの領域的存在論は對象論に於ける特殊の對象論に比せらるべきものである。フツセル自身、彼に於ける存在論なる語の使用に就いて、『イデーア』(一九一三)の中に次の様に記してゐる、歴史的な理由から差障りのある存在論なる表現を、その當時『論理研究』第一卷執筆の當時(一九〇〇)私はなほ採

用することを取てせず、斯かる研究を（同書第一版二二二頁に於いては）対象そのもののアプリア的理論の一つとして記して置いたが、それはマイノグが『対象論』と云ふ言葉で包括したところのものである。今は併しそれに反し、變化した時に應じて、存在論と云ふ古い表現を再び使用することが、その當時よりも適當してゐる様に考へられる。フツセルが初め存在論なる語の使用を躊躇したのは勿論、傳統的な使用に於けるこの語の持つ、本體或は實體的なるものに關する理論と云ふ如き意味を欲しなかつたからである。現象學に於ける存在論はこの様にして、存在や存在するもの、形而上學ではなく、対象の持つ一般的或は特殊の本質を現象學的に記述しようとする記述の本質學であり、それ故其處には存在者の實在構造に關する分析も、アリストテレスの云ふ窮極的なる原理や原因に對する問の如きも見られない。

三 併し今日これとは別に特に注目すべき二種類の存在論が興りつつある。即ちその一はカントの「認識論的立場から、その問題の徹底とし或は延長として存在そのものの問題に赴かうとする、ニコライ・ハルトマンの批判的存在論 (Kritische Ontologie) であり、他は自覺的存在者たる人間的現存在の自己解釋的方法を以つて、存在問題の解明を志してゐるところの、ハイテツゲルや又ヤスベルス等の自覺存在論 (Existenzialismus) 若くは實存哲學 (Existenz-Philosophie) である。この二つの異なる方法に依る存在論は、それが近代認識論的反省を経た立場、カントのコペルニクス的轉回の地盤の上に立つものとして、いづれも傳統的な存在論からは區別せられる。しかもそれと同時に他面に於いてこの兩者は、或る仕方

於いて、かの以前の形而上學的な問題領域をも復活せしめようとしてゐる點に於いても一致してゐる。而して更に、ハルトマンとハイテツゲルとの兩者は、その學的方法として現象學的方法をとるべきことを明言して居り、殊にハイテツゲルの如きは、「存在論はただ現象學としてのみ可能である」とすらも云つてゐる。とは云へこの兩者にとつての現象學の持つ意味は、前のフツセルや其他の人々に於けると同じではない。蓋し前述の人々にとつて現象學と云ふことは、手段や方法である以上に、寧ろ絶對的な立場的制約であり、それは超越的なるものなどは彼等の直接には興り知らぬ事柄であつた。しかるに茲の兩者にとつては、問題は直ちに形而上學的なものに連つて居り、現象學はあくまでそれへの方法に他ならない。

ハルトマンに依れば、彼の存在論の又一般に彼の哲學の體系的な方法は、現象學、問題學、理論の三段の順序に於いてあるべきである。即ち彼の存在論は先づ認識現象の分析的記述から出發して、次に認識のアポリーの發見から存在のアポリーの究明に進み、最後に初めて積極的な存在の理論があり得るのである。斯くして明らかな様に、現象學は彼にあつて問題の發見或は作成に至る前段階的な過程に他ならぬのであり、問題そのものの處置は最早現象學の仕事ではなく、問題學の又本來の批判的存在論或は所謂問題の形而上學そのものの課題である。併しハイテツゲルに於いて現象學の持つ意味は、ハルトマンに於けるよりは遙かに重大である。存在論と現象學とは彼に依れば異なる二つの學ではなく、一は哲學そのものをその対象に關して呼ぶ名稱であり、他はその取扱方法に關して呼ぶ名稱である。とは云へ彼に於ける現象學は既に、フツセル其他の人

人に於けるものと同じものではない。ハイテツゲルが存在論的方法として採る現象學は現存在の解釋學としてのそれである。即ち自覺的存在者としての人間の現存在の自己解釋を中心とするものに他ならない。彼に依れば自覺的存在者としての現存在の自己分析を通じて以外に存在問題の解明はあり得ない。彼が現存在の解釋學を以つて基礎的存在論 (Fundamentalontologie) と呼ぶのは、それに依つてのみ初めて他の一切の存在問題に至り得る意味に於いてである。

四 ハルトマン (Nicolai Hartmann, 1882-) がその求める存在論を過去のそれから區別して、批判的存在論と名づける理由は、それが端的に存在者そのものに向ふことなく、あくまでカント的批判主義の立場にあつて、認識のアポリーから進んで存在のそれにかうとし、認識現象に基いて存在の分析に進まうとするからである。彼はしかしその所謂認識の形而上學を、また批判的存在論を打建てようとするに當つて、端的に彼の立場を表明することから始めてゐる。彼はその『認識の形而上學』(第二版一九二五)の冒頭に記して、「次の研究は、認識は対象の創造や生産や産出ではなく、……あらゆる認識以前に且つ認識から獨立にも存在してゐるものの把握である、との解釋から出發する」と云ひ、又他の所では、存在論は自然的實在論と觀念論的立場との中道をとるものであるとし、その存在論のテーゼとして次の様な命題を掲げてゐる。「意識の外、論理的領域やラチオの限界の外に、實在的な存在者がある」。客觀認識はこの存在者に關係を持ち、その一斷片を再現する、たとへその再現の可能性が如何に理解し難いことであるにしても、「しかし認識像は存在者に合致することなく、それは完全(十全)でもなければ、存在者

に類似してゐるわけでもない。これは彼の認識論的立場を示したものであると共に、また彼の批判的存在論の前提的立場でもあるのである。彼に依れば、古代並びにライフニッツ、ヴォルフ、ヘーゲル等に於ける存在論の持つ誤謬は、實在的存在の領域と觀念的存在の領域とまた思想の領域との相互間の一致に何等限界を考へなかつたことに存する。これは「上から」総合的に臨まうとする合理主義の持つ獨斷である。批判的存在論はそれに反して、「下から」現前の構造現象の分析からしてのみ可能であると云ふ。即ち實在構造に至る路は現前の構造現象の分析を通して以外にはないのである。

ハルトマンは認識現象の考察から、認識に關して二種類の限界を區別することに依つて、形而上學的な領域を明瞭に區別しようとしてゐる。その二つの限界とは、認識の進行につれて移動せられ得る限界、即ち客觀化(對象化)の限界と、認識可能の原理的な限界とであつて、この後者の意味に於ける限界の彼方にあるものが初めて超智的な或は形而上學的なものである。而して彼に依れば、斯かる原理的な認識可能の限界の存することを證示するものは、例へばあらゆる領域に於ける窮極原理の不可實證性や、存在者のあらゆる層に於ける基體的存在や、存在の基本的諸形式(實存、生命、意識、精神、自由、決定、等々)の永遠の不可解性などである。即ちこれ等は、カントに於ける物自體の様に、認識にとつての永遠のアポリーとしてあるものである。しかも認識のアポリーの生ずる所が批判的な形而上學の起點なのである。ハルトマンにとつては、避けらるべきはただ立場の形而上學であつて、問題の形而上學ではない。蓋し彼に依れば、形而上學の問題とはその対象が超智的な残

除を持つ問題のことであるが、認識にとつてその様な問題は拒否することを得ないからである。しかも我々の認識は斯かる問題を定立することに於いてそれ自身を超越するのであり、その様な対象の全質客に對しては、認識の或る意味に於ける前進もただ一步近づき得るのみであつて、その全體を把握し盡すことはない。問題の形而上學としての批判的存在論はこの様に、問題そのものの永久に残りなく解決され得ぬことを自認してゐるが、このことはそれが從來の批判哲學に反して、超智的な(不可認識的な)ものを積極的に哲學課題として認めると同時に、あくまで批判的認識論的な建前に於いてそれ自身に對することの當然な結果として考へられ得る。

なほこの批判的存在論が超智的な存在領域のうちに入つての概念構成に就いては、ハルトマンはそれを「投射的概念構成」と呼んでゐる。即ちそれは既知の存在領域(客觀のホーフ)を手引として、未知の(超客觀的、超智的な)領域内に假設的な把握の試みをなすことである。しかも彼に依れば斯かる把握の試みの基礎を築くのは範疇論の仕事である。範疇論の問題こそあらゆる哲學的諸部門の基礎のうちに含まれてゐるのであつて、それ故範疇論を展開することは哲學一般に於ける一切のアポリを共に受け入れ且つ研究することに他ならない。斯くして彼はまた範疇論を以つて眞の Prima philosophia であるとも云つてゐる。即ちハルトマンに於ける存在論は斯かる範疇論としては、一切の現存在一切の生命、歴史、文化、精神、精神的所産等凡ゆる問題領域の基礎論をなすものである。ハルトマンに於ける批判的存在論への試みは、その「認識の形而上學」(第一版一九二二)や「批判的存在論は如何にして可能であ

るか(一九二四)等以來幾つかの著書論文に於てなされてゐるが、今日なほその完成への途上に於てである。彼の範疇論の問題に就ては彼の「倫理學」(一九二六)などの中に於ても既にその實質的な敘述が見られるが、なほ組織的には「範疇論的法則」(一九二六)なる論文に於いてその豫備的研究がなされてゐる。彼の其後の著述たる「精神的的存在の問題」(一九三三)は歴史哲學的な又精神哲學的な基礎問題を主とするものであつて、存在問題の部分的な展開であり、更に最近の著書たる「存在論の基礎」(一九三五)は著者が、二十年來目指して來た存在論への初めての纏まつた序説をなすものであるが、なほ特に形而上學的な諸問題に就ての考察は今後に残された課題であり、彼自身引續いての著述の發表を近い將來に約束してゐる。

五 批判的存在論が認識から存在へのコースをとり、認識のアポリを存在問題への起點とし、認識主觀そのものをも含めた存在者一般を矢張り對象的なものとして考察し、範疇論を媒介として把握しようとするものであつたに反して、ハイテツゲル(Martin Heidegger, 1889-)に於ける基礎的存在論は、認識する自己を最初から端々に現存在とし或は實存在として規定し、一切の認識或は認識關係などを現存在そのものの一つの在り方として考へることから出發する。それ故この存在論のとり方は認識論ではなく、ひとへに自覺的存在者の自己分析を根柢とし、或は媒介として、其處に同時に一般存在者の存在の問題を見ようとするのである。彼に依れば、現存在の存在論的分析のみが存在一般の意味の解釋のために視野を開くのであつて、自覺的存在者としての現存在の自己分析を手掛りとする以外に一般存在問題への通路はないのである。それ故彼の存

在論に於いては、一般に對象的存在者の存在規定を認識することが問題ではなく、現存在そのものの實存構造に關してのみ一般存在者の存在を見ようとするのである。彼は斯くしてこの様な「現存在の存在の諸性格」を「非現存在的存在者の存在規定」たる所謂範疇から區別して、實存時(Existenzialien)と呼んでゐる。彼に於いてもこの二つのものは「存在性格の二つの根本的可能性」ではあるが、彼の存在論が専ら問題とするものは、云ふところの實存時に關する事柄である。ハイテツゲルに於ける存在論は斯くして、その「存在



ハイテツゲル

と時間」(一九二七)第一卷に於ける基礎的存在論などの關する限り、現存在の實存構造の分析に始終してゐるのであつて、先づその根本構造を世界一内存在として規定し、更にその存在を配意、開

示性(Offenheit)等々として規定し、其實存性の根本的諸可能性の根柢に時間性の時間的生成を考へる。しかしヘーゲルの精神現象論の全過程が人間の意識發展の事實に始終し乍ら、同時に意識の對象の問題であり、世界認識の問題でもあつた様に、ハイテツゲルに於ける現存在の存在論的分析も、そのまま同時に他の諸存在者や又存在一般の意味の解釋でもある。蓋し現存在に於てあるところの世界と云ふことも、環境世界と云ふことも、またその中に於いて出會はれる存在者の交渉的存在性及び目前的存在性と云ふ如きことも、更には共同存

在及び自己存在と云ふ如きことも、現存在そのものの分析と共に、次々と眼界に入り來たるのである。しかも存在者の斯かる實存論的な諸規定がすなはち云ふところの實存時に他ならない。

しかし彼に於いて存在論の問題は勿論これだけに盡きない。所謂基礎的存在論の問題は寧ろ、彼の意圖する形而上學的な存在問題への基礎的考察に他ならぬとも云はれ得る。このことは彼がその「カントと形而上學の問題」(一九二九)の中に述べてゐることからも明瞭である。其處に彼の云ふところに依れば、基礎的存在論は現存在の形而上學の第一段階に他ならぬのであり、また「現存在の形而上學のうち形而上學の基礎がもとづくのである」と云ふ。而して彼に於いても形而上學とは要するに「存在者の存在に對するあらゆる問」に他ならぬが、彼に依れば斯かる「形而上學は人間に依つて單に體系や教説の中に創られるものなどではなく、現存在そのものうちに生ずる存在理解であり、その企畫であり又その破壊である」と云ふ。

もともと彼に於ける現存在の解釋學はそれ自身に超越(Transzendenz)の問題を含んでゐる。超越とは彼に依れば「全體としての存在者を超越すること」であるが、この超越と云ふことはまた、そのうちに最も根本的な個別化の可能と必然との存する意味に於いて他の何ものよりも優れて有限的であるところの、現存在そのものの根本的な在り方なのである。なほ彼に依れば、現存在が他の諸存在者に關係し得又自己自身に關係し得ることも、更に開示性や自由性を持ち得ることも、それがその根本に於いて超越し得るからである。しかも彼は「形而上學とは何か」(一九二九)の中に於いては、斯かる

超越を可能ならしめるものとして根源的な無 (Nichts) を考へて  
 みる。現存在は無の中に自らを引入れてゐることに依つては、既に  
 全體としての存在者を超えてゐる」のであると云ふ。それ故現存  
 在の根本的な在り方としての超越を考へることは同時に無を豫想し  
 てあることなのである。現存在に於ける超越の問題は斯くして無の  
 形而上學的問題に導かれる。しかしまた他面にこの超越の問題は、  
 『根拠の本質に就いて』(一九二九)なる論文の中に説く所に依つて  
 は、存在一般の根拠の問題に連つてゐる。即ち「根拠の本質に對す  
 る間は超越性となる」のであり、「現存在の超越からして根拠  
 の本質が解明せらるべき」なのであると云ふ。蓋し現存在の存在の  
 本質は超越に於いてあり、しかも現存在の超越は自由に於いて他  
 が、自由とは彼に依れば「根拠への自由」、根拠をとることの自由は他  
 ならないのである。彼の言葉を以つてすれば、根拠への自由を持つ  
 と云ふことは「根拠づけられる」と云ふことなのであつて、「根拠づけ  
 る」ことに於いて自由があり、又そのことに於いて自由は根拠をとる」  
 のであるといふ。斯くして彼は更に「自由が根拠の根拠である」と  
 も云ひ、また「斯かる根拠として自由は現存在の深淵 (Abgrund)  
 である」とも云つてゐる。

ハイデッゲルに於ける存在論の問題はこの様に、現存在の超越を  
 基礎として、一方には無の形而上學的問題と他方に存在一般の根拠  
 の問題とに導かれてゐる。しかしこの二つの問題も勿論無關係のも  
 のとしてあるのではない。「形而上學とは何か」の最後に云ふところ  
 に依れば、形而上學的問題は結局一つの根本的な間に要約せられ  
 る。「一體何故に在るものがあつて、寧ろ無でないのであるか。」即ち

ものである。なほ可能的實存在からするこの哲學的思惟は、經驗的  
 現存在にとつては無に等しいものであり、意識一般にとつては根拠  
 なき空想であるが、可能的實存在にとつては自己自身に至る又本來  
 の存在に至る道である」と云ふ。彼に依れば、もともと我々と何等  
 かの關係にあるものは總て、實存在のうちに出會ひ且つ交錯してゐ  
 るのであつて、それ故一般存在者への探究も探究者自身への問ひに  
 歸つて行くのであり、それを基礎としなければならぬのである。  
 彼は哲學的思惟の特性を端的に規定して、「あらゆる超越すること  
 のうちにある思惟」と呼んでゐる。超越することと彼の云ふのは、  
 「對象的なものを超えて非對象的なものうちに超出すること」であ  
 る。對象性の限界は、彼に於いてもハルトマンに於ける様に、踏み  
 越えられ得る「その時々のも」と「原理的なもの」との二種が區  
 別せられる。しかも前者は一般諸科學にとつての刺戟ではあつても、  
 特に哲學的な刺戟は與へない。それに反して後者の意味の限界こそ  
 一般諸科學の終る所であつて、しかも哲學的超越の可能の開ける所  
 である。しかし彼に於いて、斯かる超越に依つて得られるものは、  
 普通の意味の認識ではなく、從つて固定的知識ではない。先づ世界  
 に對する場合、それは意識一般の經驗的な世界認識に依る一切の限  
 界を飛躍しての或る把握であり、實存在に對する場合、それは自己  
 自身へのアツピールであり、自ら自己自身を解明し、實存の本質に  
 眼醒めしめることであり、超越的(形而上學的)なものに對する場  
 合、それは暗號文字を概念的な構成に讀解することである。  
 このヤスペルスの實存哲學が前述の他の存在論に對して持つ特性  
 は、ハルトマンの批判的存在論が意識一般の認識論的立場の延長に

これがハイデッゲルに於ける存在の形而上學の窮極の問題である。  
 而してこれに對する回答は、彼に於いては、「人間に於ける現存在を  
 把握し呼び醒すこと」に依つてのみなされ得るのである。しかしハ  
 イデッゲルは彼の意圖してゐると見える形而上學的問題の具體的な  
 解明に關しては、未だ若干の基礎的な暗示的説明を與へてゐるに過  
 ぎない。斯かる問題そのものの眞に全面的な展開はそれ故、彼に於  
 いても今後に期待しなければならぬ。

六 これと類似の傾向をたどるものとしてヤスペルス (Karl Jaspers) がその『哲學』(一九三二)三卷に於いて叙述した所謂  
 實存哲學がある。この二人は元來全く異なる系統に屬する學者であ  
 り乍ら、兩者の哲學は、非認識論的な方法を取り、自覺的存在者の  
 自己分析を以つてあらゆる哲學的問題への媒介的手段とする點、ま  
 た特にキェルケゴールの思想へのつながりを持つ點に於いて、少な  
 からぬ類似性を示してゐる。彼が實存哲學と云ふところのものは、  
 それを狹義に解する場合、特に可能的實存在としての人間の解明  
 を課題とするものであるが、廣義に於いては、世界を目標とする思  
 惟をも超越的なものを目標とする思惟をも包括した哲學一般を意味  
 する。彼がその哲學を實存哲學と呼ぶわけは、人間の自我は「經驗  
 的現存在」とし、「意識一般」とし、「可能的實存在」、即ち可能性を  
 含む實存在としてあるが、彼の哲學は特にこの自我の「可能的實存  
 在からする哲學」だからである。彼に依れば、「可能的實存在として  
 の自我は、客観存在及び自我存在の存在圏を通じての開明に當り、  
 哲學的思惟にとつて決定的な優位を持つ」のであつて、「それは恐ら  
 く客観の世界に於いて意識一般にとつては閉ざされてゐる道を開く」

於いて問題に對するに反して、可能的實存在を基底として右の様な  
 非認識的な仕方に於いて問題に向ふことであり、又ハイデッゲルが  
 現存在の普遍的な平均的日常性を基礎とするに反して、可能的實存  
 在を常にそのある狀況と共に考へることである。狀況と彼の云  
 ふのは「それに先立つものから來たり、歴史的な深さを持つものであ  
 つて、決して終結することなく、自らのうちに可能性及び不可避性  
 としての未來を藏する」ものであり、「世界的生起とし又自由に依る  
 決定として不斷の運動」に於いてあるものに他ならない。彼はなほ  
 實存在に於ける不可避な闘争、苦惱、罪惡、死、などを限界狀況と  
 呼び、其處に意識に於ける「飛躍」の機縁を見、哲學的思索への  
 移行やまた實存在そのものへの覺醒を考へてゐる。而して彼に依れ  
 ば、「存在とは何か」「何故に或るものがあつて、何故に無でないの  
 か」「私は何者であるか」「一體私は何を欲するの」と云ふ如き問  
 を、人々は自らの置かれた狀況からして發するのである。それ故あ  
 らゆる哲學的考察はまた常に狀況解明の思惟としてもあらねばなら  
 んのであると云ふ。しかも狀況そのものが絶えざる運動であつてみ  
 れば、この様な哲學は全體として決して完結することはありません  
 い。ヤスペルスはそれ故、哲學は常に過去の現實と未來的現實との  
 間の「中間的存在」であるとも云つてゐる。斯くしてまた哲學の存  
 在は當然哲學の歴史としてあるのであると云ふ。  
 七 勿論なほ今日存在論への企てをなしてゐる者はこれだけに止  
 まらない。例へばギンター・ヤコービや英のコッフイー、佛の  
 モーリス・ブロンデル等があり、或はまた最近に於けるリッケルト  
 の如きも独自の立場から「述語の論理學」としての存在論に就いて

述べてゐる。しかし前述の現象學の内部に於けるそれに續いて我々の見來たつた三つのものが、その方法の點に於いて、又今日までの實際的成果に就いて見て、最も注目されるべき特色ある新たな試みであると云へよう。なほしかし存在論への新たな企てが生じて以來近近十數年に過ぎず、それ故その實質的な發展は今後に期待してよいであらう。

参考文献——E. Husserl : Ideen, 1913. 2. A. 1922. „Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung“ ⑨中に於て H. Conrad-Martinus (Bd. III, VI), Gerda Walther (VII), Oskar Becker (VIII), Philip Schwarz (IX) 等⑩諸論文。 Nicolai Hartmann : Grundzüge einer Metaphysik der Erkenntnis, 1921. 2. A. 1925. Nicolai Hartmann : Wie ist kritische Ontologie überhaupt möglich? (Festschrift für Paul Natort zum 70. Geburtstag. 1924. 中⑪論文) Nicolai Hartmann : Ethik, 1926. Nicolai Hartmann : Kategoriale Gesetze. (Philosophischer Anzeiger. I. Jahrgang II. Halbband. 1926. 中⑫論文) Nicolai Hartmann : Das Problem des geistigen Seins, 1932. Nicolai Hartmann : Zur Grundlegung der Ontologie, 1935. M. Heidegger : Sein und Zeit, I. Hälfte, 1927. M. Heidegger : Was ist Metaphysik? 1929. M. Heidegger : Vom Wesen des Grundes. (Festschrift für Ed. Husserl, 1929. 中⑬論文) M. Heidegger : Kant und das Problem der Metaphysik, 1929. Karl Jaspers : Philosophie, 3 Bde. 1932. Karl Jaspers : Vernunft und Existenz, 1935.

G. Kraft : Von Husserl zu Heidegger, 1932. J. Pfeiffer : Existenzphilosophie, 1933. G. Jacobi : Allgemeine Ontologie der Wirklichkeit, 1925. F. Coffey : Ontology, 1917. H. Marcuse : Hegels Ontologie, 1932. H. Rickert : Die Logik des Prädikats und das Problem der Ontologie, 1930. H. Rickert : Grundprobleme der Philosophie, 1934. F. Böhm : Ontologie der Geschichte, 1933. „Ontologen-Heft.“ (Zeitschrift für Theologie und Kirche. XI. Heft 5.—K. Heim, R. Baltmann, K. Löwith. ⑭論文を集中) E. v. Aster : Die Philosophie der Gegenwart, 1935. M. Brundel : L'Étre et les étres, 1935. 後藤一民「認識の形而上學 (ハントマン)」東頭英一「ハイテッカーの存在論 オスカー・ワッカー、湯淺誠之助譯、美の果無さと藝術家の冒險性。」(岩崎勉)

### 大學の問題

學問と社會とは相互に切り離すことの出來ぬ密接な關係に立つてをると言はれる。このことは學問がその成立及び發展の過程に於いて單なる個人の思索のみでなく却つて多數個人の論議を俟つものであるといふ意味に理解せられると共に、他方に於いてはかかる諸個人間の關係を超えた客觀的統一としての社會の中に一定の地位を占めて或は社會形態の特殊性に規定せられ或はこの社會形態に作用しつつ發展するといふ意味に理解せられる。この第二の意味に於いて

學問を社會と結びつけて考へるに當つて大學の問題は一個の重要な問題として現れねばならぬ。これを他の側面から觀察して見よう。人間社會がさきの諸個人間の關係としてのみ捕へられる時に於いては凡べての時代に於いて同一の形態を以つて示されるであらうが、これをかの客觀的統一として把握する時はその根柢を形作るところの經濟的構造の如何に依つて具體的には種々の段階の區別を有するものとして存在するのであり、かくて生ずる一定社會形態にあつては成程凡べての社會が夫々の文化を持つとしてもその段階乃至形態の如何に従つて文化は歴史的に與へられた特殊の構造と秩序とを持つものとして現れざるを得ない。ヨーロッパ中世の社會形態は大地所有のヒエラルキアに應じて宗教を冠頂とする文化のヒエラルキアを有してをり、そこでは一切の文化領域が各自の獨立性又自律性を持つことなく却つて宗教に依つて貫かれ支配せられるものとして一つの階層を形成する。然るに學問形態は言ふまでもなく、この文化領域の一つとして存在するものであるが、それは獨自の構造と性格との故に、かへつて文化形態そのものの自己意識として存在しつつその特殊性を自己の内部に反映し表現することが出来る。そしてかかる特質を有する學問形態が、その具體性に於いて觀察されようとし、就中、社會形態そのものとの聯關に於いて見られようとする時に、吾々は大學の考察を一つの通路として示されねばならないのである。

近代に於ける大學がその起源を中世に持つことは明かである。中世の社會を支配する三つの力即ち Sacerdotium, Imperium, Studium の一つとして、假令それ自身最初は教會の權力に依つて建設

されたのではないとしても尙且つその一切を擧げて教會の權力の下に屬し法王の教書に依つて夫々の特權と承認とを付與され、中世的文化形態の一つの支柱として働いてをつたものであるが、その後封建的世界から市民的の世界への轉化の槓桿としての役割を果した都市及びそこに據頭する新しき力と結びついた諸侯乃至國王の保護の下に漸次新しき時代のためのものとして成立し來つたのである。固よりそこには法王の承認を経ねばならぬといふ意味に於いて教會の權威の下に屈せねばならぬ制約を與へられてはゐたのであるが、そして諸侯乃至國王自身が封建的大土地所有者としての資格に於いて現れる限りに於いてこの制約は牢固たるものであることを免れぬにも拘らず、他の側面に於いて新しき勢力との結合に於いて生み出されるところの近代的な世界を辯明するための觀念の形成と自己の支配と權威とを確保するための裝備とのために新しき精神が大學の中に成長して行くことを助長促進せざるを得なかつたのである。新しき市民的世界の精神に相應する所以は universitas なり studium generale なりの名稱が往々認つて理解せられてゐる如く單にそこに研究されるものが局限されることなく却つて普遍的であることを意味するものでなく寧ろそこに來り學ぶものの資格を制限することなしに萬人に向つてその門戸を開くといふことを意味するところから知られる。蓋し周知の如く中世固有の精神にあつては學ぶことは僧侶にのみ許され又要求されてをつたからであつて、凡べて理性を有するものに學問の門が開かれるといふことは、それ自ら近代的な事柄であるからである。

近世の大學は原理的に見て市民的學問形態を自己の中に反映する



ものであるが、この學問形態を含む市民的文化形態の特質は如何なるところに見出されるであらうか。中世的文化形態に於いて各文化領域がそれ自ら一つの文化領域たるところの宗教に依つて貫かれることに依り謂はば他律的のみ存在してをつたのに反し、市民的文化形態にあつては學問、藝術、政治その他の文化領域は自己の法則に基いて自律的にそれ自身の發展を遂げるといふ獨立性を有するものと考へられてゐる。學問は學問のためにあるであつて、他の何かへの奉仕に於いて存在の理由を與へられるのではなく、従つて自己以外の世界を顧慮する必要はないのである。宗教の如きもルテ (Martin Luther, 1483—1546) その他の人々の事業を通じて他の世俗的諸領域に干渉する任務から解放され且つその權利を剝奪され、政治の如きもマキャヴェリ (Niccolo Machiavelli, 1469—1527) がこれを示してをるやうに宗教、道徳を意に介することなしに自己の道を歩むことが要求されるに至る。併しながらこのやうな自律性又は獨立性の獲得は他方に於いてそれ等の領域が各自の法則に従つて發展するに當りそれ等の間に何等の衝突も矛盾も起ることがないといふ約束の與へられてゐることを豫想するものでなければならぬ。調和はそれ等諸領域の何れか一つが特別な權威を以つて他を統制するところから生ずるのでなく、却つて各領域が則るところの夫の法則が凡べて萬能なる理性に發するものであるといふ意味に於いて保持されるものであつて、この理性そのものの性格の故に一應科學が中世にける宗教の如き役割を果すものとも考へられるのであるが、當時に於ける科學の特質たるアトミスティク及びこれと結びついた理性の構造のために科學の支配と見えるもの自身が寧ろ諸

領域の獨立性及び自律性とそれ等の間の自らなる調和とを保護してゐると考へることが出来るのである。

ところでかうした市民的文化形態の特質はその自己意識としての各學問領域の中に再生産される。そしてこの學問領域の發展及びそれと必然的に相伴ふ分化とは他面に於ける大學並にアカデミーの設立と結びついて、ここに學問的領域に於ける専門家即ち職業的な學者群を成立せしめねばならぬ。大學の俸給その他が今や學者を一個の職業人として生み出すことになるのである。専門家はそれ自身の自律性と獨立性を有する各學問領域の人間の表現であると見るこゝとが出来よう。専門家は其の屬する領域に於いて則るべき法則を守る限りに於いてこの法則が一切の領域を貫通する理性に基くものであるが故に、決して自己の視野の制限されることを憂ふ必要なく、寧ろ深まるることが同時に廣まることを意味する如き安心を確保し得るのである。さて中世的文化形態に於ける宗教の特殊的地位は一にローマ教會の有するヨーロッパ最大の大土地所有者としての世俗的勢力及びこれから生ずる政治的權力に由来するものとして解せらるべきものであり、その經濟的構造の特殊性即ち人間を社會集團に埋没せしめる如き性格との結合に於いて考へる時右の宗教の特殊なる地位及びこれに基く文化統制は實に上からの即ち社會的全體からの統制として考へられねばならぬ。社會的全體を表現するものとしての宗教的領域に依る上からの統制である。然るにこれに反して理性に基く調和の保證は下からの即ち個人の側からの自らなる統制を意味するものと見らるべきであらう。蓋し理性こそは一切の人間の中に普く存在しつつ人間をして正に人間たらしめる如きものであるか

らである。更にホッブズ (Thomas Hobbes, 1588—1679) その他に於いて示された如き強力なる民族國家の觀念は往々信ぜられる如く個人の上に又個人の外部から來つてこれを超越するものではなくして逆に下から即ち個人から利害の合理的打算に基いて構成されたものであり、かくして根本的には個人に割り切られるものなのであるが、國家がかくの如く把握されてをることは絶対主義そのものが一方に於いて封建的土地所有といふ古き面を含むと共に他方に於いて新しき勢力との結合に於ける近代的なる面を併せ含んでゐるからに外ならぬのであり、それ故にこそ大學の設立を通じて近代的精神及び文化の發展に寄與し得たのである。

文化形態及び學問形態に於ける自律性と獨立性との獲得といふことは學問の自由といふことを意味するものでなければならぬ。學問がそれ自らの法則に従つて進むといふことは學問がその自由を與へられてゐるの謂でなければならぬ。だが以上に述べられたことは寧ろ近代的世界を貫くイデーの如きものとして考へらるべきであつて、それが全幅に於いて現實のものとなつてをつたつて見るべきではないであらう。言葉を換へれば學問の自由は決して完全に實現されてをらなかつたのである。これは理性が眞に一切の支配を委ねられてをらず、理性乃至個人の側からではない他の力に依つて統制が行はれてをつたつたこと即ち依然として古き側面を含むところの封建國家の權力に依る統制の行はれてをつたつたことを意味する。若し社會或は國家が完全に理性の法則に基くものであつたならば學問が同じく理性の法則に従ふ限りに於いてその研究の完全な自由は社會或は國家にとつて毫も有害なものでなく、寧ろこれを許容し且つ促進すべき

であつたであらう。だが現實の社會なり國家なりがかくの如きものでない以上學問の研究に於ける完全なる自由はつひに一片の空想たるの域を脱することが出来ない。吾々はこの間の消息を傳へるため此處でカント (Immanuel Kant, 1724—1804) の大學論の概要を述べておきたいと思ふ (Kant: Der Streit der Facultäten in drei Abschnitten, 1798)。

ピュシスとノモスとの關係即ち自然的なるものと人為的なるものとの關係はギリシヤ以來重要な哲學的問題を形作るものとして知られてゐるが、カントの大學論は實に學問に就いてピュシスとノモスとの關係を究明しようとするところにその重點を置くものである。學問を論議するにはそれに固有なる領域即ち認識の促進といふ共同的な意圖の下に多くの學問が結合してをるやうな領域に於いてなされねばならぬ。そしてかかる領域こそ大學であるとカントは考へる。個々の學問はこの大學に於ける相互に平等なる要素たる各分科に於いて表現されると見られよう。ところが諸分科の區分を決定するものは學問そのものの關心ではなくして却つて國家に對する學問的關係であり、國家との關係に依つて諸分科の地位は規定される。ここに二つの種類の學問がある。その一は特殊な關心に依つて國家と結びつけられてをり、公衆の實際生活に多くの影響を及ぼし、従つてそれが教授する内容に關して國家權力への依存を示す如き學問である。その二は國家がその學設内容に就いてはその學問の存在自身を否定することなしには何等の規定をなすことも出来ず又許さぬ如き學問であつて、それは完全なる自律性を有し、國家權力からの獨立を保持するものである。第一のものは上位の分科であり、第二

ものは下位の分科であつて、前者は非獨立的な學問を含み、後者は獨立的な學問を含む。前者が國家から *credit* を與へられるのに反し、後者は自己の *credit* の上に立つものと評すべきであらう。

併しながら元來學問の幸福は一切の外的強制に依つて阻まれざる自由且つ獨立なる研究の中にのみ存するのであつて、若し國家が學問のために最善の努力をなさうと欲するならば須く學問を自由にし、そしてこの自由にとつて必要な諸條件を與へるべきであらう。この點に於いて學問と國家との關係は恰も商業と國家との關係に似る。國家は唯それ等のものの發達を妨げぬやうに配慮する必要がある。そしてそれで十分であるとカントは記してゐる。けれども非獨立的な學問が上位の分科をなし、獨立的な學問が下位の分科をなすといふことは抑々如何に考へらるべきであるか。カントはこれを人間の自然から説明しようとする。命令し得る人間は假令彼自ら他の人間の從順な召使であらうとも、尙自ら自由でありながら而も何人にも命令を下し得ぬ人間よりも高貴なものと思はれ勝ちである。かくて實際生活への影響即ち效用の如何に依つて學問の地位及び分科の階層は決定されねばならぬ。それ自ら國家の目的と共通する目的を追求する學問は實踐的であり、國家の目的に直接に役立つ學問は理論的である。實定的な學問は實踐的であり、合理的な學問は理論的である。さて國家の直接の目的は何よりも先づ國民の福祉といふところに求められねばならぬのであるが、人間の幸福なるものは總じて身體的なるものと市民的なるものと永遠なるものとに區別される。第一は健康であり、第二は正義であり、第三は幸福である。この三者はその間に段階を持つてゐる。自然の本能に従へば健康、正義、幸福の順序に置かれると共にこれを道德的價值に則つて見れば正に逆の順序に置かれねばならないのである。國家はこの三つの幸福のために僧侶と法律家と醫師とを持たねばならず、神學と法律學と醫學とを持たねばならぬ。

分科の内的依存性と外的權威とはこのやうにして正比例し、依存性が大となればなる程そして依存性が教説の内部に深く侵入すればする程その分科の地位は高まらねばならぬ。最高の分科は神學科であり、最低の分科は哲學科である。哲學科はその教説に關しては全く獨立であり、その目的は一切の實踐的通用及び一切の公共的效用から離れた真理そのものであつて、その能力は外的制定からの自由を保ちつつ自己自身に對してのみ義務を有する自律的なる理性である。ところで理性認識は經驗的即ち歴史的存在であるか或ひは合理的である。哲學科はそれ故に凡ての歴史的存在及び合理的なる學問を包括する。哲學科は一方に於いてこのやうに普遍的でなければならぬと同時に他方に於いて何處までも批判の精神を堅く把持するところがなければならぬ。それは普遍的なるが故に上位の學問そのものをも剩すところなく自己の領域に含み、それは批判的なるが故に上位の學問が出發する一切の前提を批判に附することが出来る。かくして今や上位の分科（神學科、法律學科、醫學科）と下位の分科（哲學科）との争ひは必然となる。

併しながら争ひは合法的に行はねばならぬ。元來争ひを法に反せしめるものはその内容に關するか或はその形式に關するからである。即ち争ひの對象としてはならぬやうな問題が争ひの中に置かれてゐるか或は法に反した方法に依つて争ひが行はれるかであらう。

カントはこの問題に直面して遲疑することなく斷言してゐる。即ち學問的に見る限り一切の對象は検討されるべきである。何ものと雖も批判に附され得ぬ如きものは存しない。それ故に内容の側面から見れば分科と分科との争ひが法に反するといふ懸念は全くあり得べからざることと言はねばならぬ。若し或る對象に就いて論争することが禁ぜられてゐるとしたならば、學問そのものが存在することを不可能にされるであらう。従つて問題となるのは形式のみである。若し人々が事柄そのものために争ふことなく却つて主觀的利益乃至は實踐的影響のために争ふならば、その争ひは法に反するものとなるのである。世人は一般に神學者、法律家、醫師に彼等の幸福への道を委ねておけば自らこれのために配慮するよりもよくこれを行つてくれるといふ信念を抱き、彼等の中に謂はば奇蹟を行ふ人の姿を見てゐるのであるが、哲學者たるものはかかる魔術的信仰を有することなく却つて人間は道德的意志と正しき法律制度と節度ある生活方法とに依つて幸福と正義と健康とに到達し得べきことを確信するが故にかかる意見の相違から争ひが生れる時は當然一般世人の主觀的利益が中心に押し出されることとなり、争ひは法に反せざるを得ないであらう。これに反して真理のみが問題となる時、論争は法に従ふものとなることが出来る。哲學者は自己の研究と教説との真理に就いてのみ責任を負ふ。然るに上位の分科に屬する人々は一方に於いて真理への責任を負ふと共に他方國家への責任を負はねばならぬ。若し哲學者の批判に際して國家の欲する如くよく自己の學説の眞理なることを明かならしめることが出来なかつたならば、その職責に耐へ得ぬものとしてその地位を失はねばならぬであらう。論争

が學問そのものにとつて偶然的なものでなく却つてその本質に屬するものである以上それは友情の如きに依る妥協を以つて終ることは許されず、何處までも學問的結果を以つて終らねばならぬ。實定的教説は存在せねばならず、又かかるものとして妥當せねばならぬ。そしてそれと同時にそれは批判され検討されねばならぬ。かくて分科の争ひはつひに終る時がないであらう。けれども哲學が理論的である限り如何にその批判が強力であつても所詮實踐と無關係ではないであらうか。併しカントは言ふ。若し批判が敗れたならばその時は實定的教説は理性的根據を含む一切の權利根據からして當然更に鞏固なものとなることが出来る。だが若し批判が漸次勝利を占めるならば實定的教説は學問的に支持し難きものとなり、その實踐的改革は必然的となるであらう。それ故に批判の勝利は斷じて單に理論的たるのみならず、實踐的に働くものであると言はねばならないのである。

尙カントの大學論は七四歳の彼がフランス革命に就いて語つてゐる希望と祝福との明るい言葉を含むものであるが、それは別としてもこれを恐らく必要と見える以上に詳述した所以は假令そこに直接に政治的なる自由への要求を隠して一切を哲學に託するドイツの慘さが偲ばれるとしても而も吐露された自由への氣魄と見識とが吾吾を動かすと共に今日に於いても大學の問題を考慮する凡べてのものに對して確かに一讀を要求する權利を含んでゐると信ぜられるからに外ならない。カントに於いて哲學がピュリシスの學として一切のノモスを批判に附することが出来るとなす點即ち何ものも雖も理性の光の下に照し出されねばならぬとなす點に於いてこそ彼が一八世

紀的なる進歩の精神に属する所以が明かとなるのであるが、この哲學を通じて大學そのものが單なる國家權力即ちかかるものとしての社會的全體の桎梏から自己を解放しつつ又自己を萬人に普く存してこれを正に人間たらしめる所以の理性を基礎として下から構成せしめることが出来るのである。そして大學が若し眞理の探究を中心とするものであるならばそしてこれを通して人間の教養に資すべきものであるならば右の點にその存立の根本的條件が見出されると考へるべきであらう。カント自らの言ふ如く若しも批判と論議とが禁ぜられるならば學問そのものの存立が不可能となるのである。

だがそれにも拘らずフランス革命以後の社會が決して眞に理性の光を以つて貫かれたものでなく、又その後一九世紀を通じての様々な矛盾の暴露のために嘗つてはその萬能が確信せられてつた理性そのものへの信頼が失はれ、そして理性を以つて古き制度の批判に向つた階級自らが反動化するに及んで眞理への探究と國家を代表とする社會的全體との衝突が益々激しくなるにつれてカントの期待する如き大學の制度は未だ一度も完全に實現されぬ儘に社會の進歩の中にその姿を没さねばならなかつたのである。二〇世紀に於ける支配階級内部の編成替に伴ふ精神的狀況の激變が今やハイデッゲル(Martin Heidegger, 1889—)の大學論(Heidegger: Die Seibstbehauptung der deutschen Universität, 1933)に依つて表現されてゐることは人々の周知するところであらう。そこではカントに於いて斷乎として拒けられた個人を超えざる全體への學問の奉仕が隨面もなく自己を主張して學問研究の自由の剝奪と國家への奉仕としての學問研究の意義とが説かれてゐる。

ハイデッゲルの大學論が發表された時に日本の學者教授達はその紹介と譯述とに没頭しながら自分の國の大學令に日本の大學の使命が如何に規定されてゐるかを全く忘れ果ててゐたのである。大學令の第一條にはかう記されてゐる。「大學ハ國家ニ須要ナル學術ノ理論及應用ヲ教授シ其ノ蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トシ兼テ人格ノ陶冶及國家思想ノ涵養ニ留意スヘキモノトス。粗忽な日本人が譯つて思想善導の味方であるかの如く思ひ做してゐるカントはこの大學令を見て必ずや日本には大學はないと言ふことであらう。今日如何に社會事情が變化したにせよその昔封建勢力との闘争の中に生を享けたヨーロッパ又アメリカの大學がその歴史を省みつつ自由を保持し或は保持せんと努めつつあるに反して日本の大學はその最初から毫末も下からの要求を身に體することなく凡べて上からの統制と育成との下に設立され且つ支配されつつ權力の味方として立つて来たのであつて自由の傳統は少しもこれを有してをらないのである。大學令第一條は日本の文化形態及び學問形態の特質即ち學問を含む一切の文化が道徳而も個人を基礎とするモラルでなく社會的全體に發するエトスとしての國家道徳の下に立つてこれの統制と支配とに服してをることを遺憾なく告げてゐるものである。それはさきに述べた封建的文化形態及び學問形態その儘の姿ではないであらうか。日本の大學は中世の大學である。カントの要求する大學に於いては一切のものが批判に附されたとするならば日本の大學に於いては一切のものが批判を免れてをるのである。だが社會が批判と論議とを許すことはその社會が批判に耐へ得るものを有するとの自覺即ちその社會の原理が眞理の光の下に照されても少しも揺ぐことのないといふ

自信があることを前提とする。日本は自らこの自覺と自信との缺如を證據立ててゐないであらうか。

日本の大學が今日既に文化の進歩のために寄與し得ないことは明白であるが、他方それが文化の進歩を阻むために既に大なる用をなさぬことは國民精神文化研究所その他の施設の出現からしても疑ひ得ぬところであり、これを自然科学に就いて見ても軍部或は大工場に附屬する研究機關の發展と擴大とを通じて漸次その特殊の使命を喪失しつつあるものと見ねばならぬ。新しい文化の進歩は現存秩序としてのノモスを批判に委ねる如き哲學的精神を基礎として即ち原理的には大學の外部に於いてその力と原理とを見出さねばならぬであらう。

参考文献——清水義太郎、社會と個人——社會學成立史。(清水義太郎)

### 地理學

(英 Geography, 獨 Geographie, 佛 Géographie)

- 一 地理學の本質
- 二 地理學の對象
- 三 地理學の方法
- 四 地理學の諸類型

一 地理學の本質 地理學は、從來地球表面に現はれた凡ゆる自然的社會的諸事象——所謂地理的景觀 (Geographische Landschaft) をば、主としてその空間性 (Räumlichkeit) と地的斷束性 (Erdbundenheit) とに於て、把束、記述、乃至は説明する科學として理解されて来た。であるから古くはリヒトホーフエン (R. H. R.

チリガク

Orthofer, 1833—1905) の「地球表面並びに地表面と因果的相互關係に立つ諸現象に關する科學」といふやうな規定とか、近くはバンゼ (H. Banz) の、「地理學は地球表面に關する科學である。それは、或は個別的現象をば、その空間性並びに相互關係性の觀點から探求し、或は全體をば、これに形象乃至は意味を賦與しつゝ、形態化するによつて認識しよう」と追求する。」といふ定義とかは、一應、地理學の科學的特性と本質とに對する規定的な把束として受とることが出来るであらう。

この場合、地理學の科學的本質に關し、斯學が、果して、普遍化的、沒價值的な自然科學と、個別化的、價值關係的文化——歴史科學との孰れの範疇に屬するかといふ新カント主義的設問が豫想されるかもしれない。事實に於ては、地理學一般は、純粹な自然科學としての自然地理學乃至は一般地理學と、明かに歴史的社會科學的方法を以て概念構成を行ふ政治經濟地理學とを兩方の極端とし、その間に無數の系列を形づくるところの多くの部門を含んでゐるために、これ等の地學諸部門を超えて存在する「地理學」そのものの固有の方法を明確に提示することは必ずしも容易ではない。そのためには地理學固有の觀照對象をより一層詳細に分析することが必要となる。

二 地理學の對象 地理學の最も本質的かつ固有な認識對象を形づくるものは、空間的分布の形態に於て、地球表面に現はれてゐる自然的並びに社會的諸事象の全體、即ち自然景觀 (Naturlandschaft) — 山岳、平野、河川、海洋等) 並びに文化景觀 (Kulturlandschaft) — 國家、都市、村落、民族、人種、交通路等) である。しかもこれ等の諸對象は、つねに、一方に於てはそのものの空間的存在

性と地的關連性とに即して認識せられ、また他方に於てはつねに一定の全體的形像性をもつところの地理的單位として把束せられるのであり、この點に於て地理學は自然景觀の領域に於ては、氣象學、地質學、地形學、海洋學、湖沼學等の個別的自然科学から、文化景觀の領域に於ては、民族學、國家學、交通論、經濟學等の個別的な文化、社會科學から自らを區別するのである。リュトゲンス (Litrens) が「我々にとつては地理學は、地球表面と、因果的關聯に於ける地球表面の填充物との理論である。」とし、これを空間科學 (Raumwissenschaft) と呼んでをり、グラーフ (O. Graf) が「地理學はその考察をば、物理學の如くに物理的事象に限ることなく、それかと言つて植物學乃至は動物學の如くに、その研究領域の中に、専ら植物及び動物だけを引入れてゐるのではない。地理學は寧ろ、これ等一切の對象を顧慮し、且これ等一切の對象をば、その凡てを包括する概念の形に於て、一つの統一體にまで綜合してゐるのである。」と規定し、これを普遍主義的傾向若くは全體化と呼んでゐるのはこの爲である。つまり空間性と地的關連性をもつ統一的全體としての地理的景觀——それが地理學固有の認識對象である。

三 地理學の方法 地理學はまた同時に、このやうな對象を把束する場合の、それ自身に固有な方法をもつ。勿論、自然地理學 (physische Geographie) 乃至は一般地理學 (allgemeine Geographie) に於てこそ、一切の地理的現象をば、純然たる自然現象に還元せしめ、凡ゆる個別的なもの、歴史的なものを排除して、一般的なものの、法則的なものを把束しようとする自然科学的觀察方法がとられてをり、従つてそこに氣候型 (Klimatypen) とか、自然的植物集

團 (natürlicher Pflanzenverein) とか、都市乃至は國家の自然地理學的形態とかの自然科学的概念構成が行はれてゐるのであるが、然し、現在地理學の諸部門が凡てこのやうな一般化的、法則樹立的な自然科学的方法のみに従つてゐるわけでは決してない。却つて現在に於ては、グラーフも指摘してゐるやうに、「歴史的多數の地理學者は地理學をば自然科学と呼ぶことを拒否してゐる」のであつて、そこに單純に自然科学的でない第三の方法が、地理學固有の觀察方法として要請されるやうになるのである。

そのために、ヴァクネル (H. Wagner, 1840—1929) は地理學の方法は二元論的——彼によれば、地理學は一方に於ては記述的な素材科學 (Stoffwissenschaft) であるとともに、他方に於てはひとつの精神的な關係科學 (Beziehungswissenschaft) でもあると考へられたい——であると規定し、アルブレヒト・ペンク (Albrecht Penck, 1858—) は、地理學的方法をば、地理的對象は、専ら地圖上の表現によつてのみ觀察することができるといふ點に鑑みて、「マクロスコピーッシュなるもの」即ち視覺的な (makroskopisch) ものとして特徴づけてをり、更にアメリカ合衆國の地理學者デーヴィス (William Morris Davis) は、地理學的方法をば、主として一般地形學に關してはあつたが、かのカント (Immanuel Kant, 1724—1804) ——彼は「屢々、充分な經驗的地盤なくして、彼自身の最小限度の直観を基礎とし、恰も蜘蛛がその巢を紡ぐやうに、自分自身の中から地球構造學的體系を作り出した。」(アディクス) ——の場合と同じやうに、「演繹的」なものとして把束し、最近にはパンゼが、多様雜多な地理的對象の統一結合の手段をば藝術のうちに見出しつつ、

藝術こそが科學的地理學をして、「素材の死せる貯藏所から、生命に溢れ、花咲き亂れた花園にまで變化せしめる」ことがのできるものであり、藝術的觀察方法こそが、地理學をして單なる蒐集・記述の状態から脱却せしめる唯一の路であると主張してゐるのである。地理學的對象たる地理的景觀を、最も具體的に、かつ客觀的に把束するための方法は、冷徹・精緻な自然科学的分析能力と、透徹・慧敏な歴史的直観乃至は構想力を兼ね具へ、更に豊富な藝術的表現力に仕へられたそれであらう。蓋し、地理學的觀察の對象たる地理的景觀(自然景觀並びに文化景觀)は、一方に於ては客觀的自然的世界の一部分としての構造を有し、自然的諸力の作用の下に立つてはあつたが、それはまた同時に、所謂「人間の棲家」乃至は「人間の教育所(リッテル)」であり、つねに一定の歴史的關聯の中に入り込み、特定の社會的構造の中に組み入れられてゐるからである。即ち地理學的自然は、單に普遍妥當的な自然法則に従ふ限りに於ての客觀的、自然科学的自然であるばかりでなく、同時に、特定の歴史、段階、特定の社會構造の關聯の中に、一定の現實の意味をもつところの歴史的、社會的自然として立ち現はれてゐるのであつて、我々はこのやうな對象を眞に具體的に把束するためには、自然科学的分析的方法と、歴史科學的批判的方法とをひとつの世界觀のもとに統一せしめるのでなくてはならない。グラーフもいふ。「我々は景觀の單位をば、地球全體によつて法則的に制約せられ、かつ限定されてをり、しかもまた同時に歴史的關聯の中に入り込める自然的景觀として理解しなくてはならない。我々は自然的景觀のうちに、地理學内部に於ける自然科学的考察と歴史學的考察とを結合する連鎖を見

なければならぬ。蓋し、第一に自然的景觀は自然科学的發展系列の究極點であり、第二にそれは、所謂原始景觀として歴史的發展の出發點であるからである。上述の地理學の二途にとつては、自然的景觀の概念は避くべからざる交叉點である。それ故に自然景觀は文化景觀と同じく、自然科学的考察方法と歴史學的考察方法とをそのうちに於て統一するひとつの概念である。…科學體系内に於て、地理學に對し、歴史學と自然科学との中間の地位を指定、賦與しようとする見解は、實に景觀概念の中に明瞭に顯示されてゐる」と。

四 地理學の諸類型 地理學はその觀察對象の分化に對照して、數理地理學、自然地理學(地形學、氣象學、海洋學、生物地理學)、人文地理學(居住地理學、人口地理學)、經濟地理學(生産地理學、商業、交通地理學)、政治地理學等の諸部門を有つものと考へられる。しかしながら我々は更にその對象把束の諸方法を基準とするこゝとによつて、地理學諸部門をば、物語的、記述的、分析的、構成的、批判的といふやうな諸類型に類型づけることができるであらう。このやうな地理學的把束の仕方における諸類型の對立は、地理學的學史的發展の各段階を特徴づけるものであると同時に、また地理學的現在の諸形態の類型をも形成するものである。

(一) 物語的地理學 (Schildernde Geographie) 地理學の最も古く且素朴な形態は、旅行者が、その旅行に於て得た體驗——各地方の珍奇な風景、自然の驚異、民族の風俗習慣等——をば印象的に語る物語であつた。殊に、ある英雄の行動とか戦争などを、その地理的環境の描寫とともに語り傳へることが、地理學の先驅者となつた。我々はこのやうなものとして、古代の地中海沿岸の自然と民族生活

とを物語つたホメロス(Homeros)の『オディッセウス』、ヴァスコダガマ(Vasco da Gama, 1469—1524)の東洋旅行を取扱ひ、アフリカ海岸諸國とか、印度都市とかの魅力をヨーロッパに傳へたカモアン(Camoes Camoes, 1524—80)の『ルジーアダス』、自由な心情の反映としてのアルプスの自然を憧憬したルツソー(J. J. Rousseau, 1712—78)の『新エロイズ』、自然感情を精神的に深化せしめ、これに新しい表現を興へた自然詩人、マクファースン、サン・ビエール、グーテ、バイロン、ジャン・ポール、ウオーヅウォース、コールリッチ等を擧げることができよう。また地理的景觀、世界形象をば、物語地理學的に構成しようとするのは、屢々第十九世紀の浪漫主義的文學者の手によつて試みられ、例へばテオドール・シュトルム(Theodor Storm)は低部ドイツの陰鬱な美を發見し、シュティフテル(A. Stifter)はボヘミア森林の特殊な美しさを取り出してみせた。その外メリメー(P. Merimee)はアンダルシアの色彩を、コーナル(N. Gogol)はウクライナの草原を、トルストイ(Leo Tolstoj)はコーカサスの高原を、またクーパー(J. F. Cooper)とかロンクフェロー(H. W. Longfellow)はアメリカを、モリエール(J. Moliere)はシャトープリアン(F. R. Chateaubriand)等は東洋を、夫々文學的に描き物語つた。そしてこのやうな地理的物語作者の世界は、第十九世紀以後の世界の交通の擴延とともに東アジア、インド、南洋、シベリア、アラスカ等地球の涯々にまで擴げられたのであるが、我々はそのやうな新しい物語地理學的世界の發見者として、キプリング(R. Kipling)・グリム(H. Grimm)・ラフカディオ・ハーン(L. Hearn)・ジャック・ロンドン(J. London)

ビエール・ロチ(Pierre Loti)等を擧げることができよう。

(II) 記述的地理學(Beschreibende Geographie) 多分に詩的想像によつて粉飾された物語的地理學の中から、又はこれと相並んで、世界の、より客觀的な記述としての地理學が發達してくる。地理的素材を、旅程に従つて配列、敘述した旅行記はこの種のものとして最も素朴なものであるが、かのクセノフォン(Xenophon)の『アナバシス』(Anabasis)——シリアからバビロニアに至るユーフラテス沼澤地方、その草原の動植物等の敘述——はその最初のもので考へられる。その他、第十三世紀の中頃にゴビ沙漠にまで達したルブルック(W. Rubruck)、メソポタミアからタリム盆地を経て支那大陸に至り、支那、日本、スマトラ、セイロン等の事情をヨーロッパに傳へたマルコ・ポロ(Marco Polo)第十五世紀以後の所謂「發見時代」に於ける無數の旅行家——コロンバス、ヴァスコダガマ、ジェラン、ハドスン、タスマン、ビッツ、ロ等——の旅行記は凡てこれに屬する。しかし、近世初期に至り、交通貿易の範圍が世界的に擴大せられるとともに、商人的經濟活動の指針としての世界的知識が現實に要求せられるやうになり、茲に「旅程」を指導概念とする旅行記とは異り、世界の國々の地誌的記述を中心とする「世界誌」(Kosmographie)が現はれてくるのであるが、その代表的なもの、古代に於てはストラボ(Strabo)・中世以降に於ては、ワグネル(S. Wagner)・ヴァルトゼーミューレル(M. Waldseemüller)・ツェルティス(K. Zeltis)・ヘルバーシュタイン(Herbertstein)・ヒューネル(J. Hüner)等である。更に所謂重商主義段階に於ては、ヨーロッパ各地に於ける民族國家の據頭に伴つて、各國家

に關する記述的地理學——所謂「國家誌」(Statenkunde)——が前面に現はれてきた。各國家の凡ゆる國家顯著事項(Staatmerkmal dingeiten)を民俗學的方法によつて統一的表現にまで綜合したアッペンヴァール(Achenwall)とか、各國の個々の基本的勢力——人口、領土面積、陸上・海上勢力等——を比較的方法によつて、統計學的に探究記述したブツシング(F. Busching)などが、この部門の代表者と考へられる。しかし、記述的地理學の最も重要な部門を形づくるものは、第十五世紀以後の商業資本主義時代に發生し、いまもなほ盛に行はれてゐる商業地理學(Handelsgeographie)であらう。このものは、近世初期頭のヨーロッパ諸國民の商業的發展期に於て、商業的實踐のための指導的知識として現實に要請せられたものであり、事實屢々商人地理學(Kaufmannsgeographie)若くは水夫地理學(sailor geography)の名の下に、或はハンザ同盟都市等の商業教育機關に於て教授せられ、或はセーヴァリー父子(C. Savary, Ph. Savary)・ルドウィッチ(Ludovici)・タローム(A. F. W. Cronje)等の手によつて、實踐的市民的知識體系にまで組織せられたのであるが、このやうな商業學的、商品學的乃至は交通學的知識の集積としての商業地理學はいまも尙ほ決して消滅してゐるのではない。かの商業會議所地圖(The Chamber of Commerce Atlas)と、チゾム(G. G. Chisholm, 1850—)の商業地理學書(Hand book of Commercial Geography, 2. ed. 1890)とによつて代表せられるイギリス型商業地理學はその典型的なものと言ふべきであらう。

(III) 分析的地理學(Untersuchende Geographie) 地理學的諸

知識の單なる集積としての記述的地理學は、認識素材の無選擇的な蒐集、對象の外面的な觀察、その無秩序的な敘述等を寧ろその特質とするものであり、そこに獨立科學としての多くの缺陷を含むのであるが、これに對し、最近の物理化學、生物學等の領域に於ける進歩した自然科學的研究の諸成果を地理學の中にとり入れることによつて、自然的、地理的諸事象を單に記述することに止らず、そのものの相互的關聯性と因果性を明かにしようとする試みが現はれてきたことは當然であらう。それは對象の没價值的普遍化的把束と、普遍妥當的法則の樹立とを志向する自然科學的方法をば地理學的概念構成に適用しようとするものであり、従つてそこでは、凡ゆる自然的地理的現象の比較と分類とが何よりも先に重視せられ、例へば山岳はその自然的形態を標準として山稜山、圓錐山、卓狀山等に、河川はその方向を標準として横流河(Querfluss)と縦流河(Längfluss)とに、また本末政治的現象である國家も内陸國、周緣國、島嶼國といふやうに、夫々自然科學的な分析の對象となるものであるが故に、我々はこれを地理學に於ける分析的方法と呼ぶことができると考へる。

記述的地理學の缺陷に對する意識は既に古代から存してをり、ストラボ(イオニア學派)とエラトステネス(Eratosthenes—アレキサンドリア學派)とは、この問題について互に鋭く對立してゐたのであるが、しかしこれに對して分析的科學的地理學が積極的に提示されるやうになつたのは、新しい自然科學が現はれて、自然界の觀察に確實な基礎を興へた第十八世紀後半以後のことであると言つてよい。従つてこの場合に、屢々第十八世紀唯物論とも呼ばれると

この地理的唯物論思想 (Geographischer Materialismus) —— **ボ**  
**ーダン** (J. Bodin)・**モンテスキエ** (M. de S. Montesquieu)・**ヘル**  
**デル** (J. G. v. Herder) 等によつて代表される一面的な自然主義的  
 決定論——が、このやうな分析的自然科学的地理學の發展のために  
 路を平にしたことは注意されるべきであらう。この時代以來現在に至  
 るまでの間に、このやうな類型を代表する地理學者は、**ヴァレニウ**  
**ス** (Bernhard Varenius, 1622—50)・**フンホルト** (A. Humboldt,  
 1769—1859)・**リッテル** (K. Ritter, 1779—1859) 及び所謂リッテル  
 學派の人々 (例へば **アンダー** (K. Andree)・**ノイ** (K. Neumann)  
**ン**・**ホフマン** (A. Hofmann)・**コール** (J. G. Kohl)・**ルクリエ** (E.  
 Reclus) 等)・**ペツシエル** (O. Peschel, 1820—75)・**ラッツェル** (F.  
 Ratzel, 1844—1904)・**リットホーフェン** 及びその學派の人々——例へ  
 ば **ヴァグネル**・**ズーパン** (A. Supan)・**マルテ** (F. Martke)・**ペンク**  
**(A. Penck)**・**パーチ** (J. Partsch)・**ハッセルト** (K. Hassert)・  
**シュトネル** (A. Hettner)・**シヒューテ** (O. Schlüter)——  
 あるが、このうち重要なものは、その生涯の大著『宇宙』 (Kosmos)  
 に於て、自らの研究目標をば「余の目指す中心目的は、自然對象の  
 凡ゆる現象をその一般的關聯に於て理解し、自然を内部的諸力によ  
 つて動かされ、生氣づけられる一つの大きな全體として表現しよう  
 と努めることにある。」と規定した **フンホルト** (Alexander v. Hum-  
 boldt, 1769—1859) 地理學の本質を、「地理學は、地球を、獨立  
 的な單位として、凡ゆる様相、現象乃至は關係に於て取扱  
 ひ、この統一的全體と人間並びに人間創造主との關聯を顯示する  
 科學であり、従つて地理學の主要原理は自然の現象及び形態と人

類との關係である。」といふやうに表現した **リッテル**、このリッテルの  
 「地理的目的觀」 (Geographische Teleologie) を批判し、これを土  
 地形態の比較地理學的方法と置換へることによつて「眞に科學とし  
 ての自然地理學を確立した」 (デイキンスン) **ペツシエル**、自然地理學  
 の諸概念を「人類地理學」乃至は「政治地理學」に適用することに  
 よつて、「居住空間」 (Siedlungsraum)、「政治的位置」、「自然的境界」等  
 の諸概念を定立した **ラッツェル** 等である。これ等は孰れも分析的地  
 理學の創設者乃至は促進者として巨大な歴史的役割を演じたばかり  
 でなく、現在の地理學的諸研究に對しても壓倒的な影響を及してゐ  
 るのである。

(四) 構成的地理學 (Gestaltende Geographie) 分析的地理學が  
 従來の錯綜した要因をば、因果説明的な自然科学の助力の下に、ひと  
 つの統一的な作業の鑄型に嵌め込み、これによつて、單なる知識の  
 集積としての地理學をひとつの獨立科學にまで高めた功績は何人も  
 否定できない。然しながら凡ての地理學諸部門を全く純粹に自然科  
 學的に構成しようとする例へば **ゲルラント** (G. Gerland) の如き見  
 解は寧ろ稀である。さればこそ **グラウ** もこれを批判しながら、こ  
 の觀點からして **ゲルラント** は人間をその文化的創造物一切とともに  
 地理學の領域から排除すべしと主張したのである。併しながらこの  
 様な見解を有するものは **ゲルラント** 一人に止まつてゐる。地理學的  
 探究は彼の提案を全く問題としなくなつてしまつた」と言つてゐる  
 のである。蓋しそのやうな普遍的、抽象化的方法によつて把束さ  
 れた概念は客觀的ではあるけれども同時に枯淡、貧寒なものであり、  
 それによつて地理的事象の具體的な全體性を生き生きと把握するこ

とができないからである。つまりそのやうな對象把束はひとつの科  
 學を作り出すかもしれないけれども、決して地理學とはならない。  
 地理學が必要とするものは、對象の概念的な分析ではなくして、形  
 象的な描寫であり、個別的な探究ではなくして、全體論的な觀照であ  
 る。かくして分析的自然科学的地理學の代りに、對象に對する情感  
 的な感情移入を行ひ、その全體論的關聯を象的に把束し、これを藝  
 術的に表現するところの所謂「構成的地理學」 (Gestaltende Geo-  
 graphie) が立ち現はれてくるのである。このやうな地理學類型の  
 最も有力な代表者 **バンゼ** (K. Bause) は、この構成的地理學は自  
 明のことながら分析的地理學の巨大な遺産——因果的相互關聯性——  
 を繼承するのではあるが、然しそれは、このものを概念の把束に  
 のみ限定するのではなく、それを超えて、國土の形象的なものにま  
 て適用しようとするのである。それは關聯性を單に認識するのでは  
 なく眼に見えるやうにし、その中に因果的にしてかつ形象的な相互  
 關聯性を求める」と。

この場合 **バンゼ** 的構成的地理學は次のやうな二つの焦點——「景  
 觀とは何であるか。それは我々の周圍にあつて、ひとつの可視的な  
 結合を形づくつてゐるところの凡ての事象であり、地理學的表現を  
 用ふるならば、地表被覆、土壤及び氣圈の綜合であり、従つて形態、  
 光線、色彩及び運動の結合である。このやうな自然の斷片は、我々  
 がその中に我々の本質の一部分を發見したり、それから情感的な心  
 像を感受することによつて、我々の眼を通じ、我々の頭腦と心臓と  
 の中に景觀 (Landschaft) となる。」といふやうに理解された自然  
 景觀と、「景觀、殊に祖國の景觀の人間の表現」として把束された國

民性 (Volkstum) とをもつものであり、このやうな「景觀の中の  
 人間と、人間のうちに於ける景觀こそが地理學の主要問題である。」  
 と考へられるのであるが、我々はそこに、國家を特殊の自然景觀と  
 その中に哺まれる國民との有機的統一體と考へる浪漫主義的國家觀  
 を見出すことができるであらう。

この點に於て **バンゼ** 的構成的地理學は、**キルマン** (R. Kjellen,  
 1864—1922) に於て創始せられ、**ハウスホーフェン** (K. Haus-  
 hofer)・**マウ** (O. Maull)・**オノスト** (F. Obert)・**ラウテンザ**  
**ック** (H. Lautensack) 等によつて繼承、發展せしめられてゐる特殊  
 の政治地理學、所謂地政治學 (Geopolitik) と共通するところが少  
 くない。即ち **チレイン** はその地政治學の本質を「地理的有機體と  
 しての、或は空間現象としての、それ故に國土、版圖、領土或は最  
 も特徴的にいへば帝國としての國家の理論である」と規定し、**ヘニ**  
**シュ** (R. Hennig) は「地政治學は、地理的自然制約性が國家に及  
 ぼす影響を取扱ひ、これによつて國家的構成物の、有機體と同じ様  
 な發展と變化、即ち國家的生活の作用諸力を研究するものである。」  
 といふやうに把束し、そこに可なり強度な國家主義的色彩を露呈し  
 てはゐるけれども、國家の有機體的生命性と凡ゆる自然的地理的  
 現象の全體論的構成とを前面に立たしめる點に於て、それは明に構  
 成的地理學の範疇に屬するものである。藝術的地理學の主張者 **バン**  
**ゼ** が、最近の切迫せる情勢の下に高度の軍事的・ファシズムの性  
 格をもつ「國防科學 (Wehrwissenschaft) としての地理學」を提唱  
 してゐることは決して不思議ではな。

(五) 批判的地理學 (Kritischer Geographie) 最近人文地理

學殊に經濟地理學の分野に於て、自然的地理的事象をば、それ自體として、抽象的、固定的に觀照する代りに、一定の社會關係と歴史過程との間に、具體的、現實的に把束しようとする若干の企圖が現はれてゐるが、我々はこのやうな、ホラビン(J. F. Horabin)・ウィットフォージェル(K. A. Wittfogel)・ロシアの諸地理學者等によつて新しく提出されてゐる方法を、地理學に於ける批判的方法と呼ぶことができるかと考へる。

他の諸類型の地理學に於ては、凡ゆる自然的所與はそれ自體として存在として、即ち分析的地理學に於てはつねに自己同一的客觀的な自然科學的自然として、構成的地理學に於ては不變永遠的な景觀乃至は有機的生命的な統一體として、立ち現はれてゐたのであるが、この類型の地理學に於ては、それは一定の社會的生產關係の中に於ける何等か "für sich" なものとして把束される。それ故に、例へば經濟地理學に於ける「自然」は、それ自體として直接にはなく、つねに一定の具體的な社會的生產過程を通じて初めて現實的に作用するものと考へられる。詳しく言ふならば、凡ゆる自然的諸條件は、それが現實の經濟過程のうち姿を顯す場合には、つねに、かの人間労働過程の三つのモメント——労働力、労働對象、及び労働手段の孰れかとして立ち現はれるのである。であるから「經濟地理學に於て人間と自然との相互關係を分析するに當つては、自然的環境が人間に及ぼす影響といふ立場に立つてはなく、相異れる社會的發展段階に於ける人間の、自然的事象に對する關係といふ觀點からこれをなすのが唯一の正しい方法である。」(エム・ボグダノフ)と考へられるのである。

従つてここでは、凡ゆる自然的地理的所與は、分析的地理學の場合のやうに不變的・自己同一的な存在としてではなく、社會的生產力の變動過程に於て不斷に變化するものとして現はれてくる。地理的要因は、或る意味に於て、またそれだけ切り離して考察すると、變化もしてゐないし、また變化するものでもないといはれるかもしれない。成程、地理的主要要因——水陸の分布、氣候等——は、人類の歴史の如何なる期間よりも遙かに長い間に亘り、大體に於て變化がなかつたといひ得よう。だが併し、かかる主要要因を、人類の社會的及び經濟的發展に對する關係から見れば、その効果と重要性とは、不斷に變化してゐるのである。(ホラビン)この場合、我々をとり纏る自然的世界が、人間歴史の過程の中に、質的變化を與へられる仕方に於て二つの態様を區別することができよう。即ちその一つは生産的人間がその労働力によつて、いはば物理的・事物的・直接的に自然を變改せしめる場合——例へば排水、灌溉、運河の開鑿等——であり、他はある自然的條件の社會的意義乃至は効果が、人間歴史的發展段階に對應して、相對的に變化せしめられる場合であるが、ウィットフォージェルはこの二つのものを、夫々(一)自然の變貌(Transformation der Natur)(二)自然の特定部分若しくは特定性質の現實化(乃至は非現實化)(Die Aktualisierung (oder Entaktualisierung) bestimmter Teile oder Eigenschaften der Natur)と呼ぶ。

このやうに自然的地理的對象が一定の社會的聯繫と歴史過程との間に具體的に把束せられるとき、地理學は初めてひとつの現實科學(Wirklichkeitswissenschaft)となるのであるが、そのとき地理

學は明かにひとつの社會的歴史科學として現はれてくるのである。

参考文献——R. E. Dickinson and O. J. R. Howarth: The Making of Geography, 1933. A. Hettner: Die Geographie: Ihre Geschichte, ihr Wesen, und ihre Methode, 1927. E. Wisotzky: Zeitströmungen in der Geographie, 1897. Vivian de Saint-Martin: Histoire de la géographie, 1873. E. Barthe: Die Geographie und ihre Probleme, 1932. 綿貫勇彦、地理學方法論 レニングラード大學經濟地理學研究所編、橋本弘毅譯、經濟地理學の方法論。(小原教士)

### ドイツの哲學

- 一 現代ドイツ哲學の展望
- 二 科學的哲學
- 三 生の哲學
- 四 大戰以後の主要なる傾向
- 五 ナチスと哲學

一 現代ドイツ哲學の展望 哲學の如き學問は社會の現實の動きとは凡そ關係のないものやうに思はれがちである。勿論哲學をば直接社會の現實を生かして取扱ふ經濟學、社會學、歴史學等々の學問と比較するならば社會の情勢を反映する程度は遙かに少いと云はれるであらう。然し若し吾々が哲學の與へる真理内容とか、それに至る認識方法とかといふやうな方面をのみ觀察するに止らずして哲學の科學的形態の如き方面に注意を向けるならば、そこには矢張り社會の現實と哲學の形態との間に或る一定の關聯があることを看過するわけにはゆかない。

### ドイツノテツガク

哲學は一定の超時代的な真理を與へることを標榜するとは云へ、他方その成立の事情から云ふならば、最も現實的な要求よりして形成されてゐるが故に反面には必ず時代のまた社會的情勢を現はしてゐる。むしろ哲學に課せられた課題はかかる現實的地盤の上に立脚しながら、然も猶ほ如何にして永遠なる真理を樹立することが出来るかあると云つてもよい。超時間的なイデーにその思索の中心を集中させたかのヘーゲルといへども既にかゝる事情を看抜いてゐた。個人に關して云へば、人は皆もとよりその時代の子である。哲學といへども亦さうであつて、思想に於いて把握されしその時代である。といふヘーゲルの言葉はそのことを明瞭に語つてゐる。

吾々が今現代ドイツに於ける哲學の概觀を與へんとする場合に當つても、そのことが念頭に置かれねばならぬ。現代ドイツの社會情勢の急速の變化はその哲學にも著しい影響を與へずにはをかない。哲學の研究方法、その立場、その動向の動きの多彩なることは他の國の學界に於けるよりも遙かに甚しいものがある。このやうな現代ドイツ哲學の多彩絢爛なる發達變化の鳥瞰圖とも云ふべきものを提供するに筆者に課せられた課題なのである。

ところで、かかる課題を果さんとするに當つてまづ問題となるのは現代といふ概念を如何に規定するかといふことである。この概念の嚴密な規定は如何なるものであるかといふやうなことはさて置いて今は便宜上現代哲學といふことをば大體十九世紀末期のカント哲學の復興に始つて以來、殊に今世紀に入つてからの哲學といふことに限定しようと思ふ。これは少くともこの時期より以後現在に至る迄はドイツ哲學の潮流は或る一貫した線を貫いてゐると考へられる

からである。そしてその上、前世紀末にカント哲学が復興せられる以前とそれ以後との間には、或る明確な断層を認めることが出来るからである。即ち近世に於けるカント (Immanuel Kant, 1724—1804)・フョーテ (Johann Gottlieb Fichte, 1762—1814)・シェリング (Friedrich Wilhelm Joseph Schelling, 1775—1854)・ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770—1831) 等に依つて代表されるいはゆるドイツ観念論の偉大なる哲学系統は十九世紀の中頃には既に氣息奄々としてをり、哲学の成立そのものに對しても深い悲觀的な氣分がドイツの學界を支配してゐた。哲學的研究は唯僅かに歴史的研究の方面に幾らか活潑さが現はれるにすぎなかつた。かゝる時期に當つて哲學の建設をカント哲學の復興に依つて行はんとする氣運が起るに至つたのである。

かゝる氣運を引き立てるに與つて功績があるのは當時の唯物論的世界觀に對する批判的研究をなせるランゲ (Friedrich Albrecht Lange, 1828—1875) の有名な著書 *Geschichte des Materialismus*, 2 Bde. 1866. である。またこの書物よりも前にカント哲學を研究し、かつその正當なることを主張したリープマン (Otto Liebmann, 1840—1912) の處女作たる *Kant und die Epigonen*, 1865. も亦強き影響を及ぼしてゐる。この著書は當時のいはゆる「カントに歸れ」なる合言葉を作つた原因になつたものである點に於いて歴史的な意義を有する。

このやうに現代ドイツ哲學がカント哲學の復興を以て出發したといふことは決して偶然ではない。丁度カントが十八世紀に於ける懷疑論的空氣をその批判主義的方法に依る哲學を樹立することに依つ

て打開したやうに、現代のドイツ哲學も亦カントに倣つて批判哲學を再興して哲學に科學的根據を與へんとしたのである。然かも現代ドイツ哲學がカント哲學の復興とともに出發すると同時に、またその進展の方向はドイツ観念論の進行と同様に、カントよりヘーゲルへ向つてゐる。人は若し指摘せんと欲するならば、新カント主義に續いて新フイヒテ主義、新シェリング主義、新ヘーゲル主義を、否、新フリース主義さへも擧げることが出来る。或る論者の語法を以てすれば百年後の現代にドイツ観念論哲學の「反復の道」を現代のドイツ哲學は辿つてゐると言へるかも知れぬ。然し勿論これは皮相なる解釋である。一見そのやうな「反復の道」が辿られてゐるやうに見えても、その本質に於いては根本的な差異を認めざるを得ない。ドイツ観念論哲學の系統は全體としてはカント哲學の延長と見做すことが出来る。然し現代に於いては、たとひカントの再生を以て出發せしむるにせよ、根本的にはカント哲學よりの疎隔、否、或る意味ではカント哲學への對立がその特質を形成してゐるやうに見える。もつと突込んで言ふならば、カント哲學を再興せる新カント學派といへどもその根本的な點に於いて決してカント哲學と同一ではない。

このやうに考へるならば、吾々は現代ドイツ哲學に矢張り特有な性格と、固有な問題とを認めざるを得ないのである。勿論現代ドイツに於ける哲學者達に無意識にしろドイツ観念論哲學の繁榮に憧れて、その再来を希つてゐることは言へるであらう。それは彼等の偉大なる傳統であり遺産であるものに對する尊敬より起ることとして當然である。然しそのやうな主觀的な意圖を現實は裏切ること躊躇するものではないし、またそこにこそ吾々は現代のドイツ哲

學の特質を認めることが出来るやうに思ふ。

このことを外見上明瞭ならしめるのは、現代のドイツには過去に於いて見られたやうな巨大なる哲學體系が全く影を潜めてしまつたといふことである。勿論卓越せる體系的哲學者達に依つて體系建設への努力は拂はれてゐる。然しそのやうな努力にも拘はらず、もはや過去に見られたやうな巨大なる體系が見られぬことは現代ドイツ哲學の一の必然的な運命であり、そこにまたその特質を暗示する何物かある。現代ドイツに於いて體系らしい體系を作つた者は僅かにローベン (Hermann Cohen, 1842—1918) だけである。それ以外の代表的な哲學者の孰れもがその體系を示すべき著書を未完成のままに残してゐる。そしてそれが現存せる哲學者であつても、その完成せられる日を期待する吾々の希望は甚だ薄いのである。例へばリツケルト (Heinrich Rickert, 1863—) の *System der Philosophie*, 1921. ヴォルツマン (Edmund Husserl, 1859—) の *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und die phänomenologische Philosophie*, 1913. にしても乃至はハイデッゲル (Martin Heidegger, 1889—) の *Sein und Zeit*, 1927. にしても孰れも第一巻が出版されたまゝである。このやうな現象は勿論彼等が將來に於いても全く體系を完成させぬであらうといふことを断定せしめるものではないかも知れぬが、哲學も時代の子であるとするれば現代ドイツの現實の變化のあはたしきは吾々をしてそのやうな斷定を承認せしめるのである。

二 科學的哲學 現代ドイツの哲學がカント哲學の復興に始まることは既に述べた所である。ランゲやリープマンの努力を受け繼い

ドイツノテツガク

てカント哲學の批判主義的方法を復活し且つ發展せしめることに依つて眞に哲學を科學として樹立することに成功した哲學者達は普通新カント主義者 (Neukantianer) と稱してゐる。これらの學者の二つの大きな系統としては、いはゆるマールブルク學派 (Marburger Schule) とバーデン學派 (Badischer Schule) とがある。

マールブルク學派の建設者はローベンである。彼の著 *Kant-Theorie des Erfahrung*, 1871. はカントの哲學を原典に即つて忠實に解説せんとせるもので、批判哲學の樹立にとつて極めて大きな功績を有してゐる。然しローベンの一層大なる功績はカントの哲學は畢竟人間意識の生産の仕方が科學、道徳、藝術の三つの文化のうちには現はれるものとして、是等の先天的根據を確立せるものであると考へて、彼自身この三つの文化領域の先天的根據をば新たに確立せんとした。即ち *Die Logik der reinen Erkenntnis*, 1902. *Die Ethik des reinen Willens*, 1904. *Die Aesthetik des reinen Gefühls*, 1911. の三書がそれである。ローベンと同じくこの派の代表者と看做される者にはナトルプ (Paul Natorp, 1854—1924) がある。彼の *Allgemeine Psychologie*, 1912. は一種の心理學の哲學とも言ふべきものであつて、注目するべき著書である。この書物に於いては彼は心理學の對象は意識の全内容であるとなし、また心理現象と物理現象とはつねに相關關係にあるものであることを説いて、いはゆる相關主義的一元論 (Korrelativistischer Monismus) を主張してゐる。なほ彼は倫理學、社會哲學、教育學、自然科學の方法論等多方面に亘つて夫々功績を残してゐる。代表的な著述としては上述のもの他に *Die logischen Grundlagen der*



exakten Wissenschaften, 1910. Sozialpädagogik, 1899. Sozial-Idealismus, 1920. がある。なほマールブルク學派に屬する者乃至はこれに近い立場を採れる者としてシュタムメル (Rudolf Stammeler, 1856—) シュタウテンゲル (Franz Staudinger, 1849—1921) フォルンデル (Karl Vorländer, 1860—) シュタットマン (August Stadler, 1850—1910) テスマン (Kurd Lasswitz, 1848—1910) ヴーヴェルト (Arthur Liebert, 1878—) カシーナル (Ernst Casirer, 1874—) ゲールラント (Albert Görland, 1869—) キンケル (Walter Kinkel, 1871—) ブンナン (Arthur Buchenau, 1800—) 等の名を擧げることが出来る。

バーデン學派乃至ドイツ西南學派と稱ばれる新カント學派の一派は元來はロツン (Hermann Lotze, 1817—1881) 及びクローニンツ (Kuno Fischer, 1824—1907) の影響を受けながら、カント解釋に新しい一面を切り開いたヴァンデルバント (Wilhelm Windelband, 1848—1915) に依つて基礎が置かれた。ヴァンデルバントは哲學をば普遍妥當なる諸價值に關する批判的科學と規定して、思惟に於ける眞理の、意志及び行爲に於ける善の、感情に於ける美の普遍的價值を批判主義的方法に依つて探究すべきことを哲學の課題と考へた。彼は勿論カントの哲學を復活することを必要と認めながら、それと同時に「カントを理解することはカントを超越することである。」と稱してカント哲學の精神を活かすとともに擴張した。かくてカントに依つては表面に現はれることがなかつた歴史の問題が彼に依つて批判哲學的に取扱はれるに至つた。この意味に於いて自然科學と歴史との原理的な差異を論じた Geschichte und Naturwi-

ssenschaft なる一八九四年の講演の論文は歴史的な一文獻である。

彼の著書は Lehrbuch der Geschichte der Philosophie, 3. Aufl. 1924. Einleitung in die Philosophie, 3. Aufl. 1923. である。彼の見解を一層發展させていはゆる價值哲學 (Wertphilosophie) の體系的な研究に成功したのはリッケルトである。彼の努力はまたヴァンデルバントの研究を受け繼いで歴史科學的方法論的研究に向けられた。Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, 3. Aufl. 1921. はこの方面に於ける一礎石を置いたものである。また彼の價值哲學を建設するための認識論的研究をなす Der Gegenstand der Erkenntnis, 4. Aufl. 1921. 等は歴史的なものとはなつたが注目すべきものであることには渝りはない。この學派に屬する優秀なる學者ラスク (Emil Laak, 1875—1915) は妥當性の問題に就いて卓越せる研究を遂げたが、未だ眞の體系を建設することなくして夭折した。死後、著述が纏められて Laaks Gesammelte Schriften, 3 Bde. として出版されてゐる。なほこの學派に屬するものと看做されるものには、メーリス (Georg Mehlis) タローネル (Richard Kroner, 1884—) クリゲル (Eugen Herrigel, 1884—) グロックネル (Hermann Glockner, 1896—) 等がある。

なほウホ (Bruno Bauch, 1877—) の Wahrheit, Wert und Wirklichkeit, 1923. の如きは矢張りこの學派に極めて近き立場に立つものである。同じこの學派に屬する者ではないがカントの批判哲學の精神の鼓吹に一生を捧げたリール (Alois Riehl, 1844—1924) の Der philosophische Kritizismus und seine Bedeutung

für die positive Wissenschaft, 3 Bde. 3. Aufl. 1924. の名も逸すること出来ない。

哲學をば一の科學として樹立せんとする試みはこの新カント學派以外の色々の立場からもなされてゐる。その中でも現代最も廣き範圍に亘つて影響を興へた立場の一つはフツセルの現象學 (Phänomenologie) のそれである。フツセルは最初數學の哲學的研究をしてゐるうちに、凡ゆる心理主義的傾向に反對して先天的な純粹論理學の基礎の上に哲學を建てようとしたのであつて、かゝる努力が Logische Untersuchungen, 2 Bde. 2. Aufl. 1913—21. となつて現はれた。然し後には彼は純粹現象學を以て眞の哲學の基礎學であると考へるやうになつた。純粹なる現象とは凡ゆる心理的・物理的な性質を排除した後に純粹な本質直観 (Wesensschau) に依つて得らるべきものである。かくの如き現象學的方法に基づく哲學は嚴密科學としての性格を有つといふのがフツセルの主張するところである。この學派の中から出た學者としてはハイデッゲル、ブエンデル (Alexander Pfänder, 1870—) リンケ (Paul F. Linke, 1876—) ガイゲル (Moritz Geiger, 1880—) 等がある。一九一三年以來この學派の年報も出されてゐる。なほフツセルの初期の立場に甚だ類似した論理主義的傾向を採れるマイノンテ (Alexius von Meinong, 1853—1920) の對象論 (Gegenstandstheorie) なるものがある。

これらの新カント學派や現象學派とは立場は異なりながらも哲學を以て科學的研究の原理を基礎づけるものと考へる點では、それらと共通點を有する者としては論理學的研究の著述 Wahrheit und

Wirklichkeit, 1926. を出せるハインリッヒ・マイヘル (Heinrich Meier, 1867—) 及び Philosophie als Grundwissenschaft, 1910. の著者ノームケ (Johannes Rehnke, 1848—1930) や實在論的傾向を示す Die Realisierung, ein Beitrag zur Grundlegung der Realwissenschaft, 3 Bde. 1912—20. の著者キルペ (Oswald Külpe, 1862—1915) 等が擧げられる。

三 生の哲學 こと言はれてゐる生の哲學は最廣義に於けるそれであつて、哲學をば嚴密に科學的方法に基かねばならぬと考へて、主として方法的乃至は認識論的な研究に主力を注ぐ前述の科學的哲學に對立して哲學を以てまづ何よりも人間の生に根柢を置くものとして考へ、世界觀の樹立にその努力を集中させる哲學のことを謂ふのである。

かゝる方面に於ける最も卓越せる然も最も影響力ある研究を残せる者はディルタイ (Wilhelm Dilthey, 1833—1911) である。彼は生の表現を取扱ふものとして精神諸科學を規定し、哲學をば精神科學である限り矢張り生の構造を探究することに依つて基礎付け得べきものとしてゐる。それ故彼に於いては普遍妥當なる現實認識や價值規定や目的設定の構造聯關を考察する説明的分析的心理学が哲學の基礎學であると考へられてゐる。かくして彼は世界觀の存立を説明するに當つてもかゝる心理學的研究に依つて行ふのみならず、また彼は歴史的に出現せし諸の世界觀の存立をかゝる方法に依つて説明せんとしていはゆる世界觀學 (Weltanschauungslehre) を提唱してゐる。これは歴史的な諸の哲學體系をば哲學的に研究するものとして、いはば「哲學の哲學」(Philosophie der Philosophie) と

も云はれるべきものである。また生の表現物を理解する技術として解題といふことが重要視される所から彼は解題的方法をも哲學の研究に採用してゐる。彼の數多くの論文は Dilthey's Gesammelte Schriften, 9 Bde. の中に大部分收められてゐる。彼の周圍に集つた學徒達の中からはフリッシュアイゼンケーレル (Frischeisen-Köhler, 1878—1923)、ミンナト (Georg Misch, 1878—) ノール (Hermann Nohl, 1879—)、シュプランゲル (Eduard Spranger, 1882—) 等の卓れた生の哲學者が輩出してゐる。ミンナトの Lebensphilosophie und Phänomenologie, 1930. とか、シュプランゲルの Lebensformen, 5. Aufl. 1925. とかは注目すべき文獻である。

ディルタイに並んで生の哲學の代表的哲學者としてはジンメル (Georg Simmel, 1858—1918) が挙げられるであらう。ジンメルは一層繊細な分析力を持つと同時に研究が極めて断片的であるといふ反面を有してゐる。シーマン、ハウエル、ニーチェ、ゲーテ、レンブラント、カント等に關する著述に於いては、かゝる特質が最も明瞭に現はれてゐる。然し他面に於いて Einleitung in die Moralwissenschaft, 3. Aufl. 1910. Soziologie, 3. Aufl. 1923. Probleme der Geschichtsphilosophie, 4. Aufl. 1921. Philosophie des Geldes, 4. Aufl. 1922. 等に於いて比較的纏つた形で研究がなされてをり、そして倫理學、社會學、歴史哲學、經濟哲學等の夫々の領域に少なからぬ影響を興へてゐる。

生の哲學の領域に於いて影響力の大きな學者としては歴史家ではあるがランブント (Karl Lamprecht, 1856—1915) やリントネ (Theodor Lindner, 1843—1919) を數ぐるゝと出来る。また

社會學者のシュレーリヒ (F. C. Müller-Iyer, 1857—1916) も生の哲學の系統に屬する。然しまた自然科学の研究者の方面よりも生の哲學者に屬すると目すべき人を擧げることが出来る。勿論是等の人々に於いては實證主義的傾向が一層濃厚に現はれてゐる。例へば Die Welt als Tat, Umrisse einer Weltanschauung auf naturwissenschaftlichen Grundlage, 7. Aufl. 1925. の著者ライナク (Johannes Reinke, 1849—) や Philosophie des Organischen, 2 Bde. 2. Aufl. 1921. の著者エリーク (Hans Driesch, 1867—) の如きがやうである。

然しまた他方に於いては非合理主義的乃至は直觀主義的な立場からして生の哲學に歸着する者もある。ディルタイやジンメルにもやういふ一面がある。感情移入説 (Einfühlungstheorie) を説くリップス (Theodor Lipps, 1851—1914) などはその良き例である。ニーレル＝フナイエンホルス (Richard Müller-Freienfels, 1882—) は、その Irrationalismus, 1922. や Metaphysik des Irrationalen, 1927. に於いて非合理主義の立場を闡明してゐる。またレーナウ (Walter Rathenau, 1867—1922) は政治的には合理主義を採るやうに見えるが、ブルグソン (Henri Bergson, 1859—) の影響の下に立つて非合理主義的思想を表明する。Mechanik des Geistes, 1922. の如き著述を有してゐる。又コンパツケル (Emil Hamacher, 1885—1916) の Hauptprobleme der modernen Kultur, 1914. やステルン (William Stern, 1871—) の Person und Sache, System des kritischen Personalismus, 3 Bde. 1906—1924. のうちに認められるものは矢張り非合理主義的な立場であ

る。そして又多數の讀者を有するシュペンゲル (Oswald Spengler, 1880—1936) やカイゼリング (Frat Hermann Keyserling, 1880—) の書物を貫く精神は直觀主義の一種である。前者は Der Untergang des Abendlandes, 2 Bde. 1918—22. の、後者は Reisegebuch eines Philosophen, 2 Bde. 1919. の著者として普通知られてゐる。

さて以上で生の哲學の傾向に屬する主要なる哲學者を列挙したのであるが、このやうな傾向は如何なる意義を有すると考へられるであらうか。新カント學派を述べるに際しても注意したやうにカント哲學の復興と云つてもそれは決して單にドイツ觀念論の復活ではなくしてその問題の提出の仕方に於いてカント哲學そのものとは違つた姿を有してゐた。そのことは西南學派に於いては殊に明かである。ところで生の哲學の傾向に於いては更に進んでドイツ觀念論の對蹠的なものを有してゐる。かの體系的であるか否かといふ點に付いて見ても生の哲學が断片的、非體系的なる點に於いてはまさにドイツ觀念論とは反對である。これは生の哲學が元來生の具體的現實性よりの抽象化を嫌つてそれへの忠實さを望む性質をもつといふことからして全く當然なことである。

然かもこの生の哲學の諸傾向が科學的哲學の成立の時期に既に一方に根強く存してゐたといふことは現代ドイツ哲學の特質を顧る上に忘れてはならぬことである。そして大戰以後に於いては生の哲學の傾向は一層盛になつたとは言ひ得ても衰へたとは言ふことは出来ないのである。

四 大戰以後の主要なる傾向 大戰以後のドイツ哲學界の傾向は

## ドイツノテツガク

勿論大戰以前からの哲學の引繼ぎであつて、特に大きな轉回をなしたとは見られない。然し戰爭の如き大きな事件や、それに引續いて現はれた社會的政治的の諸の出來事が哲學に對しても影響を興へずにはおかない。即ち大戰以後の社會的な不安動搖の現實は人々をしてその反動として何か絶對的なものを求めることに驅り立て、かくて哲學の研究熱は一層熾烈になつたと言へる。然かもかゝる動因は何か安定觀を興へ得るやうな絶對者を定立する哲學を撰ばしめた結果宗教的傾向が哲學のうちに一層強く現はれたことは否定出來ない。然しその反面に於いて人々の注意を強く惹いた多くの社會的政治的事件はまた彼等をして社會とか歴史とかいふやうな現實的な問題に關心を持たしめた結果として哲學のうちにもかゝる現實的な問題が一層多く取扱はれる傾向を生んだ。

かくして大戰以後のドイツ哲學の傾向は一方歴史社會的な問題を取扱ひ得る如き方法を求めんとする點に於いては現實化的な傾向を探ると同時に他方では宗教的な世界觀が強くその背後に參み出てゐるやうな立場が求められるに至つた、と言ふことが出来る。その最も著しき例として吾々はシェーレル (Max Scheler, 1874—1928) とハイデッゲルとの哲學を擧げることが出来る。シェーレルの哲學が根本的にはカトリック的であることは言ふ迄もない。然かもシェーレルの哲學はマルクス主義的な社會の上部構造と下部構造との概念をマルクス主義的ではないが用ひて、社會の歴史の動態を説明せんとする。ハイデッゲルの哲學に於いては、彼がフッサールの門下生でありながら單に現象學的な本質直觀を説くに止らずして、人間の有限的存在を説き、存在の歴史性を解明して、然も無なる絶對

者を根柢に置いてゐる。この二人の哲學者が大戦後のドイツに於いて勢からぬ尊敬者を有してゐるといふことは以上の吾々の見解を最もよく証明するものである。更にまた前述の生の哲學の傾向が大戦以後一層盛になつたといふことも亦人々が哲學的世界觀に對して一層強く渴望を感じ出したといふことを示すに他ならないのである。このやうな大戦以後のドイツ哲學界に於いて最も強く人々の關心を惹いてゐるところの問題を私は便宜上歴史と辯證法と實存との三つの問題群として説明しようと思ふ。

**a 歴史の問題** 歴史に對する關心はもとより大戦以後に始まるものではない。ヴィンデルバントに依つて歴史學の方法論の問題が取扱はれてゐることは前述せる如くである。ヴィンデルバントの見解を受け繼いでそれを一層發展せしめたリッケルトの歴史科學の方法論を扱つた大著 *Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung* は一九〇二年に出版されてゐる。かゝる歴史學方法論の問題が新カント學派に取扱はれたことがこの學派をしてカント哲學とは異つた問題提出の仕方をさせてゐることを示すといふことは既に述べた所である。然し大戦以後哲學に於いて歴史の問題が多く取扱はれるに至つたのはかゝる歴史學の方法論の問題を通じてではなくして、むしろ歴史的實在そのものを如何に規定するかといふ問題提出の仕方に依つてである。この意味に於いては實證主義的色彩に富む生の哲學の立場より歴史的實在を取扱へるディルタイの哲學の方がこの分野に對しては一層重要な意義を有してゐる。ディルタイの歴史を取扱つた最も主要な著述である *Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften*

は大戦より少し前の一九一〇年に既に出版されてゐる。そしてこれが彼の全集の第七卷にそれと關聯する諸論稿と共に收められて刊行されたのは一九二七年であるが、これらの論稿が發表以後多くの追隨者を見出したことは論を俟たない。例へばロータツケル (Erich Rothacker) の *Einleitung in die Geisteswissenschaften*, 1919, 2. Aufl., 1930. の如きはその適例である。これ以外になほ同じ著者に依る *Logik und Systematik der Geisteswissenschaften*, 1927, ヤンライエール (Hans Freyer, 1887—) の *Theorie des objektiven Geistes*, 1928. の如きも同様にディルタイの強き影響の下になれるものである。またヴァン (Joachim Wach) の *Das Verstehen*, Bd. I, 1926. やリット (Theodor Litt) の *Geschichte und Leben*, 1900. の如きも同系統の書物である。一九二五年以後にはロータツケルが編纂せる *Philosophie und Geisteswissenschaften* なる題名の叢書に依つて過去の卓れたる歴史學乃至歴史哲學の書物が復刻出版されてゐる。その第一卷に載せられてゐる叢書刊行の趣旨に依れば、哲學と歴史學乃至精神科學との結合が強調されてゐる。

然しこの方面に於ける最も實りの多い仕事はトレルチ (Ernst Troeltsch, 1865—1923) に依つて成し遂げられた。過去に於いてドイツ歴史學派 (deutsche historische Schule) が歴史の世界のうち沈潜しつゝ、その内在的研究をなした遺産である歴史主義 (Historismus) の立場を西南學派の價值哲學の見解を尊重しながら批判克服することに依つて新しき歴史主義の立場を確立せんとする彼の試みはもつと高く評價されてよいものである。主として一九一

八年以後になされた彼のこの方面の努力の結晶が彼の全集の第三卷として版行された *Der Historismus und seine Probleme*, 1922. である。彼の及ぼした影響はディルタイのそれと比較すれば劣ると言はなければならぬが、然し決して低く評價することは許されぬ。社會學者のマンハイム (Karl Mannheim 1893—) の如きは知識社會學的研究に於いて歴史主義の立場に立つべきことを主張してゐるが、それは主としてトレルチの影響である。

以上挙げたディルタイ及びトレルチがこの分野では最も大きな收獲を上げてゐると考へて差支へないが、この二人の影響乃至は刺戟を受けながらもなほ獨自の途を歩んで歴史の問題を取扱つてゐる者はなほ多數ある。前に挙げたシェーレルにしてもハイデッゲルにしても歴史性の問題に對して多大の關心を示してゐることは疑へない。またフライエールの *Theorie des objektiven Geistes*, 1928. にしてもディルタイの影響を可成り受けながら文化哲學を論ずるものである。更に最初はマルブルク學派に屬してゐたが後には現象學の立場に立ち、更に考へを變へて獨自の存在論の體系を建てんとしてゐるハルトマン (Nicolaï Hartmann, 1882—) の *Das Problem des geistigen Seins*, 1933. の中には歴史哲學の基礎付けを行つてゐる。

このやうな歴史の問題に對する關心は當然文化や社會の問題に對する關心とも結び付くのを當然とする。今迄挙げた多くの歴史哲學の研究者は他方ではまた文化哲學とか社會哲學とか云つたものにも論及し乃至は關心を示してゐる。かゝる社會の問題に於いては社會學者は勿論のことであるが、哲學者にも直接間接寄與してゐる。

## ドイツノテツガク

最近殊に社會學者ヴェーバー (Max Weber, 1864—1920) に對する關心が哲學の方面に於いても持たれてゐることはその證據である。吾々はそれを證明するものとしては、例へばヤヌス (Karl Jaspers, 1883—) の *Max Weber, Deutsches Wesen im politischen Denken, im Forschen und Philosophieren*, 1932. とか、メットレル (Arthur Mettler) の *Max Weber und die philosophische Problematik in unserer Zeit*, 1934. の如きものの刊行を挙げておく。

**b 辯證法の問題** 辯證法 (Dialektik) が何よりもまづ歴史や社會に適用されてその眞理性が明かにされるものであるとすれば、辯證法の問題が一般の關心を惹き出したといふことは今迄の吾々の論述に依つて納得されるであらう。然かもこの辯證法の問題がドイツに於いてはヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770—1831) の研究と結びいて取扱はれるやうになつたのであるが、このヘーゲル哲學乃至辯證法が人々に依つて重要視されて來たといふことはかのカント哲學よりの背離といふ現象の一つであることを示すものである。勿論ドイツに於いてヘーゲルが注目されたのはカント哲學の問題領域の制限が注意を惹くやうになつたためであり、そしてカント哲學の發展としてのヘーゲル哲學が求められ出したのである。然し元來新カント學派の問題提出の仕方がカント自身の場合とは多分に異つてゐることは既に述べた如くであり、またヘーゲル哲學への注目が既に新カント學派の成立期に求めることが出來るとすれば、現代ドイツ哲學が過去のドイツ觀念論の單なる復興ではない所以が理解されるのである。

ヴィンデルバントがカント哲學の制限を説いてヘーゲルに言及し

たのは、一九一〇年の *Erneuerung des Hegelianismus* のうちに於いてである。當時より既に彼の周囲の青年學徒のうちにはヘーゲル哲學への關心が呼び起されてゐたと云へる。また一方ではドイツの *Die Jugendgeschichte Hegels*, 1905. がヘーゲル研究の關心を高めるに與つて力があつたとは否定出来ない。さらに一九〇九年にはクローネル (*Benedetto Croce, 1866—*) の *Lebentages und Totes in Hegels Philosophie* が翻譯されてゐるのも見逃すことは出来ない。然しヘーゲル哲學への従つて辯證法の問題への關心が一般的に高まつたのは何と云つても大戦以後のことである。吾等は今この方面に於ける主要なる文獻を列挙することに依つてその様子を知らしめようと思ふ。一九二〇年代には、H. Heimsoeth: *Hegel, ein Wort der Erinnerung*, 1920. F. Rosenzweig: *Hegel und der Staat*, 1920. A. Brunschwig: *Hegel*, 1922. Jonas Cohn: *Theorie der Dialektik*, 1923. N. Hartmann: *Aristoteles und Hegel. Beiträge zur Philosophie des deutschen Idealismus*, III. I. 1923. R. Kroner: *Von Kant bis Hegel*, 2. Bd. 1924. Betty Heymann: *System und Methode in Hegels Philosophie*, 1927. Heinrich Levy: *Die Hegelrenaissance in der deutschen Philosophie*, 1927. Hugo Fischer: *Hegels Methode in ihrer ideengeschichtlichen Notwendigkeit*, 1928. Theodor Haering: *Hegel, sein Wollen und sein Werk*, 1929. N. Hartmann: *Hegel, (Die Philosophie des deutschen Idealismus, 2. Bd.)* 1929. 等の出版を擧げることが出来る。殊に一九三一年はヘーゲル没後百年目に當つたので各國に於いてヘーゲルの百年記念祭が行は

れ、この年の前後にはヘーゲルの研究熱は最高潮に達してゐる。最も記念すべきことは記念出版としてクロツクネル (*Hermann Glockner*) の手に依つて二十二卷より成るヘーゲル全集が複刻出版されたことである。そしてなほこの全集の附録として『ヘーゲル辞典』 (*Hegel-Lexikon*) が現に刊行されてゐる。

かくの如くヘーゲル復興が盛大に行はれるとともにこゝに新ヘーゲル主義 (*Neuhegelianismus*) の名の下に稱ばれる學徒が現はれて來た。勿論この名稱の下に個々の學者を數へ上げることは現在の所は困難であるやうに見える。然し最も興味のあることは從來新カント學派に數へられ乃至は新カント學派から出た人々が新ヘーゲル主義を採つてゐることである。ヘーゲル全集の刊行者クロツクネルの如きもリッケルトの門下生である。同じく西南學派に屬してゐたクローネル (*Richard Kroner*) の如きも現在は新ヘーゲル主義の立場を採つてゐる。このクローネルの前掲の著書 *Von Kant bis Hegel*, 2. Bd. 1921—24. はこの新ヘーゲル主義運動の最も指導的な旗幟であると云つてよいであらう。そしてこのクローネル自身ヘーゲル主義へ轉回した後自己の體系的な考へを *Selbstverwirklichung des Geistes*, 1925. のなかで現はしてゐる。このやうなヘーゲル主義の復活とともにヘーゲル主義以外の立場のうちにもヘーゲル主義的な要素や辯證法的な要素を認めんとするやうな極端な考へも現はれてゐる。マルツク (*Siegfried Marek*) の *Die Dialektik in der Philosophie der Gegenwart*, 1931. のうちに見られる見解の如きがそれである。

● **實存の問題** 實存 (*Existenz*) とは人間の自覺的存在のこと

を意味するのであるが、かゝる實存の問題を取扱ふ立場は一般には存在論 (*Ontologie*) と稱ばれる。存在が一般的に言へば存在一般の哲學的研究をなすものである點に於いて、存在論的立場が採られるといふことが既に、存在の成立するに先立つその構成原理たる價值とか當爲とか規範を究明するカント哲學の立場から背離することを意味する。この意味に於いては存在論的立場の主張が新カント學派とは別の問題提出の仕方をするものであり、況んやドイツ觀念論の單なる復活とは見られ得ぬことが分るであらう。

存在論的立場は大體大戦以後漸く採られるやうになつたのであるが、最も早く體系的思想を表明したのはハルトマンである。彼の *Grundzüge einer Metaphysik der Erkenntnis*, 1921. 2. Aufl. 1925. のうちに現はれてゐるものはいはゞ實在論的存在論とも云はるべきものであつて、これはアリストテレスの存在論的研究たる第一哲學に極めて近い見解を採るものである。然るに最近一般に問題とされてゐる存在論的研究は主としてハイデッゲルの主張する存在論の立場に立つものであつて、或る意味に於いてはハルトマンの主張するものとは根本的に差異を持つものとも考へられる。即ちハルトマンの存在論が存在者の研究であるに對してハイデッゲルのそれは存在者の存在の在り方を研究するものである。然かもハイデッゲルにあつて凡ゆる存在者を問題とするに當つてもまづ人間として存在者が先に問題とされねばならぬ。かくしてハイデッゲルに於いては自覺的存在者としての人間の存在の在り方が研究される。これが彼の存在論が自覺的存在論 (*Existenzialontologie*) と稱ばれる所以である。このハイデッゲルの存在論に近い立場に立つ者としてはや

スベルスがある。彼も亦人間の自覺的存在を説くのであつて、之を彼は實存哲學 (*Existenzphilosophie*) と稱してゐる。最近のドイツ哲學界に於ける最も一般的な關心を惹いてゐる書物がこれら二人の著書であることはその傾向を極端に表はすものと云へるのである。即ちハイデッゲルの *Sein und Zeit*, I. Bd. 1927. や Kant und das Problem der Metaphysik, 1929. \*たナズベルス著の *Die geistige Situation der Zeit*, 1932. や *Philosophie*, 3. Bd. 1930—33. 等がそれである。

こゝでこの實存の問題と密接な關係をもつところの人間學 (*Anthropologie*) の立場にも觸れておかねばならぬ。なぜかと云へば、前述せる如く實存とは人間の自覺的存在を言ふのであるからして、實存を取扱ふ哲學に於いては人間の存在の規定が中心問題をなすのである。そして事實ハイデッゲルの思想に於いては人間學が一の重要な役割を演じてゐるのである。では人間學とは如何なる科學であるか。これを簡単に規定するならば、人間學とは人間の存在を規定し且つ之に依つて諸他の哲學の諸問題の基礎を提供せんとするものであると言へるであらう。言ひ換へるならば人間學とは人間の存在に凡ゆる哲學の諸問題の基礎があると見る如き立場の哲學に對して基礎學をなすものである。

かくの如き人間學の立場を比較的體系的に表明してゐるのは元來は現象學派に屬してゐたシェーレルである。彼が人間學の研究に主力を注いだのは大體晩年であつて、*Mensch und Geschichte*, 1926. とか *Die Stellung des Menschen im Kosmos*, 1928. とかがその成果である。然しこのシェーレルの説く人間學の立場は存

在者としての人間の存在を研究するものであつて、この點に於いてハイデッゲルなどはその缺陷を認めて、かゝる人間の存在の在り方を研究せねばならぬことを説いてゐる。それ故ハイデッゲルの考へに従へば、人間學の立場は自覺存在論の立場のうちに取り入れて扱はれねばならぬとされてゐる。

五 ナチスと哲學 以上略述した實存の問題の如きが最近のドイツに於いて最も好んで取扱はれてゐる問題であるといふことはドイツの社會の現實の反映である。即ち社會の現實の動搖不安がハイデッゲルに於ける如く有限的存在としての人間存在の不安といふが如きものを存在の問題の中心的な規定たらしめてゐると考へられるのである。かゝる社會の現實の動搖不安は一九三三年二月以來のナチスの政權に依つて安定に持ち來されたかの如く見える。然しこのナチスのフアッシュ革命に依つて學界は極めて深遠なる不安のうち突き落されてしまつた。優秀なる學者や教授達がユダヤ人なるが故に、また反ナチスの態度を採つたが故に追放され大學の地位を罷免された。吾々は個々の學者に就いてその一々の運命を正確に知ることには不可能な状態にある。然しかの現代に並びなき碩學アインシュタインがユダヤ人の故を以て國外に逃避せねばならなかつた一事を以てしても多數の學者の運命が決して恵まれたものでないことだけは推察出来る。

現在のドイツに於いては哲學の研究といへども決して單に學問への忠實を以て行はれることは出来ぬと云つて差支へない。そこには政治の過剰が支配してゐる眞理への服従は息を潜めてゐるとしか考へられない。事實ナチス政權把握以來ドイツの哲學界から提出され

る優秀な問題とすべきやうな哲學書は殆どないと言つてもよい位である。そして一方ナチスの思想を表現した體系的な卓越せる哲學書は學問の性質上當分は現はれまいと見なくてはならぬ。たゞこのやうな思想界の混沌裡に於ける哲學の大體の傾向を述べるならば、ハイデッゲルの存在論的哲學は矢張り一般の關心の的となつてゐる。そしてハイデッゲルの思想とも間接には關係のあることであるが、

キエルケゴール (Soren Aabye Kierkegaard, 1813—1855) の思想が可成り盛んに論議されてゐるやうである。これはキエルケゴールが實存の哲學者であるためであつて、ヤスベルスの思想の如きもの實存の哲學者から多大の影響を受けてゐるやうである。それとともに數年前からではあるが最近殊にドイツの哲學界で注目され出したのはニーチエ (Friedrich Nietzsche, 1844—1900) の思想である。フォン・アステル (Ernst von Aster, 1880—) の如きは Die Philosophie der Gegenwart, 1935. のなかでニーチエ復興といふ言葉を以て最近の研究熱を言ひ表はしてゐるほどである。彼はニーチエ復興を以て矢張り實存哲學と關聯あるものとして語つてゐるが、然しニーチエの思想が強力主義を肯定する一面を有するが故にナチスの政治思想と一致する點があるものであるとも考へられる。

参考文献——E. von Aster: Die Philosophie der Gegenwart, 1935. K. Vorländer: Geschichte der Philosophie, 3. Bl. 1927. E. Erdmann: Grundriss der Geschichte der Philosophie. herausg. von F. Clemens, 1930. 4. Teil 4. Kapitel. 岩波哲學講座中の「新カント學派」「對象論と現象學」「新ヘーゲル主義」「生の哲學」等の項目。(樽 俊雄)

### 統計學

(英 Statistics, 獨 Statistik, 佛 Statistique)

- 一 統計學の起源
  - a 大學統計學
  - b 政治算術
  - c ケトレスと近代統計學
  - d 社會統計學
- 二 方法としての統計學
  - a 統計學の問題
  - b 統計
  - c 統計調査
  - d 統計分析

一 統計學の變遷 民族の歴史に國家の組織が現れて以來、土地、人口、經濟の状態を調査する必要は何れの時代にも存在した。之を史實に徴するに埃及に於ては既に紀元前三千年、ピラミッド建設の目的のために人口及び經濟の調査が行はれて居り (Herodotus, II, 109)。又支那に於ては紀元前二千二百年、夏の禹王の治世の土地經濟調査の記録と傳へられるものが残存してゐる (書經、禹貢編。但之を周代(紀前二千年頃)の記録とせず説あり)。何れにしても統計調査の歴史は甚だ古いものであるが、此の統計調査によつて得た結果を組織的に研究し、或は此の様な統計調査の方法並にその結果の解析の仕方を講究せんとする學問としての統計學の起源は極めて新しいことに屬する。

統計學の源流は之を二つの方向に迎ることが出来る。一は大陸に發達した大學統計學であり、他は英國に發達した政治算術である。

a 大學統計學 (Universitätsstatistik) 或は國勢學派 元來、Statistic なる語は中世のラテン語 ratio status とその伊太利語譯

トウケイガク

ragione di stato に發する。status は國家又は狀態の意味を有し、右の熟語は國家の状態に關し政治家の知悉す可き事柄の研究を意味したのであつて、その知識に明かなるものを statista (英 statist) と呼んだ。之が形容詞の形で statisticum, statistica となり、遂に學名 Statistik を生むに至つたのである。之によつても統計學の一源流が政治家の關心す可き國家社會の狀態の説明を内容としたことを知ることが出来るのである。

此の種の著作の最も古いもので統計書とともに地理書の濫觴となつたのはミヒンステル (Sebastian Münster, 1489—1552) の Cosmographia, 1541. であるが、所謂大學統計學の始祖と考へられてゐるのは Helmstedt 大學の教授 **コリンツ** (Hermann Canning, 1600—81) である。一六六〇年以降彼は notitia rerum publicarum なる題目の下に諸國家の事情を講義し、之によつて始めて地理、歴史、政治學とは異なる一の獨立した知識體系を作り出さうと試みた。彼の後、獨逸の諸大學に於て國勢誌を講ずるもの漸く多く、就中 Jena 及び Halle に於けるシュナイツェル (Martin Schmeitzel, 1679—1747) の講義 collegium politico-statisticum は最も著名であつて、その門弟中より大學統計學の完成者であり屢々「統計學の父」と呼ばれてゐる **アーヘンワール** (Gottfried Achenwall, 1719—73) が現れたのである。アーヘンワールは一七四八年、後に大學統計學の本據となつた Göttingen 大學に於て國家顯著事項に關する講義を開き、はじめて Statistik なる語を學名として使用した。所謂國勢誌に統計學なる名稱を附し、國勢資料の集積に確固たる體系を興へて之を普及せしめたのは主として彼の功績である。

以上コンリングに始まり、アーヘンワールによつて大成された大  
學統計學に於ける著しい特徴は、凡ての場合に於て文章による叙述  
の方法が尊ばれ、數字は僅かに説明の補助手段に使用されてゐるに  
過ぎないことである。故に統計の意味も統計學の内容も今日のそれ  
とは頗るかけ離れたものであつた。此の記述派に對して、同じく國  
勢記述を目的としつゝ、異彩を示したのは表示統計學 (Tabellenstatistik) である。丁抹の人アン(ルナン) (J. P. Ancheren, 1700—  
80) は諸國家の事情を表の形式を以て記述せんと試みた。彼は必ず  
しも數的材料のみを使用したのではなかつたが、然し表の形式は自  
然數的材料をより多くとり入れることとなつた。一方大學統計學の  
流を汲む者の中にも例へばビュッシング (A. F. Büsching, 1721—  
80) の如く數的材料によつて諸國の状態を比較せんとする傾向も現  
れ、偶々英國に於て發達せる政治算術派も亦獨逸に於て一大勢力た  
らんとするに及び、大學統計學は強力なる反對勢力と對立するに至  
つた。政治算術は社會現象の數的關聯の研究を目的とする點に於て  
單なる國勢記述の範圍に止る表示統計學とは異なるが、數的表現を尊  
ぶ點に於て兩者は大學統計學と反對の共通點を有する。ゲッティン  
ゲン派は表示統計學を「表の奴隷」「表の職人」と貶し、政治算術  
を「魯鈍なる拵へ物」と罵つたが、統計學の大勢は結局數字尊重の  
方へ傾かざるを得なかつた。一八五〇年、クニス (Karl Knies,  
1821—88) は著書『獨立の科學としての統計學』に於て、統計學な  
る名稱を政治算術に對して與へ、アーヘンワール派の統計學に對し  
ては「國勢誌」(Staatskunde) なる名稱を用ふ可きことを主張し  
たが、大學統計學は當時既に事實上勝勢を絶つてゐたのである。

b 政治算術 (Political arithmetic) 今日の意味の統計學の

主源流は英國に於て發生せる政治算術に求めねばならぬ。コンリン  
グがヘルムステット大學に於て國勢誌の講義を始めた頃に僅かに  
遅れて一六六二年、英國の王立理學協會は倫敦の一人商人グラウン  
ト (John Graunt, 1630—74) の研究に於てグラウントは倫敦市の過去三  
分の一世紀間に於ける出生死亡の記録を整理し、之より歸納的に、  
一見偶然的と見ゆる諸種の人口現象の中に注目す可き規則性の存在  
することを明かにした。彼の使用した材料は不完全な粗雑なものに  
過ぎなかつたが、その研究の方法は全く近代科學の精神と一致して  
ゐた。グラウントの研究は友人ペティ (William Petty, 1632—87)  
が繼承し、その方法を人口現象のみならず他の社會、經濟現象にま  
で適用した。政治算術なる名稱は其の著書に始まる。ペティの研究  
には結論を豫定してその證據として數字を求める幾分獨斷的な態度  
があつたが、政治算術の科學性を確立したのは有名な天文學者ハレ  
ー (Edmund Halley, 1656—1742) である。彼はブレスラウ市の材  
料に基いて世界に於ける最初の死亡表を作成し、一六九三年之を王  
立協會の『哲學論叢』に發表した。勿論今日の死亡表に比較すれば  
材料も方法も極めて不完全であつたが、之によつて生命保險の合理  
的經營基礎の端緒を開くと共に、政治算術的方法的基礎を確立した  
のである。

英國に生れた政治算術は次第に歐羅巴大陸にまで擴がり、大學統  
計學と争ひつゝ遂にその本據たる獨逸に統計學史上の輝かしき一存  
在であるヨハン・クルツ (Johann Peter Süssmilch, 1707—67)

を生むに至つた。ジュースミルヒの統計學に於ける最大の功績は近  
代統計學の基本原理たる大數法則を暗示したことである。曰く「小數  
に於ては凡てが秩序なきが如くに考へられる。蔽はれたる規則性と  
秩序とを明るみに引出すためには個々の小さな場合を多數に集め、  
多年に亘り多くの地方を通算して觀察しなければならぬ。然しプロ  
シヤの一僧侶たりし彼によつて此の規則性の發見は「偉大にして完  
全且完美」なる神の秩序の證明であり、統計は神意の發見の手段に  
外ならなかつた。彼の著書の標題「人類の體性の變化に於ける神の秩  
序の觀察」は彼の研究の目的が那邊にありしかを示してゐる。  
政治算術は次第に大學統計學を壓倒し、何時しか統計學の學名を  
完全に篡奪した。然し統計學がジュースミルヒの宗教的外被を排脱  
し、純然たる獨立科學として確立される迄にはなほ一世紀の時日を  
必要とした。而して此の事業の完成者として統計學史上の最高峯を  
占めた學者はケトレである。

c ケトレと近代統計學

數學と天文學との素養をもつて人文科  
學の研究に臨んだケトレ (Adolphe Quetelet, 1796—1874) はその主  
著の一つの標題「社會物理學」が示してゐる様に統計學を以て人間社  
會の諸現象の中に自然法則を發見することを目的とする精密科學と  
考へた。此の自然法則は人間の生理的及び道德的諸性質の平均値に  
よつて規定される「平均人」(l'homme moyen) によつて示される。ケ  
トレは數學者ラプラス (Laplace, 1749—1827) の感化を受けて確  
率數理を社會現象に應用しようとした。彼によれば個々人の有す  
る之等の諸性質は夫々複雑な攪亂の原因に基く個人差を伴ふが、斯  
る攪亂の原因の作用は社會全體に於ては所謂大數法則及び誤差法則

の作用によつて相殺され、平均人の諸性質は恰も物理現象を支配す  
る自然法則の如く超歴史的な妥當性を有する。我々は茲にジュース  
ミルヒの「神の秩序」がケトレによつて全く反對の思想たる「自然法  
則」を以て置き替へられたのを見る。ケトレ自身は決して宿命論者で  
はなかつたが、その學說の中には斯る思想への危険な萌芽が多分に  
潜んでゐた。果してその後繼者に至つて彼の思想が不當に擴張され、  
決定的な社會的宿命論の出現をみた。例へばハーシェル (John F. W.  
Herchel, 1792—1871) の如きは人は全く環境の產物であつて自由  
意志の如きものは殆ど認む可らずと主張した。茲に於て神學者、經濟  
學者、統計學者の間にケトレ派の説に對する烈しい反對が起つたが、  
その反對説が次第に有力となり、一八七〇年代に至つてシュモレル  
(G. von Schmoller, 1838—1917) 等の學者によつて社會的宿命論は  
統計的合法則性の範圍を明瞭にする事によつて完全に克服された。  
ケトレ派覆滅後の統計學は二派に分れた。一派はケトレ主義の失  
脚の直接の原因たる法則的研究の危険を避けて社會大量の觀察方法  
を問題とし、特にその具體的なる觀察結果の體系的整理によつて統  
計學を實質的內容を有する一個の社會科學たらしめんとするもので  
あつて、之を社會統計學派と云ふ。他の一派はケトレの法則的研究  
方法を批判しつゝその性質と限界とを明かにし、之を發展せしむる  
ことによつて統計學に方法學としての内容を與へんとするものであ  
つて、之を方法論派と云ふ。而して此の派を特徴づけるのは實質的  
科學としての統計學の成立を否定することであつて、最近の趨勢は  
社會統計學派が次第に勢力を失ひ方法論派が有力となりつゝある。  
但方法論派にも統計學を社會現象の方法學に限定するものと一般に

集團現象の方法學となすものがあるが、將來の統計學がその何れに向ふかは未だ全く不明である。

d 社會統計學 此の派の代表者はマイル (Georg von Meyer, 1841—1925) である。マイルによれば Statistik には實質的意味と形式的意味とあり、形式的意味に於ては所謂統計方法を意味し、實質的意味に於ては科學としての統計學を意味する。科學としての統計學は社會現象の統計的研究結果の組織的體系であつて、従つて此の場合の研究の對象は社會大量に制限され、之を研究する方法は即ち大量觀察法である。此の考へ方はケトレ以後に於ける獨逸統計學の主流であり、ワッポイス (J. F. Wappanus)、ヘンゲル (E. Engel)、ヘッテンゲン (A. von Oettingen)、クウスホーフネル (M. Hauptmann)、ヴァークネル (A. Wagner)、コンラート (J. Conrad) 等が之に屬し、今日生存せる學者の中ではチチエーク (E. Zizek)、ヴォルフ (H. Wolff)、チスカ (G. von Tyska) 等を擧げることが出来る。然し之等の人々は何れも統計學を一個の社會科學として主張したけれども、彼等が實際に示した統計學の内容に於ては屢々反對に形式的意味の統計學、即ち大量觀察の方法の研究が大部分を占めてゐた。所謂科學としての統計學の編成に眞に努力した人は始とマイルのみと云つてよいであらう。彼の著書『統計學と社會學』(1895—1917) は不幸にして未完成に終つたが此の派の最大の業績であつた。

方法としての統計學 統計學の方法論派は統計學に固有なる實質的の對象の存在を認めず、諸他の社會科學の對象たる社會現象、或は自然現象たる社會現象たるを問はず一般に集團現象の數量

的觀察の方法と、夫等の觀察結果、即ち統計の解析方法とを直接の研究對象とする。即ち方法としての統計學の内容は統計調査法と統計解析法の二部門に分れるが、方法論者が特に力を注ぐのは後者である。そして統計解析法のうち確率數理の應用に屬する部分を取扱ふのが數理統計學 (Mathematical Statistics) である。

所謂統計的方法 (英米の學者が使用する statistical method) と云ふ言葉は主に茲に云ふ統計解析法に該當する。は政治算術と確率數理とに發源して居り、此の兩者を結付けたのがケトレであるから、今日の統計的方法の發端はケトレに遡るのである。然しケトレ派の社會的宿命論が直接の原因となつてケトレの後統計方法理論の研究は暫く停滞し、僅かにリューメリン (Gustav von Kilmelin, 1815—89)、レキンス (Wilhelm Lexis, 1837—1914) 等があつて秘かに新しい方法の展開に努力してゐたのみであつた。特に後者の統計數列の安定性に關する研究は後の理論統計學發達の全運動の出發點となつたところのものであつた。

理論統計學の新時代は前世紀の最後の二十年に始まる。その頃英國に於て遺傳研究に従事せる一團の生物學者はその研究の手段を統計方法に求めた。彼等の中に最も傑出したのはピアソン (Karl Pearson) は卓越せる數學的才能を有し、ポアソン (Poisson, 1781—1842) 以後殆ど進歩をみなかつた確率數理が彼によつて新しい展開を得、且統計方法の極めて重要な用具として應用せられた。數理統計學に於て世界の先進國たる英國に於ける斯學の發達はピアソンと、更にレキンスの影響の下に論文『統計學の方法』(王立統計協會雜誌五十年周年記念號收載) を執筆した經濟學者 エッチワース (E. Y.

Edgeworth, 1845—1926) によつて導かれたのであつて、今日此の國の統計學は殆ど彼等の思想體系によつて統一されて居り、斯學の齊宿として現存せるボウレイ (A. L. Bowley) とヘール (G. D. Yule) とは何れも彼等の直接の感化を受けた人々である。又それらの理論は同文の米國にも移され、特に此の國ではその經濟統計に於ける應用方面に於て發達した。當に英語國に於てのみならず、其他の國に於ても方法統計學は次第に勢力を占むるに至り、特に伊太利と北歐諸國がその影響を受けしこと最も早く、前者にはベニニ (Benini)、チリ (Gini)、モルタラ (Mortara) 等、後者にはウニステルゴール (H. Westergaard) 等の人々を出した。中歐諸國に於てはレキシスとその後繼者ポルトキウィッチ (L. von Bortkiewicz, 1868—1931) の輝かしき業績があつたにも拘らず、マイルの影響が依然支配的であつて、ケトレ派の敗北後の經驗派の傳統が續けられてゐたが、最近に至つて漸く英國派の理論を受け容れ、特に經濟統計方面に於て米國學者の研究を批判的に檢討せんとするに至つた。又ロシヤに於てはチュプロフ (A. A. Tschuprow, 1871—1926) が英國派の理論とレキシスとポルトキウィッチの思想とを綜合し、特に之を獨逸西南學派の哲學體系を以て基礎付けんと試みた記憶さる可き業績をみる事が出来る。

此くして今や世界の大部分に於て統計學の内容は方法學としてのそれに移つた観がある。國家顯著事項の學として生誕した統計學は政治算術によつて數字の洗禮を受け、繼て數字が統計學の全體を占據した。その統計學が今や統計數字を取扱ふ方法學として純化されたことは學問發達の必然の歸結であつたのかも知れない。そのはじ

め統計學を規定した主要觀念であつた社會或は國家の概念は現今方法論派の間では僅かに社會統計方法論派と稱せらるべき一派に於てその跡を止めてゐるに過ぎない。統計學は永久に此の社會の概念の中に踰越しなければならぬのであらうか。それは歴史のみが解決し得る問題である。

ii 統計學の問題 以下方法學としての統計學の問題を一瞥しよう。

a 統計 一般に統計とは統計集團 (Statistische Massen) —— 又は大量とも云ふ) の數量的記述であつて、統計集團とは一定の標識によつて客觀的に限定された同種個體の集團である。統計の記述する對象は集團であつて個體ではない。更にその集團は主觀の任意の構成によるものではなく客觀的に成立せるものたることを要する。但客觀的集團と云つても必ずしも自然的團體を構成することを必要としない。例へば内地に於ける二〇歳乃至五〇歳の人口と云へば客觀的に成立する集團であるが、それは統計の上で考へ得るだけで、斯る團體が自然的に實在してゐるわけではない。

個體が客觀的に統計集團に結合されるためには各個體に共通せる性質がなければならぬ。此の共通性質を集團の標識 (Merkmal) と云ふ。集團の標識は集團に結合される個體の範圍を客觀的に限定する。従つて統計集團の範圍は集團の標識によつて一意的に確定される。

統計集團を構成する各個體は共通の性質を有すると共に互に相異なる性質を有する。之等の相異なる性質が集團の構成を規定する。但し此の場合個體の有する相異なる性質 (特殊性) を無限に問題とするの

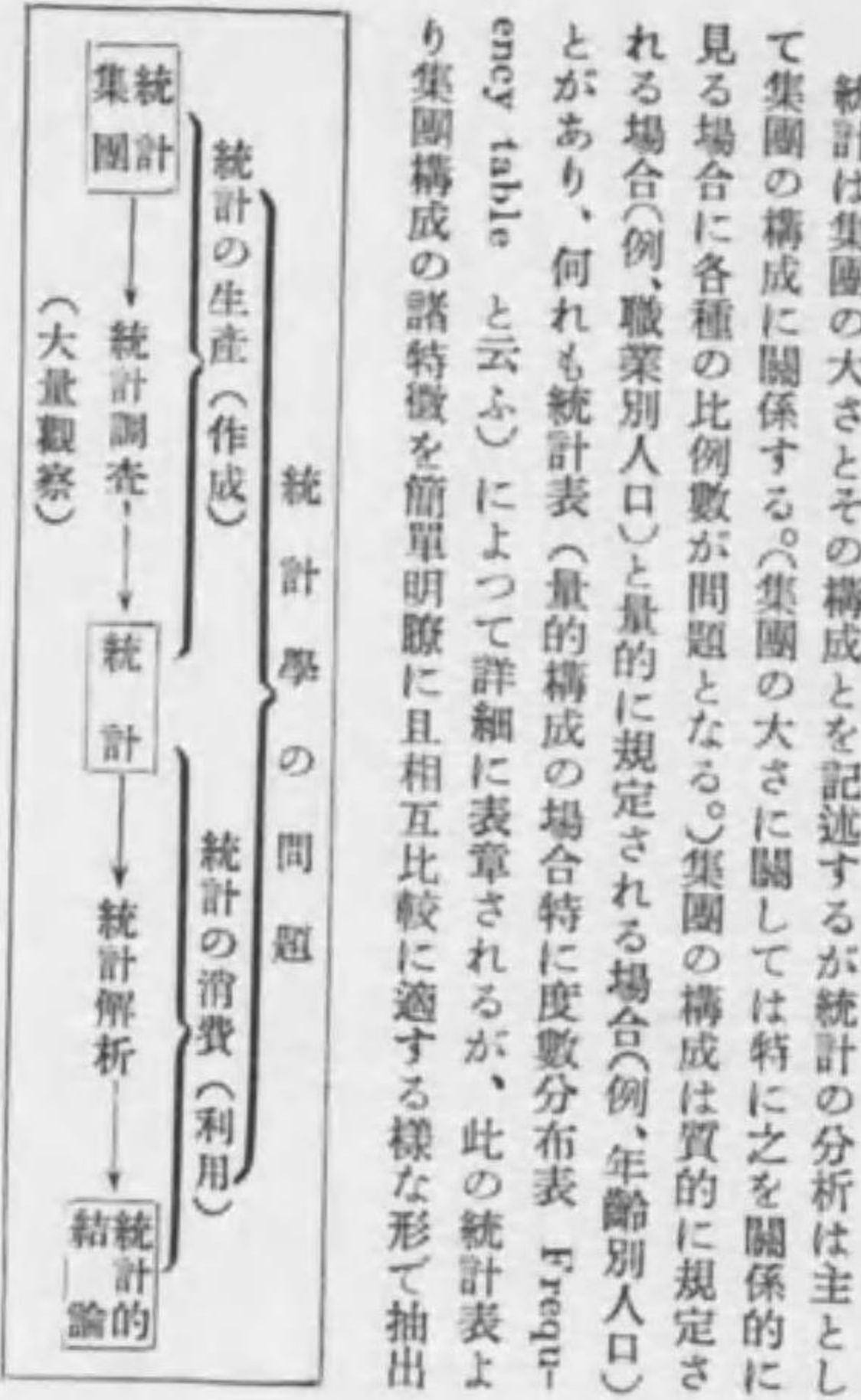
てなく、常に或程度の選擇を行ひ、且斯る選擇を行ふことによつてのみ統計集團の觀察が可能である。人口集團を構成する各個人は無

限に多種の屬性に關して相異なる性質を有するが、人口調査はその中の十乃至二十種の屬性、即ち調査票に指定する體性、年齢、職業等の屬性に關してのみ之を問題とするのである。

以上の如き統計集團の範圍(大きさ)又は構成を數によつて記述したものが統計である。従つてそれは數學で取扱はれる様な抽象的な數ではなく具體的な内容をもつた數である。然し統計の記述する集團の性質に就ては格別に制限せず、自然現象に屬する集團的事實を記述する場合にも統計たる名稱を使用するのが一般である。唯一部の學者は統計と云ふ言葉を特にその存在が社會的に規定せられた集團を記述する場合に制限してゐる。

b 統計調査 統計集團に數的記述を與へるために行ふ觀察が統計調査である。統計集團の觀察は集團の個々の單位に就て悉皆的に行ふを原則とし、此の原則的方法を特に大量觀察(Massobservation)と云ふ。然し實際には全單位の悉皆的な觀察の困難な場合又は不可能な場合が多く、屢々種々の代用的方法が行はれる。標本調査、抽出調査等はその主なるものではあるが、之等は集團構成の觀察に役立つのみであつて、集團の大きさの決定には大量觀察による非れば不完全な推算の方法があるのみである。

統計調査に於ては如何なる統計集團に就て(集團の標識及び調査の時間的場所的限定)、何を(調査事項)調査す可きか、之を如何なる方法によつて調査するか、調査の結果を如何に整理す可きか(統計表の作成)等の問題が存する。之等は理論的には極めて單純な事に



することが分析の目的である。その主なる手段に、質的構成に對しては比例數(構成比)があり、量的構成に對しては、度數分布の量的位置、或は度數の集中點乃至代表値を示すものとして中數(Mittelwert)、各種の平均値、中位數、並數、度數分布の範圍即ち單位

柄の如くに思はれるが實際には多くの困難を伴ふ。特に調査單位の範圍を決定する集團の標識の規定は嚴密且合目的でなければならぬ。例へば失業者を如何に定義するかによつて失業調査結果の利用性は大に異なるのである。又調査結果を時間的場所的に正確に比較するためには各調査に於て上記の諸點が統一的に規定されてゐることを必要とするのである。

統計調査は常に集團の場所的及び時間的限定を必要とするが、特に時間的限定に關して集團が二種に區別される。例へば現在人口の調査の如く一定の時点を限定して瞬間的に調査するものを靜態集團(Bestandsgemeinschaft)と云ひ、出生統計の調査の如く一定の期間を限定してその期間内に於ける出生を連續的に觀察するものを動態集團(Bewegungsgemeinschaft)と云ふ。靜態集團に就て調査した結果が靜態統計であり、動態集團に就て調査した結果が動態統計である。

なほ調査の方法に關して直接調査と間接調査とを分ける。直接調査は本來統計の作成を目的として行ふものであつて、その調査結果を第一義統計(Primäre St.)といふ。間接調査は他の目的のために調査された記録を統計の作成に利用する場合であつて、その結果たる統計を第二義統計(Sekundäre St.)と云ふ。例へば國勢調査による人口統計は第一義統計であり、出生届記録を利用する出生統計は第二義統計である。現今の統計の大部分は第二義統計である。

統計分析 統計方法の第二段の問題は調査結果の利用であつて之を統計分析と云ふ。統計分析の問題は更に二つに分れる。第一は統計調査の結果を分析して集團の統計的性質を明かにすることであつて、第二はその分析結果を比較して統計集團相互間の關係を明

扱て之等の集團的性質は集團の觀察に於てはじめて明かにされ、個々の單位の觀察によつては知ることが出来ない。之は統計的認識の基本的な性質であつて、統計分析の理論は此の性質に出發する。更に之等の集團的性質は偶然的原因の作用に累される危険多き小範圍の集團に就てみる場合よりも、その危険少き大範圍の集團に就てみる場合に於て一層安定した形で觀察し得るのであつて、例へば出生兒の男女の自然的割合は一地方に就てみるよりも一國全體に就てみる方がより正確な結果が得られるのである。そこで集團構成を單なる事實としてみるのではなく、之によつて集團的性質に現はれる一般的原因の作用を知らんとする場合には可及的大數に就て觀察することを必要とし、其の數理的根據が確率數理の所謂大數法則(Gesetze der Großen Zahlen)によつて與へられるのである。大數法則を以て統計分析の基礎原理となす所以である。但茲に云ふ大數觀察と先の大量觀察とは明瞭に區別せねばならぬ。大量即ち集團は之を構成する單位數を制限しないから小範圍の集團に就ての觀察も大量觀察即ち統計たることを妨げない。然しその大量觀察の結果を統計的推論の素材として、之より一般的な結論を導き出すとする場合には大量(集團)の大きさが大數法則の標準によつて反省され、大數が一般的推論の條件として要求されるのである。

此の點に關聯する統計分析上の重要な一問題は一部調査に於ける集團構成の誤差の問題である。統計調査は集團の全部觀察を原則とし、學者の中には全部觀察の結果のみが統計であるとするものもある。マイルの如きその代表者であつて、一部調査は止むを得ざる代用手段に過ぎず出来るだけ避く可きものとしてゐる。然し社會統計



の範圍に於ても全部調査の不可能なる場合、困難なる場合が少くない。假令可能であるとしても經濟的時間的に却つて不利益な場合が多く、特に經濟統計の範圍に於てはそれが通例である。更に自然現象に關する統計的研究に於ては全部觀察が理論上不可能なるは云ふ迄もない。かくて今日利用される統計の大部分は一部調査に基いたものであつて、全部調査によるものとしては人口統計其他僅少の社會統計が例外的にあるのみである。故に一部調査の結果に基いて集團全體の構成を觀察する場合、幾何の誤差を覺悟す可きは統計の實際利用上重要な問題と云はねばならぬ。

一部調査の最も典型的な方法は抽出調査法 (sampling) と稱するものであつて、集團の全範圍より at random に抽出した一部單位によつて小集團を構成し、之を集團全體の縮圖と考へて分析するのであつて、此の場合の結果に對しては確率數理の大數法則及び誤差法則の定理を應用して可能的な誤差の範圍を確定することが出来るのである。一般に試料集團中に含まれる單位數が大なる程結果の誤差は小である。此の方法は例へば國勢調査の場合の如く結果の集計に多大の日子を要する場合に豫め大體の結果を明かにして要急の用に役立てるために屢々用ひられる。

統計の分析の第二の問題は統計數列 (又は系列) の分析である。統計數列 (statistische Reihen) とは同種統計記述が時間的又は場所的に排列されたものであつて、時間的及び場所的數列に區別する。數列の分析に於て先づ問題となるのは、數列の項の量的變化の意味であつて、それが偶然的と解されるものを典型的數列 (typische Reihen) と云ひ、一定の原因に基くと解されるものを徴候的數列

(symptomatische R.) と云ふ。レキシスは確率數理の應用によつて此の兩者を鑑別する方法 (レキシスの標準) を案出した。

時間的數列が徴候的變化をする場合には屢々その變化の中に若干の要素的類型を見出すことが出来る。その最も顯著なものは趨勢變動 (Trend)、季節變動、循環變動、特發變動の四者である。之等は何れも時間に關係のある徴候的變化であつて、その各々の型を決定することが統計解析の (特に經濟統計に於ける) 重要な課題の一つである。

なほ、統計數列の簡明な表章法としては比例數の一種である指數 (Index numbers) の方法があり、特に經濟統計に於て重要視されてゐる。

統計解析の最後の問題は統計による因果的關係の研究である。統計方法による因果的關係の研究は長らく形式論理に於ける歸納法の一つと解されてゐた。リューメリンは統計方法の利用の場所が普通の歸納法と全く異なる所以を明かにした。兩者の第一の差はその取扱ふ對象であつて、歸納法は類概念 (Gattungsbegriff) に屬する個體を取扱ひ、之に就ての結論が類に屬する個體一般に就て妥當するに對し、統計方法は集合概念 (Kollektivbegriff) に屬する集團を取扱ひ、之に就ての結論は集團に就てのみ妥當し集團を構成する個々の個體に就ては必ずしも妥當しない。第二の差は取扱ふ因果關係の性質であつて、歸納法に於ては原因と結果とは要素的に且一意的に結合し、從つて同一の原因は必ず同一の結果を反覆し、その關係は必然的に成立するのであるが、統計方法の場合には兩者の關係は極めて複雑であつて、原因複合體と結果複合體とが全體的に關係せしめら

のみならず、その間には結合關係の明瞭ならざる、或は互に無關係なる諸因子を含み、從つて兩者の關係は歸納法の場合の如く一意的でなく、單に確率的或は平均的に成立せざるに止る。此の如き事情から統計方法による推論に確率數理が援用されるのである。所謂相關係數 (Coefficient of correlation) の方法は統計的因果研究の最も重要な手段である。

興味ある事柄は自然科學の領域に於て統計方法による因果關係の研究が近時特に盛になつて來たことであつて、之によつて物理學の理論が書き改められつゝある。然るに統計の本來の領域たる社會科學の範圍に於ては統計の因果研究の利用は未だ二次的であつて、此の方面に於ては依然統計の記述的職能が重視される状態である。その主なる理由は社會現象の不安定なること、その數列變化が一般に徴候的なことに存するのであるが、然し社會科學の範圍に於ても統計的因果研究法を注意深く應用するならば理論の解明に資するところ大なるは云ふ迄もない。

社會科學の中で統計解析法が最も多く利用されるのは經濟學である。經濟理論と統計解析との關係は恰も今日の理論物理學と實驗物理學との關係に等しい。實驗の不可能な經濟理論に於て統計調査と統計解析とが測定と實驗の代用手段となる。但し物理的測定や實驗の結果に較べると經濟現象に關する統計調査や統計解析の結果は精密の度に於て遙かに劣るが、之は對象の性質上止むを得ざる差異である。然し假令幾分不精密であるとは云へれば決して統計方法の價值を否定する理由とはならない。經濟理論が常に含蓄するところの量的關係の正確さが統計的實證によつて一層確實にされることは

事實である。唯統計方法はあくまでも實證の手段であつて、それ自體理論を生み出すものではない。統計方法が有効に使用されるためには常に豫め理論が興へられて居り、且その理論に對して統計方法が合目的に結付けられることを必要とする。統計方法の無意味な濫用は害あつて益なきことが多いのである。

参考文献——〔統計學史〕V. John: Geschichte der Statistik, Stuttgart 1884. H. J. Westergaard: Contributions to the History of Statistics, London, 1932. 財部譯治、タトマーの研究 高野岩三郎、社會統計學史研究。〔社會統計學〕G. von Meyr: Statistik u. Gesellschaftslehre, Bde. I-II, 2. Aufl. Tübingen 1914—26, Bd. III, 1917. F. Zizek: Grundriss der St., 2. Aufl. München 1923. H. Wolff: Theoretische St., Jena, 1926. 財部譯治、社會統計論綱。〔統計方法〕G. U. Yule: An Introduction to the Theory of St., 10. ed. London, 1932. A. L. Bowley: Elements of St. 5. ed. London, 1926. R. A. Fisher: St. Methods for Research Workers, 4. ed. Edinburgh, 1932. F. C. Mills: St. Methods Applied to Economics and Business, N. Y. 1924. L. March: Les principes de la méthode st., Paris, 1930. W. Winkler: Grundriss der St., Bde. I-II, Berlin, 1931—33. H. T. Westergaard und H. C. Nybølle: Grundzüge der Theorie der St., 2. Aufl. Jena, 1928. K. Pearson: Grammar of Science, 3. ed. London, 1911. A. A. Tschuprow: Očerki po teorii statistiki, 2. ed. St. Petersburg, 1910. A. A. Kaufmann: Teoriya i metodi statistiki,

b. ed., Moscow, 1928 (deutsche Üb., 1913 Tübingen). 小倉金之助、統計的研究法 蛭川虎三、統計學概論 森田優三、統計概論。(森田優三)

### 獨裁主義

現代は獨裁主義の時代である。ロシアではレーニン(Vladimir Ilyich Lenin, 1870—1924)によつて樹立されたサヴェート政府のプロレタリア獨裁あり、ドイツではヒットレル(Adolf Hitler, 1889—)が統帥するナチスの獨裁が君臨し、イタリアではムッソリーニ(Benito Mussolini, 1883—)の下にファシズム獨裁がその威を振ひ、トルコはケマル・パシャ(Kemal Pascha, 1879—)の獨裁下にある。その他ポーランドには最近までピルスツキ(Jozef Pilsudski, 1867—1935)の獨裁あり、イスパニヤも一九二三—三〇年迄デ・リヴェラ(Primo de Rivera, 1870—1930)の獨裁下にあつた。斯かる情勢は現在益々強化する傾向にあると云つてよい。處でこれらの獨裁形態を一樣に獨裁と名づけるにしても、その内容は決して同一ではなく、大體プロレタリア獨裁、ブルジョア獨裁並にその變態であるファシズム獨裁の三つに分つことが出来るであらう。獨裁政治の沿革は古代羅馬共和國(紀前五〇〇年頃)時代に初めて設けられた獨裁官(Dictator)の設定に發してゐる。その内容は内亂とか戦争の場合に元老院が獨裁官の必要の有無を決定し、その上で執政官(consul)に獨裁官選任の権限を與へる。そこで執政官は自ら獨裁官を任命する事が出来た。但し獨裁官になる人物は執政官



ヒットレル

級のものに限られてゐたので執政官が二人存在してその中の一人が獨裁官であつた場合もあつた。獨裁官は任命されるや元老院や執政官の上に位して何等の制肘を受けることなく獨裁を振ふことが出来た。がその任期は最高六ヶ月を出る事が出来なかつた。これはその任命が合法的であつて且この制度樹立の目的が現存政體の變革でなくして寧ろその保持であつた點に特徴があつた。かゝる種類の獨裁は今日の民主的立憲政體の下に於ても見られる。即ち立憲國家の憲法の中に緊急命令、緊急處分の規定や戒嚴令の規定が存在してゐて、政治的的重大時にその適用が見られる場合がこれであつて、その發生は合法的で、その權限も憲法上の效力以上に出ることが出来なく、獨裁者は主權者から委任された權限を有つて過ぎない。その實現には實力又は武力的手段を必要としなが戒嚴令の布告などのある場合には武力が行使される。そしてその期間に必要な間だけに止まつて時局が舊に復するとこの制度も失くなつてしまふ。これは一般に立憲的獨裁と呼ばれるものであつて、この事は今日の民主的立憲政治の中にも獨裁政治の要素が含まれてゐることを意味するものであり同時に立憲政治もその構成上決して獨裁政治と相對立してゐるものではなく、社會的情勢が段々と逼迫することが多くなればなる程、立憲政治も容易に獨裁政治に變化し得ることを示してゐる。

この種の委任による獨裁は特命的獨裁と呼ばれる。

反之、獨裁政治が合法的にはなく、革命とかクーデター等によつて發生し、その權限が絕對的であつて、政體の變革や或ひは憲法法規の改廢が行はれる場合がある。この場合には極端な武力的手段が用ひられる。従つてこの種の獨裁には猶一層の實力が伴はなくては其の實現が不可能である。勿論この場合は、一個人の獨裁に限らないて一つの階級がその社會的實權によつて獨裁權を把握することもある。即ちロシアのプロレタリアによる獨裁の發生がこれである。この種の獨裁政治も永續的のものではなく、新しい社會秩序の安定が得られると消滅する。プロレタリア獨裁も新しい民主主義に立脚する階級のない社會發生への過渡的現象である。この種の獨裁は前者の特命的獨裁に反して主權的獨裁と稱せられる。従つて一般に獨裁政治と云へばこの二つのものを含んでゐる。

然らば獨裁政治の内容は何であるか。普通には獨裁政治は民主主義(Democracy)に對立される(ヘルレル Hermann Heller; Rechtsstaat oder Diktatur ? 1930)。然しこの對立は前述した様に、獨裁政治の本質を明らかにするものではなく、今日民主的議會政治がブルジョア獨裁に化してゐる事實を見てもこの事情は明らかに看取されるであらう。それでこそマルクスは眞の意味の民主主義を嚴み取るためにプロレタリア獨裁の必要を認めたのである。そこで獨裁政治は民主政治の下に於ても存立し得るとすれば、獨裁政治は、政體ではなく一つの状態であるとする議論がある(カウツキー Karl Kautsky; Die Diktatur des Proletariats, 1918)。即ちプロレタリア獨裁はトロツキー(Leo Trotzki, 1877; Von der

Oktober Revolution bis zum Brest-Litovsk-Vertrag, 1918)

が主張する様に労働者、兵士及び農民の支配の永續的事實ではなくて、それは資本主義的支配の崩壊から共產主義的社會主義への過渡的支配の時代であつて、この獨裁政治は何等法律に拘束されない一人の個人の壟斷的支配であり、只それが專制政治と異なる點は、それが民族的國家組織を有することではなく、却つて暫定的な緊急處置であることである。従つて獨裁政治は政體ではなく、プロレタリアが政權を奪取した場合に必然的に常に入り込む一状態である、と。

併し乍らカウツキーは政體の種類を立憲政治とか專制政治、民主政治とか君主政治に限つてゐるのであつて、これは明らかに誤つてゐる、即ち政體は相互に競合してゐるのではなく、民主的立憲政體の中にも獨裁政體の要件が含まれてゐて、ただその何れが強度に現はれるかによつて、獨裁政體ともなり又は立憲政體ともなるのである。従つて獨裁政治は、それが政治運用の組織如何によるものである限り、一つの政體である。又獨裁政治は一個人の壟斷的支配ではなく、マール(N Die Diktatur des Proletariats und der Renegat Karl Kautsky, 1919)も云つてゐる如く、獨裁政治は個人の單獨的支配ではなく、個人の集團、寡頭政治、階級も亦獨裁政治を運用することが出来る。

階級支配が獨裁政治であるとする立場をとるものは例へばアードレル(Max Adler; Die Staatsaufassung des Marxismus, 1922)である。彼は階級社會の枠内に於ける單なる權利平等としての政治的民主主義と階級のない社會主義社會に於ける民主主義的理想概念の實現としての社會的民主主義とを根柢的に區別することから出

發する。前者は階級支配であるが後者は階級の無い、眞の民主主義である。處て政治的民主主義は常に階級支配の一形式であつて、獨裁なしには一般に可能ではない。従つてそれは獨裁政治に移り行く事が出来る。即ち獨裁政治は階級支配に素質として存在する。アドレルは又獨裁政治とテロリズムとを區別する。彼によると、この二つの概念は他のものを強壓することを意味してゐる點に於ては一致してゐるがテロリズムに於ては強壓されるものが多數であり、獨裁政治に於ては單に少數のみが強壓される。そしてテロリズムでは利益者は少數であるが獨裁政治ではそれは多數である。獨裁の區別的標識は、それが多數による少數の強壓であるといふ事である。然しこの場合強壓とは、政治的民主主義が制限されるか又は止揚されることを意味する。そこで獨裁は、テロリズムと相違して、民主主義の止揚の「民主主義的」な形態である。このアドレルの規定も實は曖昧であつて、實際に於ては、政治的民主主義に於て組織されてゐるブルジョアジーの階級支配は民主主義の制限又は止揚の二形態即ち彼がテロリズムと呼んでゐる非民主主義的形態と彼の前提に従つて獨裁である民主主義的形態とを含んでゐるのであつて、ブルジョアジーが民主主義によつて彼等の支配を行ふ事が最早出来ない様な情勢が起ると、ブルジョアジーはテロリズムに變化しなければならぬのである。

これに對して暴力的テロリズムが獨裁であつて階級支配が獨裁ではないと説くのが例へば**オットー・パウエル**(Otto Bauer; Bolshewismus oder Sozialdemokrat?)である。彼によると、たとひプロレタリアが民主主義的手段と共に政治的手段を奪取しても、プ

ルジョアジーはプロレタリアの支配に反抗する、それ故に民主主義的議會も亦それ自身のために獨裁的手段を要求せねばならぬ。そしてブルジョアジーのサポータージュヤ又はその反抗をもテロリズム的手段で以つて打破せなければならぬ。従つて獨裁とテロリズムとは分離されるべきではない。獨裁は階級支配そのものではなくて、この支配の行使の形態であり、云ひ換へれば、この支配を強力の手段で以つて行使する一つの形態である。

然しパウエルの説も極端であつて、立憲的獨裁の場合を考へても分るやうに、テロリズムが必ずしも獨裁政治ではない。たゞ獨裁政治はテロリズムに陥り易い危険を有つてゐると云ふことは出来る。例へば露西亞には昨年その廢止が聲明される前にはGPUがあり、伊太利にはミリティア、獨逸にはナチスの衝撃隊があり、又多くの場合獨裁政治の成立には軍閥の策動が伴ふ。従つて獨裁政治の背後にはテロリズムへの推移の可能性が存在してゐることは否めない。が、然しテロリズムは獨裁の本質ではなくその附隨現象に過ぎない。この點から**ディール**(Karl Diehl; Die Diktatur des Proletariats und das Kaiserystem, 2. Aufl. 1924)も、プロレタリアの獨裁下に於ても民主主義的共和國は政體として殘存すべきであり、獨裁政治は民主主義的憲法の枠の内で行使され得るので、獨裁政治と結びつけられたテロリズム的職術はボルシェヴィキが主張する様に、マルクスとエンゲルスとによつて推薦されてゐない事を認めてゐる。従つて獨裁政治の本質は寧ろアドレルの云ふ如く、それが階級支配である點にある。

**シュタット**(Carl Schmitt; Die Diktatur, 2. Aufl. 1928)は獨

裁の概念を法律概念として構成せんとしてゐるが、然し法律は元來支配階級のイデオロギイの表現である。即ち獨裁政治は社會生産關係に不可分に結び付てゐる社會的上部構造であり、前者の反映に過ぎない。従つてそれは法律的規範學の概念とは異つた社會學的概念である。**クルランド**(Arvid Gurland; Marxismus und Diktatur, 1930)によると、獨裁政治の概念は一定の生産關係に結びつく階級支配の概念であつて、その時々の社會形成は階級のこの獨裁なしには全く考へ得られない。勿論クルランドの様に獨裁政治は階級支配である點に於て誤りはないが、然し獨裁の概念の中には一個人による獨裁の場合も含まれてゐるが、前者の方が基礎的である。そして**レ**

**ニン**(前掲書)も云つてゐる様に、獨裁は直接強力の上に基礎づけられてゐる支配であつて、それは何等の法律にも拘束されない。が然しレニンの云ふ無拘束の意味を恣意的支配の意味に解してはならない。寧ろそれは古き法律を守らないことであつて事實プロレタリア獨裁に於ては非常に嚴格に統制された強制組織が實現されるので、この點はサヴェーエトの下で公民法の範圍に於て多くの法律が發せられたことによつてもわかる。以上によつて獨裁政治の概念を大體説明したが、然しそれでは近時の諸種の獨裁は如何にして發生したか。この問題を考へる前に獨裁政體を必然たらしめた資本主義社會の發展段階としての帝國主義の問題を解明しなくてはならぬ。

十九世紀の七十年以後、時に二十世紀以降に於いて目覚ましい發展を遂げた世界資本主義の最近段階は普通に高度資本主義、又は金融資本主義、或ひは企業獨占主義の段階と呼ばれてゐる。**レニン**(Imperialismus als die jüngste Etappe des Kapitalismus)によ

ると、帝國主義とは獨占及び金融資本の支配が形成され、資本輸出が著しい意味を有ち、國際的トラストによる世界分割が始まり、地球上の全領土が最大の資本主義國に分割され終つたところの發展段階に於ける資本主義である。

これによつて判る様に、帝國主義時代に於ては、資本主義社會内部に於ける生産の組織が益々集注化され、重要な原料の資源が益々獨占化される。かゝる生産及び資本の集積の結果、國民經濟は金融資本の君臨する國家資本主義トラスト化し、少數の金融寡頭的支配の上に經濟と政治とが置かれ、各國內に大資本の獨裁、企業獨占が作り出される。そしてこのために自由交易は閉塞されるに至る。この事は政治的上部構造の推移にも反映する。即ち自由交易は民主政治に相應し、企業獨占は政治的反動に適應する。従つて企業獨占的資本主義の下に於ては民主政治から反動政治への移行が行はれる。云はば帝國主義は民主政治一般の否定であり、國內に於ける自由の破壞である。企業獨占は又生産量の増大であつて、それによつて生じた生産過剰は、國內市場の狹隘を越えて、ダンピングによつて外國市場にその捌口を求め、外國商品に對しては關稅によつてこの輸入を防禦する。殊に帝國主義下に於ては商品輸出は從となり、寧ろ蓄積された資本の金融的利益や投資的利益が商業的利益よりも重要になつて、資本の輸出が主となる。この事は必然的に高度の資本主義的國家間に非資本主義的諸民族國家に對する投資のための競争を惹き起さしめる。この事は結果に於て帝國主義競争を誘發するに至る。この競争の特徴は、帝國主義時代以前に於けるが如き民族的發展のために起る競争に非ずして、資本、即ち獨占資本者階級によつ

て代表される列強が弱少民族を壓迫する點にある。此處に吾々は、外國資本による他民族の壓迫に對する反抗が當該民族に於けるプロシヰズム發生に聯關あることを忘れてはならぬ。

ブルジョア資本主義社會に於ける企業の獨占は、小企業を驅逐し、中産階級を益々没落過程に陥らしめる。そのためにブルジョア階級と中産階級との對立は益々烈しくなる。一方立憲議會政治に於ては政黨は益々階級化して、ブルジョア階級の手握られ、政黨は獨占化するが、然し資本と資本との争ひは、政黨政治の上にも現はれ、政黨や議員はブルジョア階級の手先きとなつて活躍し、利権漁りに没頭することによつて、政黨内部の抗争が絶えず起り、政權が動搖し議會の解散が屢々行はれる。斯くして政黨政治の墮落は國民の信用を失ひ、嫌惡的となる。プロシヰズムが議會制度に反對して起つた理由は此處にある。勿論議會制度に對する信用が缺如した場合にはテロリズムが行はれて、右翼も左翼もテロ化する傾向がある。が然しプロレタリア獨裁にしてもプロシヰズム獨裁にしてもかゝる非合理的な手段によつてのみ成立するものではない。成程露西亞のプロレタリア獨裁は革命によつて發生したがナチスの獨裁は議會に於ける多數權によつて合理的に發生してゐる。

帝國主義時代の下に於てはかゝる中産階級とブルジョア階級との對立ばかりでなく、勞資の對立は猶一層烈しいものとなる。即ち、企業獨占の結果は生産量の増大となるが、この販路は世界市場が益々狭隘となるに連れて、生産過剰を招來する。然るに獨占によつて抑壓されてゐる大衆はその消費力が減退してゐる故にこれらの過剰生産をこなすだけの力が缺けてゐる。一方生産は大量的に續けられ

て行き、その生産額を切り下げる事が出来ないから、市場には商品が充満し、而かも買手が無い状態となり、このために金融が逼迫して恐慌が起る。そこで資本家は勢ひ企業の合理化を計り、工場閉鎖や、操業短縮の手段を以つてこれに當り、殊に最小の生産費で最大の利潤を得るためには資本家は勞働者階級に支拂ふ賃銀を出来るだけ少くする様に努力する。かゝる事態の結果は失業者の數を益々多くし、産業豫備軍は増大する一方となる。そして大衆の貧困が強度化され、無産者階級とブルジョア階級との對立は一層激烈となり、一方このために勞働者階級はブルジョア階級に對する闘争手段を組織化してこれに當る。そして帝國主義の下に於て世界がブルジョア階級對無産階級の共同の闘争となつて現はれた時に、萬國の勞働者は反動的帝國主義××を利用して、それを××に轉向せしめることによつてプロレタリア獨裁を樹立せんと試みるに至る。この努力は露西亞に於て大戦當時にその成功を見たが、然し何れの國に於てもその見込があるわけではない。獨占資本主義の地盤が強く帝國主義的競争に勝利を博し資本主義の危機を切抜ける事が出来れば資本主義の支配は續行されてゆくであらうし、帝國主義競争に勝利を得ても資本主義の地盤が比較的弱い場合や中間階級の動向やその勢力の如何により、又は官僚軍閥の基礎如何によつて資本主義の危機はプロレタリア革命に至る前に、プロシヰズムの獨裁を發生せしめる可能性がある。併し乍らこの場合に注意すべき事はプロシヰズムの獨裁は資本主義に絶對的に反對するものではなく、資本主義の内的矛盾によつて作り出された經濟的社會的危機を經濟機構の國家的統制によつて救ふことを目的とし、このためには勞資の協調が必要である

故に、民族的或ひは國粹的精神即ち超階級の理想の謳歌によつて兩者を結びつけようとする。が然しその實質はブルジョア階級の存立が可能である限り、プロレタリア階級はそれに從屬する事となり、従つてプロレタリア階級の地盤が弱体化され、それだけブルジョア階級は安定的になる。故にプロシヰズム獨裁はブルジョア階級にとつては資本主義の危機を切り抜けるための一つの政治的手段であつて資本主義的生産の一定の發展段階に於て過渡的に發生するものである。この意味に於てプロシヰズム獨裁はブルジョア獨裁の一變態であり同時にプロレタリア獨裁とは全く相對立してゐる。

**プロレタリア獨裁** (Die Dictatorship of the proletariat, Dictatur des Proletariats, 德 Dictature du proletariat) は資本主義から共産主義への過渡期に於ける唯一の支配形態であり、現在サヴェート制度によつてとられるものである。その目的は、階級對立のある資本主義の支配下の所謂民主主義に於ては資本並びに土地の所有者の權力が社會の實權を握つて全體民族の意志は實際に於ては葬り去られてゐる。従つて後者の意志を實現即ち眞の意味の民主主義を樹立するためには、資本主義社會に於ける生産手段の個人的所有並びに消費手段の所有を除去することによつて階級の對立をなくする事が必要である。この使命を帯びてゐるものはプロレタリア階級であつて、プロレタリア階級は革命によつて眞の意味の民主主義を勝つて獲得する。然し乍らこの新しい民主主義は直ちに得られないから、即ち革命が終つた後も未だブルジョア階級やこれに味方するものの反抗があり、それを壓迫するため、且彼等を新らしい民主主義に慣らすために、完全に階級の撤廢が行はれる迄プロレタリア階級

のみが政權を握ることになる。即ちルソンの意味に於ける民族的主權の代りに、プロレタリア階級の階級的な主權が現はれる。そして此處ではモンテスキュー流の三權分立が廢止され、立法權と行政權は一致し、プロレタリア階級は勞働者であると同時に官吏となる。そしてプロレタリア階級のみが選舉權と被選舉權とを有し、他の少數の庶民は選舉權から排除される。かくして人口の中の壓倒的多數者であるプロレタリアの民主主義はブルジョア階級の民主主義に數千倍も勝る民主主義的となり、各個人の自由な發展は實現される。更にプロレタリア獨裁に關する主張の中には社會革命の遂行、即座の全體社會化、テロリズムの戰術的要素が加つてゐる。かゝる概念を持つプロレタリア獨裁が眞の意味のマルクス、エンゲルスの主張と一致してゐるか否かに就いては論争があつて、各々眞正のマルキストを以つて任ずるレーニン(Lenin: Staat u. Revolution. Die Diktatur des Proletariat u. der Renegat K. Kautsky, 1919)やトロツキ(Brahin: Das Programm der Kommunisten, 1919)やトロツキー(Vom der Oktober Revolution bis zum Brester Friedenvertrage, 1819)とカウツキー(Die Diktatur des Proletariats, 1918. Terrorismus u. Kommunismus)との間に論争が交され、テール(Karl Diehl: Die Diktatur des Proletariats u. das Rätesystem, 1921)もこれに就いて述べてゐる。ボルシェヴィキの主張に對する意見は、總括すれば、民主主義の取扱方如何の問題であつて、テールの主張によると、マルクスはプロレタリア獨裁のために民主主義の原理を否定したのではなく、彼がプロレタリア獨裁に關して云つてゐる限り、ボルシェヴィキの意味に於てこれを

理解しなかつたし、且民主主義の政治的原則に對して對立的立場をとつてはなかつた。その上マルクスやエンゲルスがプロレタリア獨裁に就いて云つてゐる箇所は多くの場合手紙や小論説の中であつて、基本的な著者の中では發見されない。従つてプロレタリア獨裁の要求も彼等に於ては僅かな役割しか演ぜられてゐない、といふのである。そしてプロレタリア獨裁は階級的差別的撤廢のためには必要な通過點であるがそれは短かい間の過渡的例外状態であつて、ボルシェヴィキ連(例へばハリン)の主張する如く、數十年又は數代間のものではなからぬ、マルクスもこの點に就いては語つてはゐない。そして民主主義の形態は寧ろ保持されるべきもので只異つた内容で以つて満たされるべきである。全體の民族階級から政治的權利を奪ふことはマルクスの見解に反對する。マルクスの見解によると獨裁は、一般に民主主義が未だ行はれてゐない場所に於いて必要であつて、此處で獨裁は始めて民主主義の原則を實現するべきである。マルクスの意味に於けるプロレタリア獨裁は、ブルジョア階級が既にその支配を失つたといふ事實のみを表現すべきであり、ブルジョア階級を暴力で以つて滅ぼす手段であつてはなからぬ。テロリズムはマルクス及びエンゲルスによつて勤められてゐない。民主主義的共和國は政體として存續されるべきである。即座の社會化やテロリズムはマルクスの政治的活動の最初の時期の思想であつて、彼は壯年時代に思想的變化を來してゐる。従つてそれ等はより古いマルクス主義のロシア化されたものであつて、プロレタリア獨裁のボルシェヴィキ的解釋の中、生産手段の私有や消費手段の所有の廢止や國家の死滅に關する重要な解釋を除いてその他のボルシェヴィキ

キーの見解は絶對的に非マルクス主義的である、といふのである。ファシズム(※ Fasizm, 譯 Faschismus, 等 Faschisme)獨裁(ファシズムの項参照)は元來イタリアに於いてムッソリーニによつて起された運動であるが、今日ではこの種の獨裁を總稱するために用ひられてゐる。従つて獨逸のヒットレルの下に於けるナチス獨裁もその本質上ファシズムの運動形態に屬してゐると云ふ事が出来る。ファシズム獨裁が帝國主義時代下に於ける經濟恐慌の打開策としてとられた一つの支配形態であることは前述した。それはその發生の時に當つては獨占資本に對する反抗であり、資本家の意志によつて動かされて腐敗化した議會主義に對する反動として起つたものである。従つてその運動の綱領は反資本主義的言辭に滿ち且社會主義に近い面相を呈してゐる(例へば獨逸民族社會主義労働黨の如き)然しその内容は財産の私有を認め、階級の存立を認める限り、資本主義と異ならない。今ファシズムの支柱となつてゐる階級層を見るに、それは大體に於て中間階級である。即ち中商工業者、中農、官吏、軍人、インテリゲンチヤの諸階級によつてファシズム獨裁の支持が得られてゐる。資本の獨占化の傾向によつて中商工業者や農民の窮乏が増大し、このために獨占資本家階級に對して大なる反感を持つに至り、官吏や軍人は元來一切の社會關係から超越した國家といふ永遠的性質を持つものを守るといふ崇高な理想を懐いてゐる階級であるが、獨占的金融ブルジョア階級の支配、殊に世界大戰後に於ける獨占資本の「寡頭政治」が露骨に議會政治の無能と腐敗とを暴露し、外交的手段に於いても軟弱な態度を示し、軍縮に賛成したるが如き立場に至つたのに對して國家的見地からブルジョア階級の政治に對

して反對し、國難救助のために自ら國政を執る必要を認めるに至つたのである。インテリ階級は最初から金融資本家に對しては反對的立場をとつてゐるが、然しその反對は積極的なものではなく寧ろそれに對して反感を懐いてゐる程度に止まつてゐる。従つてこれらの階級が反資本主義的であることは事實であるが、然し亦これらの中間階級層はプロレタリアでなく、自己の所有物に執着してゐる。且現代の行詰まれる社會に於ても自己の希望を棄てない階級である。従つて彼等は社會主義に對しても反對である。この意味に於いてファシズム獨裁は中間階級のイデオロギーを持ち、反資本主義、反共產主義を共通の要素として持つてゐる。併し乍らこれらの各社會層の利害と感情との間には何等の統一がなく、官吏と軍人との間には互ひに勞力的争ひがあり、インテリ階級は亦テロリズム的行爲に對して反感を持つ、従つてファシズムの理論には何等の體系がない。従つてかゝる難多なものを統一するためには超現實的な理想を樹立することによつてのみ可能である。例へば獨逸のヒットレル獨裁下ではゲルマン民族の國粹的謳歌、伊太利のムッソリーニの下では光榮ある羅馬の復興の理想がある。この國粹主義は現實に於て如何なる形をとつて現はれるかと云へば、第一には排他國主義であり、民族精神、民族の清淨の強調であり、そこにナチスのユダヤ人排斥の根據がある。第二は國家至上主義であつて、個人の利益よりも先づ國家の利益が主となり、従つて階級の對立は廢止され、立法も國家主義の見地に於て改廢され、各人は國家と云ふ有機體の一部分として、個人の自由は全體のために犠牲にされ、労働者も農民も商工業者も學者も凡て各自の職業を忠實に固守することによつて全體の調和を

保つことが強制される。そして個人權利も國家の延長として認められる。これは共同體的結合、即ち普遍主義の意識的強調であつて、個人中心の自由主義否認を意味してゐる。第三に經濟の國家的統制であり、それによつて恐慌を征服せんとすることであり、そのためにも海外植民地の獲得が實行される。然しファシズム獨裁の下に於ける恐慌克服は、優位的地位を失はないブルジョア階級と中間階級、無産階級との双方のための妥協を目的とする限り、今迄の所ルーズベルト(Franklin D. Roosevelt, 1882-)のニュー・ディール、ナチス獨裁強化のためのシャハト(Horace Greely Hjalmar Schacht, 1877-)の新計畫も、ムッソリーニのそれも失敗に終り、却つて恐慌に堪へないことを示してゐる。ムッソリーニのエチオピア征略もこの經濟的、社會的危機切抜けのための計畫に過ぎない。斯くしてファシズム獨裁は云はば社會進化の硬化であり、資本主義發展の現實の進歩に對して何等積極的な態度に出ず、却つて寧ろ前資本主義的な發展段階に社會を逆戻りすることであつて、其處には最早封建制度に反抗して新興ブルジョア階級が作り上げた客觀的進歩を意味するイデオロギーは認められず、却つて氣力のない中間階級のイデオロギーが支配してゐる。そして現實の窮乏化は寧ろ益増大しつゝあり、この場合に當つてファシズムがその獨裁を益々強化せんとするに當つて金力を必要とする限り、ブルジョアもそれに助力を與へることによつて安全を得られる以上、ブルジョア階級とファシズム獨裁との結びつきは益々密接となる、従つて中間階級の固定化が行はれ、ば行はれる程この階級はブルジョア階級に對して奴隸的立場をとらざるを得なくなるであらう。(加茂儀一)

日本精神

一般的に云へば、日本民族の歴史が何等かの精神の表現であるとか、又はその表現自身がこの精神であるとか考へる立場に立つ時、この精神が日本精神と呼ばれる。之によつて日本民族の歴史がもつ本質が云ひ表はされると考へるのである。精神といふ言葉が通俗的に、ものゝ本質乃至生命を意味する限り、日本精神なるものは日本民族の本質を通俗的に云ひ表はす言葉として都合なく用ゐられるといふ。併し日本民族の歴史そのものが日本精神なる表現であるとか、又は日本精神の表現であるとか考へられる場合は、夫はもはや通俗的な語法ではなくて、一定の哲學乃至世界觀上の體系を想定した上での一つの理論的説明を意味する。即ち解釋學的な歴史哲學乃至歴史觀へ夫は立脚する。こゝに於て日本精神といふ概念自身の理論上の基礎が含まれてゐる。この意味に於て、日本民族乃至日本の歴史の現實を解明乃至解釋する一つの原理として、日本精神なるものを持ち出すことは、一種の哲學的觀念論に立脚するものである。日本精神の提唱は、云ふまでもなく今日に始つたのではない。併し之が一定の意圖の下に、廣汎に提唱され又強調され又流行し始めたのは、XXXXによる滿洲國獨立と、之をシグナルとする處の日本ファッシズムの急速な擡頭以來である。日本精神は日本XXXXの諸イデオロギーの共通な根本觀念であり、又實にその合言葉又はスローガンである。無論一般にファッシズムはその本質と名目上のレッテルとが一致しないといふ著しい特色を有ち、そのイ

デオロギーは何等その本質に相應するとは限らないのが恒であるが、その意味に於てファッシズムはそのイデオロギーを一種のデマゴギイとしてしか持つことが出来ないものであるが、日本精神なるものも亦、日本XXXXXXのためのさうしたイデオロギー日本主義の根本觀念なのである。

元來ファッシズムは様々な形態と條件との下に高度に發達した諸ブルジョア國に於ける獨占・金融・大産業・資本主義の行き詰りと内訌と腐敗との必然的な一つの著しい所産であつて、無産者大衆の社會主義的組織が充分鞏固に社會變革的に發達してゐないにも拘らず、無産大衆の社會變革へのエネルギーが横溢してゐるやうな國に於て、各種の社會民主主義者の認容の下に、中農・小商人・軍人・官吏・意識の遅れた労働者、其他等の層の意識を通じて、獨占・金融・大産業・資本がこの無産者の變革的エネルギーを強力的に抑制して自らの解體を延引しようとして用ゐる政治形態である。日本に於ては、その資本主義が世界的發達水準に達してゐるにも拘らずなほ著しい封建制の殘存物（軍閥・官僚・國家的家族制度・其他）に依存してゐるのであるが、そこで日本のファッシズムはこの封建的殘存勢力を利用して、それによつて初めて、純然たるファッシズムの道を開拓する他はない。さうでなくてもファッシズムは民族主義・國粹主義・ショーヴィニズム其他を介して封建化・原始文化化・其他を最後のイデオロギー内容としなければならぬのであるが、特に日本ファッシズムはこのイデオロギーに特別に都合のよい根據を附與することが出来る。日本の封建的殘存勢力を利用して、ファッシズムが必然に赴かざるを得ない一種の封建化的イデオロギーを、強化し

權威づけるものが、正にこの日本ファッシズムのイデオロギーとしての日本主義であり、そしてその中心觀念が日本精神なのである。それ故日本精神の各種の主張は、まづ第一に日本精神を高唱する一つの精神主義といふ共通特色を有つてゐる。唯物主義・唯物思想・唯物論、乃至科學的態度・技術的文化、そして最後に個人主義と資本主義、之に對するものが精神主義でなければならぬといふ。尤も之は決して日本精神主義に就いてだけに限る現象ではなく、各國のファッシスト獨裁國のファッシスト・イデオロギーの共通な云ひ草であるが、特に日本精神主義はこの精神が特別に日本的であることを強調する。と云ふのは、ヒトレルもドイツ的精神を、ムッソリーニも亦イタリア的精神を強調するのであるが、日本精神主義者は、國粹的な國學の範疇を用ゐて獨特な國史認識の方法を用意してゐるの

であり、或ひは民族神話的、或ひは儒教的、佛教的或ひは却つてヨーロッパ哲學的、言辭を援用することによつてさへ、固有に日本のものなものを導き出す。その結果、日本精神主義による日本精神なるものは、その國家封建主義的乃至封建主義的國史認識の方法とその認識の對象との二重の關係から云つて、根底的に封建的な乃至原始的でさへある處のものとならざるを得ない。所謂日本精神のこの封建性乃至原始性を利用してことによつて、現代日本の資本主義の露骨な矛盾は、合理的に解決される代りにこの矛盾が無かつたかのやうな原始的な諸條件の讚美にすりかへられる。日本精神主義の一つの變形はアジア主義乃至大アジア主義であり、日本精神に基く日本はアジア有色人種の代表者・指導者として、ヨーロッパの唯物思想・個人主義・資本主義等々に對抗しなければ

ならず、つまり滿洲及び支那其他は日本を盟主として誕生しなければならぬと説く。この際日本精神に基く政治理想は政治國家的觀念の代りに古代支那の封建イデオロギーの一つである王道主義でなければならぬ。——それから日本精神主義の一つの特殊な形態は、一種の農本主義となる。日本の封建制殘存の一つの物質的地盤でもある處の農業労働（特に零細農業労働）人口の壓倒的多數といふ事實に假託して、農業中心主義而も低技術的な農業中心主義が日本精神の主たる内容であるとし、唯物論・マルクス主義、或ひは自由主義・個人主義・資本主義等々が想定すると考へられる工業中心主義は、絶対に日本精神と相容れないと説くのである。つまり日本精神は非資本主義的であるから、ヨーロッパ的社會主義は日本精神にとつて有害無益だといふことになるのである。資本主義の矛盾を資本と労働力との社會的對立にあると見る代りに、都市と農村との對立にあると見るのは、この農本主義の廣く行はれてゐる結論の一つであり、日本のXXXXXX自身がこの農本主義的結論に對して絶大な信頼を懷いてゐることに注目する。

日本精神の内容如何に就いては日本ファッシスト連の間に初め必ずしも完全な一致はなかつたが、一九三四年（昭和九年）以來、右翼政治思想諸團體間の戰線統一がおのづから行はれると平行して、夫は遂にXXXXXに歸着統一されることとなつた。日本のXXの本義はこのXX主義にあるのであつて、日本精神とは取りも直さずこのXX意識だといふことに結着した。事實右翼諸團體の統一運動は、XX・ブルジョア政黨・反動諸團體の表面上強調する國體明徴の運動によつて、速かに促進された。處がXX意識なるものは實は主と

して國家理論的な乃至は政治學的な技術上の觀念であり、主として憲法の法律學的解釋の問題に結びついてゐたのであるから、各種の内容の日本精神は反自由主義的憲法解釋に於て、共通な一致した三角點を發見することが出来る。従つて日本精神の内容は又この點に集中加重される。アジア主義や王道主義の聲は衰へ農本主義の教説は無用となり、獨り××主義・××觀念だけが××精神の中心に置かれることとなる。

日本精神の提唱は一見自由主義に對する抑制であるかのやうに見える。事實又夫は封建的勢力の高揚に他ならぬやうに見える。だがもし日本主義を目して單なる封建的勢力の高揚だとしか見ない者があるとすれば、それは日本主義の本質を見誤り、その處理法を誤るものでなくてはならぬ。日本精神は明らかに日本に強力に殘存しつゝある封建的勢力を材料とするものであり、もしこの材料に頼らぬとすれば全く成立し得なかつたものであるが、併し問題は、何故に、何の目的のために、何の意義に基いて、かゝる封建的勢力が日本精神の材料とされたか、といふ點にあるのであつて、こゝに日本精神の意義と本質とがあるのである。單なる封建制の高揚は反資本主義的の反動でこそあれ、資本主義の矛盾の隠蔽としては何等の用をなすものではない。さういふものが日本の資本主義の特別に危険なタリシスに際して速かに高揚する理由はない。それが高揚し得たのは他ならぬ資本主義そのもの、焦眉の急に夫が何より役立つものと意識的無意識的に資本主義自身によつて認定されたからなのである。即ち日本型ファシズムの何より有力な而も不可欠な材料として、こそ、封建的殘存勢力がこのクリシスに際して特に速かに動員され始めた

のである。××××はだから日本ファシズムのイデオロギー日本主義の根本觀念であり合言葉である。日本のブルジョアジーは決して純資本制的なブルジョアジーではなく、それがブルジョアジーであること自身の内に、封建的殘存物に依存しなければならぬといふ二重性の統一を有つてゐる。従つて日本では徹底的なブルジョア・デモクラシーは未だかつて實現されたことはなかつたし、従つて純正なブルジョア自由主義も十分に根柢的な傳統を有つてゐない。日本に於ける自由主義そのものが、封建性に依存して初めて高度に發達し得た資本主義の、かの二重性の統一といふ烙印を帯びてゐる。従つて日本精神の提唱即ち日本主義が自由主義の打倒を叫ぶにしても、夫は寧ろ自由主義の（日本に取つては）一つの誇張に他ならぬ處の純正なブルジョア自由主義を打倒すことではあつても、日本ブルジョア自由主義自身の打倒を決して意味するものではない。日本のブルジョアジーは殆んど何等の轉向と改心を経ることなしに、おのづから自由主義者となり又は初めから日本主義者であることが出来る。極端な戲畫的な形態をさへ取らなければ、日本主義こそその本質と眞髓から云へば、日本ブルジョアジーの、又は日本ブルジョア社會の、常識であり通念である。この常識と通念が誇張されたものこそ、正に日本精神なのである。主觀的な意圖に於て自由主義の精神と日本精神とが如何に對立對抗しようとも、その客觀的な本質に於ては、二つの間におのづからの移行と連絡と協定とが横はつてゐる。特に自由主義の精神に立脚するブルジョア民主主義者は、迅速に日本精神へ傾斜して行くことが出来る條件を持つてゐる。（戸坂潤）

### 日本の哲學

一 日本の哲學の特色  
二 明治時代の哲學

三 大戦以後の哲學  
四 非常時の哲學

一 日本の哲學の特色 日本の哲學と云つても、それは要するに西洋哲學の移入されたものであるにすぎない。哲學の如き學問に於いては特殊諸科學の高度の發達と哲學的思索方法の長い間の訓練とがなくしてはその充分なる展開を見ることは不可能であるし、況んや充分明瞭な姿をもつ特色がそれに現はれるといふことも不可能である。日本に於ける哲學の發達は明治維新以後西洋の哲學の移入以後約三分の二世紀の期間しか経てゐない。それ故、實際の所日本の哲學は現在に於いてもなほ獨自の體系といふやうなものを有するに至つてはをらぬ。吾々が茲に日本の哲學の鳥瞰圖を興へんとするに當つても畢竟西洋の哲學がわが國に移植された状況を畫き出すことを以て大體その目的を果すことが出来るのである。

勿論このやうに日本の哲學の發達史は西洋哲學の移植の歴史ではあるが、たゞ全く西洋哲學そのまゝであるとは言へない。表面的には西洋哲學そのまゝの移植であると思はれるが、その移植の仕方のうちには或る意味では日本の哲學の特色があると考へられるであらう。明治維新以後漸く開拓され出した資本主義制度の發達、大正初年に於ける世界大戦時代を境とするその高度の發達、及びそれに續く資本主義的生産關係の内部的矛盾の顯現等々の現實社會の地盤の上に行はれた西洋哲學の移入は哲學の諸體系の單に形式的な移植を許さずして、その移植そのものが、この地盤の變化に依つて制約さ

れてゐる。また他面に於いて日本に於ける長年月に互つて維持されて來た諸の傳統がその移植の仕方に大なる影響を與へずにはおかない。かくして日本の哲學の特色といふものを強ひて探し出すならば西洋哲學の諸體系が夫々その出生地たる本國に於いて根深く張つてゐたものが日本に於ける社會の現實的基礎のその時々々の事情に應じて根を淺く移植された結果として、それらの體系が原生地に於ける如く論理の明晰性と理論の嚴密性とを伴ふことなく直觀的に把握されてゐるといふことである。このやうな特色は最近に至つて漸くわが國に生じつゝある二三の哲學體系に於いては一層明かに見られる所である。

二 明治時代の哲學 茲に明治時代の哲學として一括して論ずるものは詳しく云ふならば、明治初年より大正の初期、世界大戦の時期に至る迄の期間を指すのである。これを便宜上初年より國會開設の二十三年までの第一期と、それより日露戦争の終了せる三十八年までの第二期と、それより世界大戦の始つた大正三年までの第三期とに分けることが出来るであらう。

(a)第一期 明治時代の全體を通じて言ひ得ることは未だ講壇哲學といふものが確立されなかつたといふことである。哲學が大學の講壇に於いて體系的な形を整へて講ぜられるやうになつたのは大正に入つてからであるといつて差支へない。勿論東京帝國大學は明治十年に創立されて、創立當時既に哲學科が設けられたのであるが、哲學が學的體系を整へて現はれ出したのは明治の末期、嚴密には大正に入つてからである。十一年にはアメリカ人フエノロサが東京帝國大學の哲學教授として招聘されたのであるが、彼の哲學者として

の教養はさして高く評價することは出来ない。右に述べたことはこの第一期に就いては殊によく當嵌るのであるが、然しこのことはこの時期の哲學思想の本質を低く評價すること必然ならしめるものでは決してない。或る意味では後に哲學が講壇哲學としての形を整へてからよりも健全なる點を有してゐるとも言ひ得るのである。それは當時の哲學思想が單に學問的の體系的形式的必然性といふやうなことを目標として追求されたのではなくして、當時の社會の現實的發展に伴ふ現實的な要求を充すために追求されたからである。明治維新の社會變革は根本的には資本主義的制度へ向つての變革ではあつたが、他方にはなほ封建制度の勢力が可成り根強く残つてゐた。そしてかゝる半封建的資本主義制度の下にあつた當時の日本は自由平等への熾烈なる要求をもつ國民をして國會開設といふたゞ一つの目標への達成に驅り立てさせたのである。かゝる政治運動の一つの契機として當時の哲學思想は人々の關心を惹いたのである。それ故當時の哲學思想は政治思想の形に於いて問題とされ、西洋から移入された哲學思想も多くはその政治的な關心を中心とする人生觀の哲學として移植されたのである。

このやうな事情の下にあつて移入された哲學はイギリス十九世紀後半の功利主義哲學者たるベンタム(Jeremias Bentham, 1748—1832)・ミル(John Stuart Mill, 1806—73)・スピアンスー(Herbert Spencer, 1820—1903)の思想及びルソー(Jean Jacques Rousseau, 1712—1778)やモンテスキエ(Charles Louis Montesquieu, 1689—1755)の啓蒙期のフランスの政治思想である。明治初年にはこれらのイギリス及びフランスの思想が實に多數の翻譯及び紹介を通して

て移植されたのである。そしてその根本動機は當時の維新の社會變革に依つて齎された新しき状態に應じて國民の民主主義的な政治的要求から發してゐるのである。當時最も論議された問題の一つは天賦人權論であるが、之なども右の事情に基いて起きたものである。右に挙げたイギリス及びフランスの思想家の翻譯紹介は實に多數に上つてゐるが、かゝるイギリス及びフランスの思想の移入に最も功績のあるのは福澤諭吉と中江兆民とであらう。前者はイギリスの功利主義的思想を、後者はフランスの民主主義的思想をわが國に移植するに努力した。福澤の『學問のすゝめ』『西洋事情』『福翁百話』『文明論之概略』等は利用厚生之道を奨め、獨立自主の精神を鼓吹したものであつて、その根柢は功利主義の哲學であつた。中江兆民はこの時期に於いては直接フランスの民主主義的思想の紹介に主力を盡して、未だ自己の思想といふやうなものを有してゐなかつた。ルソーの『非開化論』とか『革命前佛蘭西二世紀事』などがこの時期に於ける彼の主なる業績である。ところで福澤及び中江の關心の向けられてゐたのが哲學といふよりも、寧ろ政治的運動と結び付いた廣い意味の思想であつたに反して、學問としての哲學に關心を向けてゐたのは西周と西村茂樹である。哲學といふ言葉をはじめてわが國で使用したのは西であるが、それは物理と心理との差異を論じた『百一新論』のなかに於いてである。『百教ノ趣キ極意ノ所ヲ考フレバ、同一ノ趣意ニ歸スル』といふのがこの著書の主旨である。なほ彼はコーペン(Joseph Haven)の『心理學』ミルの『利學』の翻譯をして啓蒙家としての功績を残してゐる。西村には『泰西史鑑』といふ翻譯の他に幾多の著述があるが、就中有名なのは

『日本道徳論』である。彼の思想は一元論的形而上學であつて、その説く所必ずしも理路整然としてゐない。むしろ道徳至上主義者として當時大きな影響を與へたのである。

なほ明治時代の全體を通じて活潑な學問的活動に依つて大きな影響を與へた加藤弘之も既にこの時期に活動し始めてゐる。天賦人權説の熱烈なる主張者であつた加藤は明治二年に『非人穢多御廢止之義』の建白をなしてゐる。ついで『眞政大意』『國體新論』『人權新説』等を發表して自由民權運動の理論的の代表者となるに至つた。これらの著述の根柢



加藤弘之のベッケル(Ernest Heine)

をなす彼の思想は功利主義的個人主義的な立場に立つてダーウイン流の進化論を取り入れたものである。そして彼の思想の特色をなすものはドイツのベッケル(Ernest Heine) rich Häckel, 1834—1919)等の唯物論的思想が基調をなすと同時に他面に於いては権力主義的傾向を有することである。この権力主義的進化論の思想は最初は急進的自由民權運動の擁護者であつた彼をして後には優勝劣敗の進化の法則に基くその反對論者たらしめてゐる。『眞政大意』及び『國體新論』は世論の反對に遭つて十四年に發禁になつたが、十五年に上梓された『人權新説』に於いては萬民共治の過激なる共和制に對しては眞向から反對してゐる。この加藤の思想の推移の善惡の批判は別として、兎も角彼の思想の推移は

當時の自由民權運動の道程を示すものであると同時に、二十三年に開設された議會制度の内容を豫知せしめるものである。

(b)第二期 二十三年の國會開設に依つて輿論も一應静まつて、哲學の研究も漸く静かな軌道の上を走るやうになつた。かくして哲學の研究は現實の社會の動きとは直接關係なく進められるやうになり、いはゆる講壇哲學が確立されるに至つたのである。東京帝國大學の機關雜誌たる『哲學雜誌』も既に二十年には創刊されてゐたのであるが、この時期に至つて漸くその影響力を有するに至り、掲載論文も漸次アカデミックな傾向を帯びるやうになつた。

勿論この時期にも講壇哲學以外の社會の現實の關心より出發した哲學がなかつたわけではない。然し一方に於いて講壇哲學が確立するに至るとともに、そのやうな講壇以外の哲學思想はいきほひ漸次政治的に急進的になつてゐた。國會開設の實現とともに到達せし現實に不満を感じて雜誌『自由平等經綸』に據つて國權イデオロギーに反駁を加へた中江兆民の思想の如きはその代表的なるものである。後病床に就いてからは『一年有半』及び『續一年有半』を著して徹底せる唯物論を説いた。彼は同じく唯物論者たる加藤弘之より一步進めて絶對的な無神論を主張してゐる。この兆民を以て明治時代には大學の講壇外に於ける卓越せる哲學者の終りとせねばならぬであらう。勿論社會主義的運動の根柢としては唯物論的思想が多くの人々に依つて抱かれてゐたてはあらうが、それらの人々の努力の主力は實際運動に注がれて、哲學思想としては何等重要なものではない。

この時期に於ける哲學上の思想傾向としては前の時期を受けて未



だ進化論乃至は功利主義の思想の研究が盛んであつた。それらの翻譯及び紹介も引き続き行はれた。そして加藤弘之がその進化論的唯物論の立場に立つて活躍したのも前の時期の繼續であるが、その唯物論的傾向はこの時期に至つて一層深まつてゐる。このことは彼の著書『強者の権利の競争』『道德法律の進歩』『道德法律進化の理』『自然界の矛盾と進化』等に見られる。然し彼以外に新しく中島力造、大西祝、井上哲次郎、三益良、清野勉、元良勇次郎、三宅雄二郎、吉田静致、桑木殿翼、紀平正美、波多野精一、今福忍、井上圓了、朝永三十郎、藤井健次郎の諸氏が『哲學雜誌』に據つて活動し出してゐる。これらの人々の活動は大體啓蒙家としての活動であつて、特に取り立てゝ論ずるほどの學說が作り出されたとは言ひ得ない。然し前の時期と比較して感ぜられることは政治的關心が衰へて理論的關心が著しく高まつて来たことである。このことは加藤弘之に就いて殊に明かに見られる所である。さきに挙げた諸著に於いて彼は専ら進化論的立場よりする道德法律等の純學問的な攻究に身を獻げてゐる。同じく西洋の哲學の移入であつてもこの關心の相違は自らその移入する對象を異らしめてゐる。それ故この時期に入つてはもはやイギリスの功利主義的思想やフランスの啓蒙思想だけではなく、漸次ドイツ哲學も移植され出して來てゐる。またそれとともに哲學に屬する諸分科學の攻究紹介も行はれるやうになり、また哲學史に對する關心も漸く高まつて來てゐる。

ロツツェ、ラッド、ジェームズ等に就いての紹介や倫理學、論理學、心理學、認識論等の紹介的論述が見られる。また哲學史に關する啓蒙的論文も數多く掲載されてをり、哲學史の著述も若干現はれてゐる。このやうに考へて來るならば第二期も第一期に引き繼いで啓蒙的活動の行はれた時期であると云つて差支へないであらう。この時期に現はれた著書も殆んどそのやうなものであつて、例へば清野勉『韓國純理批判解説』、桑木殿翼『倫理學』、加藤玄智『問題體哲學小史』、中島力造『今日の哲學問題』、波多野精一『哲學史要』、桑木殿翼『哲學史要』、朝永三十郎『哲學綱要』、角田柳作『グント倫理學史』、元良勇次郎『倫理學』、清野勉『普通論理學』、大西祝『良心起原論』、同氏『論理學』、置江義丸『西洋哲學史』等の如きこの期に現はれた主要な著書に就いてそのことが見られるのである。

良乃至は社會變革を企圖せる社會主義思想家をらなかつたわけではないが、彼等に依つてその思想が哲學として形成されるほど迄には事情は許さなかつた。哲學界に於いても勿論觀念論的傾向のみが認められたのではなくして、實在論的傾向もないではなかつた。然しそれは決してドイツ觀念論的理想主義的傾向に真正面から反對して、それを克服するほどの勢力も有しなかつたし、またその實在論的立場そのものとも決して理想主義を全然否定するやうなものではなかつた。

ハウエル(Arthur Schopenhauer, 1788—1860)等の思想である。これ等の哲學者がこの時期に最も歡迎されたのは、それが他の如何なる哲學者より一層鮮明に理想主義的世界觀を掲げてゐるからである。考へられる。然かもこれらの哲學者の思想が紹介移植されたのがわが國の資本主義經濟が上昇の最高點に達せんとしつゝあつた明治の末期から大正の初期にかけてであることは決して偶然ではない。

この時期に於いて取扱はれた主なテーマはドイツ觀念論哲學ではカント及びヘーゲルであつて、この兩者の著述の翻譯も既に試みられてゐる。また他方ではミルやスペンサーに對する關心の餘蘊も見られる。ドイツ觀念論的理想主義的傾向に對する對蹠的なものとしては既に述べたやうに徹底的な唯物論は餘り勢力を有してをらず、たかだかヘッケルやオストワルト(Erichrich Wilhelm Ostwald, 1853—1932)の自然科学的唯物論的な世界觀が問題とされてゐるに止る。またバークレー(George Berkeley, 1685—1753)やヒューム(David Hume, 1711—1776)の經驗論哲學とかブラダマティズムの紹介も行はれて可成り人々の關心を捉へてゐるが、全體として見るならば決して有力とは云へない。學界の主流は矢張り觀念論的理想主義的傾向にあつたのであつて、その意味ではドイツ觀念論的哲學が力強く支配してゐたのである。然しそれよりも一層多く人々を惹き付けたのは同じく理想主義的乃至觀念論的傾向に屬するオイケン(Rudolf Kucken, 1846—1928)、『ルグソン(Henri Bergson, 1859—)』、『ニーチ(Friedrich Nietzsche, 1844—1900)』、『ニーチン

この時期に活躍せる人々としては初めには加藤弘之、元良勇次郎、井上哲次郎、紀平正美、井上圓了、三宅雄二郎、中島力造、波多野精一、金子馬治、それから當時未だ新進であつた深田康算、石原謙、小尾範治、大島正徳、高橋穰、宮本和吉、田邊元、島本愛之助、高橋里美、安倍能成等である。ケーベル(Karaphael Koerber, 1838—1923)がわが哲學界に最も影響を與へたのも大體この時期の終項である。この時期に上梓された著書としては特に擧ぐる程のものはない。比較的注目すべきものとしては、ケーベル『神學及中世哲學研究の必要』、波多野精一『スピノーザ研究』、西田幾多郎『善の研究』、加藤弘之『學說乞丐袋』、中島力造『西洋哲學史十回講義』、波多野精一『認識論』、加藤弘之『迷想的宇宙觀』、井上圓了『哲學新案』がある。然しこの時期の終り頃から歐洲大陸の終り頃に亘つては前述せるオイケンやベルグソンまたはニーチやシュローベンハウエルに關する著述は斷然多い。まづオイケンに就いて言ふならば、安倍能成『ルドルフ・オイケン大思想家の人生觀』、波多野精一・宮本和吉共譯『新理想主義の哲學』、加藤直士『宗教哲學の主要問題』、得能文『オイケン著精神生活の哲學』、鹿子木貞信『オイケン著、自

然主義か理想主義か、今岡信一郎『オイケン著現代思潮と倫理問題』等の翻譯や稻毛詠風『オイケンの哲學』、三竝良『オイケンの哲學』、現代叢書『オイケン』、安倍能成『オイケン』等の紹介がある。ベルグソンに關するものには錦田義富『ベルグソンの哲學』、金子馬治・桂井當之助『創造的進化』、高橋里美『物質と記憶』、廣瀬哲士『笑の研究』等の翻譯の他に稻毛詠風・市川盧山・ベルグソン哲學の眞髓』、北哈吉『時間と自由意志哲學入門』、野村隈畔『ベルグソンと現代思潮』等の紹介的著述がある。その他ニーチェに關しては和辻哲郎『ニーチェ研究』、安倍能成『ニーチェ著この人を見よ』、久津見巖村『ニーチェ』、和辻哲郎譯『ニーチェ書簡集』等及び少し後れて阿部次郎『ニーチェのツアラウストラ』、解譯並びに批評』が上梓され、生田長江に依るニーチェ全集の翻譯もなされつゝあつた。之に反してショーペンハウエルに關する著述は姉崎正治に依つて『意志と現識としての世界』が翻譯された位であるが、その影響力に至つては前の孰れにも劣らない。

三 大戦以後の哲學 大正三年から七年にかけて行はれた世界大戦はわが東洋の孤島の哲學に對しても全然影響なくはなかつた。勿論その影響の受け方に於いては直接慘禍を蒙つたヨーロッパ諸國とは甚だ異つてゐるが、わが國の經濟界が大戦の影響を受けて飛躍的な發展を遂げて資本主義經濟の頂上に辿り着くことに依つて、哲學の研究の方面に於いても前の時期の理想主義的世界觀が一層強く高調され、前の時期の如く端的に世界觀を掲げることをも以て満足せず、その一層科學的嚴密さを持つ究明が要求されるに至つた。かくて新カント學派、現象學等の哲學の科學的研究方法に重點をおく

哲學が移植されるに至つたことは蓋し當然のことである。それと同時にドイツ觀念論の哲學も前の時期より一層嚴密に再び攻究されるに至つた。然しかゝるアカデミックな傾向に對する反對傾向も反抗力として強まつて來てゐる。そしてかゝる反抗力の最も強力なものは國の資本主義經濟機構が極點にまで完成されて、そのうちに含まれる諸矛盾、殊に階級對立の事實が人々に依つて意識されて來たことに基くのである。

このやうにして、この時期に至つては一方講壇哲學の基礎が固まると同時に、それに対する反對勢力が増大して來たといふ極めて複雑な状態を呈して來た。勿論このやうな對立關係に立ちながら講壇哲學は却つて一層完成され、其中からは漸く獨創的な哲學も生れ出づるに至つた。かくして明治時代を西洋哲學の移植の地均らしの時期とすれば大正の時代はその地均した上にはじめて移植の成果を見出し、かつた時代であるといふことも出来るであらう。哲學の學問的水準といふべきものもこの時代に入つて漸く西洋の先進國に比肩し得るやうになりはじめたと云へるのである。例へば哲學の學問的水準の一規準と考へられる哲學辭典の如きにしても既に大正元年には『哲學大辭書』五卷(同文館發行)が出てゐるが、之は明治年間出版された井上哲次郎・有賀長雄『哲學字彙』(東洋館發行)や朝永三十郎『哲學辭典』(實文館發行)に比較するならば格段の進歩を示してゐる。

このやうにこの時代に至つてわが國の哲學上の啓蒙運動はその頂

點に達したと看做すことが出来るのである。従つてこの時代にはかかる意味に於けるわが國哲學界の學問的水準を高めるに與つて功績ある著書の出版が多數見られるのである。哲學辭典にしても前掲の同文館發行のもの以外にこの時代の終頃には宮本和吉、上野直昭、高橋穰、小熊虎之助四氏の編纂になる『哲學辭典』(岩波書店發行)や伊藤吉之助編輯の『哲學小辭典』(岩波書店發行)が出版されてゐる。これらの辭典の示す内容は蓋しわが國哲學界の水準を示すものと云つて差支へないであらう。

然し年代的に云つてこの時代の初期に現はれたものであつて、前の時代との分水嶺の役目を演ずるものは大正五年以來出版された岩波書店の哲學叢書であらう。これは紀平正美『認識論』、田邊元『最近の自然科學』、宮本和吉『哲學概論』、連水滉『論理學』、安倍能成『西洋古代中世哲學史』及び『西洋近世哲學史』、阿部次郎『倫理學の根本問題』及び『美學』、石原謙『宗教哲學』、上野直昭『精神科學の根本問題』、高橋里美『現代の哲學』、高橋穰『心理學』の十二冊から成る。この哲學叢書が當時の啓蒙に對して有する功績の大なることは何人も首肯する所であらう。また之と同じ意義を有するものもあるが、之より後れること十年餘にして刊行され今なほ未完成の續哲學叢書がある。現在までの所では三木清『歴史哲學』、新明正道『社會學』、宇野圓空『宗教學』、長田新『教育學』、戸坂潤『科學方法論』が出版されてゐる。なほ同じく啓蒙的な哲學叢書としては日本評論社の現代哲學叢書及び理想社の新興哲學叢書がある。前者では池上鏡三『論理學』、小松聖太郎『社會學』、菅圓吉『現代の宗教學』後者では後藤一民『認識の形而上學』、大關將一『現象學概説』、戸坂

潤『イデオロギー概論』、清水幾太郎『社會學批判序説』、竹下直之『辯證法の理論と歴史』、佐藤慶二『認識論概説』、權俊雄『歴史哲學概論』が今迄に出版されてゐる。

このやうな哲學の學問的水準の向上に役立つたところの業績はその他色々な方面に見られるところであるが、就中哲學の古典の研究に就いても著しい進歩を認めることが出来る。古典の研究に於いてはまづ古典的哲學書の卓れた翻譯が次々に現はれて、此方面に於ても昔日の面影を止め教程の進歩を示してゐるといつて差支へない。例へばプラトン(Platon, K. v. Akropolis)の翻譯の如きにしても明治時代に刊行された木村廣太郎の『プラトン全集』が英譯よりの重譯であつたに對して今やギリシア語の原典よりの忠實な翻譯が出るやうになつた。プラトンの譯としては久保勉・阿部次郎共譯になる『ソクラテスの辯明』、『クリトン』、『シユムポジオン』、菊池憲一郎譯の『パイドン』、『プロタゴラス』、鹿野治助譯の『ソピステス』、後藤孝弟譯の『ブイレオボス』、稻富榮次郎譯の『ゴルギアス』等がある。その他に岡田正一に依るプラトン全集の翻譯が行はれてゐる。またアリストテレス(Aristoteles, B.C. 384-322)の翻譯には松浦嘉一譯の『詩學』、岩崎勉譯の『形而上學』がある。またアリストテレスの哲學の特殊研究たるブレンタノ『アリストテレスの存在論』、岩崎勉譯の如きものさへ出版されてゐる。同じく古典として重要なライブニッツの譯としては河野與一譯『形而上學攷説』及び『單子論』、フイヒテの譯としては木村素衛譯の『全知識學の基礎』、山本鏡譯の『知識學の概念』、シェリングの譯としては西谷啓治譯の『自由意思論』等があり、さらにカント及びヘーゲルの全集さへ計畫され

てゐるドイツ観念論の移植に對して大きな影響力を有してゐる。まづカント全集では天野貞祐、波多野精一、宮本和吉、大西克禮、安倍能成、桑木嚴翼、藤原正、白井成允、田邊重三、戸坂潤、武田信一、木村素衛、田中經太郎、高坂正顯、等諸氏の努力に依つてカントの著作の主要なるものが既に譯了され、またヘーゲル全集では眞下信一、脇坂光次、船山信一、金子武藏、鈴木權三郎、等の諸氏の譯が出版されてをり、この方面の研究に對して確實な據所を提供してゐる。さらにスピノザの翻譯の全集の如きも齋藤明に依つて刊行されつゝある。

また他方に於いて哲學研究の發表機關にしてもこれまでは主なものには『哲學雜誌』一つであつたのが、この時期に至つてはこれ以外に二三種増えてゐる。大正五年以後には京都帝大の哲學會の機關誌として『哲學研究』が發行され、大正十年には雜誌『思想』が創刊されてゐる。同じく雜誌『講座』及び『學苑』が大正の終りから昭和の始めにかけて發行されてをり、昭和二年から以後雜誌『理想』も發行されてゐるといふやうに哲學掲載の雜誌の數も多くなつてゐる。また哲學の普及を目的とした講座類も現はれるやうになり、大正十五年には近代社より『哲學講座』十二冊が刊行され、啓蒙的役割を果してゐることは争はれない。

右に述べたやうに、この時期に入つて哲學界の學問的水準は非常に高まつたのであるが、この時期の哲學の特徴は單にかゝる學問的水準が高まつただけには止らない。その移植された哲學にしても前の時期とは異つたものである。即ちこの時期を支配せる哲學傾向は矢張り前の時期のドイツ観念論の哲學であるが、新たにドイツの現

つたことである。彼の『文化價值と極限概念』や『經濟哲學の諸問題』の如きがその代表的著述である。後に彼の死後『左右田喜一郎全集』五卷が出版されるに至つた。また他方では新カント學派の立場の影響の下に立つて數學及び自然科学の方法論の基礎付けが問題とされ、田邊元、戸坂潤、下村實太郎の諸氏が發表された。中にも田邊元の『數理哲學研究』はこの方面に於ける不朽の記念碑である。

この新カント學派の哲學の移植と關聯して看過することの出來ぬのはカント哲學の研究である。カント哲學の翻譯紹介は明治時代に始つてはゐるが、その確實な研究は大正時代に行はれたのであつて、この時代に哲學を研究せる學者でカント哲學を研究せぬ者は殆んどないと言つても差支へない。それ故カント哲學の研究に當てられた著述及び學者を一々擧げる繁雜には堪へられない。たゞこの時代のカント研究の基礎を置いたものとして桑木嚴翼の『カントと現代の哲學』の有する價値は没却することは許されない。また大正元年から以後桑木嚴翼その他の東京帝大哲學會の會員を中心として開催されたカント・アーベントの集會がカント哲學の普及に努めた功績は實に測り知ることの出來ぬ程大きなものである。このやうに講壇哲學の最も支配的勢力となつたカント哲學の研究は大正十三年のカント生誕の二百年祭に至つて絶頂に達するとともに一段落を付けた。この二百年祭を紀念して『哲學雜誌』『思想』『講座』の諸雜誌は紀念號を出して、當時活躍せる學者は殆んど總動員された形である。またそれと同時に前述の『カント著作集』十五卷の計畫も企てられた。カント哲學に關する研究で單行本として出版されたもの

代哲學の諸潮流が移入されるに至つた。それらは或る意味でドイツ観念論の再興と考へられるが、分析的緻密と論理的整合さに於いてドイツ観念論の哲學以上のものである。そしてその中新カント學派の哲學、現象學、存在論等であつて、これらの移入の順序は大體ドイツに於ける勢力の順序を反映してゐると考へられる。そしてかくの如くドイツ哲學の移植が成功を伴つて確實に行はれるとともに、それ以外の英米佛等の哲學の勢力は甚だ影の薄いものとなつた。

まづ最初に移植されたものは新カント學派の哲學である。大正初期以後の『哲學雜誌』『哲學研究』『講座』『思想』『學苑』等の諸雜誌に掲載された大多數の論文は新カント學派の哲學の紹介批判乃至はそれに基く考察である。これらの雜誌に據つて活躍せる人々を數へ擧げてみるならば、西田幾多郎、桑木嚴翼、朝永三十郎、波多野精一、田邊元、高橋里美、左右田喜一郎、藤岡誠六、佐竹哲雄、高坂正顯等である。この新カント學派の移植の初期に當つて最も功績のあつたのは西田幾多郎の『新理想主義の哲學』や朝永三十郎の『近世に於ける我の自覺史』とかの紹介とか山内得立の『認識の對象』の翻譯とか田邊元の『科學概論』とかであらう。それ以後になつては、この學派のもの翻譯は數多く出版されてゐる。例へばリッケルト、佐竹哲雄譯『文化科學と自然科学』、ヴィデルバント、河東涓及び篠田英雄譯『プレルデーエン』、清水清譯『哲學概論』、リッケルト、大江精志郎譯『カント』、ラスク、久保虎賀譯『判斷論』及び『哲學の論理學』等。この新カント學派の哲學の移植に於いて就中注目すべきことはリッケルト門下の左右田喜一郎がリッケルトの學說を繼承してそれを發展させ、やがて独自の價值哲學の立場を作

も多數ある。例へば桑木嚴翼『カント雜考』、田邊元『カントの目的論』、兒玉達章『カントの數學論の範圍に於て』、松永材『カントの哲學』、川合貞一『カントと現代哲學』、川村豊郎『カント判斷力批判研究』、大西克禮『カント「判斷力批判」の研究』、山口諭助『カントに於ける哲學の概念』、安倍能成『カントの實踐哲學』等がその主なものである。

この時代に入つてからはドイツ哲學の移植に依つて成立した講壇哲學はドイツ哲學界の推移變遷を敏感に反映してゐる。であるからして新カント學派が移植され出して數年にして早くもドイツに於ける哲學界の支配的な哲學の諸傾向が移植され出してゐる。フッセル(Kehrmann Husserl, 1859—)一派の現象學も大正四年には伊藤吉之助に依つて『哲學雜誌』で紹介されてゐるが、その頃から漸次問題とされるやうになつた。この現象學の移植に當つて活動した人々は矢張り新カント學派の移植に努めた人々と大體同じ顔振れである。然し中でも現象學の紹介に最も努力を拂つたのは前述の伊藤の他、高橋里美、田邊元、山内得立、務台理作、本多謙三、池上謙三、大關將一、細谷恒夫、佐藤慶二、鬼頭英一等の諸氏である。現象學の紹介並びに理解に當てられた著書も少くはない。例へば高橋里美『フッセルの現象學』、山内得立『現象學序説』、大關將一『現象學概説』、佐藤慶二『現象學概論』等その他。現象學派の哲學以外ではディルタイ(Wilhelm Dilthey, 1859—1911)やジンメル(Georg Simmel, 1858—1918)等のいはゆる生の哲學が最も好んで受容された。ディルタイの哲學の移入に最も盡力したのは勝部謙三、三枝博音、橋崎淺太郎、戸田三郎、高山岩男等の諸氏である。これらの人々に

依る雜誌論文以外に勝部謙三『ディルタイの哲學』や翻譯として勝部謙三『哲學の本質』、戸田三郎『哲學の本質』、三枝博音『精神科學序説』等がある。またジンメルの哲學は恒藤恭、谷川徹三その他の人々に依つて移植され、恒藤恭『ジムメルの貨幣哲學』や谷川徹三譯『カントとゲーテ』、小田秀人譯『ゲーテ』等がある他、ジンメルの生の哲學の立場から書かれた谷川徹三『感傷と反省』がある。

このやうに新カント主義、現象學、生の哲學等がこの時期に次々に移入されたのであるが、然しこの時期の前半を通じてわが哲學界の問題とするところは根本に於いてカント哲學的問題提出の仕方の問題を出なかつた。然るにこの時期の終頃即ち大正の終から昭和にかけてわが哲學界の動向はカント主義的からヘーゲル主義的へと向つてゐる。そしてこの時期の終には全體として見るならばヘーゲル哲學的思維方法が支配的となつてゐる。例へばこの時期に於ける指導的哲學者の一人である田邊元の思想傾向の推移にその最も明かな證據を求めることが出来る。大正十三年に『カントの目的論』を出してカント哲學の透徹徹密な理解と獨創的な見解とを示した同氏は昭和七年に出版された『ヘーゲル哲學と辯證法』に於いてはまた全くヘーゲル哲學の核心を把握せることを示してゐるのである。勿論このやうなカント主義的からヘーゲル主義的への轉向はドイツ哲學界に於ける同様な轉向を反映してゐるものであると云つて差支へない。殊にかゝるヘーゲル哲學への轉向發展へ拍車を掛けたのは昭和六年に哲學界舉つて關心を寄せたヘーゲル死去百年祭の舉行と他方講壇哲學へ漸次迫つて來たマルクス主義的思想の勢力とである。尤もヘーゲル哲學の研究は一部の人の間にはこの時期の最初か

ら行はれてゐて、大正十三年以後には紀平正美を中心としてヘーゲル研究會が開かれてゐたが、ヘーゲル哲學の復興が多くの人の口にするやうになつたのはヘーゲル百年紀念の行はれる數年前からである。この時代にヘーゲル哲學の移植に努めたのは主として田邊元、高橋里美、三木清、小山朝繪、三枝博音、河野正通、鈴木權三郎、速水敬二、岡田隆平、岩崎勉、大江精志郎、脇坂光次、眞下信一、日高一二三、小松彌郎、今田竹千代の諸氏である。雜誌では『思想』及び『理想』が各二回大正四年と六年とに辯證法並びにヘーゲルの哲學の特輯號を出してゐる。また三枝博音編輯の『ヘーゲル及辯證法研究』なる専門誌が昭和四年以降發行された。昭和六年には國際ヘーゲル聯盟の支部が日本にも設置されてクラウスがその責任者となつて、ヘーゲル哲學の普及に努力した。この聯盟の日本支部から、『ヘーゲル及びヘーゲル主義』、『スピノザとヘーゲル』、『ヘーゲル哲學解説』が出版されて多數の學者がヘーゲル哲學復興に協力してゐる。また岩波書店からは『ヘーゲル全集』が計畫され出版されつゝあることは前述の如くである。ヘーゲルに關する著書の數も夥しいものである。田邊元『ヘーゲル哲學と辯證法』、三枝博音『ヘーゲル・論理の科學』、赤松要『ヘーゲルの經濟哲學』、甘粕石介『ヘーゲル哲學への道』、クローナー、岩崎勉、大江精志郎譯『ヘーゲルの哲學』等がその中の主なものがある。

右に述べたやうにこの時期に於けるわが哲學界全般の特色は新カント主義、現象學、生の哲學、新ヘーゲル主義等の移植といふことに盡きるのであるが、このやうにドイツ哲學の諸潮流の目まぐるしい受容の過程のうちにあつて、それら移入された哲學の理解に止らず、

# 欠

# 欠

象形態」のうちに圓熟せる思想を示してゐる。

また既に前の時期の終頃より移植され始めてゐたハイデッゲル、ヤスベルス、シェーレル等の哲學が一層旺んに論議されるに至り、これらの哲學者の名前と結び付いて存在論、實在哲學、人間學等が一般の關心を惹くに至つた。就中ハイデッゲルの哲學が殆んど支配的な哲學の感を呈するに至つたが、ハイデッゲルの哲學とともに人間の實存性、またさらにその存在の不安といふ如き問題が人々の興味の対象となつて、明かに時代の不安の状態を反映するに至つてゐる。そしてかゝる一般の興味はさらに實存哲學の思想家としてキェルケゴール、ニーチエ、シェストフ等にも向ふこととなつた。ハイデッゲルの思想の移植には田邊元、三木清、九鬼周造、和辻哲郎、高坂正顯、金子武藏、大江精志郎等の諸氏が活動してゐる。和辻哲郎の著書『人間の學としての倫理學』及び『モンスーン』『沙漠』等の論文はハイデッゲルの思想の咀嚼の上に成り立つたものであり、九鬼博士の論文『實存の哲學』、大江精志郎の著書『存在論と辯證法』はいづれもハイデッゲルの哲學の紹介として有意義なものである。また三木清の『危機に於ける人間の立場』に收められた諸論文は矢張り實存哲學の立場に立つものである。いはゆる不安の思想を最もよく表はすものであらう。その他翻譯としてはハイデッゲル、シェーレル等の翻譯、『シェストフ選集』二卷、生田長江譯『ニーチエ全集』十二卷等の出版があつて、これらの思想家の哲學が現在最も多く知識階級の關心を惹いてゐることが分る。

然しこの時期に於ける特筆大書すべき事業は岩波講座の『哲學』が昭和七年から八年にかけて發行されたことである。この講座に於

## ニホンノテツガク

いては現在活動せる哲學の權威者が殆んど總動員されて、現在わが哲學界が到達した最高の水準がこのうちに示されるものと大體考へてよい。然しそれと同時にこの講座に於いて最高處に達したわが哲學界の活動はその後は決して活潑なものとは言へない。前の時期迄に達した段階から、さらに前進すべき様子も今の所では見られない。それは言ふ迄もなくわが國の蓬着せる非常時局に際して政治的活動の過剰のために純粹な學問の研究の如きに對しては見えざる大きな困難が蔽ひかぶさつてゐるからであると思はれる。然しまた他面に於いては哲學が現在置かれた周圍の状況からして新しく問題を拾ひ上げる機會に恵まれてゐるとも言へる。そのやうな問題のうち最も重要な問題の一つは哲學に對して所與の條件として哲學を制約してゐる國家、民族、國民等の問題である。和辻哲郎が論文『牧場』に於いて展開する風土史觀的考察も畢竟この問題に歸着する。田邊元が『社會的存在の論理』に於いて到達した所謂『種の論理』も根本に於いてこの問題を解決せんとする意圖に基くであらう。

マルクス主義の勢力がこの時期に入つて著しく衰退したことは争へない。『プロレタリア科學』が廢刊になつた以後には雜誌として『唯物論研究』が七年以來發行されてゐる。之は岡邦雄、戸坂潤を中心とした唯物論の研究を目的とした學術團體の機關誌であるが、その理論的活動は前の時期の活潑なものと比較することは出来ない。たゞこの雜誌に於いて注目すべきことは『プロレタリア科學』以來の課題であつたマルクス主義のレーニンの段階が船山信一、永田廣志その他の人々の理論的業績に依つて到達されたと考へられることである。然しこのやうなマルクス主義の全般的不振の状態のな

かにあつて日本の哲學の唯物史觀的再檢討の業績が行はれてゐるこ  
とである。例へば三枝博音『日本に於ける哲學的觀念論の發達史』、  
戸坂潤『日本イデオロギー』等がそれである。それ以外にマルクス  
主義的思想の立場の哲學を現はすものとしては船山信一『觀念論よ  
り唯物論へ』、『認識論としての辯證法』、戸坂潤『現代のための哲  
學』及び『唯物論全書』中の三枝博音『論理學』等が注目すべきも  
のである。

参考文献——野上豊一郎、日本に於ける西洋思想移植史(岩波  
講座、哲學)井上哲次郎、明治哲學の回顧(同上) 森戸辰男、我  
國に於ける研究自由闘争史の一節(同上) 三宅雄二郎、明治思想  
史(教育科學) 本多謙三、わが國に於けるマルクス思想研究の發  
展(同上) 金子筑水、明治時代の哲學及倫理(解放、明治文化の  
研究號、大正十年十月號) 三枝博音、日本に於ける哲學的觀念論  
の發達史 戸弘柯三、近代日本哲學史 下出幸吉、明治社會思想  
研究 加田哲二、明治初期社會思想の研究。(樺俊雄)

### 人間學

(英 anthropology, 獨 Anthropologie, 佛 anthropologie)

- 一 人間學の定義と課題
- 二 人間學の存在の規定
- 三 人間學の類型

一 人間學の定義と課題 一般に人間學と云へば凡ゆる意味に於  
いて人間に關する研究を意味することになる。即ちこの意味に於け  
る人間學とは動植物と區別される限りの生物中の一種に關するも

るのは右の如きものではなくして、特に哲學に於いて重要視されて  
ゐるところの特定の科學の理念を指してゐるのである。このやうな  
意味に於いてはそれは特に哲學的人間學(philosophische Anthro-  
pologie)と稱ばれることが普通である。ではかゝる哲學的人間學は  
如何なる點で上述の人間學と異なるのであらうか。かゝる兩者の根本  
的な差異を形作るのはその對象とする人間なるものの理念の差異に  
あると考へられる。即ち前述の意味に於ける人間學的研究はそれが  
如何なる形態のまた如何なる傾向のものであるにせよ凡べての人間  
存在の或る側面を取扱ふ點では一致する。之に反して哲學的人間學  
と稱ばれるものは人間存在の部分的要素ではなく、その全體的構  
造を取扱ふことを特色と言ふことが出来る。即ち全體人間を  
研究することが人間學をして特に哲學的人間學たらしめるものであ  
ると考へられるのである。ハイテツゲル(Martin Heidegger, 1889  
-)も人間學の問題とするものは「普通身體的」心理的「精神的な統  
一として把へられてゐる全體人間の存在」であるとしてゐる。然か  
も、この場合謂はれてゐるところの身體であるとか心であるとか精  
神であるとかは夫々獨立して取扱はるべき現象領域であるとも言は  
れるであらうが、然し特に人間の存在が問題とされてゐる場合に於  
いてはこれらのものが、單に寄せ集められただけと考へられてはな  
らない。またよしんばこのやうな仕方で行はれる存在論的試みに對  
しても「全體の存在の理念」が前提されねばならぬであらう。

哲學的人間學の立場にとつて全體人間の存在が必要なることはシ  
エーレルも亦認めてゐる。彼は従来の哲學の多くが人間に關する狭  
き理念を前提として出發してゐる所に大なる危険を認める。即ち彼

の知識一切を含むと云つて差支へない。それ故それは生物中の一  
の種としての人間の凡ゆる特質は言ふ迄もなく、人間の素質や或ひ  
は性格、人種、性別等々に基く諸種の差別を研究するものである。  
然かもさらに人間は自然的存在物としてのみあるのではなく、行爲  
し創造するものである以上、人間學は行爲する人間が自ら爲し得、  
また爲すべきことを取扱ふものであると言ふことが出来る。また  
更に人間の能力や當爲は究極に於いては人間が探る根本的な態度に  
基くものであるからして、かゝる根本的な態度即ち普通吾々が世界  
觀と稱ぶところのもの心理學的研究は人間學に於いて重要な位置  
を占めることとなる。

このやうに考へるならば、一般的な意味に於ける人間學には人間  
の身體的、生物學的、心理學的考察や乃至は性格學、精神分析學、  
人種學、教育心理學、文化形態學、世界觀學等々の極めて種々の研  
究が合流することとなつて、人間學とは畢竟これら一切の研究の總  
括的な名稱乃至はこれら一切の研究を人間の存在を中心として統一  
せる學科に對する名稱といふことになるであらう。例へばユング  
(Carl Jung, 1875-)、ハロウニウク(Leo Frobenius, 1873-)、マ  
クス・シエーレル(Max Scheler, 1874-1928)等その他多數の専門  
學者の協力の下にカイゾーリング(Graf Hermann Keyserling,  
1880-)の編輯してゐる Mensch und Erde なる著書の如きはか  
ゝる見地に立てる人間學的研究を提供せるものである。かゝる意味の  
人間學は極めて包括的なものではあるが、然しかゝる科學の理念と  
いふものは反對に極めて曖昧な無規定なものとならざるを得ない。  
現代に於いて特に人間學なる名稱の下に考へられ且研究されてゐ

に依れば、古典的な意味に於ける「理性的動物」(animal rationale)  
もまた實證主義者の考へる「道具を用ひる人間」(homo faber)、「ヒ  
ーチエーのいゆる「ディオニソス的人間」(der dionysische Men-  
sch)、「最近の汎浪漫主義に於ける「生命の病氣」としての人間」(der  
Mensch als „Krankheit des Lebens“)、「超人」(Übermensch)、「リ  
ンネの「理性を有する人間」(homo sapiens)も「ラメトリの「機  
械人間」(l'homme machine)や「キアベリの「權力」人」(„Macht-  
Mensch)や「フロイドの「リビド」人」(Libido-mensch)やマルタ  
スの「經濟」人」(„Wirtschafts-mensch)や被造物としてのアダ  
ムなどと同様に人間に關する狭き理念である。それ故これら全ての  
人間に關する従来の諸理念を排棄して新たに全體人間の理念を掲げ  
んとすることがシエーレルの意圖である。では如何なる仕方であらうか。  
人間學の理念が把握されると彼は考へるのであらうか。

シエーレルに依れば従来の人間に關する理念が狭いのはそれが人  
間の存在の一面面を抽象して考へるからであり、然かもかゝる抽象  
化が行はれるのは根本的には人間を以て事物(Ding)と看做すこと  
に基くのである。彼は之に反して人間をば事物ではなく、「宇宙その  
もの、否宇宙の根據の運動の方向」と看做す。即ち人間は宇宙の存  
在の根據である限り「小宇宙」と稱ばれることが出来る。そして宇  
宙に於ける存在の一切が究極に於いては「精神」(Geist)と「生命」  
(Leben)乃至は「衝動」(Drang)といふ相對立する二原理に基いて存  
立すると考へられるが故に、小宇宙としての人間は「精神に充たさ  
れたる生物」(geistesfülltes Lebewesen)と規定される。シエーレ  
ルはこのやうな全體人間の理念を掲げてはゐるが、その絶對的意

味に於けるものは今迄の所では實際には現はれてをらぬと考へてゐる。全體人間のもつ凡ゆる本質可能性が實現されて悉く自己のうちにあるやうな絶對的な人間の理念は將來にのみ期待することが出来ると彼は言ふ。然しその相對的な意味に於ける全體人間は各時代に把握し得る理念として存在する。

かくの如く哲學的人間學が成立するのは全體人間の存在を研究するを俟つてはじめて可能となるのであると言ひ得る。ところが、全體人間の存在が研究され得るに至るのは何よりもまず人間を事物として外的な客觀的なものと看做してはならぬことはシェーレルの主張する如くである。この意味では對象化し得ざる作用中心としての人格性を以て人間の本質となしてゐるのであるが、然しこのシェーレルの考へ方はなほ或る意味では人間の存在を對象化してゐるものと言はねばならぬ。なぜならば、全體人間の存在を研究すると云つても全體人間といふ存在者の研究を意味するだけではない。この存在者の在り方をも研究するのだから、然し作用中心はシェーレルは作用中心としての人格性を考へるが、然し作用中心は作用の遂行を離れては考へ得られない。それ故徹底的に考へるならば、人間の存在者の存在論的研究ではなくしてこの存在の存在論的研究に迄進むのでなければ哲學的人間學の立場は完成しないのである。然かもこの存在の存在論的研究といふことも畢竟人間の存在の在り方の一つであるとするならば、人間學の立場は人間の存在の自覺的認識に於いて成立すると言ふべきである。かゝる意味では自覺的存在論 (existenziale Ontologie) を展開するハイデッゲルの立場に於いて哲學的人間學は完成し得ると言ふことが出来る。グレ

單に客體として扱ふのではなくして、人間の存在の認識の仕方をも一つの人間の存在の在り方であるといふ意味に於いて人間の存在を主體として取扱ふ如き人間學の立場が要求される。このやうな立場の人間學にして、はじめて眞に哲學的基礎學の意義をもち得ると云へる。然かもこのやうな立場の人間學はハイデッゲルの主張する自覺的存在論として展開されねばならぬことは既に讀者の知られた所である。かゝる存在論はハイデッゲルの言ふ所に従へば領域的存在論に對立して基礎的存在論 (Fundamentaltologie) と稱べられることが出来る。

勿論シェーレルもハイデッゲルの如く自覺存在論の立場を展開する迄には至つてはをらぬが、人間學を以て哲學的基礎學であることは認めてゐる。シェーレルが哲學的人間學を以て「人間の本質についてまたその本質的構成についての、自然の諸領域(無機物、植物、動物)並びに一切の事物の基礎に對する人間の關係についての、人間の形而上學的起源並びに世界に於ける人間の物理的、心理的及び精神的始源についての、人間を動かした人間が動かすところの勢力及び威力についての、人間の生物學的、心理的、精神的及び社會的發展の、この發展の主要なる諸可能性並びにこの發展の諸現實性についての、基礎學」であると規定してゐるのは、哲學的基礎學としての人間學の規定としては充分なものと考へて差支へないであらう。只シェーレルの哲學的立場が自覺存在論に迄展開されなかつたが故に、哲學的人間學が哲學的基礎學として充分働か得なかつたのだと言はねばならない。

この點に於いては人間學的なる稱呼は用ひてゐないが、實存哲學

ニッケンガク

トウイゼン(Bernhard Troeltsch)が凡ゆる哲學的人間學のテーマは「汝自身を知れ」にあるとなして、哲學的人間學を以て自己自身を捕捉せんとする人間の自己省察であると規定してゐるのは、正當である。

二 人間學の課題及び意義 右に述べた如く人間學は全體人間の存在及び在り方を研究するものであるが、このことよりして人間學が哲學的に如何なる位置を占むべきであるかが直ちに理解される。即ち人間學とは單に哲學の諸他の部分科學と並んで存立する一の部分科學としては規定されぬと考へられる。人間學が特に人間の存在をば動物及びその他の存在者の存在より區別してその特質を闡明するものと考へる場合には、人間學は諸の存在領域中の一の存在領域に就いて成立する一の存在論となり、他の諸存在領域に就いての存在論と並立するものと解せられる。この時には人間學は一の部分科學として他の諸部分科學と合して哲學の全領域を構成するものとなる。然しこの時には人間學はハイデッゲルの言ふ如く「人間の領域的存在論」(Regionale Ontologie des Menschen)と謂はれるものとなる。もとよりかゝる意味に於ける人間學の存立は何人も否定するわけのものではないであらうが、然しそれが哲學的研究にとつて重大な意味をもつものとは考へられない。

哲學的人間學が最近の哲學界に於いて特に問題となつてゐるのはそれが單に「の部分科學として成立する限りに於いてではなくして、それが哲學の根本的立場に直接關涉するやうな意義を有する限りに於いてである。その限りに於いては人間學は哲學的基礎學としての位置を有するものと考へられねばならない。即ち人間の存在を (Existenzphilosophie) を説く最近のヤスベルス (Karl Jaspers, 1883) の立場は矢張り人間學を哲學的基礎學とするものであると言つて差支へない。ヤスベルスは人間に關する科學として社會學、心理學、人間學を擧げて、これらの科學は人間を對象として見ることを教へるものであり、人間に就いて何物かがこれに依つて認識されはするが、人間そのものは認識されぬ、と言ふ。之に反して實存哲學は人間の自覺存在を究明するものであつて、これに依つて人間は人間自身になり得る如き認識の仕方をするものである、と彼は言ふ。それ故このヤスベルスの哲學的立場もハイデッゲルと同じく人間學を哲學的基礎學とするものであると考へられる。

以上述べた如くシェーレル、ハイデッゲル、ヤスベルス等の哲學的立場が人間學的立場であると言ふことが出来る、また他方デイリタの生の哲學の如きも人間の生の解釋學的構造を根柢とする限り矢張り人間學的立場に立つものと考へられる。このやうに最近の哲學界に於いて哲學的人間學乃至は人間學的哲學なる傾向が強いことは確かに現代哲學の一特徴と云つて差支へない。では何故かゝる傾向が一の強い勢力を占めてゐるのであらうか。

それは畢竟人間の存在といふものが現代に於いては特に問題とされるに至つて人間學的問題提出の地盤を形作つてゐるからに他ならない。「吾々の時代が特に緊急に解決を要求する如き哲學的課題なるものがあるとすれば、それは哲學的人間學の課題である」とシェーレルが言つてゐるやうに、吾々の時代は哲學的人間學のプロブレマティクを提出すべき必然性を有してゐると考へられるのである。事實如何なる時代も現代ほど人間に關して、かくも種々様々のこと

を知つたことはない。また如何なる時代も現代ほど人間に關する知識をかくも強制的に言ひ現はしたことはない。また如何なる時代も現代ほどこの知識をかくも迅速に容易に呈示し得ることはない。然しこのやうに人間といふことが、現代に於いて特に問題とされるのは、現代が却つて人間の何たるかを知らぬからであるとも言ひ得る。即ちこのやうな事情の背後には人間の存在といふものが現代特に問題視されるやうになつたといふことが潜むのである。之を一言にして言ふならば、人間の存在が現代に於いては危機の状況に置かれてゐるといふことが哲學的人間學の問題提出の根柢をなしてゐるのである。

このやうな事情は人間學の立場に立つハイデゲルの哲學が一方「不安の思想」を表示してゐることを考へ合せるならば、容易に理解出来ることである。哲學的人間學の立場が現在特に問題とされるのが、かくの如く人間存在の不安の状況と密接な關係にあるといふことを認めるのは甚だ重要なことである。然し勿論前述せる哲學者のうちの誰かの立場がかゝる不安の状況を打開出来るものであると云ふのではない。人間の存在が不安の状況のうちにあるといふことは一の社會的な事情に根據があるからして、從來の如き人間學の立場にその事情の打開を求めることは無理であると云はねばならぬ。

三 人間觀の類型 哲學的人間學が宇宙に於ける人間の位置を基礎付けるものであり、その限り凡ゆる認識が人間の存在に關係を有するが故に、哲學的人間學の與へる人間觀(Menschenauffassung)が凡ゆる認識の性格を決定してゐると考へられる。然しながら人間觀

と云つても決して單一のものではない。歴史的に社會的に夫々異つた多様な人間觀が見られる。そしてこの人間觀の多様はまさに他方に於ける凡ゆる認識の性格の歴史の社會的多様に相應するものと考へられる。然しこの多様な人間觀のうちは何等か或る共通の傾向及び特質を有する夫々の種類を考へて、それらのものの類型(Typen)を考へるならば、凡ゆる種類の認識の性格を類型論的(Typologisch)に概括し把握することが出来ると思へられる。また元來哲學的人間學が哲學的基礎學として一切の認識の基礎を與へるものであることを標榜する以上、自己の立場以外の人間學的認識をも自己の立場からして説明し得るものでなくてはならぬ。

このやうに考へるならば、哲學的人間學の立場は自己の立場を究明して、その人間觀を闡明すると同時に、他方ではまた自己の立場以外の諸人間觀を自己の立場に基いて類型論的に説明し得ねばならぬ。かゝる仕方では人間觀の類型論的研究を比較的同時な形としてゐるのはシェーレルである。彼が『人間と歴史』(Mensch und Geschichte)なる論文のうちで展開してゐるのがそれである。吾々は以下に彼の人間觀の類型論を概観しようと思ふ。

シェーレルが人間觀の第一の類型として掲げてゐるものはユダヤ教やキリスト教等の有神論的な生活態度のうちに見られるところの宗教的信仰の所産としての人間觀の類型である。即ち人格神に依る人間の創造、アダム、イヴに始まる人間の系統、墮罪に依る樂園よりの追放、二つの本性を有する神人に依る救済並びにこれに依つて恢復されし神子關係、終末觀、靈魂の自由性や人格性や精神性、肉體の復活、最後の審判等々に關する周知の神話のうちに見られる

る人間觀がそれである。そしてアウグスティヌス(Augustinus, 354—430)に始つてオットー・フォン・フライジング(Otto von Freising, 1114—1158)やボシエ・ド・ジャクエズ・ベニグネ・ボズネ、1627—1704)を越えて最近の神學者達に至る迄一貫して支配してゐる人間觀はこの類型に屬するものである。

第二の類型の人間觀は homo sapiens の理念に依つて現はされるもので、これは古代のギリシヤ人に依つて發見されしものである。これを最初明確に言ひ表はしたのはアナクサゴラス(Anaxagoras, 500頃—428頃)、プラトン(Platon, 427—347 B.C.)、アリストテレス(Aristoteles, 384—322 B.C.)等である。この homo sapiens の理念の特色とする所は理性なる特質の有無に依つて人間を動物一般より區別する。而かもこの理性(Ornos, ratio)は人間の有する積極的な活動力ある形式であつて、この形式に基いて外界の自然も構成されてあると考へられるが故に、自然の認識もこの理性に依つて行はれるのである。かゝる種類の人間觀は古代以後に於いてもトマス・アクナス(Thomas Aquinas, 1225—1274)、デカルト(René Descartes, 1596—1650)、スティーヴン・バニッシュ(Barnach de Spinoza, 1632—1677)、ライプニッツ(Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646—1716)、カント(Immanuel Kant, 1724—1804)、ヘーデル(Friedrich Hegel, 1770—1831)branche, 1638—1715)、クーデル(Friedrich Hegel, 1770—1831)等の偉大な觀念論的哲學者の哲學體系に見られる所である。

シェーレルに依つて擧げられてゐる第三の類型の人間觀は homo faber の理念の人間觀である。この人間觀に依れば、道具を作り出すことを使用するといふことが人間をして他の動物から區別せしめる

特質である。その他の點では人間と他の動物との間には本質的な差別は認められない。兩者の間には同一の要素や力や法則が活動してゐる。それ故この人間觀に基けば、人間にのみ特有なる理性能力といふやうなものは否定される。人間の有する諸種の精神作用は人間以下の動物界にも働いてゐる生理的諸作用の隨伴現象にしかすぎない。只人間は他の動物と異つて諸種の道具を使用し得る能力を有するにすぎない。いはゆる認識作用の如きものに於いても用ひられる記號や言葉や概念は洗練されし心理的道具であるにすぎぬと考へられる。かゝる人間觀は自然主義、實證主義、實用主義などと稱ばれる理論の根柢を形作るものである。

以上の三つの類型が西歐に於いては一般に有力であつたが、また現在もなほさうであるが、これらの類型に較べては比較的一般化してをらぬ二つの類型をシェーレルは附け加へてゐる。その一つは人間を以て生命の袋街と考へる人間觀である。この場合人間が全體として精神病に罹つてゐると考へられてゐるのではなくして、人間の存在の本質的特徴である精神乃至は理性が生命そのものの見地から見て一の病的なものと考へられてゐるのである。解剖學者ボルク(L. Bolk)の「人間とは内分泌を妨げられし發育不全の猿である」といふ命題の如きはかゝる人間觀を實證するものであると言へる。そして生命主義的汎ロマンティックな思想の根柢をなすものはかかる人間觀であると考へられる。も一つの人間觀の類型は人間の存在に對して完全なる絶對性と自立性とを賦與するものである。これはケルレル(Heinrich Kerler)やハルトマン(Nicolai Hartmann, 1882—)の思想の基礎をなしてをり、シェーレルはかゝる思想をば



嚴肅と責任との要請的無神論と稱してゐる。即ちこの思想は人間以外に何等絶對的なるものを承認せず、人間に絶對的な責任と主權とを許容するのであつて、歴史過程の如きも人格的な因果性に還元して説明するものである。

以上の如き五種類の人間觀の類型を以て凡ゆる多様な人間觀を概括し得るといふのがシェーレルの主張する所である。勿論かゝる類型の種別の原理は如何なるものであるか、またこれらの類型に依つて人間觀の全てが残りなく概括され得るものであるか、といふ疑問は残つてゐる。然し兎に角、かゝる人間觀の類型論を展開してゐることは一應シェーレルの功績として認めねばならない。それよりも一層重要な問題は一般に云つて類型論的研究には重大な制限が加へられるのではないか、また類型論的立場を假りに許すとしても人間觀が果して諸種の認識の究極的根據として許されるかどうか、といふ問ひが未決定なことである。そしてこのことは結構人間學の立場の根本的原理に係る問題であると言ふべきである。

参考文献——M. Scheler: Die Stellung des Menschen im Kosmos, 1928. Derselbe: Mensch und Geschichte (Philosophische Weltanschauung, 1929). M. Heidegger: Kant und das Problem der Metaphysik, 1929. Derselbe: Sein und Zeit, Bd. I, 1927. B. Groethuyzen: Philosophische Anthropologie, 1931. K. Jaspers: Die geistige Situation der Zeit, 1932.  
樺・佐藤譯シェーレル、哲學的人間學 池島・樹田譯、人間學とは何か 西田幾多郎、人間學(朝永博士還曆記念哲學論文集所收)

はあるが、而もその言葉が最近の所産であることから知られるであらうやうに、同時に認識論と熟して歴史の所産としての一定の學を意味するからである。

認識論の原語を求めるならば、ドイツ語では Erkenntnistheorie 又は Erkenntnislehre であり、英語では Theory of knowledge であり、フランス語では théorie de la connaissance である。それはまたギリシヤ語から造語されてドイツ語に Epistemologie 英語に Epistemology フランス語に Epistémologie などとも言はれて居る。此等の言葉は悉く讀んで字の如く、智識の理論乃至認識論の意である。ドイツ語では更に初めにバウムガルテン (Alexander Gottlieb Baumgarten, 1714—62) が近くはニコライ・ホルトマン (Nicolaï Hartmann, 1882—) が Gnoseologie, Gnoseologie なる語を使用して居る。ところで此等の言葉が哲學史上に最初に現はれて来たのは決して古代及び中世に溯るものではなく、却つて近世、それも極く近くやうやく十八世紀中葉以後のことである。

二 認識論の起源 認識論といふ言葉が近世のものであることから知られるやうに、この言葉が表はす學もまた近世の産物である。認識論を一つの獨立した學として定立し、それを組織的に建設し、または建設に着手したものはイギリスのロック (John Locke, 1632—1704) である。無論ロック以前にも近世にはいつては同じくイギリスにベーコン (Francis Bacon, 1561—1626) が出て、認識論上の經驗論の先蹤となり、他方大陸に於てはフランスにデカルト (René Descartes, 1596—1650) があつて合理論を主張して、共に認識論が発生すべき胎盤を築きつつあつた。更に歴史的に溯つて

人間學(理想、第二十七號) 人間論(理想、第五十五號) 檜崎 漢太郎、人間學(教育科學、第十九冊) 城戸幡太郎、哲學的人間學(岩波講座哲學) 三木清、パスカルに於ける人間の研究。(樺俊雄)

認識論

(\* Epistemology, 獨 Erkenntnistheorie)

- 一 認識論の語義
- 二 認識論の起源
- 三 認識論の課題
- 四 認識論の占める位置
- 五 合理論と經驗論
- 六 批判論
- 七 獨逸唯心論
- 八 實證論と實用論
- 九 新カント學派
- 十 實在論
- 十一 生の哲學
- 十二 現象學
- 十三 存在論

一 認識論の語義 認識論に就て語る場合には可能な二つの途が考へられる。一つは、認識論とは如何なる學でありそしてあつたか、その方法、態度、對象とするところ、その學的並びに歴史的使命は如何なるものであるのかと問ふことである。それは認識論そのものを論ずる行き方、即ち認識批判である。他は、認識論とは要するに認識に關する理論であるとして、認識そのものを論ずる行き方、即ち認識批判である。

今吾々が茲に採らうとする途は後者ではなくて前者である。認識論とは何かといふことを吟味し、その限りに於てその内に解かれた認識に關する理論を問ふことが吾々の目指すところである。蓋し認識論なる名稱はもとより認識に關する理論一般を意味し得る言葉では現はれるに至つたのである。

認識論の樹立者なる榮譽を擔ふものはロックであつた。それはロックに始まり同じ流れに泳ぐバークリー (George Berkeley, 1685—1753) ヨーム (David Hume, 1711—76) を通じ、他方その見解と對照的位置にあるライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646—1716) を經つ、カント (Immanuel Kant, 1724—1804) に至つて一まづ基礎付けられた、と考へられる。これ等の人々が認識論の創設者とされるのは彼等がこの學を一個の獨立した學として、即ち認識そのものを特殊な研究對象としてそれを體系的に考察し且つ批判し始めたことに依るものである。

それは斯くの如き認識論の樹立に導いた歴史的契機、歴史的状況は、如何にあつたのであるか。その重要な一つが中世を支配して来た形而上學に對する不信とそこから生ずる批判とであつたことはロックとカントとの著書が等しく語るところである。彼等の理論は共に批判的であることを特徴とし、この批判的研究の出現を待つて初めて認識論は成立したのである。ところで形而上學に對して懐疑の眼を向けしめ、認識能力の批判を生ぜしめた契機となつたものは、他でもない近世に於ける數學と自然科學との勃興である。自然

科學に於ける實證的精神が正確な觀察に基づいて認識の解明を企圖したところに認識論の地盤は準備されたのである。

三 認識論の課題 認識論は發生當初に於ては、消極的には在來の形而上學の批判であり、積極的にはニールン(Sir Isaac Newton, 1642—1727)並にガリレイ(Galileo Galilei, 1564—1642)に依つて礎石を置かれた物理学及びその基礎となつた數學の基礎付けであつた。ロックは認識論の研究目標を次のやうに規定して居る。

「吾々の研究は其故に、吾々の知識の起源、確實性、及び範圍を研究し、それと共に信仰、意見及び承認等の根據と程度とを研究する。この研究の爲には心の物的條件は何であるかといふことには今は關係しない。又心の本質が何であるかといふことにも入込まないであらう。心の如何なる運動もしくは肉體の如何なる變化が感官に如何なる感覺を生ぜしめるか。またそれが悟性に如何なる觀念を生ぜしめるか。或ひは觀念は全部物質的なものに依存して居るか、それとも一部分だけ依存して居るか。此等の諸問題に關する議論は興味あることではあるが、ことは思辨に屬するものであるから、吾々の爲すべきことではない。」

ロックの認識論はその態度と問題とを規定したものととして優れたものである。がその説くところは經驗論と合理論とを混合した不精確なものであつた。従つてカントが出づるに及んで初めて認識論はその獨特の領域と使命とを確立するに至つたと言ふべきである。カントは初め大陸のライプニッツやヴォルフ(Christian Wolff, 1679—1754)の合理論を採つて居たのであるが、當時ドイツに侵入して來たイギリスの經驗哲學の影響を受けて、ロックより形而上學の

批判といふ課題を繼承して合理論の清算を試み、他方ヒュームに含まれて居た批判的精神に依つて「獨斷の假睡を呼び醒ませられ、思辨的哲學の範圍に於ける彼の研究に全然別個の方向を與へられ、ここに「未だ嘗て何人も考へたことの無かつた全く新しい學」としての批判論を建設したのである。批判論は舊い形而上學の批判と、自然科學の基礎たる先天的綜合判斷の基礎付けと、「學として現はれ得べきあらゆる將來の形而上學」の吟味、とを課題とする。

認識論はこのやうにしてその創立者である二人の哲學者に依つて既に早くその問題と方向とを規定された。以後の諸理論はその地盤に立ち、その精神に基づいて、彼等に依つて課題として取上げられたものを更に詳細により矛盾なく解明しようと努力したまでである。

四 認識論の占める位置 認識の本質を把握し、科學を方法的に基礎付けることを課題とする認識論は、先づ認識の存在を、而も眞なる認識としての科學の存在を、豫想しなければならぬ。併し事實的に時間の上で先にあることと理論的に論理の上で先にあることとは必ずしも一致するものではない。寧ろ時間上科學の後に來るものである批判は論理上は却つてその前にあるべきものと考へられる。科學は一定の方法に立脚して初めてよく科學性を保持し得、この方法を吟味することが批判即ち認識論である、と考へられたからである。認識論は諸科學及び哲學を樹立するにあつて先づ最初に論ぜらるべき部門である。このやうに事物を認識する前に認識そのものを先づ第一に論ずべきであると考へて、一切の科學的研究の基礎に認識論の位置を確立したのがロックとカントとであつた。認識論は斯くて近世に於て第一哲學、基礎學、諸學の學と考へられて、

中世に於て形而上學が占めて居たかの諸學の王位に着くに至つた。

斯かる考へ方はカントの末流に泳ぐ新カント學派に於てはもとより、それとは流れを異にするフツセル(Edmund Husserl, 1859—)の現象學に至つても本質的な點に於て變りはない。フツセルに於て現象學は哲學的諸學の中心に置かれ、而もそれは自餘一切の諸學から獨立した純粹意識の本質學として、哲學一般並びに諸科學の根本學、第一哲學であると考へられて居る。一般に總ての理論は認識論的基礎付けを得てのみ初めて妥當な學として烙印されるのを見る。認識論の優越こそ近世哲學の特徴であつた。

ところが認識論主義、意識第一主義に對する反對が最近に至つて存在論と社會學との二つの領域から提出されて居る。前者はティルタイ(Wilhelm Dilthey, 1833—1911)の生の哲學などと結び付けて現象學の内部からハイテツゲル(Martin Heidegger, 1889—)に依つて、後者は一聯の文化社會學者達に依つて、唱へられて居る。彼等は認識を、或ひは一つの存在關係、特に人間なる現實存在の一つの存在の仕方として、或ひは優れて社會的歴史なる所産として、考へて、存在論特に人間存在論もしくは社會學こそ基礎科學であつて、認識論はまさに其等に依つて基礎付けらるべき第二次的な學であるとする。認識論を學の王座から引摺り下し、認識の問題を存在の問題の中に、特に歴史的社會的存在の問題の中に、組み入れようとするのが現代の傾向である。

五 合理論と經驗論 認識論の誕生は經驗論と批判論とに於て視されたのであつたが、其等の先驅となり批判の對象となつたものが近世初頭に現はれた合理論(Rationalismus)である。このものは

デカルト、スピノーザ(Barnuch de Spinoza, 1632—1704)、ライプニッツ並びにヴォルフに依つて代表される。

合理論はその名稱が既に示して居るやうに認識の起源、その源泉、を理性の中に求める。それに依れば吾々の認識特に確實な認識は後天的經驗に依存するものではなく、寧ろ吾々に生具的な理性に依據する。もとより經驗的認識即ち感性に依つて生ずる後天的認識が存在することは認めねばならない。併し斯かる感性的知覺は屢々誤謬を犯すものであるが故に、眞なる認識の作用乃至起源として信賴することは出来ない。人間の認識の根柢には經驗から全く獨立した理性が存し、このものの働きに依つて確實な認識は成立する。理性は感性を俟たずしてそれ自身で直觀的に對象を把握する。而もその能力は無限であつて、有限的な時空的事物のみならず、神、靈魂、宇宙等の無限的な超時空の世界をも認識し得る。

合理論は理性を認識の起源と見て、感性的經驗の正當な要求を認めず、同時に理性の權限を不當に擴大して、認識の限界を不當範圍を未だ正しく問題としない獨斷論(Dogmatismus)である。

認識論が合理論を批判しつつ採つた最初の形態は經驗論(Empirismus)である。このものは主としてイギリスに於て説かれ、その代表者としてはロック、バークリー、ヒュームが挙げられる。經驗論は合理論とは正反對に經驗的認識を重要視して、認識の起源を感性の中に認める。一切の認識は感性的經驗から生じ、感性のうちにならうと云ふところの何ものも知性的のうちにはない。理性は何等確實な認識の源泉ではなく、従つてまた認識の限界は理性の能力と共に無限であるのではない。却つて認識の起源は感性であり、このものが

達し得る限りに於て確實な認識は成立するのであつて、認識の限界は感性的經驗に限られる。合理論は理性を生具的と考へて、生具觀念 (sine innatae) なるものを立てるが、其等は否定さるべきもので、理性は對象を直觀的に表象し得るものではなく、却つてその材料を感性に仰がねばならない。感性に依つて與へられた感覺を材料とし、それを或ひは結合し或ひは分解する働きが思惟であつて、これに依つて認識が生ずる。

經驗論の特徴は理性の無限性を否定して感性の有限性を指定し、認識の可能性を吟味して、その限界を感性の到達範圍に限定するところに存する。而して合理論と經驗論とに共通な點は共に直觀説をとり、模寫説 (Abbildtheorie) を主張することである。兩者にあつて認識作用は共に直觀作用であつて、このものに依る對象の單純な把握即ち模寫が認識に他ならない。

六 批判論 經驗論の後を繼げてカントに依つてドイツに於て創めて提唱されたものは批判論 (Kritizismus) である。このものは經驗論と合理論との辯證法的統一を試みる。それは經驗論と同じく認識の可能性を經驗の範圍内に限定し、超經驗的なものの認識を拒否する。と同時にそれは經驗論がヒュームに於て然かあつた如く懷疑論 (Skeptizismus) に陥ることなく、却つて確實な認識の存在を前提して、その究明に努める。

認識の起源として經驗論がとるものは感性のみであつた。感性は個人的後天的經驗を與へるものであるが故に、そこからは認識の普遍性と必然性は求められず、かくて懷疑論が結果する。批判論は認識の起源として悟性と感性との二つを考へる。ここに言ふ悟性と

は直觀的理性ではなく比量的悟性である。吾々のあらゆる認識は經驗と共に始まる。けれども「必ずしもあらゆる認識が經驗から生ずるのではない。何故なら吾々の經驗的認識ですら、吾々が印象に依つて受取るものと、吾々自身の認識能力が自ら與へるものとの結合であらうから」とカントが書いて居るのは有名である。感性は受容性を特徴とし、悟性は自發性を特徴とする。そして認識の眞理性は悟性の自發性に依つて與へられる。彼に於て優越な認識作用として考へられるものは感性ではなくして、悟性に依る判斷である。

認識には材料と形式との二要素が區別される。前者は感性に依つて與へられる後天的なものであるが、後者は先天的なものであつて、思惟の有する形式である。認識は雑多な經驗的材料を思惟の形式なる範疇に依つて綜合統一するところに生ずる。従つてそれは感性に依る對象の單なる模寫ではなく、まさに思惟に依る構成である。この點からしてカントの認識論は構成説 (Konstruktionstheorie) と言はれる。ところで先天的な思惟の形式は生具觀念即ち時間的に先なるものではなく、論理的に先なるものである。ここからして批判論はまた先驗論 (Transzendentalismus) 又は先天論 (Apriorismus) なる名稱を持つて呼ばれる。而も先天的形式は超經驗的な形而上學的實體に當て嵌まるものではなく、ただ可能的經驗の範圍内に於てのみ妥當する。認識の對象となるものは主觀から獨立して存在する物自體ではなく、寧ろ意識に現はれた現象である。それは吾々の意識内容に他ならない。斯くてカントの哲學は現象論 (Phänomenalismus) であり、觀念論 (Idealismus) であると言はれる。

七 ドイツ唯心論 カントの認識論は合理論と經驗論との二側面

を包含するものであつたが、カント哲學の精神を合理論もしくは先驗的觀念論の中に認めるものが、その次代に現はれたドイツ唯心論 (Deutscher Idealismus) である。その主張者はライオン (Salomon Mainon, 1754—1800) フライヒ (Johann Gottlieb Fichte, 1762—1814) シュリンク (Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775—1854) ケーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770—1831) 等である。

彼等は主觀を超越し意識の外部に實在的に存在する物自體の概念を徹底的に退けて、如何なる意味に於ても主觀以外のものを實在として認めない。従つて物自體は勿論のこと、カントが直觀形式なる時間と空間とに於て單純に與へられるとした感覺や凡ての範疇を主觀の中に基礎付け、そこから演繹しようとする。斯くて更にカントが考へた先驗的主觀は理性として唯一の實在として把握される。凡ての實在は理性に依つて規定されるもの、否、理性そのものであるといふ絶対的觀念論 (Absoluter Idealismus) が主張される。このことからして彼等が説くところは必ずしも認識論ではなく、寧ろ存在論であり、形而上學であることとなる。彼等は認識論を無用のものとするのでは必ずしもないが、然も認識論の吟味を豫めこととすることなくして、實在の解明を先づ第一の關心事とする。斯かる點に於て彼等の態度は批判論以前の合理論に違つたものであると言はれ得る。

主觀は對象を産出するものであり、主觀の論理的思惟がそのまま存在である、即ち主觀が思惟する通りに對象は存在する、と絶対的觀念論は主張する。そこに於て思惟は即ち實在であり、觀念と實在

とは同一である。従つてまたそれは觀念實在論 (Ideal-Realismus) とも呼ばれる。併しそれは思惟を知的直觀、直觀的理性、であると、認識の能力に限界を認めない形而上學的獨斷論であると言はざるを得ない。

八 實證論と實用論 十九世紀の中葉以後に至つては自然科学の研究が隆盛を見た。それと並行して認識論に於ても實證論 (Positivismus) や實用論 (Pragmatismus) が現はれた。前説を説く者としてはフランスのコント (Auguste Comte, 1798—1857) ドイツのライス (Ernst Jaes, 1837—85) アウエナリウス (Richard Avenarius, 1843—96) マハ (Ernst Mach, 1838—1916) が、後者を説く者としてはドイツのファイヒンゲル (Hans Vaihinger, 1852—) アメリカのシエームス (William James, 1842—1910) デューイ (John Dewey, 1859—) イギリスのシラー (Ferdinand Canning Scott Schiller, 1864—) フランスのメルタン (Henri Bergson, 1859—) が、數へられる。

實證論は自然科学の精神に立脚して認識を實證的に研究する。それは認識の起源と限界とを經驗に限る。従つて形而上學の否定はそれに共通な性格であり、その意味に於てそれは經驗論に列する。またそれは超越的なものを否定する内在哲學でもあり、その極端なものとしては感覺にのみ認識を局限する感覺論が生ずる。併し本來の實證論は理性的超越者の存在こそは否定するが、經驗の對象の外に於て實在論こそ實證論のところでなく、却つてその逆である。斯かる意味に實用論は實證論の一つの特殊な形態として考へられる。このもの

も形而上學を否定し、合理論を排撃して、經驗的なもののみ信頼する。それは單に認識の起源を經驗の中に見るばかりでなく、認識の目的を有用性(utility)乃至實踐的歸結(practical consequence)に置き、それに依つて認識の價值を決定する。在來の認識論が悉く認識を認識の爲のものとして觀想的なものとしたのに對して、實用論はそれを實踐の爲の手段であるとして實踐的なものと解する。實用論は行爲主義の哲學であり、あらゆる認識を行爲即ち生の爲のものとする。其故にデューウイの如きは其の說を道具主義(Instrumentalism)の名を以て呼んで居る。



九 新カント學派

九 新カント學派 十 九世紀後半から現代に涉つて主としてドイツに於て新カント學派(Neukantianer)が現はれた。その先驅をなしたものはロツツ(Hermann Lotze, 1817—81)・ツヘル(Eduard Zeller, 1814—1904)・リッペン(Otto Liebmann, 1810—1912)等であり、それを確立した人々はマールブルク學派(Marburger Schule)に屬するコーヘン(Hermann Cohen, 1842—1918)・ナトルプ(Paul Natrup, 1854—1924)及びノーデン學派(Badische Schule)乃至西南ドイツ學派(Die Süd-west-deutsche Schule)に屬するヴァンデルバント(Wilhelm Windelband, 1818—1915)・リツケルト(Heinrich Rickert, 1863—)・ラスク(Ernst Cassirer, 1875—

1915)等である。彼等はカントの批判論の精神を復興し、その立場に立つて認識問題を追求し、認識論を他の諸科學と哲學との基礎學であるとし、この方法的基礎付けを俟つに非ざれば科學は科學性を維持し得ないと主張する。

併し共にカントの批判論に立脚するこの二學派も自らその主傾向とするところを異にする。マールブルク學派はカントの先驗的思想を徹底して特に數學及び數學的自然科學を一切の確實な認識の原型として取上げ、その論理的構造並びに基礎を明らかにせんとする。そこに於ては認識は科學的認識を意味し、このものはまた直ちに論理的數學的認識を意味する。従つて數理哲學がこの學派の基礎理論であると考へられる。之に對して西南學派は主として批判論を文化科學乃至は歴史科學の領域に適用して、このものの闡明と基礎付けとに努力する。この學派は單に論理的價值のみならず、廣く價值一般を對象として、文化價值の解明を自らの課題とする。マールブルク學派は認識の説明に際して合理的の主知論的である。それに反して西南學派は寧ろ主知論的な態度を採り、認識乃至判斷の根柢となるものとして意志を認め、認識を單なる知的事實と見ないで、究極に於て理想價值であるとす。理論理性の根柢に實踐理性を置いて、このものの優位の思想を説くのである。故からして屢々前者は合理的批判論と呼ばれ、後者は目的論的批判論と呼ばれる。

一〇 實在論 カント哲學の内には觀念論と實在論との兩傾向が含まれて居り、前者を強調する者が所謂新カント學派であつたに對して、後者を主張する者が茲にとり上げる一聯の實在論者である。其の代表者はハルトマン(Eduard von Hartmann, 1842—1906)・リ

ール(Alois Riehl, 1844—1924)・フォルケルト(Johannes Volkelt, 1848—1930)・キルペ(Oswald Külpe, 1862—1915)等である。彼等の主張は科學乃至批判的實在論(wissenschaftlicher oder kritischer Realismus)と呼ばれる。

批判的實在論は觀念論者に依つて否定されたカントの物自體を再び承認するところにその理論的出發點を置く。觀念論に依れば認識の對象は認識する主觀から獨立して存在するものではなく、認識主觀に依存するもの、それに依つて規定され、その中に現はれる現象であり、意識内容である。之に對して正に反對に、對象は主觀に依つて規定されたものではなく、却つてそれから完全に獨立した實在であつて、斯く主觀乃至意識を獨立して存在する對象を意識の中に把握することが認識である、とするのが實在論である。

意識外在的な自體的存在である對象が認識の規準となるものであつて、吾々の認識は之に向ひ、その結果として意識の中に表象を構成する。表象は意識内在的であるが、對象は飽くまで意識超越的である。斯かる對象はそれが意識されると否とに拘らず存在し、このやうに自體的に存在する對象を把握することが認識である。其故に認識は何等かの意味に於て必ず對象の模寫である。實在論は模寫説をとり、従つて超越的眞理を主張し、對象そのもの即ち存在そのものを先づ第一次的眞理と見て、然る後に之を模寫したものととしての意識を第二次的眞理と見る。それは意識を絕對的存在と見て、このものを第一次的眞理とする觀念論の反對物である。

實在論はフッセルの所謂自然的態度なる常識的立場に立つものである。それは超越的對象の存在を承認し、その把握を認識である

とする限りに於て、認識の事實の本質を把握した態度であり、健全な人間性と言はれる常識に最も適應する見解である。

一 生の哲學 茲に言ふ生の哲學(Lebensphilosophie)とは精神科學派と言はれるものの哲學であつて、それはディルタイ、ジンメル(Georg Simmel, 1858—1918)・シムランゲル(Eduard Spranger, 1882—)等に依つて代表される。

彼等の言ふ生(Leben)とは生物學的なものではなくして、寧ろ彼等の所謂體驗(Erfahrung)乃至精神(Geist)として精神科學的なるものである。而して生はあらゆる存在の中心として考へられ、認識や科學はこの生を基礎とし、それに役立ち、その表現であると考へられる。即ち其處に於ては生は直接的な根源的な直觀的なものとして把握され、認識はこのやうな生の一つの作用としてのみ把握され、然もそれは斯かるものとして初めて意義を有する。

生に價值を置く生の哲學は當然にその認識論の仕事として生を對象とする精神科學の基礎付けを問題とする。精神科學の認識論的基礎付けに自らの中心的課題を見出すものが生の哲學である。ディルタイはこの仕事をカントにならつて「歴史的理性批判」(Kritik der historischen Vernunft)と呼んで居る。ジンメルが試みることも主として歴史的認識の理解であり、精神科學としての社會學の方論的基礎付けである。

生の哲學が立脚地とするところは心理主義である。其處に言はれる生とは個人的な心理的生であり、畢竟するに心理的意識である。而して歴史や社會や一切の文化は斯かる心理的生乃至意識の客觀化として理解される。彼等に於て基礎學とされるものは心理學であり、

更にディルタイにあつてはそれを基礎とする歴史學であり、従つてまたこの兩者の結合としての解釋學 (Hermeneutik) である。而して文化は斯かる生の表現であり、客観化であつて、それ自身歴史的なものである。従つて心理的な相対的な生を超越した絶対的な文化や眞理などは存在し得ない。生の哲學は一切のものを心理的相対的な歴史的發展的なものと見る心理主義であり、歴史の相對主義である。

二 現象學 新カント學派の隆盛の後を承けて哲學界に相當大きな影響を與へ、また現に與へつつあるものはフッサールが創唱する現象學 (Phänomenologie) である。

現象學とは先驗的純粹體驗即ち純粹意識の現象學的態度に於ける記述的本質學である。それは意識そのものを、その具體的作用機能、あらゆる哲學的立脚地から離れ純粹無假定の立場に立つて、純粹本質に於て捉へることを目標とする。斯かる純粹意識を眼前に齎す手段は現象學的判斷中止 (Phänomenologische Reduktion) または現象學的還元 (Phänomenologische Reduktion) と呼ばれる。これは形相的還元と先驗的還元との二つに分かれたれ、之に依つて事實の世界と本質の世界とが括弧に入れられて純粹意識が定立される。そしてそれを把握する仕方は本質直観である。

意識の特徴は志向性 (Intentionalität) であり、それは常に「或ものに就ての意識」である。その内面に於ては作用側面なるノエシス (Noesis) と客観側面なるノエマ (Noema) とが區別され、ノエシスは更に作用性質と作用材料とに區別される。作用性質は作用材料を變化 (Beseelen) することに依つてノエマなる意味を構成する。この

ノエマの中には核心があり、それは「意味そのもの」であつて、これが超越的對象を指示する。

認識もまた志向的體驗であつて、常に對象に志向的に關係し、主観内に作用性質と作用材料とを有する。認識とは作用性質を作用材料に依つて充實することである。即ち前者なる意味志向を後者なる知覺に依つて充實すること、意味と直観との合致である。この合致の完全な場合が明證作用 (Evidenz) であつて、その客観的ノエマの相關者が眞理である。このやうにして現象學的認識論は判斷論であるよりも寧ろ直観論である。従つてその眞理論は畢竟するに「事物と知性との一致」(adequatio rei et intellectus) を以つて眞理の規準と見る模寫説であると言はれ得る。

三 存在論 上來認識論として説かれたものは認識の論理學であるかまたは心理學であつた。認識の問題を論理乃至心理の問題として論ずることが近世を飾る認識論の特色であるとするならば、それ以外には最早認識論はあり得ない筈である。併し認識の問題はそれに盡きるものではない。茲に在來の認識論を止揚するものとして認識を存在の問題として取扱ふ存在論 (Ontologie) が可能である。其の代表者としてハルトマンとハイデッゲルとが挙げられる。

ハルトマンは認識を一つの存在關係であるとして、認識の存在論的解明を彼の哲學の主要課題として居る。彼の説くところは認識形而上學 (Metaphysik der Erkenntnis: Gnosologie) である。その根本命題はかうである。「認識は對象の創造や生産や産出ではなく……あらゆる認識以前に且つそれから獨立して存在する或ものの把握である。對象とは單に主観に對立して居るものではなく、それ以

前に自體的に存在する或ものである。更に主観も單に論理的又は心理的なものではなく、それ自體存在するものである。認識とは斯くの如き存在者と存在者との間の一つの存在關係であり、存在的主観が存在的對象に定位して、その内に客観の像を作ることである。客観の像とは主観の中に於ける客観の代表、内容であり、主観が客観を把握するとは自らの内にこの内容を創造することに他ならない。

ハイデッゲルも認識を存在論的に解明するのはあるが、そこに於て中心問題となるのは認識ではなくして、更に廣く存在一般である。また特に人間の存在なる現存在 (Dasein) である。認識が彼に於て存在論的問題となるのは、それが人間の持つ認識としてその存在の仕方の一つに他ならないからである。人間の存在は世界内存在、關心、として、第一次的に實踐的交渉であり、認識は非實踐的觀想的なものとして第二次的な而も缺如的なものである。従つて認識の存在論は廣義の存在一般論、乃至彼が特に基礎的存在論と名付ける人間の存在論の一部を構成するものである。斯くて近世の認識論主義は止揚さるべき時期に達著したかに思はれる。

参考文献——Locke: An essay concerning human understanding. Leibniz: nouveau essai sur l'entendement humain. Kant: Kritik der reinen Vernunft. Fichte: Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre. Hegel: Phänomenologie des Geistes. Wissenschaft der Logik. Encyclopädie usw. James: Pragmatism. Bergson: Essai sur les données immédiates de la conscience. Rickert: Gegenstand der Erkenntnis. Cohen: Logik der reinen Erkenntnis. Husserl: Ideen zu einer

ヒガクオヨビゲイジユツガク

reinen Phänomenologie usw. Hartmann: Grundzüge einer Metaphysik der Erkenntnis. Heidegger: Sein und Zeit, Erste Hälfte. Eisler: Einführung in die Erkenntnistheorie. Meuser: Einführung in die Erkenntnistheorie. 紀平正美、認識論 高橋里美、認識論 (岩波講座・哲學) 三木清、認識論の構造 (觀念形態論) 佐藤慶二、認識論概説。(佐藤慶二)

### 美學及び藝術學 (Aesthetik, Kunstwissenschaft)

一 美學と藝術(科)學 美學はその名稱の起原を、ドイツ人パウムガルテン (A. G. Baumgarten, 1714—72) の命名に有ち、ドイツ觀念論の美學、經驗的美學等々としてすべてドイツを中心として發展せしめられて來たが、近時この美學の祖國としてのドイツに、美學から新しい藝術(科)學 (Kunstwissenschaft) なるものを分たうとする傾向が起つてゐる。藝術學を美學から分たうとする動機及び理由は人々によつてさまざまである。

フリードリヒ (Conrad Fiedler, 1841—95) は、特に美學と藝術學とを分つべきことを主張したわけではないが、藝術なるものを美なるものから截然分つべきことを主張した點から、普通藝術學の最初の主唱者のやうに見られてゐる。彼によると美は藝術の屬性ではな

い。藝術の本質的屬性は可視性にあつて、藝術がもし美的効果を人間の感情に與へることを意圖するならば、純粹な可視性が、即ち藝術性が害はれることとなる。かかる見地に立つてゐる彼にとつては藝術を對象とする學は、必然的に美學ではあり得ないわけであり、事實また彼には美學と名づける著書はない。

ウテイツ (Emil Ullrich, 1893) になると、美學から藝術學を分つべきことをはつきり規定してゐる。彼によると藝術には形成、表現といふことが必然的契機になつてゐる。美を有しながら、しかも人間によつて形成表現されたものでないものがある。例へば機械に對しては、その金屬の光澤、構造の精巧さ等に美を感じるが、これはどこまでも實用のために造られたもので、人間の感情體驗の形成表現ではない、従つて藝術ではないといふところから、美學の外に藝術學のあるべきことが主張されてゐる。

デュッソア (Max Dessoir, 1897) は、『美學及び一般藝術學雜誌』(Zeitschrift für Aesthetik und allgemeine Kunstwissenschaft) の編輯者として、藝術學の確立のために奮闘してゐる。デュッソアは一つには美の概念の狭さから藝術現象の研究に美學なる名稱を與へることに反對してゐる。即ち藝術的なものの中には崇高、滑稽などといふ「美」といはれてゐる以外のものも含まれてゐる、時には美の反對の醜をさへ内包する。或は自然美を藝術的に模寫すると、現實感を離れた新しい特質が生じ、作家の人格が現はれる、等々。かういふ理由を擧げて美學に對する一般藝術學の獨立を主張してゐる。

またグロッツセ (Ernst Grosse, 1892—1926) も、藝術(科)學を

學としての美學或は藝術學の一部分、一側面となるべきものであらう。わが國ではマルクス主義の見地に立つ森山啓、新島繁氏らは、最近美學ではなく藝術學の確立といふことに意を注いでゐる。

併し、かかる美學及び藝術學の區別の混亂のうちにも、一つの基本的な線が見出されないことはない。即ち美或は藝術に對する研究態度が、主觀的、觀念論的であるか、客觀的、唯物論的であるか、といふ根本的な區別が存し、前者が大體に於いて美學を稱し、後者が藝術學を稱してゐると見られる。この問題について餘程重大な意義をもつのは、最初美學といふ名稱をこしらへたパウムガルテンがそれを如何なる意味に用ひたかといふことである。パウムガルテンは美學を感覺の學と考へてゐる。論理的能力や實踐的能力に對立する美的能力としての感覺の研究、感覺學 (Aesthetik) が即ち美學である。カントもやはり人間の能力としての趣味や天才を論じたが、判斷力批判に於いてなされた彼のかかる研究はカントの美學と一般に稱されてゐる。これらはいづれも客觀的な藝術作品、藝術家について研究し、それより藝術の本質を見出さうとするものでなかつた。

リップス (Theodor Lipps, 1851—1914) やガイゲル (Moritz Geiger, 1880) は論理的に美的能力を研究してゐるわけでないが、感情移入、美的體驗の構造、作用など、心理的なるもの研究を任務として、やはり客觀的な作品、作家を問題にしないのであるが、彼等は自己の體系に「美學」といふ名稱を附してゐる。(リップスは美學 Aesthetik の代表作があり、ガイゲルにも美學、現象學的美學 Phänomenologische Aesthetik, 1925 などの論文がある)。

これに對して社會的、歴史的な存在としての具體的な藝術作品か

主張してゐるが、これは上の場合と趣きを異にし、美と藝術との領域の差といふことを問題にしてゐない。彼によると従來の美學は藝術の本質、目的を説明するものであつたが、これを形而上學的に説明した、しかし藝術の本質は、客觀的藝術作品の科學的な記述と説明によつてのみ明かにされる。これは在來の藝術哲學としての美學に對して、藝術(科)學と言はるべきである、といふのである。

以上が今日までの藝術學を美學より區別する學者の主なる立場であるが、これを見ると、藝術學の主唱が種々雑多な立場から行はれて、そこに一つの主要傾向が認め難く、近時かういふ現象が目立つて來たことは一つの偶然に過ぎないかの如き觀を呈してゐる。一方マルクス主義者の側を見ると、ここではメーリング (Franz Mehring, 1846—1919)、ウィットフォーゲル (Karl August Wittfogel) はマルクス主義美學といふ名稱を用ひてゐる。最近のリフシツツ、ユージン、ラリツエヴィッチも辯證法的唯物論の美學或はマルクス主義美學といふ名稱を用ひてゐる。これに對してハウゼンシュタイン (W. Hausenstein, 1882) フリーチ (V. M. Friche, 1870—1929) などの藝術社會學があるが、この兩者の關係については、美學と並んで藝術社會學があるのか、マルクス主義の美學が即ち藝術社會學であるのか、についてはまだ方法的に明かにされてゐない。しかし主觀的には兎もあれ、所謂藝術社會學の實際の内容から見ると、これは「一定社會の藝術とその社會との等價關係を見る」といふことを目的にし、従つて寧ろ藝術史だけの理論であつて、藝術の本質、藝術的價値の基準の問題が取上げられてゐない故、包括的な學としての美學に對立するものではなく、藝術に關する包括的な

ら出發し、そのうちに藝術の本質を見出さうとするものには、ヘーゲル、テース、グロッツセなどがあるが、ヘーゲルはその美學講義の冒頭に、この講義は元來「藝術哲學」(Philosophie der Kunst) といはれるのが正しいと斷つてゐる。テース (Hippolyte Taine, 1828—1893) は彼の體系を「藝術哲學」(philosophie de l'art) と稱し、グロッツセは在來の美學は「藝術科學」にならねばならぬとしてゐる。

デュッソアなどの一般藝術學 (Allgemeine Kunstwissenschaft) はよほど觀念論的なものであるが、これが唱へ出された一つの動機を見ると、最近著しく發展せしめられた個々の藝術の領域、音楽、建築、繪畫、文學などを研究對象とする個別藝術學に對して、それを綜合した藝術學が存在しなければならぬといふ要求があるのである。ここにはやはり藝術的能力一般や美的體驗一般ではなく、客觀的な個別的藝術、その作品から出發し、これらに通ずる一般的な藝術の法則を發見しようとする傾向も見られる。

藝術、美の研究を社會的、歴史的な存在としての藝術作品、藝術家の分析から出發するか、それとも主觀的に人間の美的能力、美的體驗の分析から出發するかといふ事は、この科學に於ける二つの可成りに根本的な傾向である。そして藝術學、美學といふ區別はこの二つの傾向に大體に於いて相應するやに思はれる。この歴史的事實から見ると、例へばヘーゲルが表面上美學なる名稱を用ひてゐることや、メーリング、ウィットフォーゲルがマルクス主義美學といふ言葉を用ひてゐることは、ふさはしからぬ感じを與へ、一方フリードリヒが自己の科學を美學と言ひ得ないと言つてゐるのも理由が薄弱

のやうに思はれる。むしろ彼の學にこそ、感覺の學としての Aesthetic なる言葉がびつたり適合するやうに思はれる。

参考文献——Zeitschrift für Aesthetik und allgemeine Kunstwissenschaft (マッソマの編輯で、美學藝術學についての多くの論文が載つてゐる)。

Dessoir: Sinn und Aufgabe der allgemeine Kunstwissenschaft, 1925. Dessoir: Beiträge zur allgemeine Kunstwissenschaft, 1929. Dessoir: Aesthetik und allgemeine Kunstwissenschaft, 1906. Uitz: Grundlegung der allgemeine Kunstwissenschaft, 1914—1920. Konrad Lange: Das Wesen der Kunst, 1901. Grosse: Anfänge der Kunst, 1894. Grosse: Kunstwissenschaftliche Studien, 1900.

外山卯三郎編、藝術學研究第一輯。

二 現代の美學、藝術學の前提 現代の美學、藝術學、藝術社會學の諸傾向を述べるに先立ち、その直接の前提をなす、十九世紀末以來最近までの一世紀の美學の状態を略述しておく事が必要である。美學或は藝術學が一つの科學として認められるに至つたのは、この世紀以來のことであるが、それを名實ともに確立したのは、ドイツ觀念論の形而上學的美學である。カント、ヘーゲル、ショーペンハウエル、フィッシャー、ハルトマンなどによつて代表されるドイツ觀念論美學者は、ただヘーゲルのみを例外として、永遠不變の美の本質、或は人間の美的能力を、具體的、科學的にでなく、「哲學的」に究明することに力を注いだ。これが「形而上學的」と呼ばれた所以である。殊に専門的な美學者でなく包括的な哲學者であつたカントや

ヘーゲル、ショーペンハウエルなどの美學は、ガイゲルの所謂「哲學の一分科としての美學」であつて、藝術や美そのものための美學ではなく、それを彼らの全哲學體系の要求上取上げるとか(ヘーゲル)、彼らの哲學上の問題、例へば感性と理性、傾向と當爲、肉體と精神等の哲學的範疇間の矛盾を解決する手段として美を取上げる(カント)といふことが多分にあり、かういふ動機のために、藝術や美の正しい本質が歪曲されて把握されることにもなつてゐた。

かかる形而上學的傾向に對して十九世紀半ば以後の自然科學及び社會科學の異常な發達は、藝術、美に對する實證的、科學的研究を呼び起した。その一つはフェヒネルなど代表される美感の心理學的な分析である。フェヒネル(G. F. Fechner, 1801—1887)は具體的な美(快適)を、單純な要素に分解し、それから數個の法則を抽出することに努力した。吾々が對象に快適を感じるためには、それは(一)多様は一つの目的に統一され、一つの統一は多様を含んでなければならぬ、(二)表象は矛盾のないものでなければならぬ、矛盾があれば吾々は快感を感じ得ぬ、(三)従つてまた表象は明晰なものでなければならぬ、といふやうな美感のための根本法則を定めた。そして有名な黄金分割についても論じてゐる。(Ueber die Frage des goldenen Schnittes)。

ところで、かういふ寧ろ自然科學的な研究の功績はといへば、殆んどなかつたと言つてよい。美の形式に對するかやうな抽象的分析的研究は、第一に具體的な美の有する歴史性、社會性が無視され、更に一般に美の有つ具體的全一性を破壊するものであつた。

前代の形而上學的美學への反動としての科學的な藝術研究には、

これに並んで藝術の社會學的研究がある。これにはフランスのテーヌ、ギュロー(Jean Marie Guyau, 1834—1888)などがあるが、テーヌは藝術は一定社會の一般的な風潮、欲求の產物であるといふところから、藝術の社會性、歴史性を明かにし、ギュローは美的感情とは本來社會的結合、社會的共感に外ならぬこと、藝術とはかかる結合、共感を起すことを目的とするものであることなどを示して、やはり藝術の社會性を明かにした。これらの社會學的研究は、後の藝術社會學の前提となるもので、重要な役割を果した。

これに少しく後れて當時可成りの程度に發達してゐた考古學、人類學、人種學の方面からの藝術の發生的研究が起つた。これに力のあつたものは、グロッツセ(Ernst Grosse, 1862—1926)、ホルン(Hirn, 1870—)、キーン(Herbert Kühn, 1857—)などであるが、原始社會の藝術は、發達せる社會の藝術と異り、藝術の機能、目的等を單純な姿で示すといふ好條件に恵まれてゐたため、從來藝術に附随せしめられてゐた神祕的ヴェールが多くとられ、その本質が明かにされた。グロッツセなど原始社會の藝術の研究家は、その根本の立場は決して唯物論ではなかつたが、その到達した結果は明かに唯物論のために幸するものであつた。

以上述べた美學の形而上學的時代及び科學的時代の二つの時期は近世のヨーロッパ、特にドイツに於ける資本主義發達史の二つの時期に相應してゐる。美學は元來市民階級の科學であるが、第一の時期は後れたドイツの封建性を多大に反映してをり、第二の時期は十九世紀後半の諸産業とそれにつれ自然科學が異常に發達し、市民階級が政治的權力をはつきりと獲得した時期に於ける美學である。現

代の美學、藝術學は以上の二つの時期に續く市民社會の下降、廢頹期のそれである。現代美學の諸特質は、一般にこの事實によつて規定せられてゐる。それは前代の美學の有した批判性、科學性を喪失し、現代美學の支配的な潮流は主觀的觀念論をその哲學的立場とするものであつて、客觀的な藝術作家、作品でなく、藝術家的創造や藝術の享受の心理の究明が、その主要な、多くの場合は唯一の任務となる傾向が次第に濃厚になつてゆく、一方これと並んでマルクス主義者の間では、現代の市民的學者によつて放棄せられた前代の美學の科學性、唯物論的傾向が攝取、發展せしめられて、藝術社會學的研究、古典的唯物史觀による検討、創作方法の研究等が行はれてゐる。

参考文献——T. Vischer: Aesthetik, 1846—58. T. Vischer: das Schöne und die Kunst, 1897. E. Hartmann: Aesthetik, 1886—87. G. T. Fechner: Zur experimentalen Aesthetik, 1871. Vorschule der Aesthetik, 1876. H. R. Marshall: Pain, Pleasure and Aesthetics, 1894. Aesthetic Principles, 1895. G. Santayana: The Sense of Beauty, 1896. H. Taine: Philosophie de l'art (テーヌ藝術哲學、廣瀬哲士譯) Guyau: L'art au Point de Vue Sociologique, 1888. (ギュロー、社會學上より見たる藝術、大西克禮、小方庸正譯) K. Bücher: Arbeit und Rhythmus, 1896. E. Grosse: Anfänge der Kunst, 1894. (藝術の起源、安藤弘譯) Y. Hirn: The Origin of Art, 1900 (藝術の起源、本間久雄譯)。

三 現代の美學、藝術學 現代の美學、藝術學の基本的傾向は、その哲學的立場に於いては主觀的觀念論である。これは前代の惡し

き意味に於ける自然科学的、分析的な研究方法に對して、哲學的、體験的、綜合的になつたにしろ、前代の社會學的、發生的研究のもつてゐた藝術の社會的内容を重んずる態度は失はれ、形式的となり客觀的な社會的存在としての藝術作品から出發する態度が顛倒されて、主觀的な、藝術家の創造の心理、藝術的享受、美的態度等が美學、藝術學の對象とされてゐる。更にこれに關聯して、現代美學の主要傾向として注目すべきものは、美或は美的態度を、實踐や論理、實際的任務や科學的態度と峻別することである。これは「美的自律性」の問題として、現代美學の一つの重要なテーマとなつてゐる。美的自律性問題には、單なる美學、藝術學の方法論的反省に偏踏する傾向が結びついてゐる。このため、現實の藝術作品、特に現代のその直接の研究が忘れられるまでになつてゐるのは、注目すべきことである。一般に美學、藝術學は、所謂アカデミー化して、現代の藝術との接觸を益々失ひ、一方では現代の藝術の傾向の理論的表現たることを止め、従つてまた他方ではその指導原理たることを止めてゐる。以上が現代の美學、藝術學の一般の特徴である。

次にこれらの個々の場合について見るに先立つて、前代から現代への過渡をなすと思はれる美學者について述べておかう。

**ディルタイ**(Wilhelm Dilthey, 1859—1911) はかかる者と見ることが出来る。彼の立場は生の哲學である。彼の生なるものは本來歴史的规定をもつものであつて(この點に於いて彼はヘーゲルの歴史哲學の繼承者である)、従つて生の表現である藝術も歴史的规定をもち、同じ時代の他の諸文化と共通の刻印を有つ。かやうに客觀的、歴史的な藝術を對象とする點に於いて、彼はヘーゲルやフラン

スの社會學的藝術學者等と傾向を同じくして、現代美學の主觀的傾向とは可なり趣きを異にしてゐる。ウェルフィン(Heinrich Wölfflin, 1864—)やヴォリンゲル(Robert Wilhelm Worringer, 1881—)などの美術史上の様式の研究家が、現在この傾向を傳へてゐる。彼等が藝術様式を典型學 Typologie に考へるところも、またディルタイに發してゐるものである。ディルタイは一方また藝術を藝術家の體験として、心理學的にも考へる。この心理學的方法是、フェヒネルなどの自然科学的、形式的な心理學ではなく、藝術家の心理を全一體として理解しようとする寧ろ藝術家的な具體的な心理學である。これは前代の心理學的研究の修正として注目されるべきものであらう。

次にやはりこの過渡期の美學者と見られるものにリップス(Theodor Lipps, 1851—1914)がある。リップスも心理學的立場に立つ。しかし彼の心理學もフェヒネルの心理學とは種類を異にし、また現代の現象學的美學者の心理學とも異なる。一言を以て言へば、それは觀念論の見地には立つてゐるが、なほ客觀的立場をも捨てないものである。即ち個人の客觀的な實在、また個人と個人との交渉即ち或る意味に於いて社會の客觀性をも認める。しかしこの個人と個人、個人と物との精神的な交渉が如何にして可能かといふことを中心的なテーマとなし、それを主觀的な「體験的」な、感情移入といふものに求める。そして美感はこの感情移入の上に成立するとされる一種の折衷説であるが、これが現代の主觀的觀念論の立場と異なる點であつて、後者にあつては、事物や個人は獨立した客觀的な存在と考へられてゐない故、いきなり一般的な美的態度や創造作用や享受、

觀照といふ主觀的心理が持ち出され、これと客觀的な對象との關係などは、問題となり得ないのである。

またディルタイの藝術、藝術家に對する態度が、心理學的見地以外になほ歴史の見地を以てしたやうに、リップスは没價値的な心理學を、「價値の見地」と結びつけたといふことが言はれるが、彼の心理學的美學が、單なる美學でなく、彼の倫理學と結びついてゐること、美が善との關聯に於いて考へられてゐること、この點がまたリップケルト派や現象學派が美を善と分つことに務めてゐるのと異なる點である。かくリップスの考へる美は決して形式的ではなく、内容的なのであるが、一方にはまた「統一性の法則」、「君主的從屬の原理」等の美的形式的法則を、美の内容と無關に列挙してゐる



フイードレル

點などは、フェヒネルの美學の形式性と共通點を有つてゐる。凡そかかる意味に於いてリップスは前代より現代への過渡を代表する美學者である。彼から認識論上なほ残れる客觀性を奪ひ、美に附隨せしめた人道主義的色彩を拭ひ去るならば、吾々は現代美學の一般的特質を得ることが出来る。

現代美學の一つの特質は形式主義である。これは美から實踐的な従つてまた思想的な意味、一般に内容的な意味を除去し、藝術を形式的に解しようとするのであるが、この傾向を代表するものは、ハ

ンスリック、ヒルデブランド、フイードレルなどである。

**ハンスリック**(Eduard Hanslick, 1825—1904)は音楽の領域で形式主義を主張した。彼は一般に標題的音楽を退け、音楽の中に特定の意味を捜さうとするのは無意味だとす。音楽はただ音楽の内容のみをもつ。そしてこの内容は形式そのものの中に着かされてゐる。また音楽に實際的效果を期待することも見當違ひであつて、音楽はそれ自身のために存在すると主張する。これに對し**ヒルデブランド**(Adolf Hildebrand, 1847—1921)は彫刻の領域で、藝術の思想性、模寫性に反對し、その構成的形式的性質を強調してゐる。

しかし形式主義的理論を唱へて最も強力であり、最も影響力を有つたものは、造形藝術の研究家**フイードレル**(Konrad Adolf Fiedler, 1841—85)である。フイードレルは現代美學の特色の一つを最も徹底的に現はした美學者で、その影響力も大きく、わが國の美學の主流の最も重大な構成要素、むしろその基礎となつてゐるものである。彼は哲學的には、存在と思惟、實在と感覺といふ對立は、概念的思惟の抽象であつて、實際にはない。在るものは、直接吾々に與へられてゐる感覺のみである、といふマッハ主義の哲學に立脚してゐる。この感覺がさまざまに構成されて、科學や日常の觀念が生ずるのであるが、科學は一定の他の目的をもち、言語といふ抽象的概念によつてこれを把握するため、抽象を重ねるに従つて感覺の真相より遠ざかる、一方日常の觀念もまた感情といふ不純な觀點からこれを構成するため、やはり感覺そのものの姿を示し得ぬ。これらに反して直觀的な感覺をそのまま如實に發展せしめたもの、視覚作用の直接の繼續としての表現作用の結果こそ藝術である。これは



かかる性質上、科學及び實踐的態度とは根本的に異なる一つの独自の世界であつて、從來考へられてきたやうに、或る思想的な内容を、直観といふ手段によつて表現したのではなく、ただ直観そのものの發展であり、直観そのものが形式であつて同時に内容である、と主張されるのである。

以上三人の藝術理論のうちにはすべて深い主観的觀念論と共に、現代藝術の一つの傾向である藝術至上主義に對應する理論、藝術を實際的效用及び思想的内容より區別する形式主義を見る事が出来る。

この同じ形式主義を新カント派の論理主義の立場にあつて、特殊藝術についてでなく、美一般について主張し、美學の独自の領域を確立しようとしたものは、**コーン** (Jonas Cohn, 1869—)、**キューン** (Lenore Kühn, 1878—)、**クリスチャンゼン** (Breder Christiansen) などである。ここでは美の自律性 (Autonomie) といふことが主要な問題となつてゐる。自律性は例へばキューンに従ふと、カントの用ひた論理的概念であつて、カントに於いては自然科學の對象界たる必然の世界及び道德の對象界たる自由の世界はそれぞれ自律性を有つが、美の世界は必然のうちにある自由が美だといふことから前記二つの世界の原理から説明されて固有の自律性を有たなかつたとされる。かくてキューンは美の世界に自律性を得しめるために、認識の世界、道德の世界のそれぞれの構成的原理たる必然、自由、に對して直観を擧げ、これを立證することに努めてゐる。

やはり美の自律性は現象學派の**ガイゲル** (Moritz Geiger, 1860—) に於いても問題となつてゐる。ガイゲルによると、美學は在來

とするものと、他の實用的目的の手段としてのものがあるが、藝術にも音楽の如く自律的なものと、他の倫理的、理論的觀念のための説明的藝術とがある。説明的藝術より出發したヘーゲルは美の本質を明かにすることを得なかつた。美の本質は、ただ主観的な美的態度より明かにされるといふのである。現象學的美學の先鞭をつけた**コンラッド** (Waldemar Conrad) も、またもつと新しい**オーテ** **フノルト** (Rudolf Odebrecht, 1883—) の點に於ては同一である。

リッケルト派、現象學派の美學が主として美學の方法論の究明に向つてゐるのに對して、現代美學の一つの傍流として藝術史的方面の研究に實質的な成果を擧げようとしてゐるのは、**ディルタイ**の流を汲む**ヴェルフリン**、**ヴォリンゲル**、**シュトリッヒ** (Friedrich Strich)、**ヴァルツェル** (Oskar Walzel) などの個別藝術の研究者である。ヴェルフリン、ヴォリンゲルは美術史及び美術史の方法論の上で、具體的な研究を行ひ、シュトリッヒ、ヴァルツェルはその影響の下に文學史の究明に従つてゐる。これらは言ふまでもないことであるが、美的體驗や美的享受、或は現象學的な意味に於ける美的對象等ではなく、客観的、歴史的な藝術作品を研究の一應の出發點となし、それらの中に客観的な法則を見出さうとしてゐる。しかし、これらの様式史家の特徴は藝術の外面的な形式としての様式に於いてのみ歴史性を認め、藝術の内容に於いてはむしろ超歴史的な、永遠の「人間の本性」、「生」と言つた形而上學的實體を設けてゐること、また様式に見える歴史的把握も、典型學の見地に立つてをり、典型相互の間の必然的繼續と、従つて全體に於ける一貫せる連鎖と

哲學の一分科であるか、他の科學の應用領域とされて來た。シェリング、ヘーゲル、ショーペンハウエルの美學は前者であり、フェヒネルの美學は後者で、美學は應用心理學でしかなかつた。しかし美學は今や自律的な個別學とならねばならぬとして、彼は現象學的美學の獨自の方法を述べてゐる。現象學的美學の方法は、上からの美學の演繹的方法とは異なる。これは例へば藝術は模倣であるといふ一般の原理から出發して、音楽や建築などを裁斷しようとする無理がある。だが下からの經驗的美學の歸納法も無前提ではない。悲劇の本質を見出すために、個々の悲劇的作品から出發するといふも、その場合は既にその作品の悲劇たる事が解つてゐなければならぬ。現象學的方法はまさにこの二つの方法の間にあるもので、それはあくまで現象の下に止つて、一般の原理には至らないが、それを偶然的、個性的制約に於いてでなく、その本質的契機によつて把握する。これがガイゲルの直覺 (Intuition) である。ガイゲルはこの方法によつて美的享受といふ主観的な體驗の分析によつて、美の本質を明かにしようとした。

かく美學の他の科學からの分離と、その方法の獨自性を主張するのは、一般に現代美學の特色であるが、これによつてもつぱら美的體驗、しかもフィードレルの場合の如く藝術家の創造的體驗でなく、享受者の受動的體驗の中から美の本質を見出さうとするのは、現象學派の全體に通ずる特色である。

**ハープン** (Richard Hamann, 1879—) は特に客観的な藝術作品から出發したヘーゲルに反對して、美學は美的體驗の分析によらねばならぬことを主張してゐる。彼によれば知覺にはそれ自身を目的を缺くことをその特性としてゐる。

参考文献——W. Dilthey: Das Erlebnis und die Dichtung, 1906. T. Lipps: Aesthetik, 1903—6. E. Hanslick: Vom musikalisch Schönen, 1854. (田村寛貞譯「音楽美論」) A. Hildebrand: das Problem der Form in der bildenden Kunst, 1893. K. Fiedler: der Ursprung der künstlerischen Tätigkeit (参田廉譯「藝術論」) J. Cohn: Allgemeine Aesthetik, 1901. L. Kühn: Das Problem der ästhetischen Autonomie. Zeitschrift für Aesthetik und allgemeine Kunstwissenschaft Bd. IV. 1 909. B. Christiansen: Philosophie der Kunst, 1909. S. Vitasek: Grundsätze der allgemeinen Aesthetik, 1904. W. Conrad: Der aesthetische Gegenstand, Zeitsch. Ass. u. allg. Kunstwiss. Bd. III. 1908. R. Hamann: Aesthetik, 1911. R. Odebrecht: Grundlegung einer aesthetischen Werttheorie, Bd. I. 1927.

その他は文藝學の項を参照。

四 **マルクス主義藝術學** 市民社會の美學、藝術學に於けるテーヌなどの社會學的方法、ビュッヘル、ヒルン、グロッセなどの發生的研究などの遺産を繼承し、マルクス主義に立脚せる藝術學の建立を行つたのは、**ブレハノフ**、**フリーチエ**、**ハウゼンシュタイン**、**マーツア**などである。これらの一列の學者の現在までにほぼ完成せしめた藝術社會學は、藝術學の一つの重要な側面である藝術の社會性、歴史性、階級性を藝術史の上で立證する任務を有つてゐた。だがここに於いて注目すべきことは藝術と政治との關係(藝術の黨派

性)、藝術の評価、批評の問題、藝術と大衆との関係などの現代のプロレタリアートの政治的文化的闘争のプログラムに於いて問題となる切實なテーマは除外せられてゐることである。また藝術家的創造の心理、藝術家の才能の問題なども未だ論ぜられてゐない。かかる實踐的問題と切り離されて、単に動かない過去の歴史を靜觀的に取扱ふ態度であつたため、藝術社會學は自ら定めた部面のみを研究としてもいろいろの缺陷を有することを避け得なかつた。即ち所謂社會學主義、ブレハーン主義或はブハーリンの機械論的傾向をさへ帯びてゐたのである。かかる意味に於てブレハーン、フリーチェなどによつて代表される藝術論は、包括的な藝術學の領域に於ける單に一分野の理論であり、しかもそれはマルクス主義理論としては正統的なものではない。しかしそれにも拘らずこの藝術社會學のうちには唯物論藝術學の特性がはつきりと現はれてをり、これを前節の觀念論の美學と對比すると、各々の特性が明瞭に輪廓づけられてくる。

まづ藝術社會學に於いては、藝術の社會性が主張せられる。これはヘーゲル、テニスなどにも共通に見られたものであるが、藝術は一定社會の要求、趣味の表現であるといふ説である。現代の觀念論美學に於いては藝術の社會性といふことは全く言はれない。そして藝術は大抵は個人の内奥の、もしくは或る形而上學的實體の表現と解されてゐる。ところでかく藝術社會學は藝術を一定社會の反映と見るのは、藝術を外界の模寫と見るからであるが、現代の觀念論美學に於いては、藝術は絶対に模寫とは見られず、一つ構成、別の世界の創造と見られてゐることも兩者の相反する點である。またこ

の藝術の社會性といふことと關聯して、藝術社會學者は藝術の社會的機能に任務といふことを重く見てゐるが、觀念論美學に於いては、藝術をむしろ實踐的目的と切り離し、藝術にそれ自身の意義を與へることに努めてゐる。この藝術の社會的機能といふのは、藝術社會學者が前代の藝術の發生的研究の到達した結果を繼承したものである。

藝術の社會性といふことは、マルクス主義に於いては必然的に、藝術の歴史性を導き出してゐる。彼等にとつては社會一般ではなく封建社會、資本主義社會等々の具體的社會のみが實在するからである。従つて藝術は自己が生み出されたこれらの各歴史的社會の區別によつて本質的な區別を與へられてゐる。藝術の歴史性は現代の觀念論美學に於いては全く問題とされない。そこではつねに超歴史的な永遠の美が、永遠の藝術が、永遠の美的對象、美的態度、享受が研究對象とされてゐる。ただディルタイに於いては歴史性が問題にされてゐるのが見られる。それからディルタイの系統を引くヴェルブリン、ヴォーリンゲル、シュトリッヒはディボロギー(典型學)の形で歴史の見地を藝術學の領域にもち込んでゐるかの如く見える。ヴェルブリンのルネッサンス式とバロック式の二典型説は、フリーチェのいふ藝術の五つの社會型と、その反覆されるといふ點に於いてもよく似たものである。しかしヴェルブリンの典型には社會的根據がない點に於いては異り、また反覆といふのはフリーチェの見解に於ける最も機械的な、非歴史的な點であるので、この點で兩者が似てゐるといふのは、元來ヴェルブリンも藝術の歴史性を示さうとしたのでないことを現はしたものである。

次に藝術社會學は藝術の階級性を主張する。即ち對立階級にあつては各々の藝術の價值がしばしば根本的に顛倒されること、その他社會階級によつて藝術は本質的説明を與へられることをいふ。ヘーゲルやテニスは藝術の一定社會の產物であることは言つてゐる。しかし二人にとつては一定社會はつねに單一な精神によつて支配された分裂のない、單純な全體であつた。だがマルクス主義に於いては、原始社會を除いて從來の社會はつねに階級社會であつた。そして階級對立が社會の根本的對立であつたため、藝術もまた根本的に階級性を帯びるものとされる。これを特に明瞭にし、定式化したものがブレハーン、フリーチェ、ルナチャルスキーであつた。しかし藝術の社會性をも認めない觀念論の美學、藝術學に於いては元來藝術の階級性は存在しない。

藝術社會學は大體以上のやうな特性を以て、藝術史——文學史と造形美術史——的研究を行つたのであるが、前述の如く過去の藝術が現代の藝術と切り離されて取扱はれた爲、評價の基準が過去の場合と現在の場合に二元化されてゐることが重大な缺陷であつた。更にまた藝術を生産するものとしての歴史的な階級が相對的に理解せられてゐた爲、歴史的藝術の價值が相對化されたこと、またこれは特にフリーチェ、マーツァに現はれた缺陷であるが、社會の基本的形式(生産様式)によつて區別される狩獵社會、原始農業社會、封建的・農村的・神官的社會、商業資本主義社會、工業資本主義社會といふ區別それ自身の不妥當さは問はないとしても、これらの型が無秩序に反置されるものになつてゐるのは、重大なる誤りであつた。

その後のソヴェートに於ける哲學的發展(ブレハーン主義、ディボロギー主義の克服、レーニンの段階的確立)は、この藝術社會學の缺陷を暴露してゐるが、特にその有する藝術的價值の相對化を是正し、藝術評價の客觀的基準を明かにすることを助けてゐる。その次第を簡単に述べよう。

フリーチェに於いて歴史的藝術の價值が相對化されたといふのは彼が藝術を單にイデオロギー論的に見て、それは特定の社會、階級の世界觀、イデオロギーによつて基本的に、しかも残りなく制約されるものと考へた結果であつた。その結果階級がちがへば、それぞの藝術は極端に言へば全く別のものであつて、その間に何らの共通點もないことになる。かうしてフリーチェに於いては、階級性は異りながらも藝術史には一貫した發展があるといふ事實が否定され(その結果藝術型は互にばらばらで反覆し得るものとなつた)また過去の藝術にも現在の藝術にも通ずる共通な評價の基準といふものが失はれることになつたのである。しかし事實に於いては藝術史にもあらゆる社會を通じての發展といふことがあり、評價の客觀的基準もある。この藝術史發展の證據となり、過去、現在の藝術評價の基準となるものは何か。それは一つの藝術がどれほど客觀的眞實を反映してゐるか、といふことによつて決まる。そして事實に於いてはあらゆる藝術は根本的には特定のイデオロギー、世界觀によつて制約されながらも、つねにいくらかづつの客觀的眞理を反映して來たのである。殊にリアリスト藝術家はさうであつた。彼等はしばしばそのリアリズムなる創作方法によつて、自己の階級の世界觀の框を破つて正しい現實の姿を吾々に示してくれた。かういふフリ

ーチエが全く忘れてゐた藝術の本質的側面が、最近明かにされ出したのである。

このことはツヴェートに於いて二つの方面から行はれた。一つは藝術古典の研究及びマルクス・エンゲルスの藝術論に對する藝術學者の再検討によつて。一つは實際の藝術家の舊組織及び舊創作方法に對する批判的討議を通じて。前者の方面ではシルレル (S. Sauer) 、ルカッチ (Georg Lukacs) 、リフシツツなどが働いた。後の方面ではゴルキー、ファチエーエフ (A. A. Fadeev, 1901) 、パンフエーロフ (F. I. Panferov, 1900) 、グロンスキー (Gronsky) 、キルポーチン (Kirpovin) などが、藝術に於ける世界觀「唯物辯證法」萬能主義を打ち破つた。かくして現在では、唯物辯證法に正しく立脚した新しい藝術論の建設がもくろまれてゐる。

参考文献——ブレハーフ、藝術論、藏原惟人譯、ブレハーフ、階級社會の藝術、外村史郎譯、ルナチャールスキー、藝術の社會的基礎、外村史郎譯、フリーチエ、藝術社會學、昇曙夢譯、フリーチエ、藝術社會學の方法論、藏原惟人譯、ハウセンシュタイン、造型藝術社會學、川口浩譯、マルクス・エンゲルスの藝術論、上田進譯、藏原惟人、唯物辯證法的創作方法のための闘争、「社會主義ンアリズム」藏原惟人、藝術論、森山啓、文學論、コムアカデミー編、無澤復六譯、小説の本質、同、文藝の本質。

五 わが國に於ける美學・藝術學 わが國では明治二十年頃からドイツ美學の紹介が行はれてゐるが、多少とも獨立的に藝術の根本的理論や諸理論の體系を作らうとするものは、大正初期までなかつた。歐洲大戰以後の人道主義的傾向の起ると共に、始めて日本の思

ルの影響下にあつて、著しく浪漫的な美學は、美を概念的認識や善と絶對的に分ち、美にはゆる自律性を與へることによつても、阿部の美學と對立するものであつた。西田の美學は、そのうち植田壽藏博士によつて繼承され、その主觀的觀念論の傾向を益々深めつつある。

一方大塚保治、深田康算兩博士などによつて、貴族的、ディレクタント的色彩を有つた美學が存在し、「觀照」といふことを以て、美的態度の本質としてゐるが、これは西田—植田美學がむしろ藝術家的創造作用の解明の上に、美の本質を見ようとする態度とはやや趣きを異にするものであるが、しかし主觀的觀念論、及び美の眞及び善からの自律性の主張といふ根本的立場に於いては相違するものがない。

以上が日本美學の主流である。この外に美學者もあるが、それはヨーロッパの現代美學の紹介、或はその種々なる流派の分類といふことが唯一の任務になつてゐる。

一方マルクス主義藝術學の方を見ると、體系的な藝術學の紹介、建設の歴史は淺い。昭和初年から藏原惟人氏などのプロレタリア文學評論家によつて、ツヴェートの藝術社會學が相當活潑に譯譯、紹介され、これがプロレタリア文學者の文學史(古典)研究、特に批評活動に可成り大きな影響力を有つてゐるが、その後藏原氏がフリーチエ主義の批判の必要を唱へ、その批判の上により包括的な唯物論藝術學の建設が、森山啓氏などの手で行はれようとしてゐる。

参考文献——阿部次郎、美學、西田幾多郎、藝術と道徳、植田壽藏、藝術哲學、深田康算、全集、大西克禮、美學の根本問題

ファッシズム

想界、藝術界に、現實的影響力を有つた美學を作つたものはリップスを祖述した阿部次郎氏であつた。これは明確な個人主義と、可成り稀薄ではあるが、人道主義、理想主義に立脚したもので、わが國に於ける市民社會の有した一つの代表的美學といふことが出来るであらう、といふのは、これ以前の美學の紹介は、全くドイツの封建性を多分に反映したハルトマンなどに限られて居るのであつて、またこれ以後の美學は濃厚な主觀的觀念論の色彩で塗りつぶされたからである。

阿部氏によると、美の基準は人格價值を高めるか、却つて低下せしめるか、といふところにあるのであつて、決して美はそれ自身の基準を有つものではない。この點は可成り弱々しいのであるが、兎に角美に對する善の優位が主張されてゐる。この點はヨーロッパの現代の美學やわが國のそれ以後の美學と趣きを異にするところである。またこの人格といふものが、個人主義的なものであるが、これの客觀的な嚴然たる實在が主張されてゐる。この點も現代の美學と異なる點である。

だがヨーロッパ戰後にはもはや阿部の哲學及び美學は支配力を失ひ、代つて西田哲學が獨自の美學を携へて登場してゐる。西田博士の美學は、個人の實在を全客觀的世界と共に一つの形而上學的實體——眞實在の中に溶解してしまふ西田哲學に立脚するものであるが、かかる徹底的な觀念論のお蔭で、阿部氏が原子論的に考へられた個人と個人、或は人間と物との間を、感情移入などで覺東なげに連絡するのを、すべての個人は眞實在の中では一であるといふ趣旨によつて苦もなく解決し去つた。またそのベルグソン、フイードレ

藏原惟人、藝術論、森山啓、文學論、甘粕石介、藝術論。(甘粕石介)

ファッシズム

(Fascism, 或 Fascismus, 或 fascisme, 或 fascismo) ファッシズムの語源は、イタリア fascio といふ語から導出されたものであるが、今日では唯單にイタリアのファッシヨ運動の提説のみを意味するのでなく、もつと廣く一般化されてゐる。イタリアでは最初一九一四年ムッソリーニ (Benito Mussolini, 1885) によつて「革命者ファッシエ」(Fasci d'Azione Rivoluzionaria) なる團體呼稱として使用された。この團體はかの一九一九年三月の「戦闘者ファッシエ」(Fasci di Combattimento) の前驅となつたものである。

ファッシズムの歴史的地盤は世界大戦を契機とせる世界資本主義の破滅的動向そのものであるといはれる。一九一四年以降更に歴史の轍に拍車をかけたところの世界資本主義の終局的段階、即ち類廢しつゝある資本主義の帝國主義的段階(所謂アルゲマイネ・クリーゼ)、プロレタリアXXの危機に照應する上部構造の政治的動向、そこにファッシズムの歴史的地盤がある。ファッシズムはかかる段階において似而非的革命的スローガンの下に中間的動向的諸勢力を引寄せ、帝國主義的矛盾を對内的に隱蔽し一般の危機の防止を企圖する支配的階級の獨裁政治的權力の持續的強化のための非合法的手段の體系である。この支配的潮流は一方では世界資本主義の構成にお

いて夫々重要な環をなすところの諸々の國民的社會の狀勢に即して特殊具體的に把握されると同時に、又世界資本主義の全體としての歴史的運動の姿相において一般的にも把握されなければならぬ。

世界歴史としての全體的姿相におけるファッシズム潮流は世界大戰時代に萌芽を發し一九二〇年代において大凡そ具體化されたものと観ることが出来る。それは一にはロシア革命の成就及びボルシェヴィズムの恐怖に對する對抗力の結成と、二には世界資本主義再組織の基礎の確立との利益社會的統一化として觀察される。戦後におけるかゝる世界の利益社會的統一の發展はあらゆる意味においてアメリカ(金融)資本主義の帝國主義的段階への飛躍に依存しなければならなかつた。世界ファッシズム化の支配的動向は、巨大なアメリカ國家資本主義トラストを總帥とする世界資本主義再組織——金本位制度の恢復・安定化(それは一九二七—一九二九年の間のブームにおいて絶頂に到達した)——の經濟的土臺に適應した政治機構の反映にほかならない。アメリカ國家資本主義トラストの帝國主義政策——アメリカ金融資本主義のヨーロッパ資本主義諸國に對する老なる貸付及び信用賦與による世界制覇——は、一方ではアメリカ經濟プロクタの擴大強化を實現せしめると共に、他方ではいはゞ世界的規模における資本主義秩序の強力政治化的擁護即ちファッシズムの確立を可能ならしめたのである。アメリカ資本主義の帝國主義的制覇こそ世界的ファッシズム潮流の重要な歴史的契機をなしたものであつた。國家資本主義トラストの強化、中歐・南米・カナダ等の植民地及び半植民地支配の確立と同時に、アメリカ帝國主義は世界資

本主義の澎湃たるファッシズム化への可能性を基礎づけることによつてボルシェヴィズムに對抗すべき世界産業封建主義の總括者と化し、而してそれ自體が又巨大な高度のファッシズム機構と成るの必然性を具有したのである。だが、かゝる世界資本主義機構の安定化はそれ内に内在的な矛盾の發展のために間もなく破局に導かれなければならなかつた。アメリカ金融資本主義を首領とする世界帝國主義十字軍は、矛盾的事實だが國際的ファッシズム傾向の培養者であると同時により強力な國家的民族主義的傾向の生産者でもあつた。それは戰時國民經濟の打撃を最も多く被つたイタリア、ドイツ、フランス、イギリス等におけるアウタルキー、經濟的自給自足主義の確立・外國資本の排撃等の孤立經濟への動向の中に明確に表現された。加之戰後資本主義の安定化・上向運動の一時的成功は、却つて資本主義的矛盾の激化を招來し、その不可避的破滅を急いだのである。高き技術水準及び生産機構の發展にはそれに應じて巨大な市場の擴大・資本及び商品輸出の増進・海外原料の確保、從つて又植民地及び半植民地の獲得が不可缺であつた。戦後におけるかくのごとき國際的連鎖と國家的緊張との對立・矛盾は、たゞ頭でつかちの不均衡な資本主義機構をつくり上げただけであつた。一九二〇年代における「組織された」資本主義の永久的繁榮の幻想は遂に一九二九年の世界經濟恐慌の到來と共に崩壊し、資本家的イデオロギー部面ファッシズム化に對する決定的動因となつたのである。そしてロシアにおける計畫的社會建設の異常なる發展は資本主義的生産關係における基本的諸矛盾及び技術の進歩と階級社會の維持との基本的軋轢を愈々開明ならしめ、世界歴史の過程は二つの社會體制の皮肉なる對照を描き

出すことによつて自らファッシズムの根本的任務を露呈せしめた。多くの國々において多少の程度に認められる反議會主義・法律外的武装組織とテロリズム・民族的及び階級的デマゴギー等の氾濫は、夫々の國におけるファッシズム・半ファッシズム・前ファッシズムの諸段階の發展を證示するところの現象形態そのものにはかならない。

ファッシズムの萌芽的形態は早くからフィンランド、ハンガリー、ポーランド及びドイツ等に存在してゐた。だが最初にファッシズムの標本的形態が完成されたのは、汎ゲルマニア主義の重層と資本主義の矛盾とプロレタリア政黨の錯誤とに呻吟しつゝあつたイタリアにおいてであつた。イタリアにおけるファッシズムは、一九一四年以降の「革命者ファッシズム」→一九一九年以降の「戦闘者ファッシズム」→「ローマ進軍」の翌年一九二三年以降の「ファッシスト國民黨」(Partito Nazionale Fascista)の三段階を経て成長してきたものである。この現在完了的なファッシズムは約十ヶ年の間に一方ではリベラリズム、ソシアリズム及びコミュニズムその他あらゆる反ファッシズム分子の掃蕩を、他方では反動化せる資本主義勢力との妥協(所謂「財政淨化」政策)をなしとげ、ファッシスト獨裁を確立することができた。けれども、ムッソリーニによつて組織化されたファッシズム綱領——憲法制定、共和國宣言、元老院廢止、貴族制廢止、強制徴兵制度の廢止、言論・集會・出版・信教の自由等の進歩的な市民的綱領と、私有財産の登録及び課税、不生産的収入の沒收、産業及び金融を目的とする株式會社の一齊解散、生産組織の協同組合化と全労働者の直接的利潤參與等の改良社會主義的綱領との混淆——は政權獲得後において殆んどその實現を見ず、資本の無政府的状态は依然として支配的

であり、又一九二七年の「労働憲章」(Carta del Lavoro)立法にも拘らず一九二九年以後の狀勢は寧ろ失業の増加、貨銀の低下、農民及び中産階級層の生活難、結婚率の衰頹を激化せしめたのである。ファッシズムの大業績は全くその政權の維持に都合よき立憲的自由主義政治機構から職能的統制機構への轉換(一九二八年議會政治の終焉)を實現したこと以外のものではなかつたと觀られる。イタリア・ファッシズムの經驗は、ファッシズムがプロレタリアートの前進が内部からの破綻によつて挫け敗北的狀勢が濃厚となつたとき始めて前線に登場したこと、公然たるファッシスト獨裁の確立は何らブルジョワ政策の變革を意味するものではなく却つて新しき政治形態によるブルジョワ政策の繼續にほかならぬこと、ファッシズムの政權は全く強壓的な恐怖政治の下においてのみ安定を保つてゐるといふことを雄辯に物語つてゐる。

近年のドイツにおけるファッシズム獨裁の樹立はファッシズム史の上に更に新しき分野を開拓したものである。一九三三年ヒットレル(Molot Hitler, 1933)によつて率ゐられた「ドイツ國粹社會主義労働黨」(Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei)即ち所謂ナチス(Nazis)の政權獲得がそれである。戰敗、共和化革命、賠償問題等の重層はドイツ國民生活をつねに危機に當面せしめ、資本主義安定化の綱が切斷された一九三〇年前後のドイツは社會民主主義・コミュニズム・國粹社會主義等の收拾しがたき鼎立の只中に投込まれてゐた。國粹社會主義(ナチス)の名におけるファッシズムは、年々に盛り上りくる中産階層の不滿、社會民主主義の反動化的崩壊と統一戰線を喪失した労働者階級勢力の後退、獨占資本

家的陣營の攻勢、政治経済的及び外交的破局性に對する國民的憤懣を巧妙に利用することによつてその大衆的影響力を擴充し、コンミニズムの進出を喰止めることができたのであつた。だがこの力は「下から」のものであつたといふことはできない。ドイツにおいてはファシズムはイタリアよりも以上に舊政體、特に軍部當局の指導と庇護との下に成長したのである。ナチスはその政權把握にいたるまで終始一貫「上から」——國家機關・軍隊・警察・裁判所・反ユダヤ主義 (Anti-Semitism) の獨占大資本家から——の厚い保護と支持とをもち得、自己の武装組織を建設することに成功したのであつた(ダット)。そしてかゝる資本的獨裁の全機構力によつてのみユダヤ人系國際資本及びマルクス主義的労働組合に對する闘争、國際的組織との一切の協働の拒否を餌として(一九二六年二十五ヶ條綱領参照)、國粹社會主義はドイツ人口の中の政治的に遅れた諸々の不滿分子、種々雑多な小ブルジョワ諸層、没落的諸分子、遅れた労働者農民達をその網の中に拘ひ上げることができたのであつた。これと共に、ファシズム勝利の過程においてその現實の温床として決定的な重要性をもつてゐた第二インターナショナル的社會民主主義のイデオロギー及び反動的役割、社會ファシズムの政治的意義を看過してはならない。資本主義が愈々ファシズム的政治形態へ發展するにつれて、資本主義の影も観るべき社會民主主義も亦必然的に反動的にそれに對する順應と提携との過程を進まねばならなかつたのである。

總じて今日のファシズム潮流の共通的性格は、技術の腐朽と生産關係の矛盾の激化状態、金融資本主義的權力の擁護、プロレタリア

運動の抑壓及び反ソヴェート體制、自由主義の崩壊と國家的統制主義の強調、帝國主義プロレタリアの單一經濟化運動、議會制度の修正的廢棄的傾向、協同組合國家的・國粹主義的全體主義論理の非合理主義的(神話學的及び精神主義的)粉飾形態(英雄主義・侵略主義・暴力主義・ショーヴィニズム・民族主義・集權主義等の國內向きの教説及び平和主義・協調主義・國際主義・反戰主義等の外國向きの教説をも含めて)、大ブルジョワ及び大地主・反動的な中小ブルジョワ諸層(中産階級)及びインテリゲンチア層・労働貴族等を地盤とし反資本家の宣傳によつて吸收された遅れた労働階級の部分や階級から脱落せる社會的無宿者群をも包括するその階級的基礎、等に看取されなければならぬ。嘗てファシズムは中間社會層のイデオロギー的表現を以て労働者に向つては資本主義の味方でないと言ひ企業家に向つては社會主義の味方でないと言ひ、資本主義でもなければ社會主義でもない所の超階級的「第三帝國」への途として自己を提示したのであるが、一度それが政權を依託されるや忽ち大資本の鐵拳的獨裁手段たるかの如き正體を自ら暴露した。ファシズム支配が強化されるほど愈々深刻にその最悪なる——歴史の機關車を逆に向はさうとする——反動的役割が露呈されて行くのである。

参考文献——内外の詳細な参考文献については戸田武雄編、ファシズム参考文献(東京社會科學研究所年報第一輯)による。J. R. Palme Dutt: Fascism and Social Revolution, London, 1934 (松原宏譯、ファシズム論、叢文閣) Ivanoe Bonomi: Dal Socialismo al Fascismo, 1923. E. Beckerath: Wesen und

Werden des faschistischen Staates, Berlin, 1927. G. Aquila: Der Faschismus, Hamburg, 1923. Socialism, Fascism, and Democracy, (The Annals of the American Academy of Political and Social Science, July) Philadelphia, 1935. E. R. Huber: Das ist Nationalsozialismus, Stuttgart, 1934. J. S. Barnes: Fascism, London, 1931. John Strachey: The Menace of Fascism, London, 1933. Nationalsozialistische Jahrbuch, 9 Jahrg. München, 1935. A. Menzel: Der Staatsgedanke des Faschismus, Leipzig, 1935.

ラヒンスキー、第三期と社會ファシズム、共生閣、リッペー、磯貝實譯、ファシズム研究、希望閣版、ファシズムと社會ファシズム同、ヒトラー綱領批判、ヒトラー、國民的世界觀、内外社編、今中次磨、現代獨裁政治論、三笠書房版、改造社版、ファシズム研究、土方成美、ファシズム、岩波書店、佐々弘雄・戸野原史朗譯、H. W. シュナイダー著、ファシズム國家、今中次磨・兒島兼三郎共著、ファシズム論。(早瀬利雄)

## 不安の哲學

前世紀の終——ほと普通佛戰爭を境として、いはゆる世紀末的デカダン思想が流行したことがある。それは一種の自然主義崩壊であつた。いひかへれば飽滿、爛熟、倦怠の現れであつた。今までの文化様式では藝術の上で學問の上で、もうどうにもならないといふ絶望

と、遺瀾なさとを耽溺と奇行とによつて粉らはさうとする空しい努力に外ならなかつたであらう。人々は意志を喪つたかのやうであつた。舊いものを崩し、形式を破り、傳統を無視する以外、新なるものを創造しようとの氣力をもち合はさなにかの如くだつた。そこへ自然科學的、もしくは汎神論的自然主義がつけいつたのである。

ある人々はこのやうな風潮を資本主義文化の行詰りといふことで説明し得ると考へるかもしれないが、それも勿論あるにはあるが、さういふ客觀的な社會學的規定で片づけられるものではない。絶望とか、憂鬱とか、不安とかいふ内面的事柄はさういふ風に取扱ひきれないものである。外から受ける抑壓、脅迫、虐待といふやうなものは恐怖、被壓迫感、苦痛として現れる。それらはどこまでも客體との關係から起つてくる。これに對して、絶望、憂鬱、不安等は主體内部の状態である。前者のやうに出來事(Geschehen)ではなく、氣分(Stimmung)である。この區別は大切だと思ふ。そこで敢ていへば、これらは文化の爛熟と行詰、あまりの組織化による個人の抑壓感の消極的抵抗、いはゆるルサンチマン(resentiment)の表現だつたと解し得よう。そしてこれを最も敏感に、明白に表出したのは、元來が主體的人間であるところの知識人に外ならなかつたらう。知識人とはこれもまた、社會學的、客觀的に規定しつくされるものではない。即ち知識層、知識階級と定められただけでは不十分である。その失業、就業の問題も大切であるが、それだけでは知識人に特有な不安、絶望の心情は理解され得ないであらう。知識人は單に知識の所有者といふ如きものではなく、どこまでも考へ抜く人間を指すのであらう。いはゆる知識階級に屬する者で、さういふ意味では知識人

でない人が澤山にある。ルソーは「私はたゞ二つの階級を認める、それは考へる人とさうでない人である」といつてゐるが、知識人はこの「考へる人」なのである。

今日の——それは戦後といつてもよいが、わが國ではむしろ滿洲事變後である——不安思想もまたある意味では世紀末的絶望思想の繼續である。しかし、かつてのものが、より消極的抵抗、破壊、不従順等の側面を示してゐたとすれば、今日のそれは、より創造的、建設的の側面を示してゐるといつてよいであらう。少くとも積極的方向に展開すべき契機を含み、氣運を孕んでゐる。またさうでなければ今日、不安などといふことを問題にするのは無意味である。フランス文藝における不安思想の發展を叙したクレミウ (Benjamin Crémieux) もその書に「不安と再建」と名づけることを忘れなかつたし、わが國で逸早くこの問題に目をつけた三木清氏も「不安と其超克」を論じてゐる。元來ルサンチマンといふ思想が、ニーチェ (Friedrich Nietzsche, 1844—1900) や、シュニール (Max Scheler, 1874—1928) などによつてとりあげられてゐるやうに、一つの辯證法的規定である。詳しくは實存辯證法 (Existenz-Dialektik) の規定である。辯證法はもと争論術の組織だてられたもので、それは論理本然の秩序を示すよりも、論敵を説服するといふ論理外の役割をもつてゐた。この意味でアリストテレス (Aristoteles, 384—322 B.C.) はこれを論證法 (Apodiktik) よりも價值低きものと解した。ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770—1831) に於てそれは存在の論理、客觀的論理學の根本規定とされたが、今度は何よりも世界體系の秩序であつた。この意味で客觀的規定たるを免れない。

世界は隔々まで認識し盡され組織され終つたかの如くである。個人は自由はこの秩序を理解し、それに従ふことの外はない様である。かゝる客觀的真理に對し「真理は主觀的である」と呼んだのはゼーレン・キエルケゴール (Sören Kierkegaard, 1813—1855) であつた。ソクラテス (Sokrates, 470/69—399 B.C.) が敢然と毒杯を仰いだ時、真理を己れは知らない、しかし真理がもしあるとすれば、これによつて」といふ信念を示してゐた。真理は客觀的に出来上つてゐて、それを認識すれば足りるといふやうなものではない、行爲によつて初めて實現され得るものである。もし真理があるとすれば、それは、といふ假言的な氣持、知らざることを知る逆説のうちこそ主觀的真理は成立する。客觀的世界に編みこまれ、その中の一分肢として行動してゐる間は、我々の本來の存在は蔽れてゐる、世界の外に自分自身の自主的存立を見出すとき、初めて人間は固有の存在に還へるとみられるのである。かくの如き本來の存在がキエルケゴール等によつて實存 (Existenz) と稱せられる。そして世紀末的絶望、今日の不安が共に自己の生きる世界との距離の覺醒、世界の強力の外に壓倒され、自己を無力のやうに感じ、反抗といやがらせとよつて僅に體面を糊塗してゐる状態に存するとすれば、まさしく實存への還歸の前途でなければならぬ。かく不安は壓迫から解放への轉化といふ辯證法的過程を含むものでなければならぬ。そしてこれはあくまで内部的、主觀的に行はれるのであつて、決して客觀的出来事として把握されない。人間を外的人間、内的人間に分つならば、それは後者に屬する事柄である。

不安思想の他の特色は文化の否定にある。それが虚無思想として映ずる所以である。かつてマルクス主義もブルジョワ文化を否定した。しかしそれは一切文化の否定ではなく、却つてプロレタリア文化の興揚のためであつた。ところが今や一切の文化が否定さるゝ如くである。その否定の彼岸に何か理想の世界が待ち設けてゐるかの如くに。かくて不安思想は終末思想 (Eschatologie) に連つてゐる。マルクス主義の革命觀をも終末觀の一種と解した論者もあるが、危機思想の本體はむしろ今日の不安思想に於て示されてゐるといへよう。それは虚無思想のやうにみえて、内面の底に何か實體的なものを求めてゐる。たゞその實體に達するに理知の力に信頼せず、理知以上のものに頼らうとする。この理知以上のものは、あるひは信仰であり、あるひは行爲であり、あるひは超有機的生命である。それに従つてあるひは危機神學となり、あるひはサンチカリズム、フアンシズムその他の行動主義となり、あるひはニーチェ的な悲劇精神の信奉となる。

今日わが國に於ては、不安思想は主としてフランスの文藝思想家ジード (André Gide, 1869—)・ブルースト (Marcel Proust, 1871—1928)・ヴァレリイ (Paul Valéry, 1871—) 等を通じて普及し、それらの現代作家を介してドストイェフスキー (Fedor Michailowitch Dostolevsky, 1821—1881)・ニーチェ・シュエフト等々が、次々に紹介され研究されてゐる。即ちそれは宛も文藝上の旗幟か何かのやうな有様を呈してゐる。ところで史上でかゝる思想の醸成者たちをもとむれば、ユダヤの豫言者たちはさておき、近くはジャン・ジャク・ルソーにその源を見出すべきであらう。彼が當時の文化を

墮落とみなし、それを否定して「自然へ還れ」と號んだとき、文化によつて磨り減らされ、衰弱させられた生命力を取りもどさうとしたに相異なかつた。彼の懺悔録をみると、彼がいかに内面的な不安に脅かされたか告白されてゐるが、この不安の氣分は革命直前の世界把握にも移されたやうに思へる。

現在、不安思想を哲學的に體系づけてゐるのは、なんといつてもマルテン・ハイテツゲル (Martin Heidegger, 1889—) であらう。彼は我々の現實存在 (Dasein) を「世界内存在」と規定し、これをまた「關心」または「配慮」の意味をもつ Sorge、といふ規定を以つて示してゐる。我々の存在はこの世界に投げこまれてゐる。そして世界と交渉しつゝ生存するが、この投げ込みの状態から脱しようとの可能力 (Gewortener Entwurf) をもつてゐる。世界内存在は一つの關心であり、不安である。この閉ぢこめられた状態を自覺し、自己本來の存在に還へる。この實存辯證法的な手續が、その體系の根幹をなしてゐる。

カール・ヤスベルス (Karl Jaspers, 1883—) もまたニーチェやキエルケゴールの影響の下に今日の危機を説いてゐる。そしてこの情況を認めることが既にこの情況の變化を齎すのだといふ。今、轉落の基となつてゐる思想に三つある。一つはマルクス主義であり、二はフロイド説であり、三は人種論である。これらの現代的唯物論を越えて、これらの實證知を以ては達し得られぬ超越的なあるものに思ひ至ることが大切だと述べてゐる。現代における實體の再獲得が彼の念願であるやうだ。それには内に引こもつてゐるだけでは足らず、體驗と有機觀とを脱しなければならぬ。このいはゞロマンチ

イタな心情から免れることに危機論者は懸命である。危機神學者の一人エミール・ブルネル(Emil Brunner)のシュライエルマッヘルへの反対もその一例である。

不安の哲學は確に現代のものである。ファッショ的強權に屈し切れぬ知識人の反抗、無力、氣力がその中にいりまじつて表現されてゐる。これを一概に反動哲學とのみ刻印するのは不當である。むしろ浪漫的な生の哲學の方が反動的である。但し浪漫的といふこともブレハーフ(Georgii Valentinovich Plechanov, 1857-1918)など早くからいつてゐるやうに、反動時代の已むを得ぬ進歩的心情表出の形式だとすれば、不安思想は浪漫的でもある。いはゆる浪漫的イロニーがその中に示されてゐる。これを反動とするのも、進歩的とするのも、ひとへに知識人の肩にかゝつてゐる。

参考文献——バンジャマン・クレミウ、不安と再建(増田篤雄譯) 三木清、不安と其超克(改造) 同、シエストフの不安について(改造、昭和九年九月) 同、行動的人間論(改造、昭和十年五月) シエストフ選集二卷、改造社 キェルケゴール選集、三卷、改造社。(本多謙三)

### 物理學 (英 physics, 獨 Physik, 佛 physique)

- 一 現代物理學の特徴
- 二 量子力學
- 三 量子力學の基礎に就て
- 四 新しき實驗事實と理論
- 五 相對性理論

一 現代物理學の特徴 ニートン(Isaac Newton, 1643-1727)

測者と觀測對象との相對運動も、實は觀測値に影響することを知らしめた。例へば、地球上で測定した太陽のスペクトル線の位置は、古典論より導いた結果より多少の歪を呈してゐる事實がある。之は、地球と太陽とのある種の相對運動の結果であると説明することが出来る。

近代物理學の主要問題を前記の二者に限り、それのみに就いて論ずることが近代物理學の概観を興へるといふ理由は、第一に、他の諸部門にも、個々に就いて、理論の改變が行はれてゐるが、それは主として、技術的發展であるか、舊理論の例題の範圍に止る。

例へば、實驗音響學は決して、レイリー卿(Lord Rayleigh, 1812-1919)に依つて完成された理論音響學の實驗的證明をなす爲のものではなく、全く新しい分野を開拓したものであるが、それは寧ろ技術的問題に主眼を置いて居るものである。——故に狹義の意味の物理學發展の動向にはさして寄與しない様に考へられる。第二には、實驗器具の發達は、ラヂウム放射能等の發見と相俟つて、從來、觀測不可能な領域を可能ならしめ、舊理論の崩壊を來したことは、物理學を學ぶ者にとつて、大なる魅力となり、その結果、此の未知の領域に關する實驗結果が驚くべき多數にのぼり、之を説明記載する理論の出現が熾烈に要求されて居る。此の二理由により、現代の物理學としては結局前記の二理論を撰ぶことが必要であり、且十分であることを知るのである。

#### 二 量子力學 (quantum dynamics, Quantenmechanik)

量子(Quantum)なる術語が初めて物理學に用ひられたのはプランク(Max Planck, 1858-)が輻射論に關するレイリーの法則とブリ

により一應體系付けられた古典物理學は十九世紀の末葉までは、殆ど夫自身が含む内部的矛盾には殆ど觸れることなく發展して來たが、光學機械、電氣機械の發達は、古典物理學に甚だ不幸なる結果を持ち來たし、加之、理論的には、エーテルの如き非實在的存在の認容、レイリー・ジーンズ(Rayleigh Jeans)の公式の不合理性等の爲に、古典物理學は全く崩壊せざるを得なくなつた。之に代つて登場した近代物理學は、これ迄、全く掘り下げられなかつた「測定」及び「測定値」概念の性質を究明し、その明瞭に規定された本質に基いて築き上げられたものである。此の近代物理學の中核をなすものは次の二者である。

A 量子力學 從來、一物理量を測定する際、その觀測方法は測定結果に何等の影響も與へないものと考へられて來たが、「大いさし(Dimension)」が甚だ小さい場合は、此の影響がないとは必ずしも言ひ切れない。例へば電子の如き軽い粒子の位置等を測定するには、之に光を投射して之を眼に映せしめて觀測を行ふのであるが、その際投射する光を形成する光粒子(Photon)と電子とは互に他を動かすに充分な能力(エネルギー又は運動量)を有するが故に、觀測手段たる投射光線が直接觀測結果に影響を及ぼす事になる。従つて、觀測手段の如何はその結果の精密度に從來の夫とは全く異なる意味での影響を有する。

B 相對性理論 古典的理論では、時間、空間枠にある運動を入れて之を記載せんとする場合、その時間及び空間枠の觀測物に對する相對運動に何等の關係(附加的部分を除いて)がないものとされ居たが、絕對運動の存在の可能性が實驗的に否定せられた爲、觀

ングスハイム(Ernst Pringsheim, 1859-1917)の實驗とが一致しない爲、その説明に導入したエネルギー量子の假定的である。此の量子假定の妥當性は、アインシュタイン(Albert Einstein, 1879-)の光電効果(光を金屬に投射する時、金屬電子が逸出する現象)の説明に於て與へられた(一九〇五年)。更に、一九〇七年には、アインシュタインの原子熱の計算あり、一九一二年には、デバイ(Peter Debye, 1884-)の實驗的證明がある等、その妥當性は漸次立證された。此のエネルギー量子(energy quantum)は振動數に比例するもので、その比例恒數hが普遍常數(universal constant)であり、此のhの次元は作用(action)  $\frac{(\text{質量}) \times (\text{長さ})^2}{(\text{時間})}$  と同一である爲め之を作用量子(action quantum, Wirkungsquantum)と名付けられる。此hは、週期的運動の場合(圓軌道運動、楕圓軌道運動等)の場合、次の如き關係を興へる。運動量p、座標の微分をdqとすれば  $\int p dq = nh$  茲にnは一般に正整数を取る。此の關係式が、ボアア(Mielsen Bohr, 1885-)及び長岡博士の水素原子の模型に適用せられ、水素のスペクトル(Spectrum, spectra)配列を成功的に説明し得た事が(一九一三年)、現時の原子構造論の研究を隆盛ならしめる最大原因となつたのである。此の原子構造論は、パーシュン(Paschen, 1885-)、ゾムメルフェルト(Arnold Sommerfeld, 1868-)等の努力に依つて、長足の進歩を遂げ、それ迄説明し得なかつたシュタルク効果(電場によるスペクトル線の分岐)、ゼーマン効果(磁場によるスペクトル線の分岐)及びスペクトル線の微細構造(Sommerfeld)量子論に相對性理論を適用して説明し得られる。一九一五年)等を完全に理解し得るに至り、一九二〇年に發見せられた新元素ハフニウム(Hafnium)の性質に對する

豫言もなされ、原子の構造は驚歎に値する程度にまで明瞭になつた。此の如く量子論(後記の量子力学と區別して)は實驗的根據が十分あるにも拘らず、理論的には如何にしても避け難い難關があつた。不連続な線スペクトル(Line spectrum)の各線は(他の連続スペクトル(continuous spectrum)、帯スペクトル(band spectrum)と同様に)原子核の周囲を廻轉する電子が一軌道より他の軌道に移る際放出するエネルギーが光となつて現はれるものであるから、一つのスペクトル線が常に一定に現はれる爲には、各軌道を廻轉する電子は、その軌道に相當する一定のエネルギーを保有し、その軌道上で安定な運動を続けなければならない。然るに、電磁氣學の要求する所に依れば、電子はその加速度運動中、輻射のエネルギーを絶えず外部に放出する爲、保有するエネルギーの量は絶えず小となり、其の軌道は、絶えず縮小する。此の相反する二事實は、共に十二分の實驗的根據を持つてゐる。又、一方に於て、光量子の存在は、光に粒子的性質を賦與することを要請するが、之も亦、電磁場の波動性と矛盾する。之等の難點は必然的に新理論の出現を促し、遂に、今日の量子力学の建設を見るに至つたのである。

量子論の参考文献——

M. Born: Vorlesungen über Atommechanik. A. Sommerfeld: Atombau und Spectrallinien, 1924, 4. Aufl. Hund; Unions-spektren und Periodisches System der Elemente, 1927.

ボルンの著書は、量子論最盛期に於ては、理論方面での必讀の書であつた。ゾムメルフェルトの著作は、甚だ浩濶なものであるが量子論に關する實驗結果並びに理論は殆ど全部は掲載されて居

り、その別冊は、波動力学(量子力学の一つの形、後出参照)の理論的研究に當てられてゐる。この別冊には、他には餘り見られない、波動方程式を類推によつて導出する方法が最初に述べられて居り、或る意味では、量子力学の入門書と見なすことが出来る。別冊 A. Sommerfeld: Atombau und Spectrallinien Wellenmechanischer Ergänzungsband, 1929.

フント(Hund)の著書は實驗的事實に關する綜合報告で、此の方面の最も權威ある著作の一つとされてゐる。猶「物理學」(岩波講座)中の分光學も、取り上げられるもの一つであらう。

量子力学は、その當然有する性格として、微細的問題(microscopic problem)に適用し得る。微細なる語は、観測對象のダイメンションが從來取扱つた對象の夫よりも甚だ小なる場合である。通常程度の大きいさは一耗の千分の一位までのもので、此の程度の問題に於ける量に對しては、プランク常數  $h$  ( $6.55 \times 10^{-27}$  erg. sec.) は略々零に等しいと見做し得られる。量子力学の結果に於て、 $h$  が零に略々等しいとおけば、古典理論を得るが故に、量子力学の特別の場合として古典理論が、數量的の意味に於ては、含まれる。此の事からは、直ちに、古典理論が眞の意味に於ける量子力学の特殊の場合であるとは斷じ切れないが、此の方面の決定的研究は未だ殆どなされてゐない。

微細な観測對象の段階は、

a 電子——(electron, Elektron)最も根源的な粒子で負の電氣を有する。その質量は略々  $8.9098 \times 10^{-28}$  グラムで、その半径は約  $2 \times 10^{-12}$  ㎝、その荷電量は  $1.591 \times 10^{-19}$  クロロンである。

b 原子——(atom, Atom)中心に正電氣を有する核があり、その周囲を電子が廻轉する。

c 分子——(molecule, Molekül)數個の核と電子が或る法則の下に結合した體系と別ける事が出来る。量子力学が如何なる理論構成を有するか、又在來の概念を如何に變革を行つたかを見る前に、此の三種の粒子體系の性質を如何に説明、記載してゐるかを見よう。

a 電子 古典的概念としての電子は一個の荷電せる粒子であつたが、それでは、電子の廻折現象を説明することが出来ず、而も、



ディラック

カイルソンの霧箱(chamber)の實驗は飽くまでその粒子性を主張するが故に——此の二重性は、光に於ても全く同様で、廻折現象と光電効果の結論とが是を示してゐる。——量子力学はその

立場からして、電子並びに光子(Photon)なる概念は、此の二重性を兼備せしめるに至り、現在では、電子は、不確定率の要請等によつて、一個の荷電雲(Ladungswolk)と考へられてゐる。此の荷電雲を與へる函數の表はす曲面は波動堆(wave packet)と呼ばれる船狀の突起を有する。此の部分が在來の粒子に當るとも見られる。二個の荷電雲即ち、二粒子間の相互作用は其の荷電雲の重り工合によつて定まる。此の波動堆の幅は古典の意味に於ける電子の直径の如きものであるが、時間、粒子の質量及び粒子の不確定度の函數なるが

爲に、非常に早い速度で此の波動堆は擴がり電子の像は、従つて、抽象することが不可能となる。(此の現象を電子の diffusion と呼ぶ)——此の波動堆の概念は、單に、電子に限らず、一般の粒子に歸屬せしめることが出来る。其の場合、擴散現象(diffusion)は、若し、對象の總ての程度が、古典力学に於けるものと同様である時は、甚だ遅い爲、粒子は常に一定の形を保つが如く見え、而も、エーレンフェスト(Felix Ehrenfest, 1879)の定理に依れば、古典力学の法則に従つて運動する。例へば質量一瓦、位置の不確定度が一萬分の一程度の粒子の擴散に要する時間は  $10^{-12}$  秒の程度である。

註、エーレンフェストの定理粒子の運動方程式は、スピンを考慮に入れない場合は、古典力学に甚だよく類似する。然し、此の定理は、スピンを考慮したディラック(Dirac)の電子論による時は全く崩壊する。猶、此の方面の研究は今後に殘された問題である。

b 原子 原子の構造理論は、その直接的な起因であり、結論であるスペクトル線の研究、元素の週期率表、パウリの背反原理(Verboten Prinzip)等と結合して、中心運動をする電子の軌道、及び其の軌道上の電子の個數等を明にし、以て、原子構造を其の微細な點まで究明し盡してゐる。此の問題は、同時に多粒子問題、

註、パウリ(Pauli)の原理、「二つ以上の電子は同時に同じ量子状態にはあり得ない。」(一九二五年)

として考察されるため、統計力学の導入を要求してゐる。現在、此の統計力学は三種ある。マックスウェル、ボルツマンの古典論、ボーゼ(Bose)、アインシュタイン(Einstein)の理論、第三にフェル





が保證された。中性子は、電子と陽電子との結合物か、獨立の核の構成單位であるかは今後に残された問題である。

陽電子 (Positron) 電子と略々同程度の質量を有し、正の荷電を有する粒子で、アンダーソン (Anderson, 1932) の宇宙線の寫眞で初めて認識せられたものである。理論的には、ディラックの電子論の難點たる負エネルギーの存在を説明せんが爲に、彼によつて彼の空孔の理論中に豫想されてゐたもので (1930)、此の發見に依つて、此の電子論は益々實驗的支持を受けるに至つた。現在では、中性子と陽電子とが核の構成單位であると説があるが、之も、今後の發展に俟つべきである。

中性微子 (Neutrino) 原子核のβ線放射の際に於けるエネルギー保存原則支持の爲に理論的にパウリ、フェルミ、ペラン (Perrin) によつて考察され (1934)、その性質を研究されたもので、観測不可能な程透徹力強き、電氣的中性の微粒子で、其の固有質量は甚だ小な、而も速度の頗る大なものがある。

註、之等の新發見物は多く宇宙線、人工放射能、核物理學中に屬するものであるから、詳細は其等の文献を参照せられ度い。陽電子に關しては「科學」第三卷七・八・九號に仁科芳雄氏の解説がある。又宇宙線に關しては同誌第四卷第四號に同氏の解説あり。

宇宙線 (cosmic rays, Ultrastrahlung) 四六時中、大空より絶へず放射される透徹力極めて大なる一種の物で、其の本質に關しては未だ確定的結果が得られてゐない。専門的文献には綜合報告として Hoffmann; Problem der Ultrastrahlung physikalische Zeitschrift 33 (1932).

でなく、融合したもので物理現象の記載は此の融合した四次元の時空世界に於て、行はれねばならず物理法則は總てこの變換に際してその形式は不變に保たれることが要求される。此の理論が、座標變換に重心を置き、且現象の時空世界内の記述を要請するが故に、使用せられる數學が計量幾何學であることは當然の結論であり、當時に於て最も一般的な計量幾何學たるリーマン幾何學が一般相對性理論 (加速度の相對性を論ずる特殊論は速度の相對性理論) を與へることは明かな事である。その結果、物理量は總てテンソル (Tensor) で與へられ、物理現象を示す式は總てテンソル解析で計算されるに至つた。その結果、舊來の質量概念を變革し、それとエネルギーと同一性を強調し、光、電磁氣を空間の屬性とし、或は又、水星の近日點の移動、太陽のスペクトル赤方變位等を可成成功的に説明してゐる。然し、此の理論では電磁場理論の基本方程式 (マックスウェルの式) の相對性化は完全には行はれず、幾何學的に歸し難いテンソルの存在する事は此の理論を驅つて、現下の問題たる統一場理論、一般場理論に迄發展せしめた。引力場と電磁場との統一は最初ワイルの勞作『引力と電子』(1918)中に其の萌芽が見られ、續いてヘディントン (Arthur Eddington, 1882-) の擴張 (1923)、アインシュタインの遠隔平行性の理論 (1925) となつた。他方數學者として、より一般の立場に立つたスカウテン (Schouten) はカルツァ (Kalza) (1921) 及び其の擴張を行つたアインシュタイン及びマイエル (Mayer) の五次元空間の理論 (1931) をより基礎的な五次元の射影幾何學を使用して、發展せしめ、所謂一般場理論 (Generale Feldtheorie) を提唱した (1932)。一般場理論は、其の

量子電磁力學 (Quantum Elektrodynamik) 量子力學の電磁場理論への適用で、元來連續的と考察された電磁場を量子化(場を表はす量の交換法則の設定)する理論である。一九二七年、初めて、ディラックにより輻射場の量子化が行はれ、次いでパウリ・ヨルダン (Pauli, Jordan) ハイゼンベルク・パウリ (1929) の諸理論に依つて、物質と場との共存する場合にまで量子化が徹底せしめられた。此の理論に於ては、無限大のエネルギーの存在を認めるといふ困難がある。更に、ポルンは一九三三年以後三回に亘つて相對性理論との關聯に於て、之を解決せんとしてゐるが、未だ解決の域には達してゐない。

量子力學の文献——

Dirac: Principle of Quantum Dynamics. Weyl: Gruppentheorie und Quantenmechanik. Handbuch der Physik, Bd. 24. 1. Darrow: Elementare Einführung in die Quantenmechanik (初等的な)。Born: Moderne Physik (最近發展する諸問題が列挙してある)。Born, Jordan, Heisenberg, Schrödinger, 1927

五 相對性理論 (Relativity, Relativitätstheorie) 一八七七年イケルソン (A. A. Michelson, 1852-1931) モーリー (Morley) の光波干涉の實驗は、エーテルの存在を決定的に否定した。相對性理論の基礎は此處に於て確立し、アインシュタイン (Einstein) の一九〇五年の特殊相對性理論、ひいては、一九一六年の一般相對性理論の出現を見るに至つたのである。相對性理論の根本は、一つの觀測體系より他の觀測體系に移る際、其の時間並びに空間座標系の變換式は、四個の變數 (時間座標一、空間座標三) を總て含む函數式でなければならぬ。従つて時間と空間を與へる數は、最早、互に獨立

前提の相異により、之を前記の方向と、ヴェブレン (Veblen)、ホフマン (Hoffmann) の方向 (1931) の二種に分ける事が出来るが、何れも、兩種の場並びに、シュレージンゲルの波動場を形式的に統一し得たに過ぎず、之に物理的解説又は意義を與へることは甚だ困難で、現時の状態では、未だ數學の例題の域を脱してゐない。最近、量子力學と相對性理論の統一として、前掲のポルンの研究もあるが、未だ完全されてゐない。又、此の統一化の全く他の方向として、ザイコフ (Zeycoff, 1930) フォック (Fock, 1929) テトロード (Tetrode, 1928) シュレーディンゲル (1932) の十六元數 (Sextenion) を基調とする行き方もあるが、前者同様、形式的との批難を免れ得ない。従つて、現在では相對性理論は、相對性方法として全物理學に浸透してゐるが、その本來の動向はいさゝか數學的に偏つてゐる觀がある。之等の文献は、發展の過程にある爲め概括し得ないのであるが日本數學物理會誌の

第一卷、第二號、遠隔平行性の理論 第七卷、第一號、Sextenionの理論 同第六號、Einstein-Mayerの理論、第八卷、第一號、第四號、Schoutenの理論 第八卷、第八號、第九卷、第二號、Bornの理論  
に綜合されてゐる。  
相對性原理の文献 Weyl: Raum, Zeit und Materie, 1923. Eddington: Space, Time and Gravitation (概念的) Eddington: Mathematical Theory of Relativity, 1924. (兩宮純夫)

## フランス哲学

一 ベルグソニスム  
 二 主知主義の諸傾向  
 三 科學批判の哲學

四 哲學史の諸派  
 五 哲學的諸科學及びその他

吾々が、この國の哲學界の現状を見渡すとき感じる以上に、古き傳統を持つ現代フランス哲學の潮流を一定の立場に立つて概観することに多くの困難を見出す。これまでフランス哲學界の現勢を説く著書、論文はかなり多いが何れもこの種の困難に悩んでゐるやうである。従つて最も顯著な二三の哲學者の近業の紹介でなければ多くは羅列的なブリオグラフィーに終つてゐる憾みがある。それ等の中でとりわけ明瞭に異色をもつてフランス現代思潮を要約してゐるものは Isak Benrubi: Philosophische Strömungen der Gegenwart in Frankreich, 1928 であらうが、ベンルービは大體三つの潮流を區別してゐる。(1)コントに端を発するフランス固有の實證主義の傳統に立つ科學的經驗論的實證主義は今日デュルケイム學派の社會學、心理學に依つて代表されてゐる。これに對する反動としてフイエ、ギョー、ブートルー等の純粹に形而上學的な唯心論的實證主義、科學の哲學の傾向及び批判的合理主義が一括されて(2)となる。更に(3)として認識論的觀念論の人々が擧げられるが、直觀の立場を説くベルグソニスムはこれ等の何れにも屬せず、獨自の地位を與へられてゐる。この見解は把握の大膽さに於いて明確さに於いて特異の所説と見られるが、その反面に於いては粗雑な圖式を餘りに追ひ過ぎたと考へられるのみならず、その内容は十年前に止つてゐる。

る。従つて本稿に於いては理解を容易ならしめるために、多くの思潮を貫く二三の特徴を抽象するよりも、むしろ専攻の領域に依つて個々の現存哲學者の近業を概括しそれ等の立場、傾向を見ることによよう。

一 ベルグソニスム フランス哲學の今日の水準に最も輝かしく吾々の眼を惹くものはベルグソン(Henri Bergson, 1859—)の哲學である。その老來益々思索の世界を深め展開して行くにつれ、謂はゆるベルグソニスムは現代フランス哲學を代表するものの如くにさへ見える。

ベルグソニスムといはれる哲學の思潮は、合理主義哲學に對抗して一九世紀末以來擡頭して來た非合理主義哲學の流れに立つてゐる。ベルグソンの哲學はこの最も顯著な現れであると見ることが出来る。この傾向は哲學の破産を叫んだ實證哲學に對する不信を現はすもの一つである。即ちベルグソン哲學はコント、テーヌ、ルナン以後の實證哲學に對する一の反抗の叫びである生の哲學の傾向を端的に代表してゐる、かかる思潮の擡頭の原因は背後にある社會的現實の中に求めらるべきことは當然であるが、思想としてそれが主張するところは如何なる特徴を持つのであらうか。

Cogito ergo sum の哲學に於いては自我の存在即ち自己意識であり、意識の確實性は否定さるべき理なく、知識が客觀的、合理的なることは十分に保證されてゐた。これに對しベルグソンの哲學はかかる知識の客觀性、合理性を一律に主張することを拒否する。凡ゆるものが等しく一般的に認識せられるのではない。ベルグソンは所謂實證哲學的な一般的科學的な態度の普遍的適用を拒否して、我々(creative)もこれを意味するに外ならない。處女作『意識の直接與件』(Essai sur les données immédiates de la conscience, 1889)に於いて自由を強調し引續き物心間の關係を『物質と記憶』(Matière et Mémoire, 1896)に論じ、更らに『笑』(Rire, 1900)を論じて社會的事象に對する認識を示したベルグソンは『創造的進化』(Evolution créatrice, 1907)に於いて人間を本來的には homo faber と見ながらも、その自由なる特質を説き、人の生に於ける純粹持續の重要性を論じて來た。そこに生の躍進(élan vital)の語がいはれたのもこの内的自由に基づいてである。後『精神力』(Énergie spirituelle, 1919)の論文集及びアインシュタインの相對性理論批判(Durée et Simultanéité, 1922)を出して以來沈黙を續けて來たが、十年の沈黙の後『道德と宗教との二つの源泉』(Deux sources de la morale et de la religion, 1932)を出し、『創造的進化』の續編として、生の躍進の思想を新に社會的領域に適用した。

の認識の對象界を自然と精神とに分ち、精神界の認識の原理を究めるのが哲學であり、科學は専ら自然界に限らるべきものとする。哲學に於いてはこの科學的方法の適用はその場所を見出し得ぬものとして排撃される。哲學に於いては直觀が眞の方法たるべきであり、科學的客觀的方法は間接的に事物の本質に觸れ得るに止まり、直接的に本質そのものには接し得ない。哲學に於ける根本問題は時間の問題である。これを明確にすることが哲學者の任務である。この時間概念の明確化は直觀に依つて得られるのであるが、それは時間の本質に依るものである。時間とは何か。ベルグソンはこれに答へるために時間を空間と對立させてゐる。即ち運動に依つて時間を考へる仕方があるが、これは未だ充分ではない。此處彼處といふ空間に依つて表象せられた運動は實は運動ではなくて、表象せられた運動であり時間はかかる空間に依つて考へることは出來ぬところの、領域を異にするものである。時間の本質は空間化せられぬ純粹持續(durée pure)である。それは又純粹意識(conscience pure)ともいはれるものである。單なる連續や繼起の如きものに依つては時間は考へられない。空間化の絶對的に不可能な領域に時間には實存するのであつてその間には越ゆべからざる深淵があるのである。又空間とは所與であるが、時間は靜的なものではなく、不斷に創造してゆく内的自由である。従つてこれを外面的に捉へることは不可能である。この純粹內的持續(durée interne pure)は直觀に依つてのみ把握せられる。この持續は精神の本質たる自由である。精神はこの自由に依り空間の凡ゆる必然性の領域を超越するのである。かくベルグソン哲學は内的自由従つて人格的創造を強調する。生の創造的進化(évolution

者に規則や法則の認められることは共通である。動物社会は組織が固定し、不變であるが、人間社会は自由意志を持つ成員から成り立つものであり、變じ得るものである。人間社会は自然法則に支配される譯ではないが、意志は組織されるに及び本能を模倣し、慣習を生ずる。慣習は社会の必然なる規則である。この慣習は服従を要求するもので、人々に一種の義務の感じを抱かせるものである。即ち社会生活は吾々には共同體の要求に應じた多少とも強く根を張つた慣習として見えるのであつて、この慣習が持つ拘束力の故に我々は義務を感じるのである。然しこの義務感も慣習の個々に就いて見れば取るに足らぬものであるが、本来一體となつて社会の要求に應じてゐるから全體的には大なる權威を持つのである。この義務は生命現象の不屈の秩序に類似する規則性を個々に齎すが、實はこれは個人を相互に結びつけるのではなくて、個人を自己自身に結び付けるものである。社会に對する吾々の義務は社会的自我の養成といふことである。蓋し個人の中に何等か社会的なるものがなければ、社会の個人に對する手懸りは無い譯である。何人もこの社会の手懸りを脱することは出来ない。個人の記憶、想像は社会に依り與へられるものであり、社会の魂は個人々の語る言語に浸み亘つてゐる。併し日常人は社会に對する義務を考へず、寧ろ義務に従つてゐるだけである。社会は個人のために日常生活の過程を規定してゐるから、義務に對する服従は自動的になされる。併し時には服従が自己に對する努力を要する場合がある。この時には義務はカント的の意味に於いてではないが、斷言的命令として現れ、義務の全體の力が確認される。そしてかかる義務に伴ふ社会のタイプが閉じた社会 (closed society) である。

(closed) である。それは自然から手離されたばかりの社会であるが、敢へて未開社会には限らず、文明社会もこれに屬する。この社会は原理的に一定の人員しか包括し得ないもので常に一定の人間を排する。それはだから求心的傾向に應じた社会といへる。それは全人類を包括する開いた社会ではない (société ouverte)。閉じた社会たる家族、市町村、國家が漸次擴大して人類たる開いた社会に到着し得ると考へるのは誤である。國民は如何に大なりとも人類とは本質的に異なるものである。その間には有限と無限、閉と開との差がある。閉じた社会の融合は他の社会に對する防禦の必要から生じたので、同胞に對する愛はこれに基因する。この原始的本能は文明の下にも残存してゐる。然るに人類への愛は間接的でしかない。両親を愛することは自然的であるが、人類愛は獲得せられるものである。開いた社会の道徳は何であるか。閉じた社会の道徳は非人格的であつたが、開いた社会の道徳は人格的であり、愛は人類全體を包括するものである。この道徳の典型は人格者に體現せられてゐる。個人が社会と融合してゐて、その精神が同時に個人的であり、社会的であつて一の環内をめぐつてゐるのが閉じた社会である。開いた社会の基となる心は全人類を愛するのみならず全生物にまで愛を及ぼし得るものである。だからその心は創造的な感情である。ベルグソンは斯かる感情を超知的感情 (emotion supra-intellectuelle) としてゐる。これは希求 (aspiration) の精神に應じたものである。故に希求に應じた道徳は社会連帶のそれではなく、この道徳は人間の自然的性質の或るものと縁を切るものである。ソクラテスの道徳は開いたものであり、キリスト教亦然りである。これに對してストア道徳は閉じたものを現

はす。さてかく二つの社会の道徳の類型が見られたが、此の閉じた心と開いた心との間には理知がある。この理知は自然の設けた枠を破壊する作用をなすが、かかる社会的統一を破る様な危険に對し自然は防禦の策を講ずる。それが宗教である。本能と理知とは全く別のもではない。本能の奥には理知の光が残り、理知の周囲は本能が縁どつてゐる。そこで理知が勝手に自分の途を歩み、社会規範を棄す危険があると本能はこれを引込めようとする。併し正面から當ることは出来ない。幻像的表象を惹起して現實的表象に對抗せしめ、表象といふ理知の力により理知の作用を妨げる。この作用をベルグソンは (Catalation) と呼んでゐる。これは閉じた社会を維持する故に閉じた宗教であり秩序を保つことを目的とする故靜的であり、閉じた道徳と共に閉じた社会を構成する。然るに他方に於いて生命は人間にとつて重要である。何故なら生命の創造的努力は人間に至る發展の線上に於いてのみ不可能だから。人間は躍進を試みるために、に缺乏した自信や反省に依りぐらつた自信を取り戻すためには、躍動的な方向に邁らねばならない。併しこれは理知に依つては不可能である。理知の周囲には直観が縁どつてゐる。この直観が弱まつてゐるのは本来の力が足りないからである。今やこの直観を強力にしなければならぬ。この努力をする人は躍進を試みるに當つて、この力が超越者から降り來り自身の内漲るのを感じ純粹な喜びを喜ぶ。かかる直観の作用に依つて人間は生命一般に融着し、人類全體を自己に抱き入れ、凡ゆる不安懸念を消去する。これが即ち動的宗教であつて、開いた社会を志向し、生命一般の大原理と融合する故に開いた宗教である。所謂ミステイシズムはこの宗教である。斯

くしてベルグソンはギリシヤ、印度、キリストの各宗教を論じてゐる。神に關する問題もこの立場から解決される。最後にベルグソンは時事問題に言及し政治を閉じた社会の争と見、人類の現在に人類の現在なした進歩が閉じた社会となり人類を苦しめるところに問題であるので、人類の未來は人類自身に懸つてゐる。人類の躍進は自由の進展にあると彼は言ふ。La Pensée et le Mouvement, 1934 は未發表の論文や既刊の論文を集めたものであるが、論文はいづれも自由、純粹持續の哲學の立場を體系的哲學から區別してこれを明かにし、同時に眞理の空間化、社會化を防ぎ、哲學が日常的概念を超越すべき所以を説き、生の哲學の立場を明確にしてゐる。即ち、ベルグソンが如何にして在來の合理主義の地盤を叩き破つて意識の純粹の直接的直観に到達し得たかを物語るものとして重要であり、既に一九二〇年の L'Énergie spirituelle に續く第二論文集としてその序文に豫告されたものであつた。

ベルグソニズムに對する非難攻撃は少くないがそれ等に就いては後に述べるとして、ここではただロワジ (A. Lajoie, 1857-) がベルグソンの近著に對して神學者、宗教史家としての見地から眞面目な論究を出してゐることを附言しよう (Y a-t-il deux sources de la religion et de la morale? 1933)。ロワジはこの著に於いて宗教と道徳との二つの源泉の區別、即ち社会的本能と神祕的直観との區別はベルグソンの考へる程ラディカルなものかどうか、又人類の宗教的進化的背後には一種の神祕的直観があるのではな

いかを問題にしてゐるのである。

ベルグソニズムは既に世界的思潮であり、その本國に於いても各